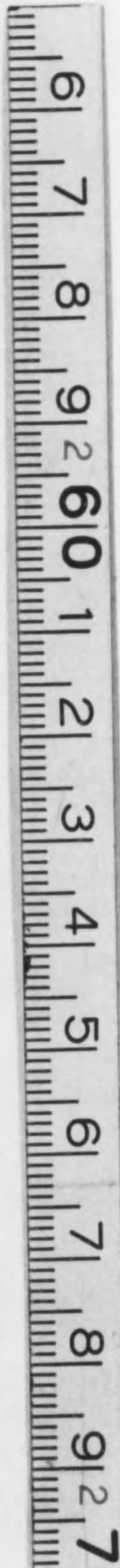


R025. 1-Sy998-S7



1200500765684

R025.1
Sy998



始



3211.16

第一書房

!!よへ備に庭家に館書圖に校學

第一書房

ズイリシ本讀

夏目漱石 文學讀本

夏目漱石文學の簡便な名解題内。多量なる文學の生面のみづみづしさに、今更新しき漱石の出現かと目される。

正岡子規 文學讀本

明治の文壇に馳騁たる先きを以て君臨する英雄。正岡子規の全著作の精選は悉くこの二巻に集る。編輯者河東勇務別此は子規の最も良き理解者である。

島崎藤村 文學讀本

春夏秋多に分けた編輯によつて、日本の季節のうつろひが、この藤村の文字を通じて、一層濃く、一層鮮やかに讀者の心に印象づけられる「文學讀本」だ。

菊池寛 文學讀本

多量多様な大作家、菊池寛比の偉大なる人格と識見とが一字一句の隅々に反映してゐて、これは又傳がたき「人生讀本」であり、「社會讀本」でもある。

吉田絃二郎 文學讀本

高き思想者であり、清き胸襟の作家である吉田絃二郎氏の雄王の文字、鼓動する「文學讀本」氏自ら感動と記憶の中に一編毎に註語を加へられた。

佐藤春夫 文學讀本

詩人にして作家であり、その情調と洞察に於て他の道徒を許さぬ佐藤春夫氏の「文學讀本」。氏自ら全二巻に編輯され、全著作は一葉の中に眺められる。

寺田彌吉著 親鸞聖語讀本

四六判五七〇頁 定價一圓八十錢

寺田彌吉著 蓮如聖語讀本

四六判三五〇頁 定價一圓五十錢

山田靈林著 禪學讀本

四六判三三〇頁 定價一圓五十錢

大田黒元雄著 音樂讀本

四六判四六〇頁 定價一圓五十錢

橫光利一 文學讀本

全著作に分けて精選され、最も優れた文學讀本。我文壇に傑出と躍ぐ氏の偉大なる業績のエッセンスの一大集結である。

山本有三 人生讀本

山本有三氏の全著作の半から人生に關する佳篇のみを採録し、季節に配列したる「人生讀本」。簡潔なるヒューマンスト、氏の面目躍如たるものがある。

高山樗牛 人生讀本

胸襟たる美文、純潔なる心構、明徹なる思想、明治の天才思想家、我國ロマンティズムの精華たる高山樗牛の全集はこの書によつて生々として再生した。

萩原朔太郎 人生讀本

すぐれたる詩人であり、それにも生じて直觀の哲人である萩原朔太郎氏！これは聞かれた人生ではなく、君見され、創造された新しい人生の海潮である。

賀川豊彦 人生讀本

「死後を越えて」の著者にして、人類愛の戰士、大衆教育、賀川豊彦氏、これぞ東の生命の文藝、眞實の詩、愛の聖書、修養の書である。

土田杏村 人生讀本

思想生活二十有餘年、平生を不治の病と闘つて、雙手よく等身の大著作を築いた土田杏村氏の人生讀本。陶山勝氏苦心の編輯、懇切なる註語が添へられた。

第一書房

四六判總布裝美本 各一圓五十錢
各册著者肖像入 (書店にて發售中)

發行所寄贈本

東京堂編

出版年鑑

昭和十二年

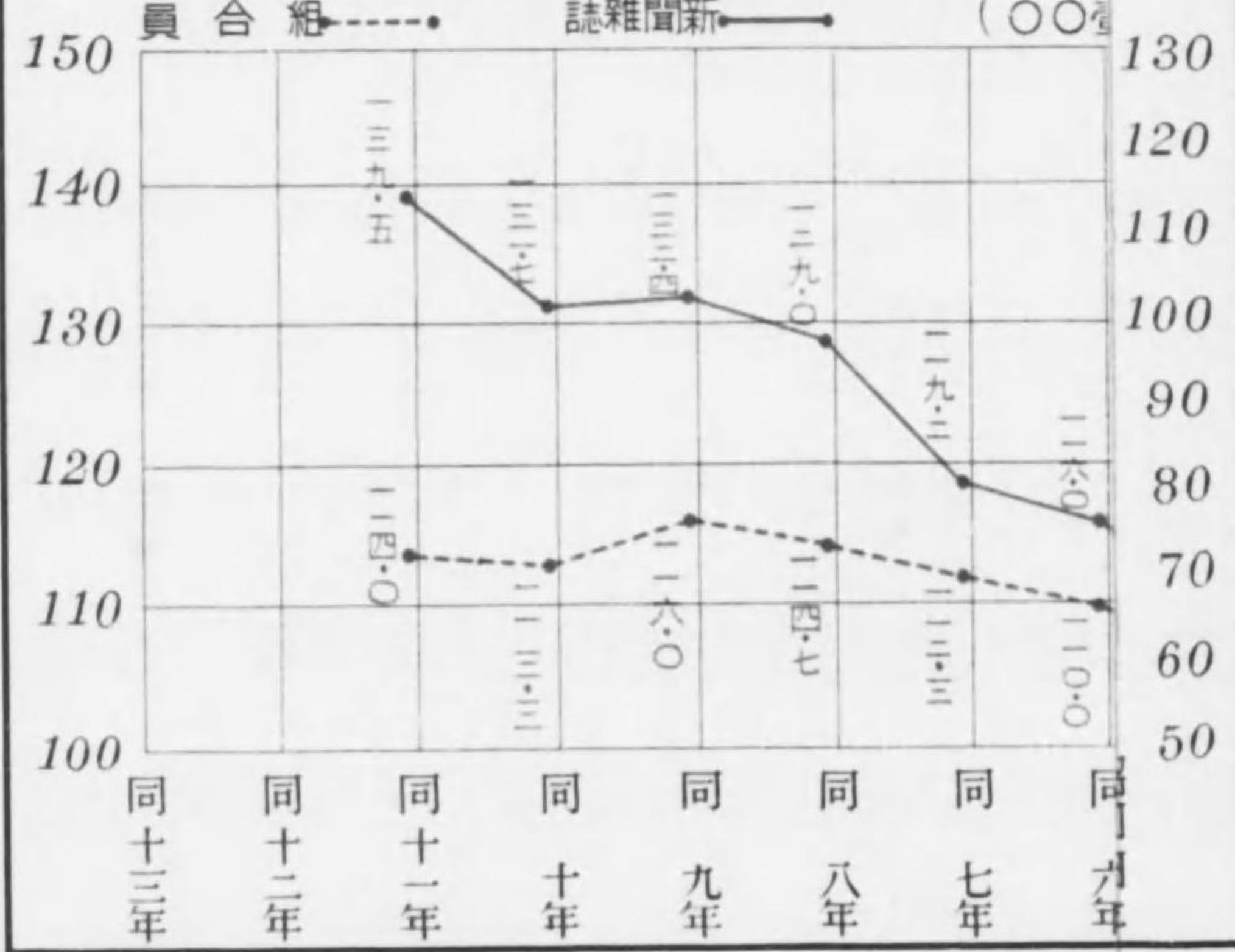
- 一、出版界一年史(昭和十一年度)……………一
- 二、出版諸統計……………一四三
- 三、昭和十一年出版圖書目錄……………二五三
- 四、昭和十一年内務省納本摘錄……………二七四
- 五、昭和十一年豫約配本目錄……………二八四
- 六、雜誌總目錄……………二九四
- 七、出版關係諸名簿……………三〇五
- 八、出版關係團體規約……………三二九
- 九、出版關係法規書式……………三七一



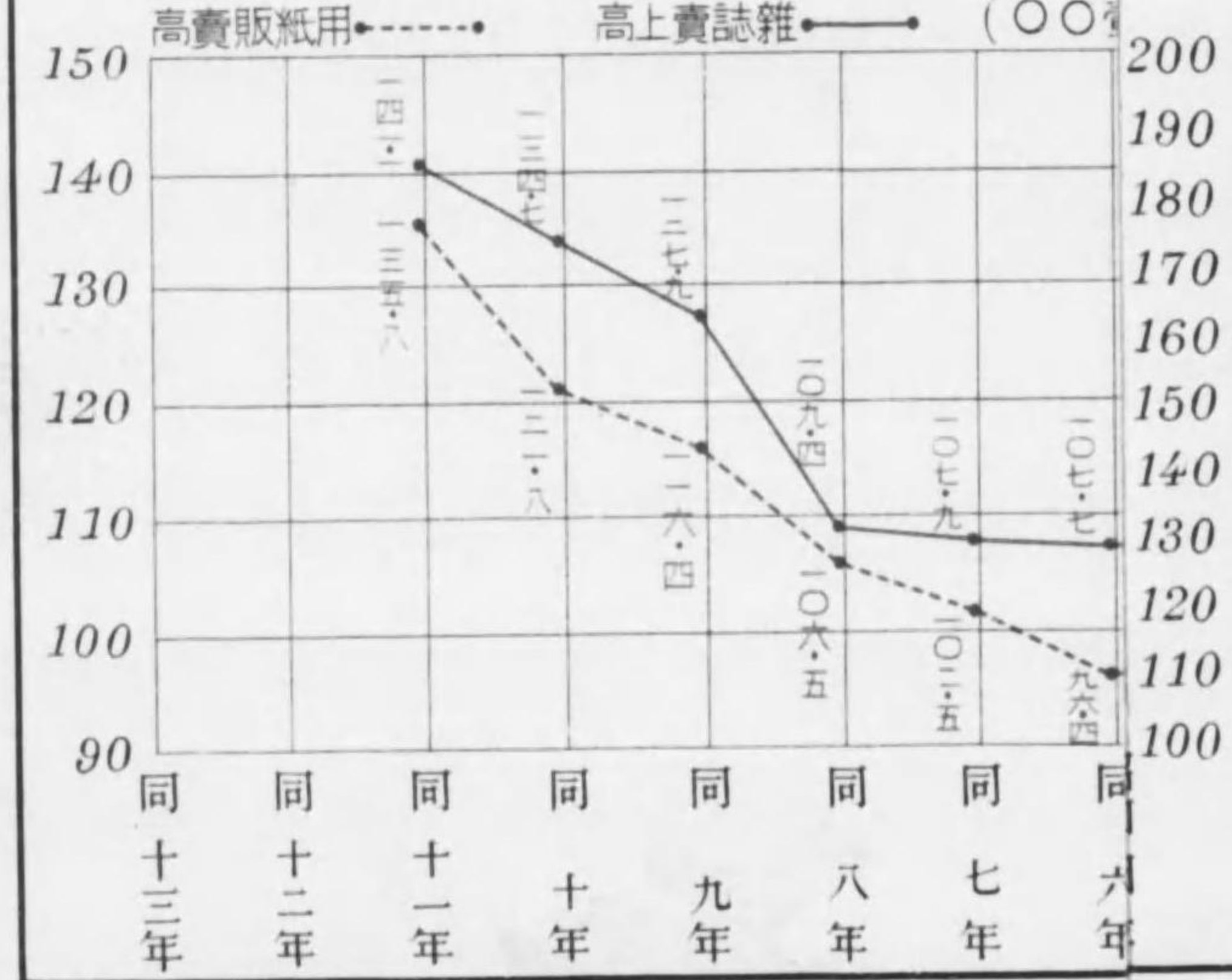
R025/Sy99
R025/Sy99
S

標 指

數指員合組誌雜籍書國全及數指末年

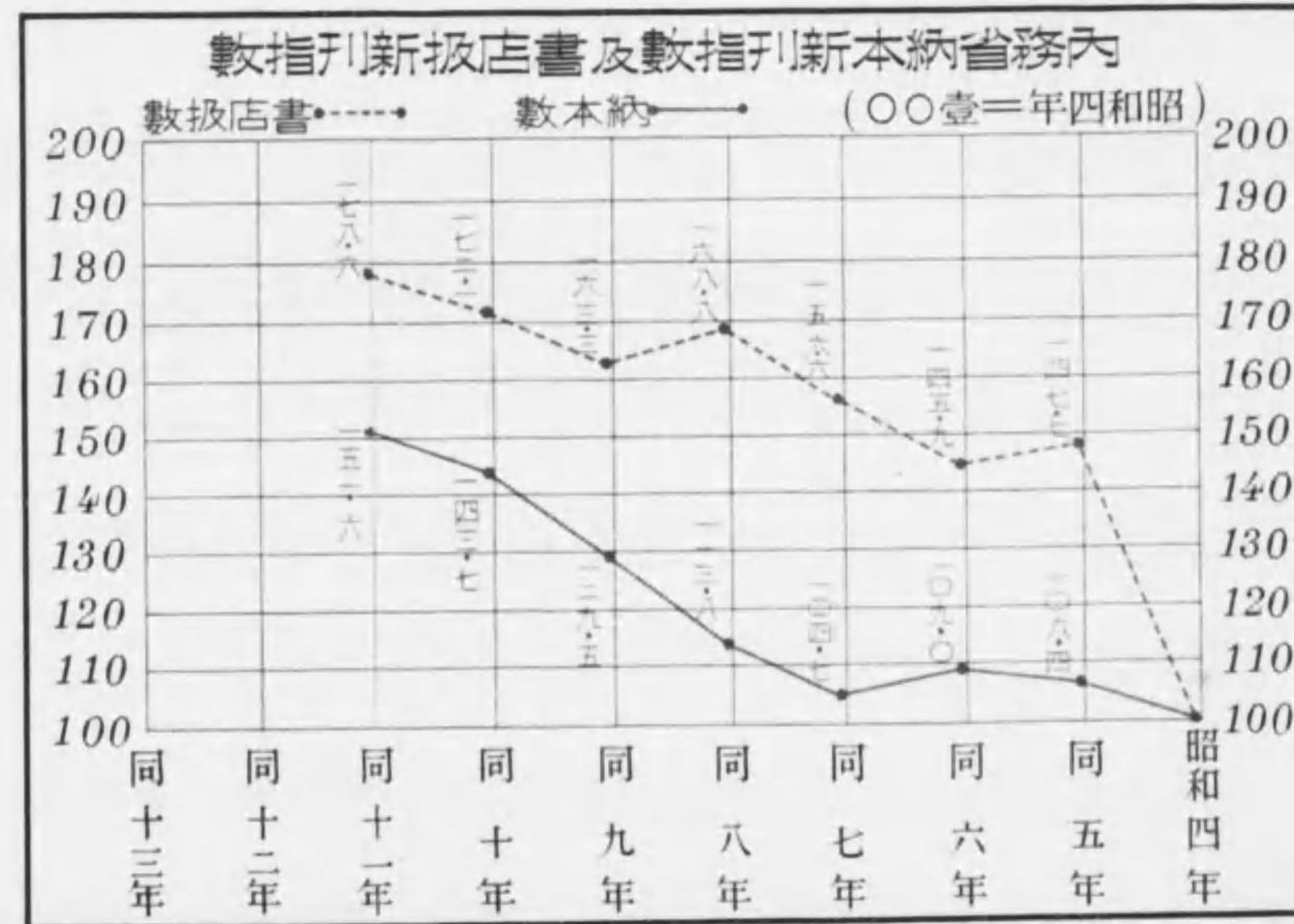
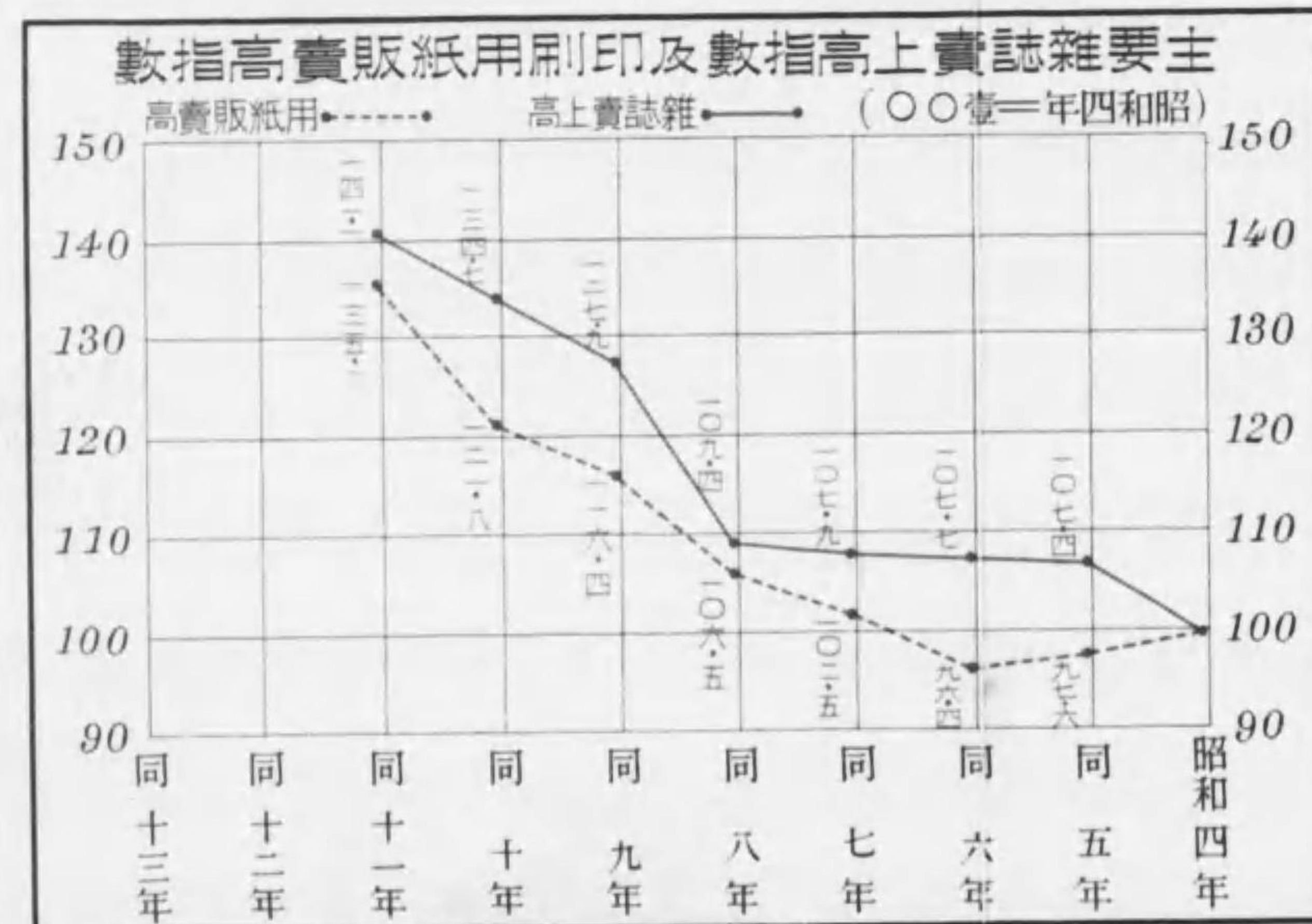
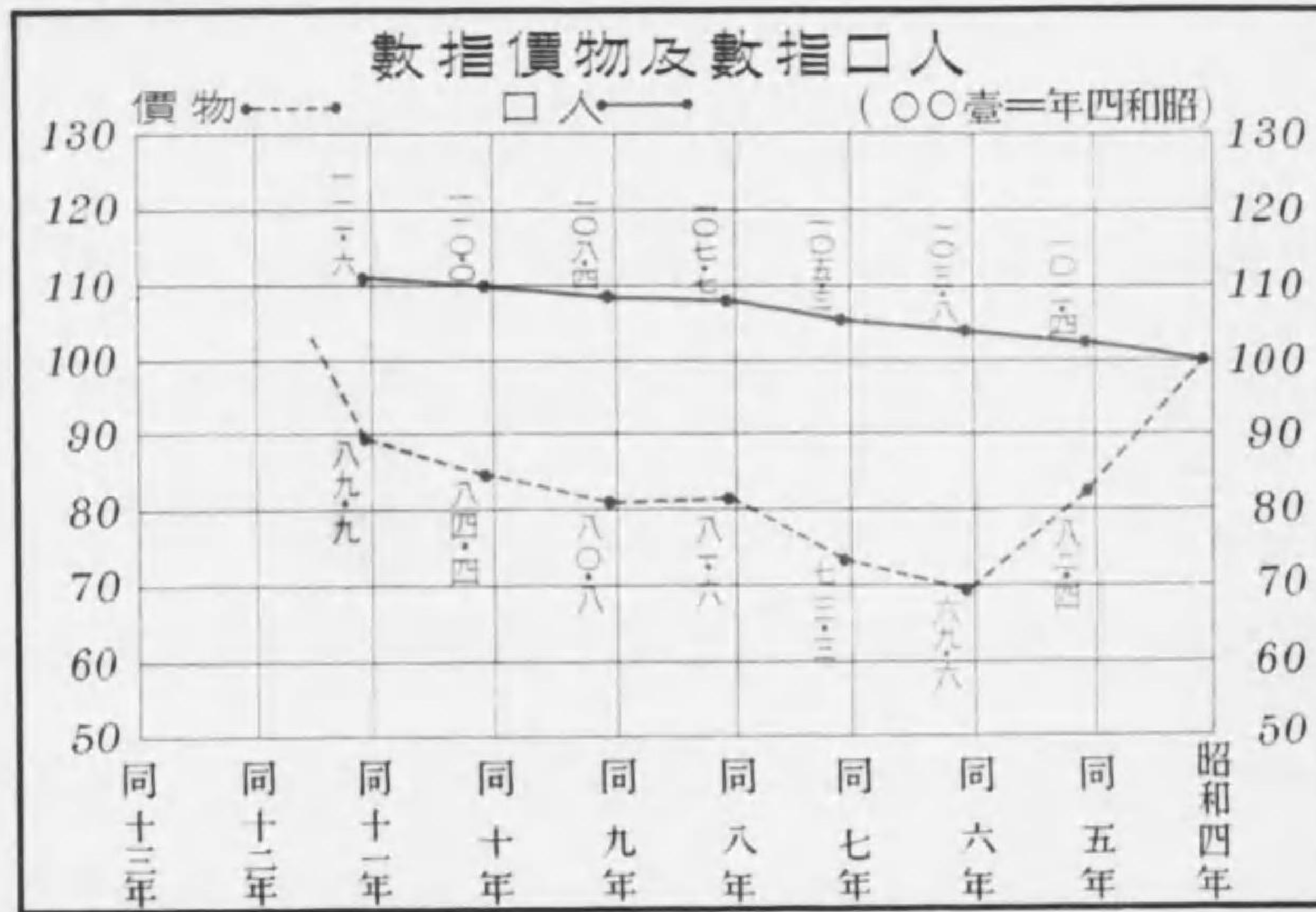
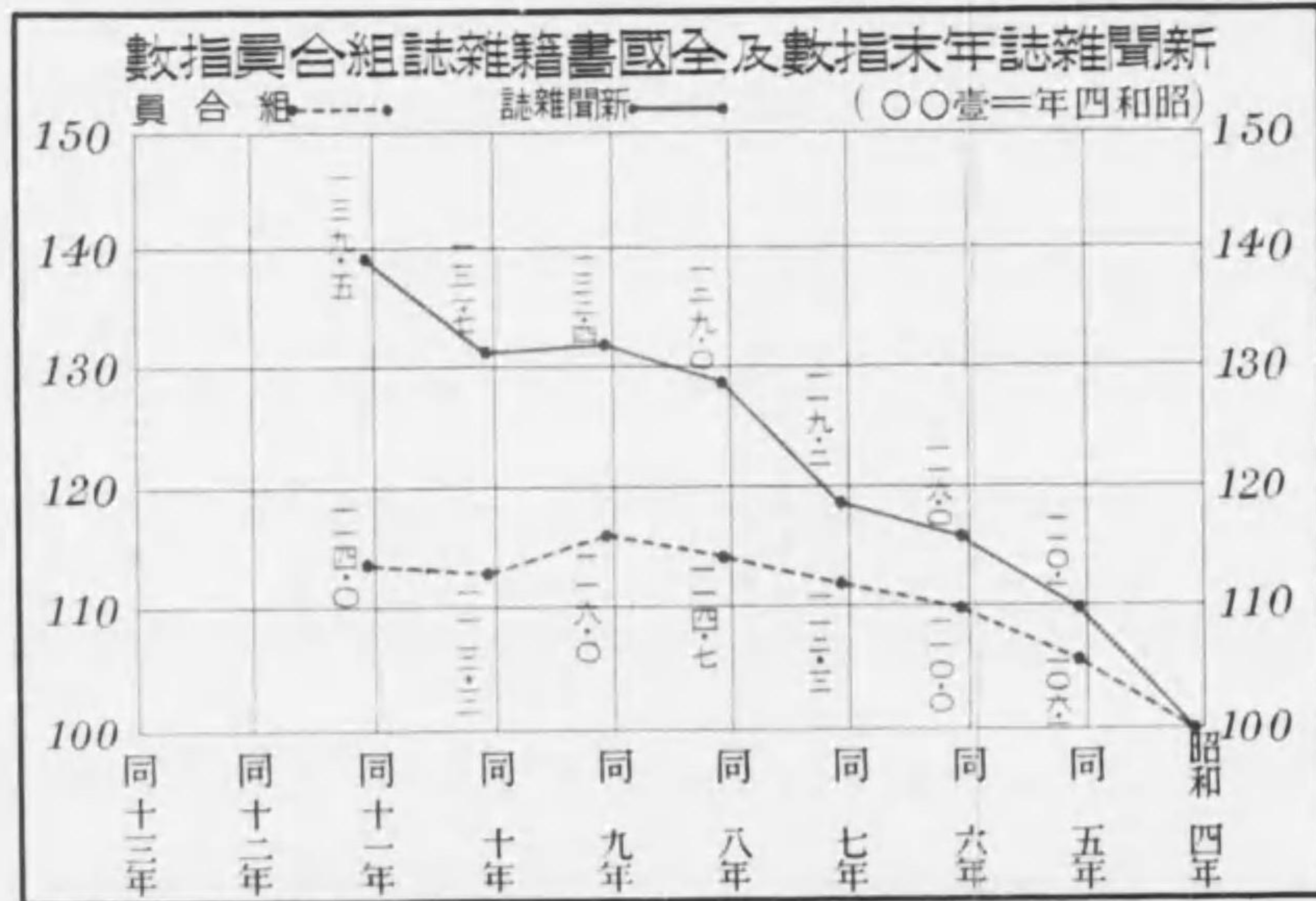


數指高賣販紙用刷印及數指高上賣



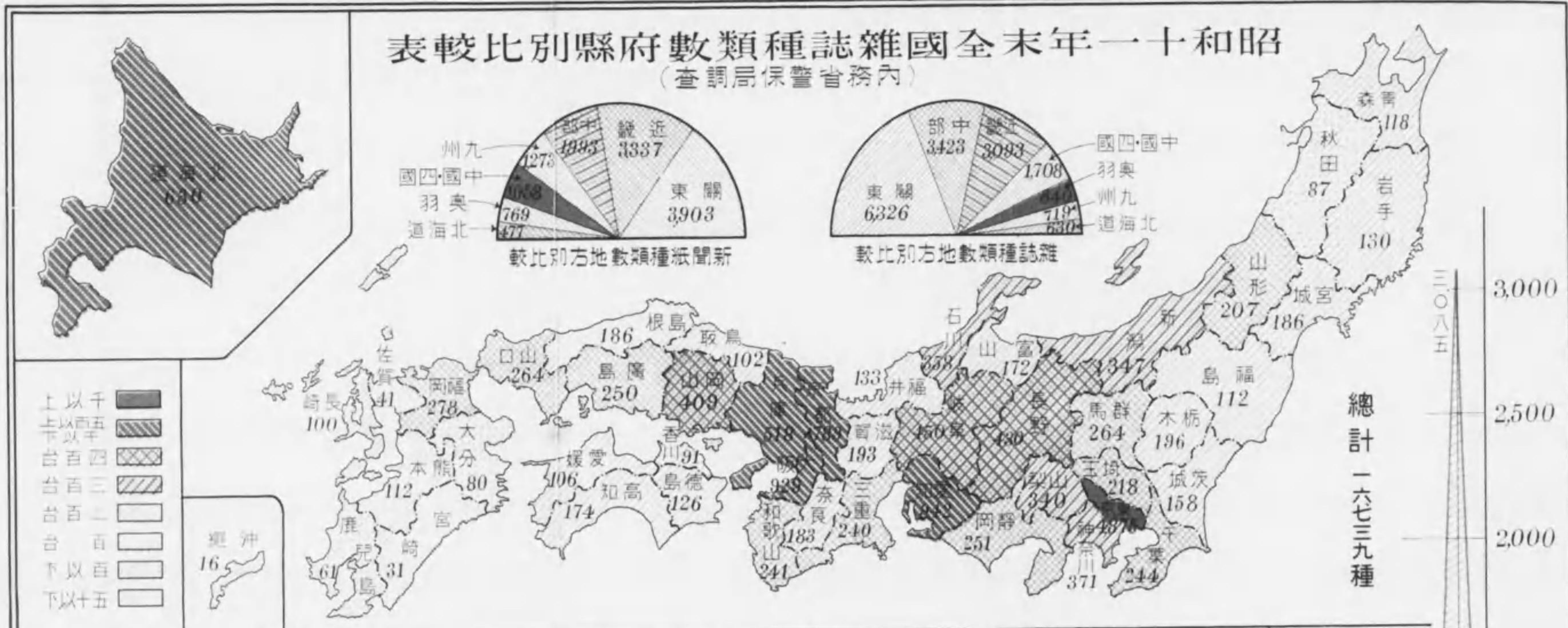
最近八年出版界指標

(東京堂月報調查)



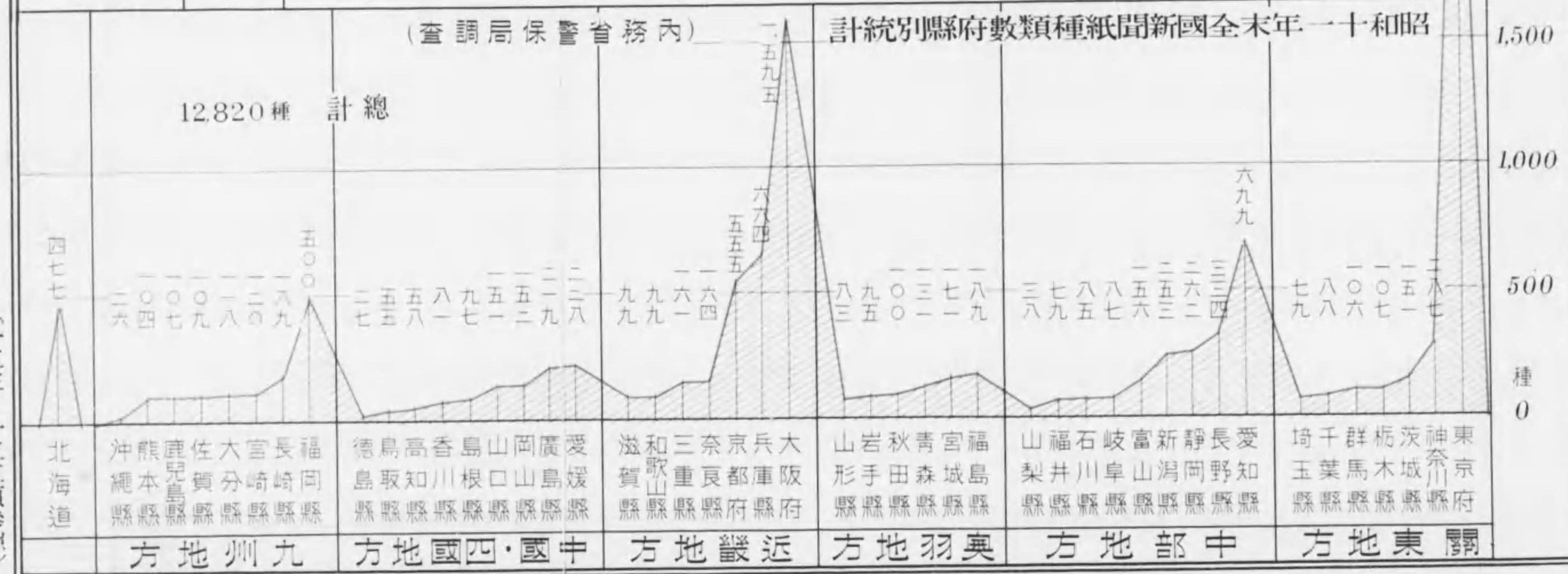
昭和十一年末全國雜誌種類數別府縣比較表

(內務省警務調査)

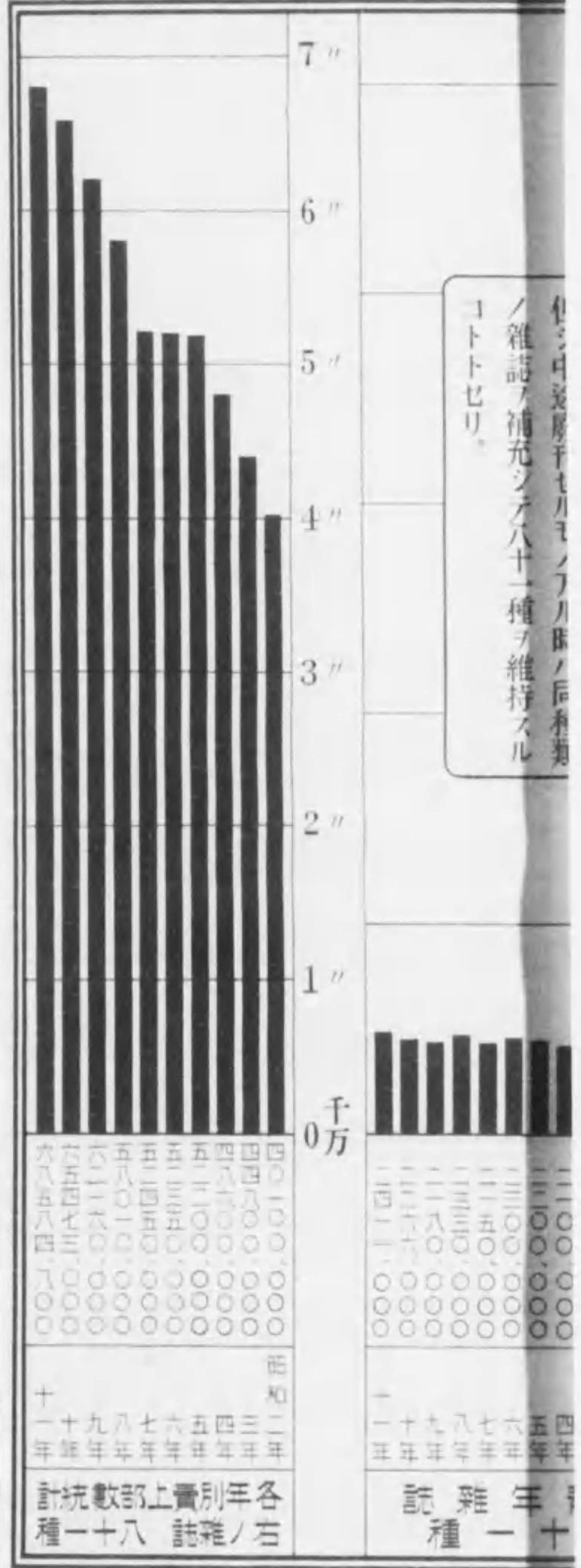


昭和十一年末全國新聞紙種類數別府縣統計表

(內務省警務調査)

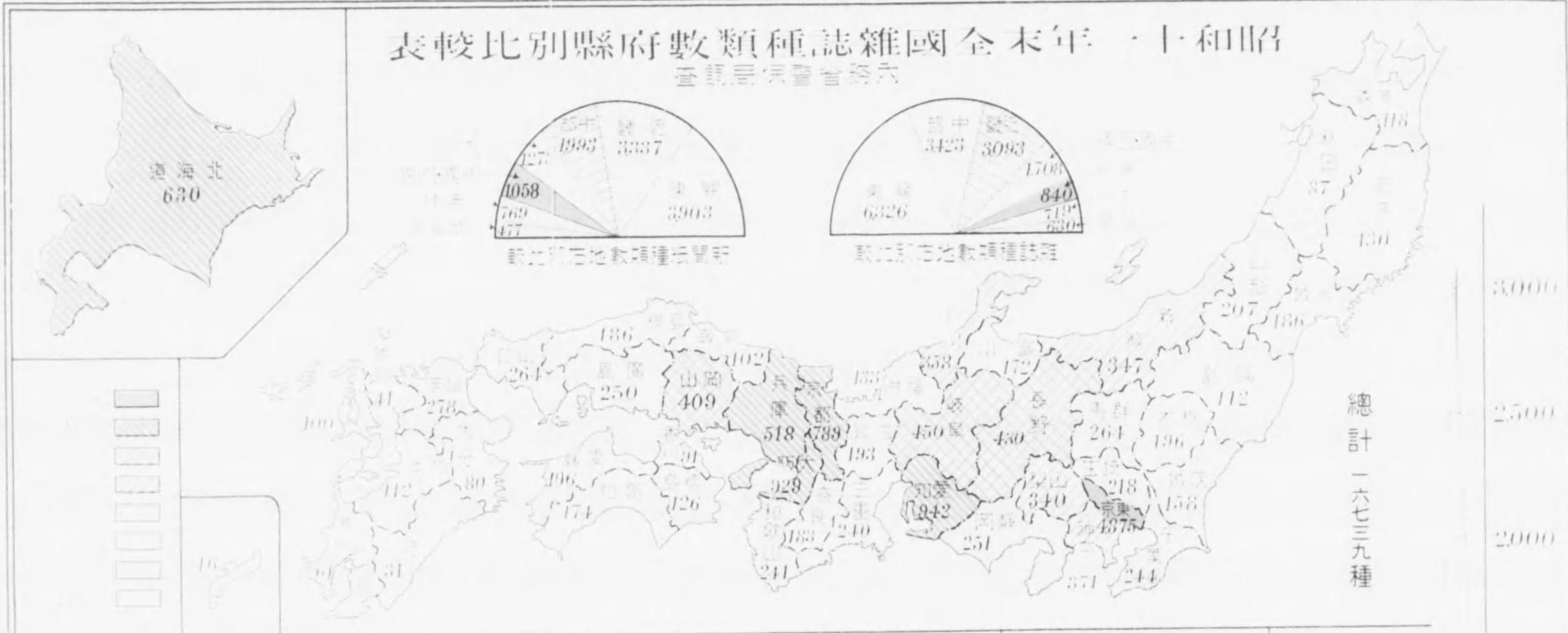


(一五三・一五五頁參照)



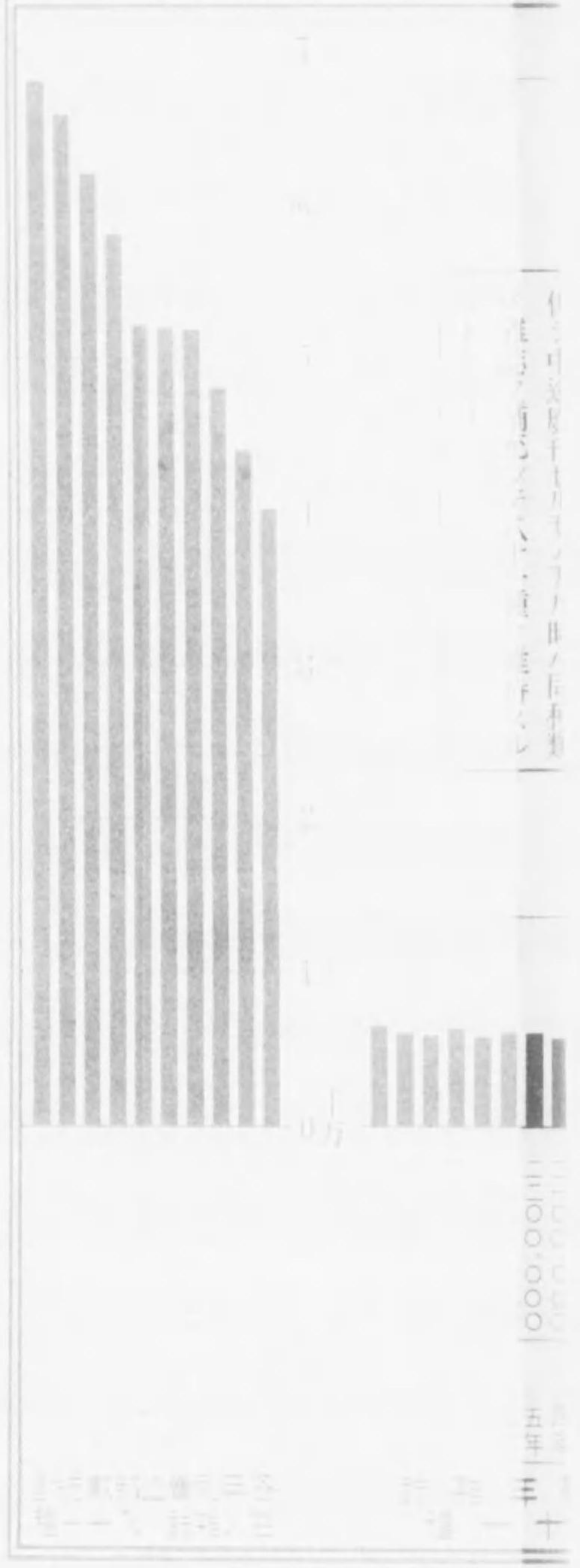
昭和十一年末全國雜誌種類數別府縣比較表

六務警備廳調查



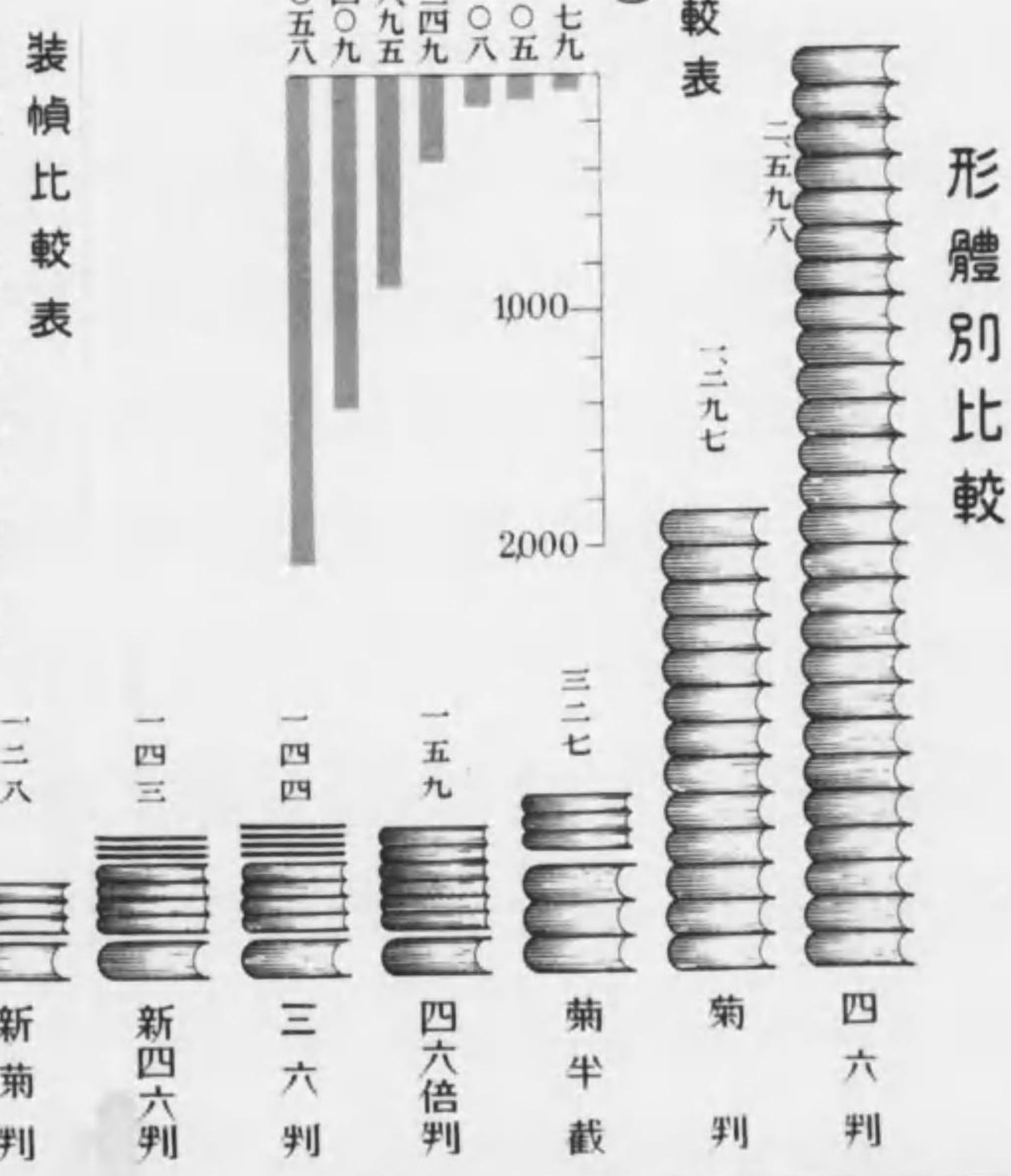
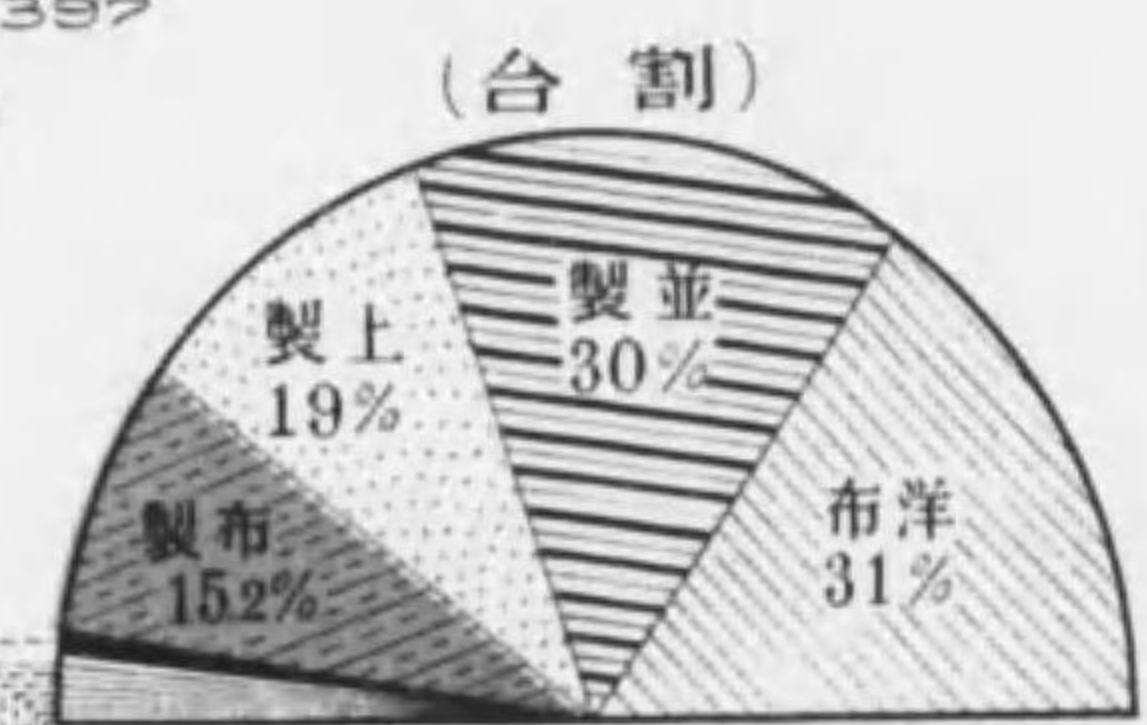
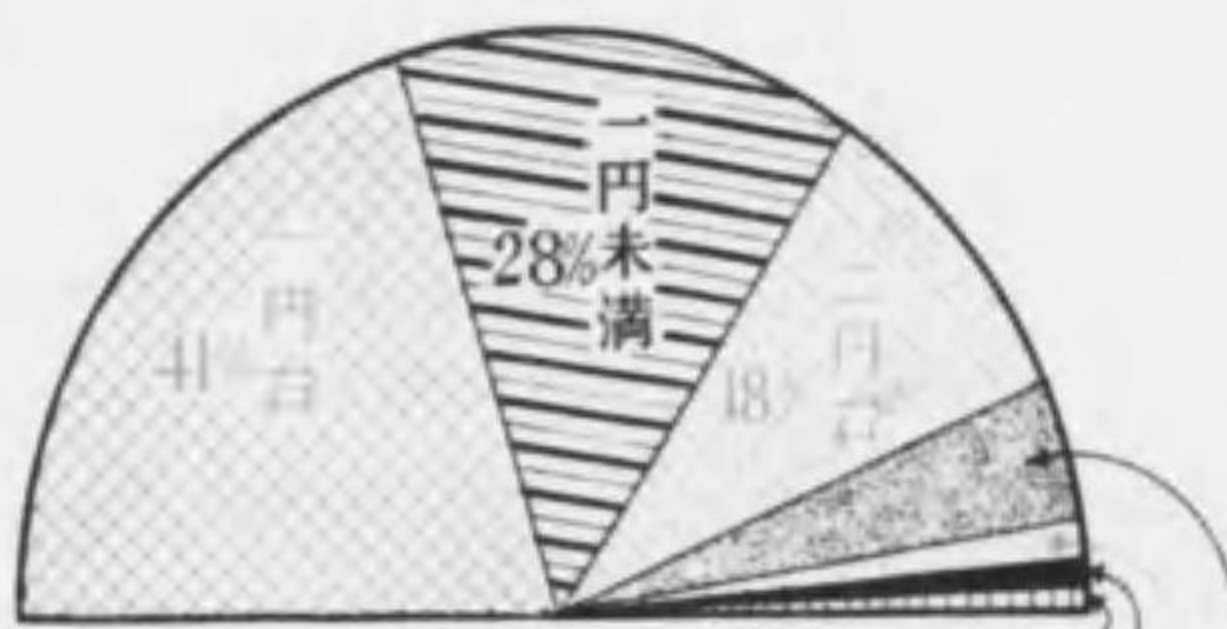
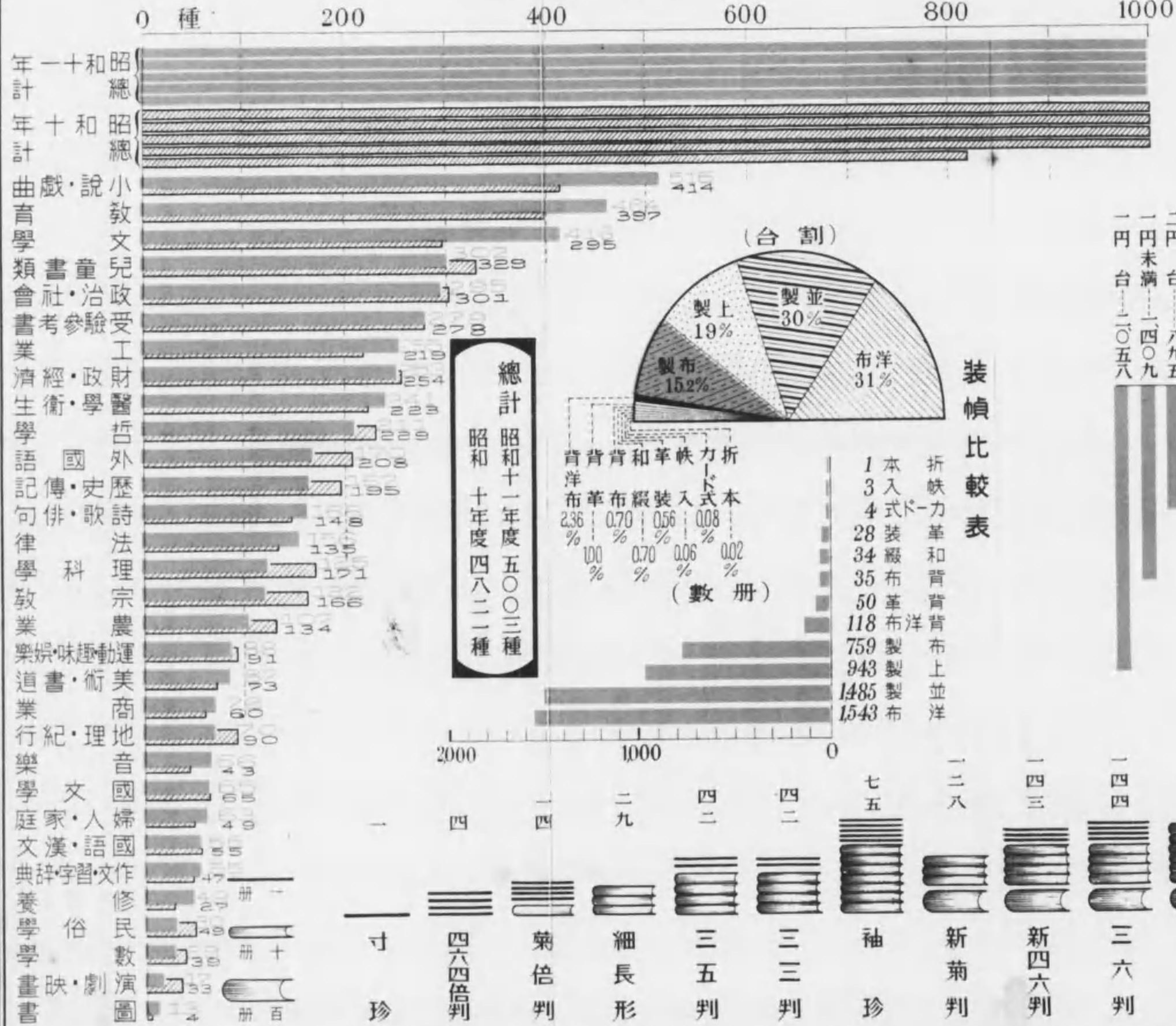
總計 一六七三九種

六務警備廳調查		昭和十一年末全國新聞紙種類數別府縣統計			
12320種	計總				
九州地方	四國・關中地方	近畿地方	關東地方	中部地方	關東地方
九州地方	四國・關中地方	近畿地方	關東地方	中部地方	關東地方
九州地方	四國・關中地方	近畿地方	關東地方	中部地方	關東地方
九州地方	四國・關中地方	近畿地方	關東地方	中部地方	關東地方



(查調部報月堂京東) 計統書刊新度年一十和昭
(除を書約録) 扱店書般一

較比別類種



總計 昭和十一年度 五〇〇三種
昭和十年度 四八二一種

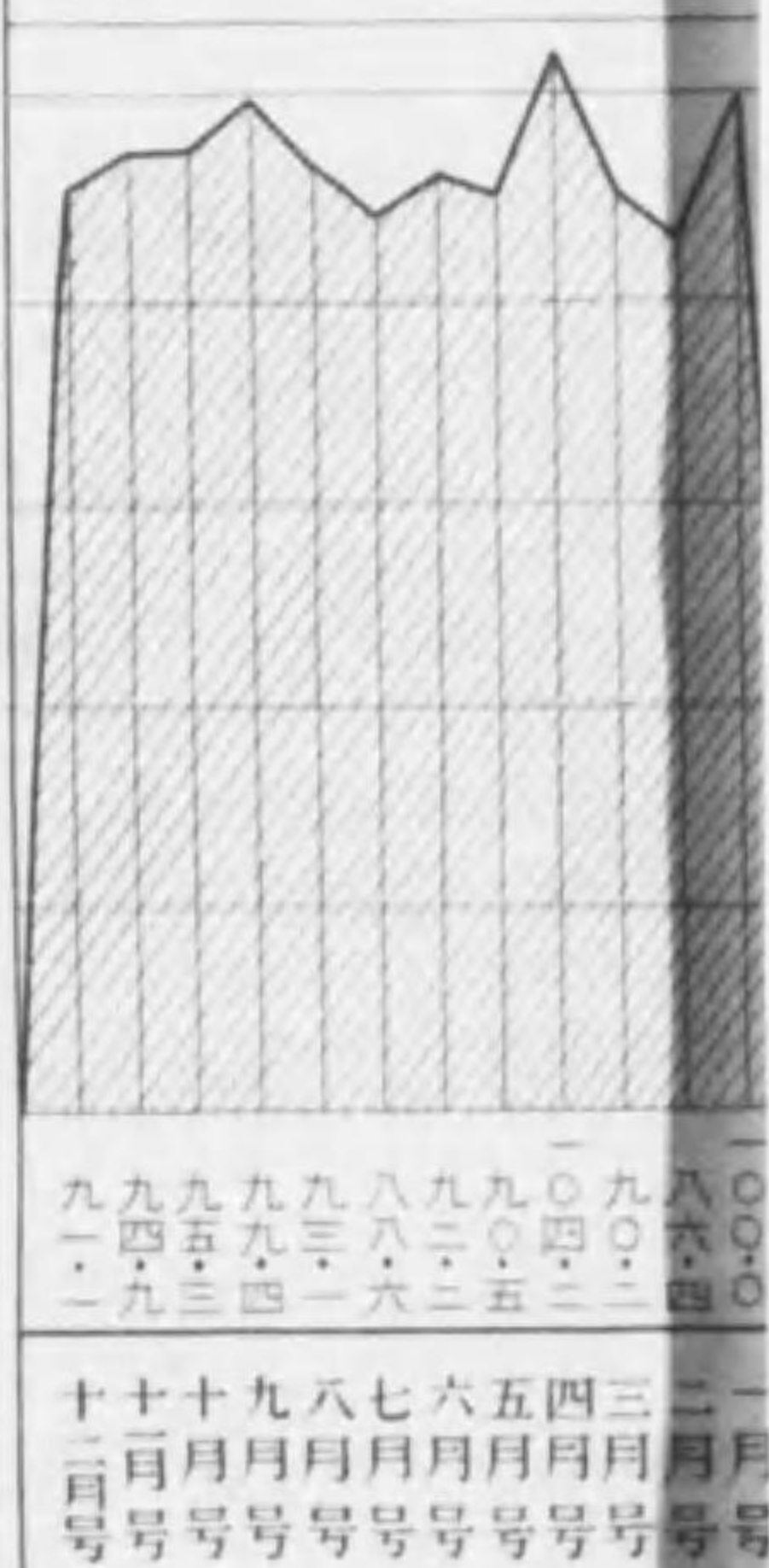
折込力革和背背布上並洋

Material	Percentage
折込力革	0.08%
和背背布	0.06%
上並洋	0.02%
布	100%
革	0.70%
和	0.56%
背背布	0.70%
上並洋	2.36%

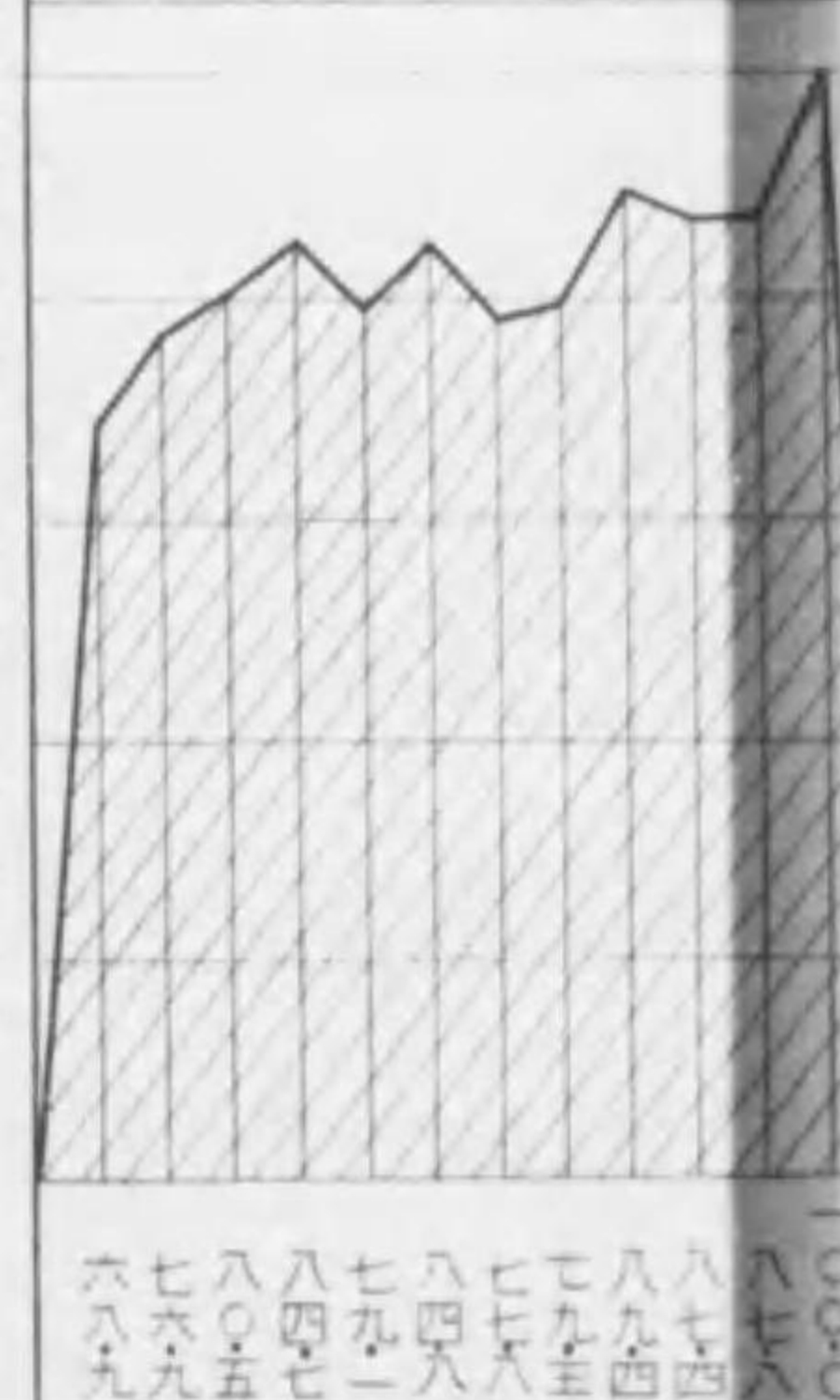
(數冊)

(一五七頁参照)

(種四) 誌雜學文濟經法政



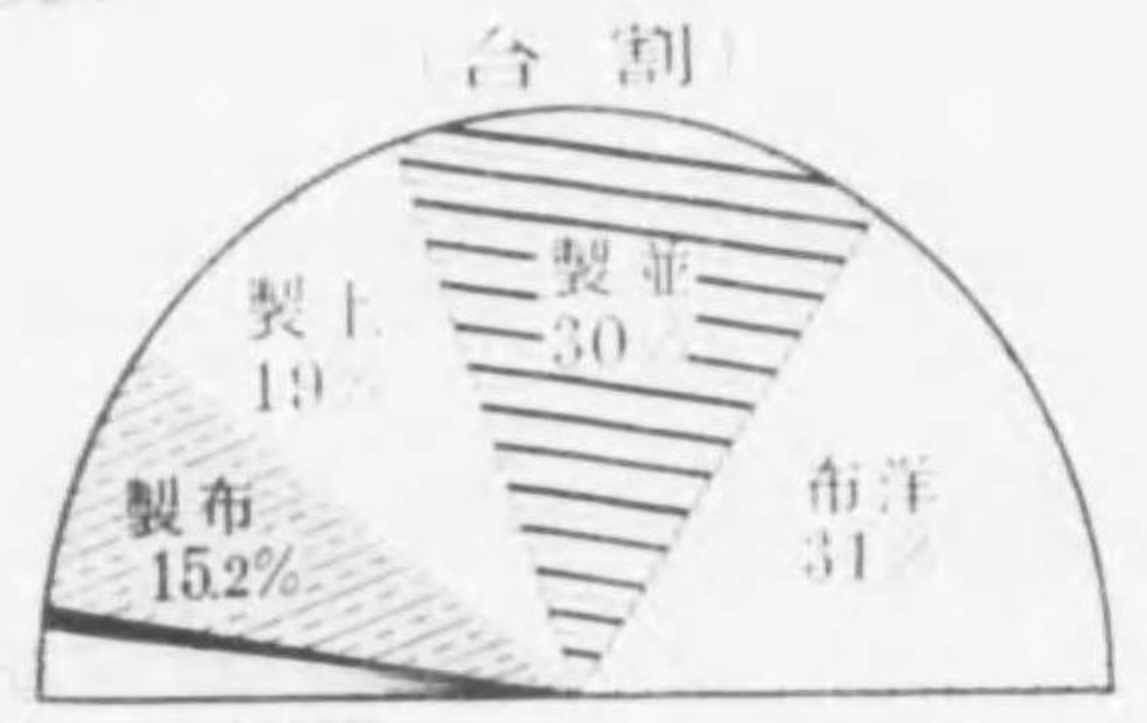
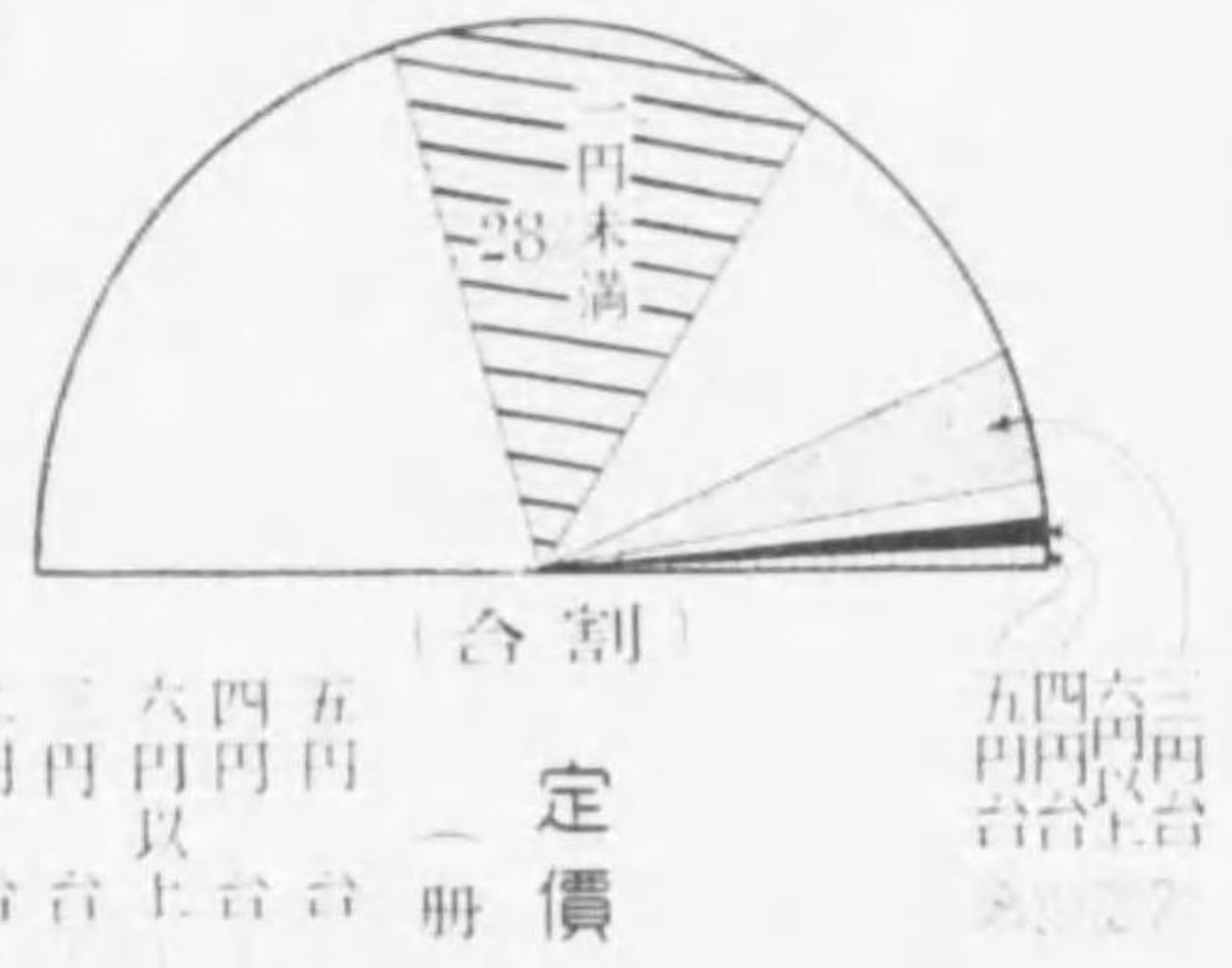
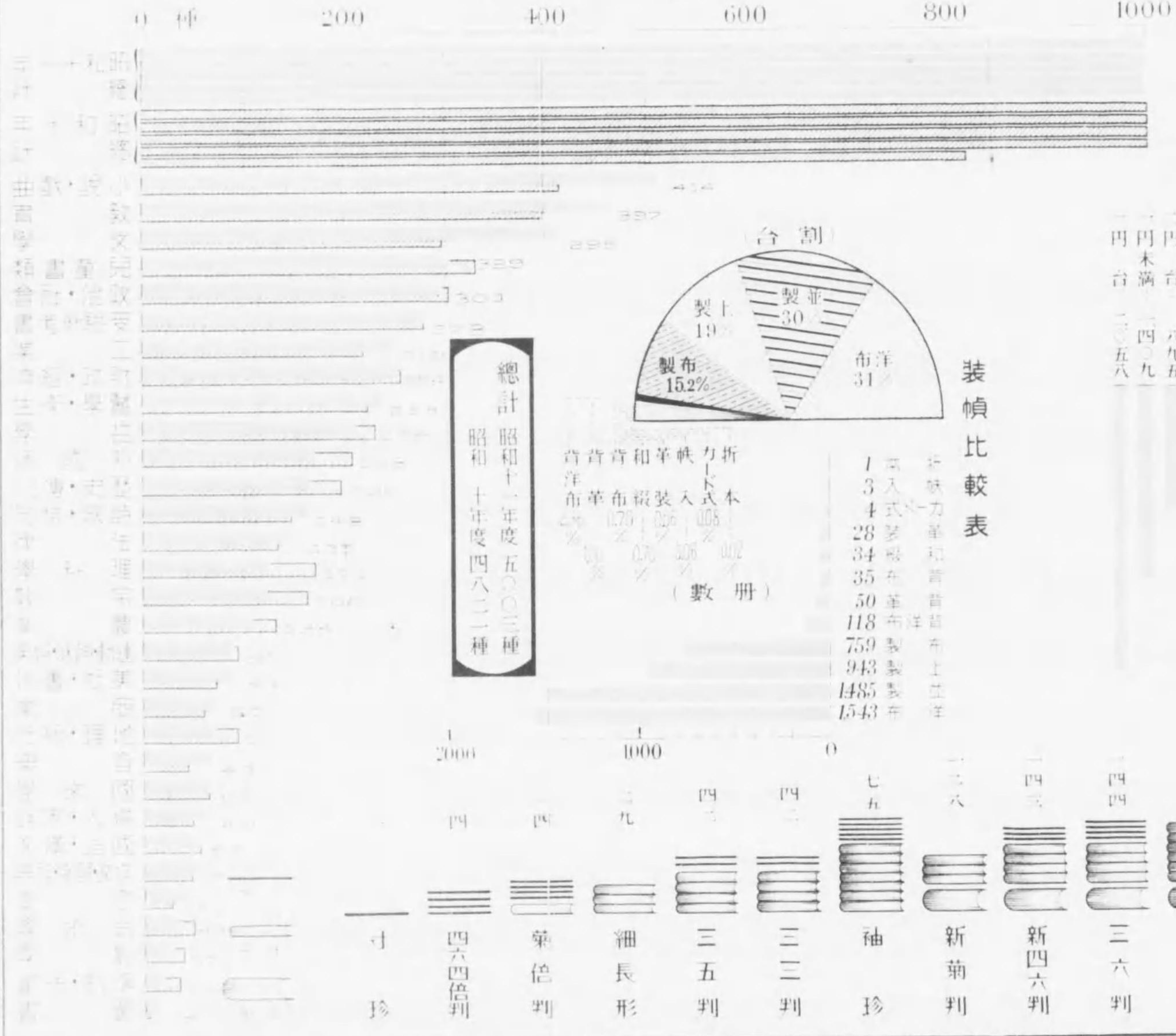
(種二十) 誌雜學文濟經法政



この統計は、昭和十一年度の上半期を調査対象として、二月以降の上半期の出版状況を調査したものである。昭和十一年度の上半期の出版状況は、昭和十年度の上半期と比較して、全体的に増加傾向にあることが認められる。特に、政治経済学、文学、社会科学などの分野で著しい増加が見られる。これは、戦時体制の進展に伴う社会情勢の変化や、国民の意識の高揚などが原因と推測される。また、出版業界の競争激化や、読者の嗜好の変化も影響していると考えられる。この統計は、出版業界の動向を把握し、今後の出版戦略の立案に役立つ貴重なデータである。

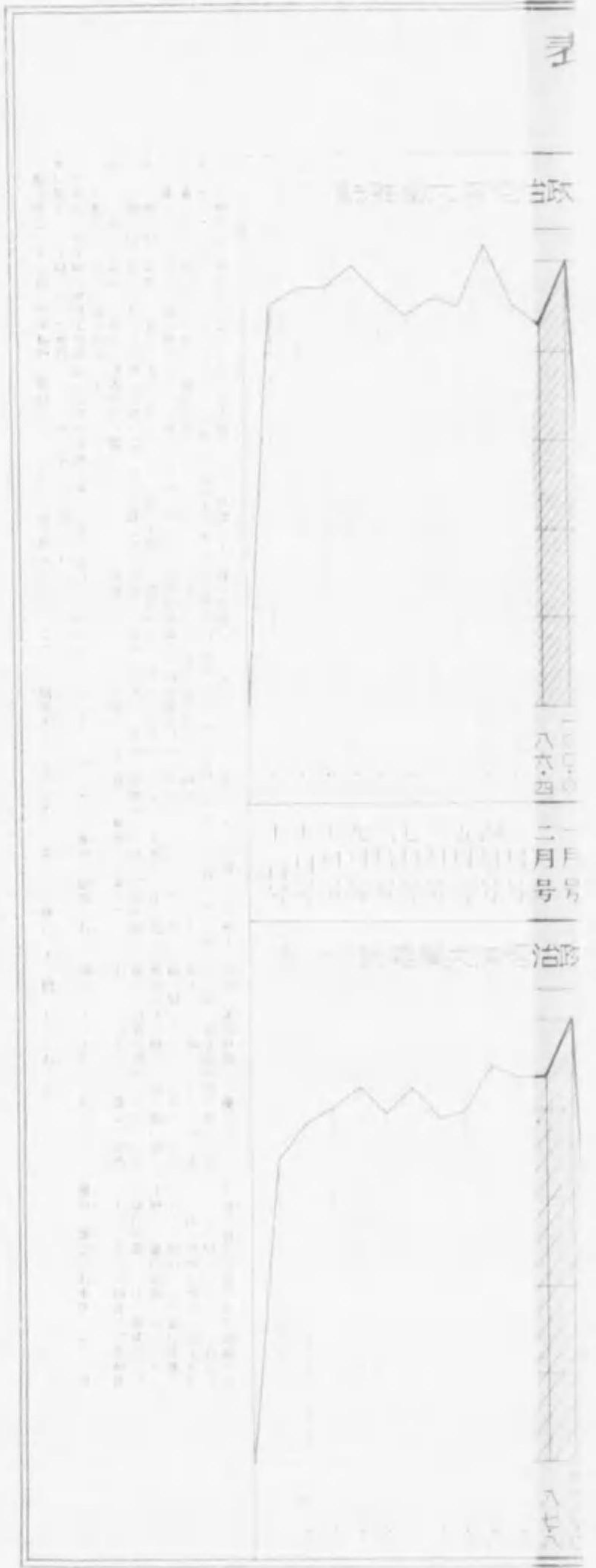
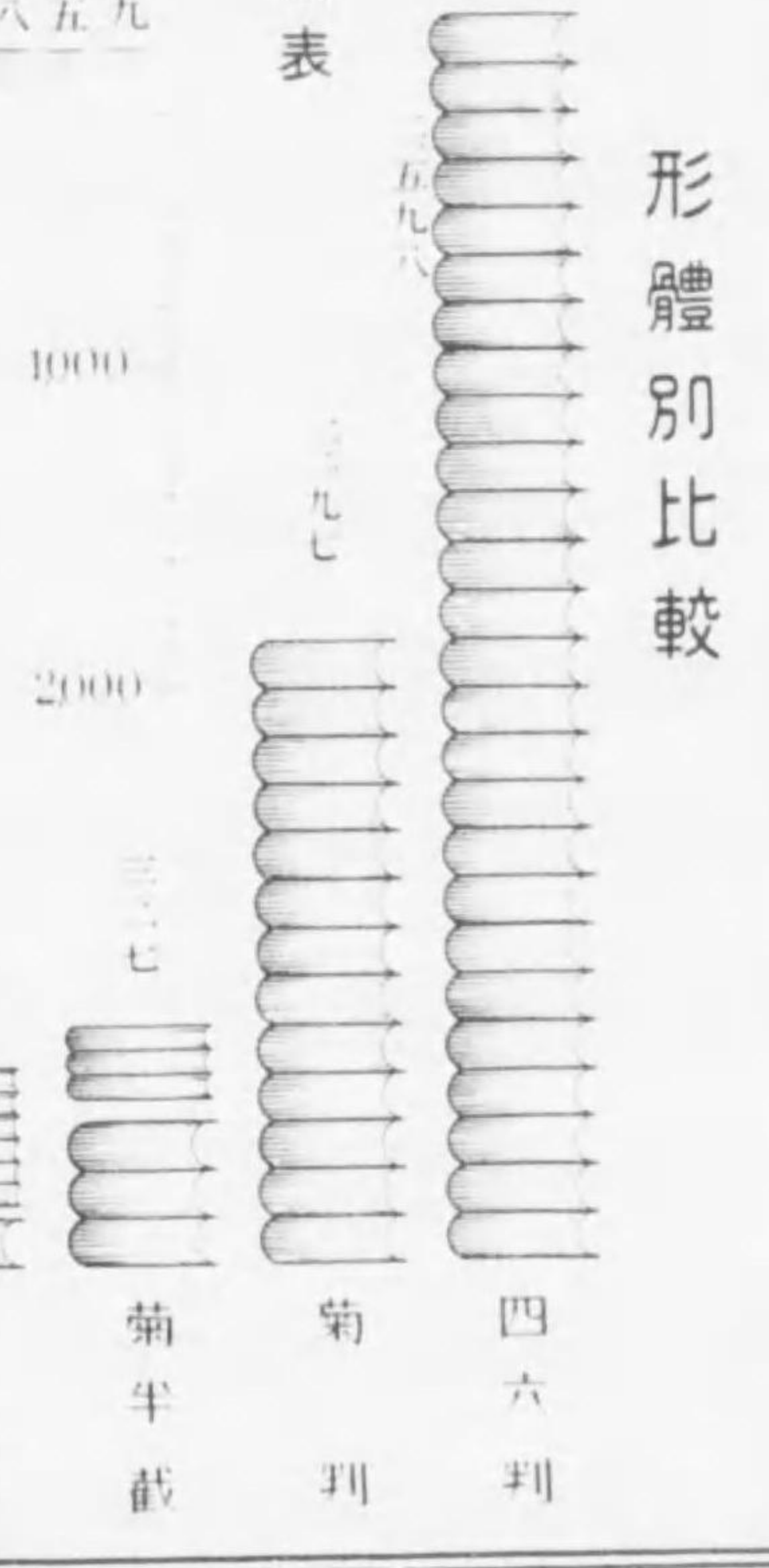
(查詢部報月堂京東) 計統書刊新度年一十和昭
 (除を書約意) 扱店書放

較比別類種



總計 昭和十一年度 五〇〇三種
 昭和十年度 四八二種

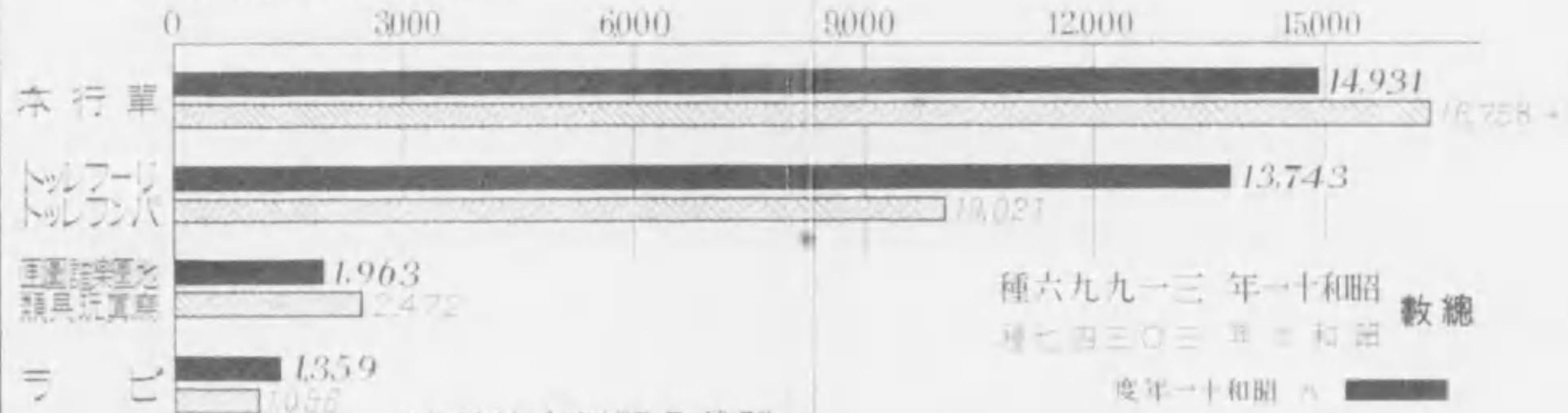
折力革 1 3
 力下式 4 28
 折入式 34 34
 革装 35 50
 和装 118 759
 洋装 943 1485
 布装 1543



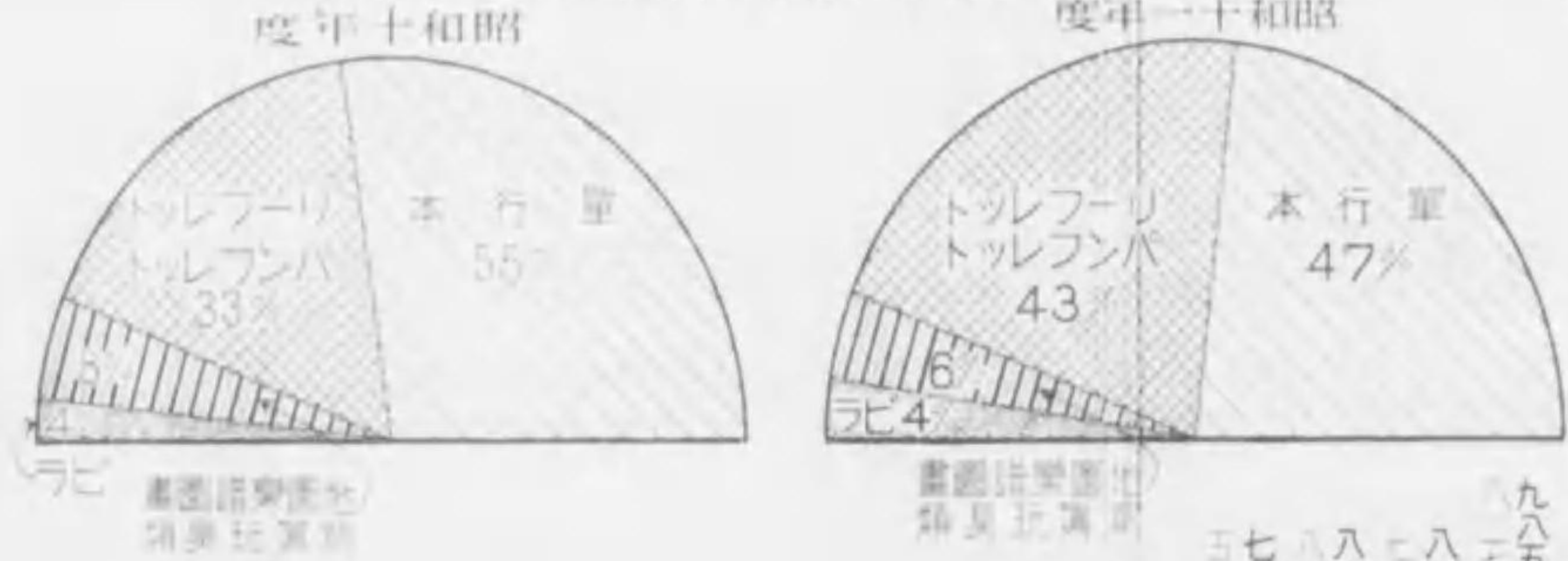
(査調局保警首務内) 計統數本納物版出通普年一十和昭

〈除を物版出廳官・誌雜聞新〉

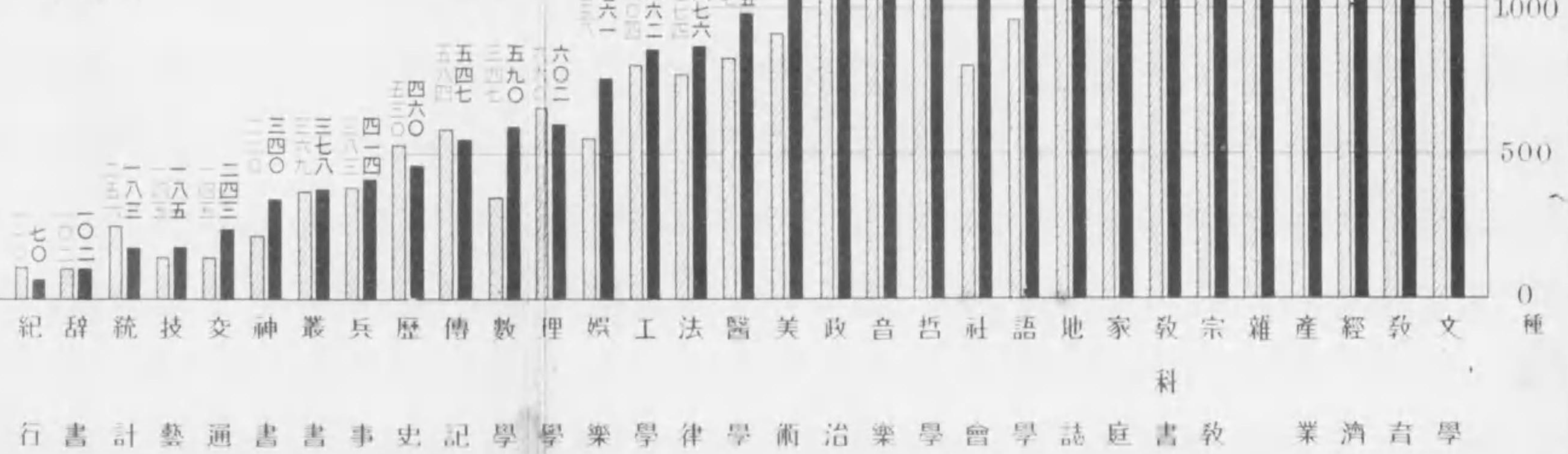
(數冊) 較比類分裁體



(%) 較比合割類分裁體



種六九九一三年一十和昭
種七四三〇三年一十和昭
度年一十和昭
度年一十和昭



凡例

- 一、本年鑑は昭和十一年一月より十二月まで一年間に出版された新刊圖書の目録を作ることを主眼とし、併せて出版界の情勢・彙報、統計類及び参考要覽を掲げて昭和十一年度に於ける出版界の現状と其動向を概観記録したものである。
- 一、第一部出版界一年史中「概観」の部は例年の通り一部分齋藤昌三氏が擔當し、「書誌學に關する圖書及び論文」の項は天野敬太郎氏が擔當執筆されたものである。「逝ける人々」の項は例年によつて出来る限り遺族の方々より寫眞と資料を得て正確を期した。
- 一、第二部出版統計はその中主要なるものを巻頭に圖表化して掲げた。今回は更に「最近八ヶ年出版界指標」等新圖表を交へてある。
- 一、第三部昭和十一年出版圖書目録は實物調査になる「東京堂月報」の目録を土臺にしたもので、前年版より調査の正確を期する爲に、單なる通知報告による目録は一切掲載せぬ方針に改めた。その代りとして、本目録に調査洩れの新刊は次の「内務省納本摘録」に掲載した。
- 一、第四部内務省納本摘録は、前年版より新たに増設した部門で、永久保存指定の内務省納本日録によつて編輯した。次の第五部預約配本目録と併せて、第三部の目録を補ひ、この三者によつて、殆んど完全に近い新刊圖書目録が出来たものと信ずる。尚「預約配本目録」は本年版より一層詳細に記載してある。
- 一、第六部雜誌目録中、一般書店扱ひの雜誌は實物により調査し、特殊雜誌目録は手數でも一々發行所に照會して正確を期した。現今我國發行の全雜誌を網羅することは内務省にて決行せぬ限り不可能であるが、更に

凡例

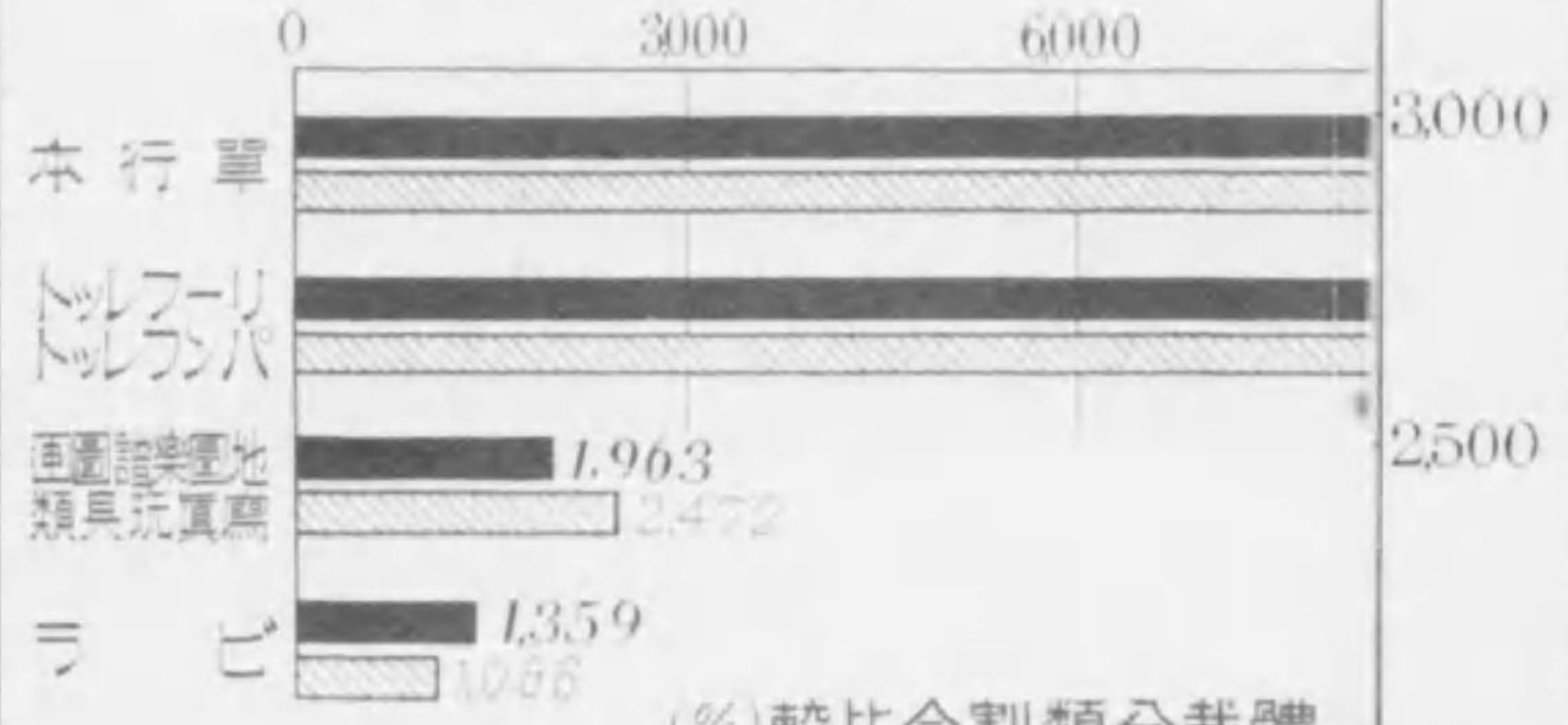
- 一、本年鑑は昭和十一年一月より十二月まで一年間に出版された新刊圖書の目録を作ることを主眼とし、併せて出版界の情勢、彙報、統計類及び参考要覽を掲げて昭和十一年度に於ける出版界の現状と其動向を概観記録したものである。
- 二、第一部出版界一年史中「概観」の部は例年の通り一部分齋藤昌三氏が擔當し、「書誌學に關する圖書及び論文」の項は天野敬太郎氏が擔當執筆されたものである。「逝ける人々」の項は例によつて出来る限り遺族の方々より寫眞と資料を得て正確を期した。
- 三、第二部出版統計はその中主要なるものを巻頭に圖表化して掲げた。今回は更に「最近八ヶ年出版界指標」等新圖表を交へてある。
- 四、第三部昭和十一年出版圖書目録は實物調査になる「東京堂月報」の目録を土臺にしたもので、前年版より調査の正確を期する爲に、單なる通知報告による目録は一切掲載せぬ方針に改めた。その代りとして、本目録に調査洩れの新刊は次の「内務省納本摘録」に掲載した。
- 五、第四部内務省納本摘録は、前年版より新たに増設した部門で、永久保存指定の内務省納本日報によつて編輯した。次の第五部豫約配本目録と併せて、第三部の目録を補ひ、この三者によつて、殆んど完全に近い新刊圖書目録が出来たものと信ずる。尙「豫約配本目録」は本年版より一層詳細に記載してある。
- 六、第六部雜誌總目録中、一般書店扱ひの雜誌は實物により調査し、特殊雜誌目録は手數でも一々發行所に照會して正確を期した。現今我國發行全雜誌を網羅することは内務省にて決行せぬ限り不可能であるが、兎に角出来る限り多數を収録すべく努力した。
- 七、第七部出版關係名簿は發行所一覽に力を注ぎ、其他なるべく最近の調査により訂正した。
- 八、第八部出版關係團體規約、第九部出版關係法規は、主なるものを殆んど網羅して最近の變動までを正した。本年鑑も昭和五年創刊以來巻を重ねること八回、毎年改良に改良を加へて、本年版も千二百頁を超えた。尙大方の教示を仰いで此上にも萬全を期したいと考へてゐる。

昭和十二年六月
編纂者識

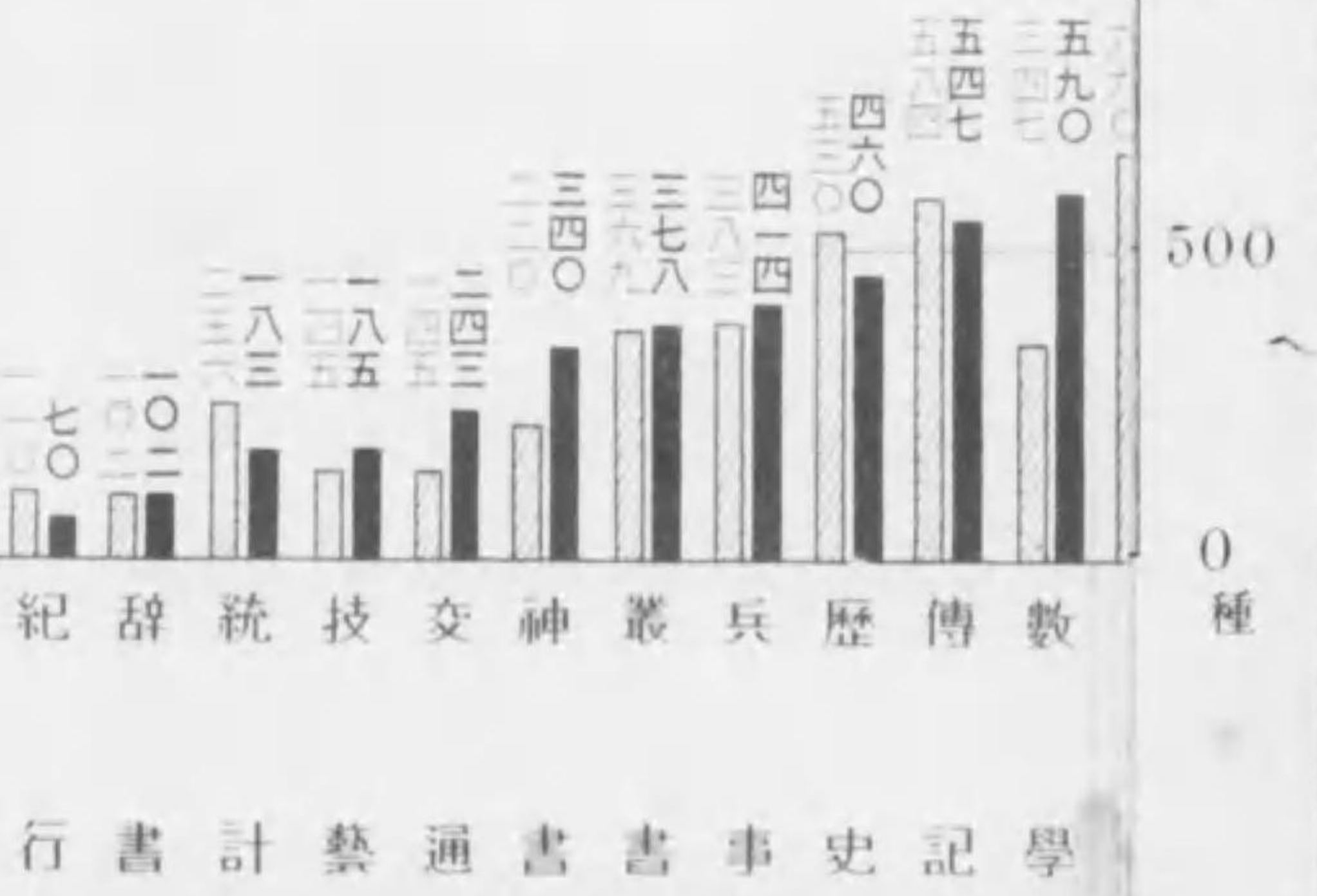
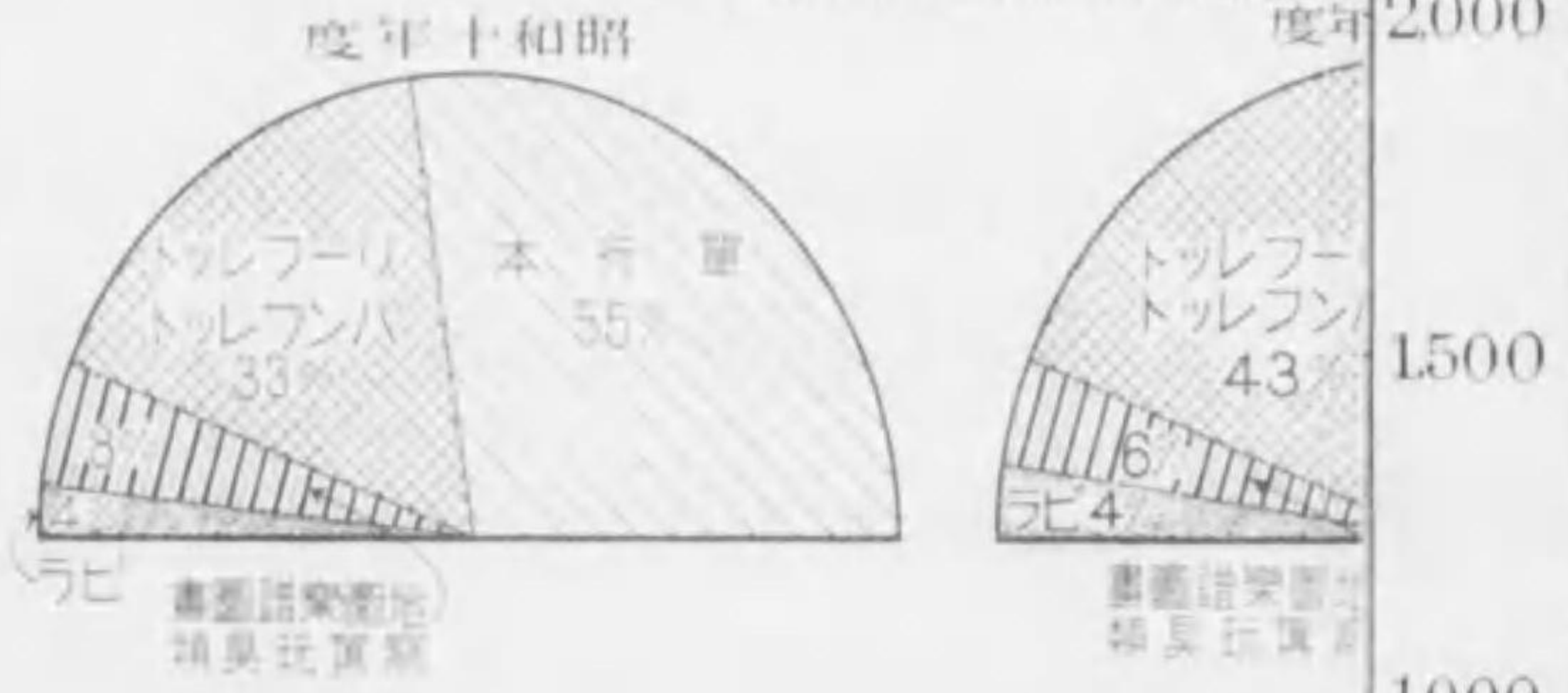
凡例

(查詢言保警警務内)

(數冊)較比類分裁體



(%)較比合割類分裁體



(一四四頁参照)

『出版年鑑』(昭和十二年版) 目次

第一部 出版界一年史(昭和十一年度).....一

(A) 概観

一、出版界.....二

出版界概観.....二

雑誌界.....一〇

装釘界.....一七

出版廣告界.....二二

二、印刷・製本・紙業界.....三

印刷界.....三

製本界.....三

紙業界.....三

三、圖書館界.....四

(B) 彙報

一、出版界・讀書界彙報.....四五

一月 出版關係の各團體總會.....四五

東京書籍商組合の定時總會.....四五

大阪書籍商組合の定時總會.....四六

日本雑誌協會の定時總會.....四六

京都書籍商組合の定時總會.....四六

中等教科書協會の定時總會.....四七

東京出版協會の定時總會.....四七

東京雑誌販賣業組合の定時總會.....四八

著作權に關する供託金制度の運用便法.....四九

小學館相賀氏の美譽.....四九

大阪出版組合の二十周年祝賀會.....四九

書籍商同志俱樂部の店員慰安會.....四九

筆曲の樂譜にも著作權を認む.....五〇

二月 國定教科書の大改訂.....五〇

名古屋新本協会の誕生.....五〇

排日教科書使用事件.....五一

中教協會組織改善案の決定.....五一

チェンバレン氏の英譯「古事記」に.....五一

二月 日本青年畫家挿繪を描く.....五二

目黒前會長の表彰式.....五二

出版協會の機關新聞發行に就いての諮問書.....五三

聖徳太子の「憲法」獨逸語に翻譯さる.....五三

陸上日本を各國へ紹介の英文機關紙.....五四

アイヌ教化の父パチエラー翁の「アイヌ語辭典」完成.....五四

京都の昭和圖書館休館となる.....五四

日本雑誌協會前正副會長表彰式.....五四

坂本前中教協會長の彰功慰安會.....五四

三月 文部省で標準教科書を編纂す.....五五

青年聯合會本部の教科書編纂.....五五

豫約刊行物の一時拂込みに豫約出版法の適用.....五五

櫻の文獻展覽會.....五六

第二回出版文化展覽會.....五六

四月 海外廣告資料展覽會.....五六

勸工場式書籍の陳列.....五六

五月 吉田絃二郎氏の「感想」を剽竊.....五六

標準教科書案につき文部省當局陳情.....五六

猥褻刊行物の禁止條約.....五七

戰爭物語の取締.....五七

米國で「現代日本詩歌集叢書」出版.....五七

六月 ベルメ會議突如無期延期となる.....五八

小・中、高專學校の教科書を再檢討.....五八

外務省から公刊の「大日本外交文書」.....五九

業界機構改革座談會.....五九

東京書籍株式會社々屋の落成式.....六〇

東京出版協會の強化案.....六〇

國定教科書の値下げ.....六〇

大阪出版組合の先人慰靈祭.....六一

友松圓諦氏著書に剽竊問題起る.....六一

英國貴族の勞作「英譯校註藤栗毛」.....六一

七 月	國際著作權法改正案の諮問	六二
	日本翻譯界の實狀を歐洲各國に觀	六二
	機構改善座談會	六三
	文部省で自然科學研究の貴重論文を公刊	六三
	帝國圖書株式會社設立	六三
	兵庫縣書籍協會結成	六三
八 月	巴里で「日本叢書」を刊行	六三
	民族博物館建設の計劃	六四
九 月	第四回雜誌週聞	六四
	伏せ字を斷乎一掃	六五
	伯林から第二のブラーゲ旋風	六五
	日本を誣ひる外國圖書に發禁	六六
十月	圖書大市會	六六
	全國書籍雜誌商組合地方協會の定	六六
十一月	時總會	六七
	全國書籍商組合聯合會總會	六七
	第二回出版販賣懇談會	六七
	日本翻譯家協會の結成	六八
	書籍の賣上及營業收益税免除運動	六八
	書名登錄に注意が肝要	六八
	機關紙に關する出版協會の懇談會	六八
	各國語の日本研究圖書目錄	六九
	「春琴抄」英獨譯なる	六九
	「寶談藏」出版の機運	六九
	スチムソン著「極東の危機」	六九
	一部五千圓の世界的超豪華版	七〇
	ナチスの國の雜誌が日本特輯號を出す	七〇
	創立五十年記念に富山房社長の美學	七〇
十一月	第四回全國圖書祭	七一
	東京の圖書祭	七一
	各地の圖書祭	七一
	圖書館週聞	七二
	書道博物館完成す	七三
	東京出版協會制定の電報通信符號	七三
	兵庫縣組合の創立三十周年記念會	七四
	機關誌發行會社の發行人會	七五
	新潮社の創立四十周年記念	七五
	發禁の英文日本史	七五
	第三種郵便値上げに對する反對運動	七五
	英語萬葉集決定版	七六
十二月	讀賣新聞廣告料値上げに對する對策	七六
	滿洲で當用日記の發禁	七六
	イタリー政府から寄贈の「イタリー文庫」	七六
	四十年前獨逸で出版された萬葉集	七七
	「内科撰要」の原書發見さる	七七
	書籍會館建設の議	七七
	世に出る「明治時代重要資料」	七八
二、逝ける人々	生田長江氏(文藝評論家)	七八
	坪井九馬三氏(帝國學士院會員)	七八
	山本重彦氏(東洋出版社社長)	七八
	山本松之助氏(元東朝社會所長)	八六
	納所辨次郎氏(元學習院教授)	八六
	大橋太郎氏(博文館取締役)	八六
	松村謙氏(理學博士)	八七
	松岡靜雄氏(海軍大佐)	八七
	柳澤保惠伯(貴族院議員)	八八
	大森細雪氏(劇作家)	八八
	尾竹竹坡氏(日本畫家)	八八
	長尾半平氏(禁酒同盟理事長)	八八
	南部修太郎氏(劇作家)	八八
	綱島佳吉氏(番町教會名譽牧師)	八九
	鈴木三重吉氏(作家)	八九
	石割松太郎氏(劇評家)	八九
	大田馬太郎氏(日本書籍會社常務取締役)	九〇
	鈴木友三郎氏(明治書院取締役)	九〇
	南鷹次郎氏(北海道帝大前總長)	九〇
	伊藤銀三郎氏(大日本圖書支配人)	九〇
	奥田艶子女士(女子高等職業學校校長)	九〇
	野澤藤吉氏(元二六新報主幹)	九一
	加島虎吉氏(至誠堂書店主)	九一
	草間滋氏(慶應醫學部教授)	九一
	下田歌子女士(女子教育家)	九一
	安田善次郎氏(安田同族會總長)	九二
	三樹胖氏(明治書院監査役)	九二
	岡倉由三郎氏(英學者)	九二
	小倉伸吉氏(理學博士)	九三
	岡田朝太郎氏(法學博士)	九三
	谷孫六氏(著述家)	九三
	中山秀三郎氏(帝國學士院會員)	九四
	寺田鼎氏(劇作家)	九四
	齋藤義範氏(上田屋書店事務取締役)	九四
	飯田忠純氏(文化史家)	九四
	ハツパー氏(浮世繪研究家)	九四
	牧野菊之助氏(元大審院長)	九五
	安藤和風氏(秋田魁新報社長)	九五
	三品長三郎氏(東朝客員)	九五

田中榮治郎氏(大阪榮進堂主)	八一
河出精一郎氏(成美堂主)	八一
夢野久作氏(探偵小説家)	八一
入江爲守氏(御歌所長)	八二
橋野信一氏(野球界元老)	八二
牧野信一氏(小説家)	八二
橋本文吉氏(實業之日本社取締役)	八三
小林益氏(元東京府立第三高女校長)	八三
生沼大造氏(富山房支配人)	八三
岡島敬治氏(慶大醫科教授)	八三
成瀬正一氏(九州帝國大學教授)	八四
田中義一氏(醫海時報社長)	八四
久保田讓氏(樞密顧問官)	八四
紀淑雄氏(早稻田大學教授)	八四
佐分眞氏(洋畫家)	八五
石井直三郎氏(八高教授)	八五
滿川龜太郎氏(拓殖大學教授)	八五
福永渙氏(詩人)	八六
鬼頭伊八良氏(文敎書店主)	八六
三、創刊・改題・廢刊雜誌	九六
四、豫約本總覽	一〇二
五、發賣禁止一覽	一〇九

六、文部省推薦圖書……………一一一
 七、讀書週間選定圖書……………一一六
 八、茗溪會選定圖書……………一二九
 九、書誌學(圖書・書目・附出版)に關する圖書及論文……………一三三
 一〇、圖書出版に關する新聞雜誌……………一三八

第一部 出版 諸 統計

一、最近八ヶ年出版界諸統計……………一四三
 二、昭和十一年度普通出版物統計……………一四四
 三、同 體裁分類表……………一四五
 四、普通出版物累年比較表……………一四六
 五、出版圖書數曆年表……………一四八
 六、新聞雜誌年未數曆年表……………一五〇
 七、昭和十一年末全國雜誌數……………一五三
 八、昭和十一年末全國新聞紙數……………一五五
 九、東京堂接昭和十一年度新刊書類別統計……………一五七
 一〇、同 定價統計……………一五八
 一一、同 形態統計……………一五八
 一二、同 裝幀統計……………一五九

一三、東京堂接新刊書類別累年比較表……………一六〇
 一四、同 定價比較表……………一六〇
 一五、東京堂接雜誌類別形體、定價統計……………一六一
 一六、本邦製紙高、販賣量統計……………一六二
 一七、全國書籍雜誌商組合員増減表……………一六三
 一八、全國公立圖書館數調、豫算、藏書冊數、閱覽人員數統計……………一六五
 一九、同 累年比較表……………一六七
 二〇、出版圖書新聞廣告行數累年比較表……………一六八
 二一、同 順位累年比較表……………一六八
 二二、昭和十一年新刊數種類細別表……………一六九

第三部 昭和十一年出版圖書目錄

一、哲學……………二五三
 哲學概論・哲學一般……………二五三
 西洋哲學・西洋思想……………二五五
 東洋哲學・東洋思想……………二五九
 日本哲學・日本思想……………二六一
 論理學……………二六四
 心理學・精神分析……………二六四
 美學・藝術哲學……………二六六
 倫理學……………二六六
 人生論・人生觀……………二六七
 處世哲學・修養……………二六九
 心靈・妖怪……………二七二
 性哲學・占術……………二七二

二、宗教……………二七五
 宗教學・宗教一般……………二七五
 神道……………二七六
 佛教……………二七六
 基督教……………二八〇
 回教……………二八三
 新興宗教……………二八三

三、教育……………二八五
 教育學・教育一般……………二八五
 教育史・教育思潮……………二八八

教育實務・法規・要覽……………二九八
 教育心理學・兒童研究……………二九八
 道德教育・國民道德……………二九三
 宗教教育……………二九三
 社會教育・公民教育……………二九三
 青年教育・青年學校……………二九四
 農村教育・鄉土教育……………二九四
 學校教育・學級經營……………二九五
 教授法・學習指導……………二九八
 修身教育……………三〇〇
 國語教育……………三〇一
 綴方教育……………三〇五
 書方教育……………三〇七
 數學教育……………三〇七
 理科教育……………三〇七
 歷史教育……………三一〇
 地理教育……………三一三
 圖畫教育……………三一四
 手工教育……………三一四
 家事・作法教育……………三一五
 裁縫教育・手藝教育……………三一五
 音樂教育……………三一六
 體育・體育ダンス・學校遊戲……………三一六
 學校劇・學藝會……………三一〇
 學校設備・學校衛生……………三一〇
 家庭教育・幼稚園教育……………三三三

四、文學……………三三五
 (A)文學一般・外國文學研究……………三三五
 文學總論・文藝評論……………三三五
 歐米文學研究・評論・翻譯……………三七七
 文藝辭典・文藝年鑑……………三三三
 圖書・出版……………三三三
 (B)國文學・漢文學……………三三四
 國文學史・研究・雜纂……………三三四
 明治大正文學史・同研究(附・現代文學研究)……………三三八
 國文學註釋書……………三四〇
 國文學校訂本……………三四一
 漢文學研究……………三四二
 漢詩……………三四三
 (C)隨筆・文集・日記・書翰……………三四五
 隨筆……………三四五
 文集・讀本……………三四三
 日記・書翰……………三四三
 (D)詩歌・俳句・民謡……………三四五
 詩論・作詩法……………三四五
 詩集……………三四六
 翻譯詩集……………三四八
 歌論・作歌法……………三七〇
 歌集……………三七〇
 俳論・俳句法……………三七四

俳句集	三七五
川柳	三七六
民謡・歌謡	三七七
童謡	三七七
(E)小説・戯曲	三七七
現代小説	三七七
小説文庫類	三七七
大眾文藝・傳記小説・考證讀物	三七八
探偵小説	三七八
諸講小説	三七八
軍事小説・戰記文藝	三七八
情話・怪談・物語	三七八
續譯小説	三七八
續譯文庫類	三七八
戯曲	三七八
翻譯戯曲	三七八
(F)演劇・映畫	三七八
演劇史・演劇一般	三七八
歌劇・レグエウ・舞踊	三七八
映畫	三七八
五、語學	三七八
(A)言語學・國語・漢文	三七八
言語學一般	三七八
國語學・同研究	三七八
國文法	三七八
國文解釋參考書	三七八
漢文法	三七八
漢文解釋參考書	三七八
(B)作文・習字・速記	三七八
作文・書翰文	三七八
式辭・演說	三七八
書道・習字	三七八
速記	三七八
(C)辭典	三七八
國漢辭典	三七八
現代語・日用百科辭典	三七八
故語辭典	三七八
外國語辭典	三七八
(D)外國語	三七八
英語學・外國語一般	三七八
英語學習書	三七八
英文學註釋書	三七八
英譯書・英文著書	三七八
獨逸語	三七八
佛蘭西語	三七八
ラテン語	三七八
西班牙語	三七八
露西亞語	三七八
伊太利語	三七八
和蘭語	三七八
滿洲語・支那語	三七八
六、美術・音樂	三七八
(A)美術・工藝・寫真	三七八
美術評論・美術一般	三七八
日本美術史・同研究	三七八
西洋美術史・同研究	三七八
東洋美術史	三七八
畫集・圖錄	三七八
繪畫技法研究	三七八
圖案・商業美術	三七八
書畫	三七八
諸工藝	三七八
彫塑	三七八
陶磁器・茶湯釜	三七八
刀劍・金工藝	三七八
寫真	三七八
(B)音樂	三七八
音樂評論・音樂一般	三七八
西洋音樂・評傳	三七八
名曲解說・レコード音樂	三七八
樂理・樂典	三七八
器樂・聲樂	三七八
樂譜・唱歌集	三七八
謠曲・能樂	三七八

長唄	四七八
七、歷史・傳記	四七八
史學一般	四七八
人類學・考古學	四七八
民族學・郷土研究・傳説	四七八
日本通史・日本史一般	四七八
日本上古・中古・近古史	四七八
日本近世・現代史	四七八
日本社會・制度・經濟史	四七八
日本風俗史	四七八
史料・史籍・史蹟	四七八
年表・辭典	四七八
地方史	四七八
戰史・陸海軍史	四七八
史談・史話	四七八
東洋史	四七八
世界史・西洋史	四七八
日本人傳記	四七八
外國人傳記	四七八
八、地理・紀行	四七八
地理學一般	四七八
自然地理・人文地理	四七八
經濟・產業地理	四七八
日本地理・地誌	四七八
滿洲地理	四七八
世界地理・地誌	四七八
地圖	四七八
日本案内記	四七八
登山案内記	四七八
各地紀行	四七八
九、政治・社會	四七八
(A)政治・軍事	四七八
政治一般・政治思想	四七八
時局評論・國策評論	四七八
國家・國體	四七八
議會・選舉・政黨	四七八
行政・自治	四七八
國際・外交・國際聯聯	四七八
軍縮問題	四七八
世界政局・列國事情	四七八
露西亞問題・露西亞事情	四七八
支那問題・支那事情	四七八
滿洲問題・滿洲事情	四七八
拓殖・植民	四七八
國防・戰爭・軍事	四七八
(B)社會	四七八
社會學一般	四七八
社會思想・社會主義	四七八
社會運動	四七八
社會問題・社會政策・社會事業	四七八
勞働問題	四七八
農村問題	四七八
職業問題	四七八
婦人問題・兩性問題	四七八
社會評論・人物評論	四七八
社會常識	四七八
社會理想・社會探訪	四七八
新聞雜誌・文化記錄	四七八
年鑑・要覽	四七八
一〇、法律	四七八
法理・法律一般	四七八
法制史	四七八
憲法	四七八
裁判所構成法	四七八
民法	四七八
商法	四七八
民事訴訟法	四七八
刑法	四七八
刑事訴訟法	四七八
地方制	四七八
諸法	四七八
選舉法	四七八

稅法……………五二二
 國際法……………五二二
 六法全書……………五二三
 日常法律・願屆書式……………五二三
一一、經濟・商業……………五二三
 經濟學一般……………五二三
 日常經濟知識……………五二三
 マルクス主義經濟學……………五二五
 經濟學說史……………五二六
 經濟史……………五二六
 生產・組合……………五二七
 貨幣・金融……………五二八
 恐慌・景氣……………五二九
 經濟政策・統制經濟……………五三〇
 經濟諸問題……………五三一
 世界經濟・國際經濟……………五三一
 滿洲經濟事情……………五三四
 支那經濟事情……………五三四
 日本經濟事情……………五三五
 財政・租稅……………五三六
 人口・統計・食糧……………五三七
 產業・貿易・各種事業……………五三八
 財界・景氣觀測……………五三九
 株式・投資……………五四〇
 交通經濟……………五四二

農業經濟・米穀經濟……………五四二
 經營・企業……………五四三
 銀行・會社・信託・保險……………五四三
 市場・取引・商品……………五四四
 商業一般……………五四五
 實務・能率……………五四五
 爲替……………五四六
 會計・簿記……………五四六
 商用通信・商業敎學……………五四七
 商店經營・販賣……………五四八
 廣告・宣傳……………五五〇
 商工業名簿……………五五一
一二、工業・工學……………五五二
 工業一般……………五五二
 工學一般……………五五三
 土木工學・土木材料……………五五五
 製圖……………五五五
 建築・家具……………五五六
 電氣工學……………五五九
 ラヂオ・テレビジョン……………五六二
 機械工學……………五六三
 鐵道工學……………五六七
 航空・船舶・航海……………五六七
 自動車……………五六七
 採礦・金屬・冶金……………五六八

化學工業・製造工業……………五七〇
 織物工業……………五七三
一三、農業・農學……………五七五
 農業一般・農業經營……………五七五
 農產製造……………五七七
 農學一般・農藝化學……………五七七
 園藝・作物……………五七九
 林業……………五八〇
 蠶業……………五八一
 畜產・家畜……………五八一
 水產……………五八三
 農具……………五八四
一四、理科學・數學……………五八五
 科學一般・日常科學……………五八五
 物理・化學……………五八六
 天文・地文・氣象……………五九〇
 生物學……………五九一
 動物學……………五九二
 植物學……………五九二
 礦物學……………五九三
 採集・標本・模型製作……………五九四
 數學……………五九四
 珠算……………五九六

一五、醫學・衛生

醫學・醫事一般……………五九七
 生理學……………五九七
 衛生學・營養學……………五九八
 解剖學……………六〇〇
 病理・組織學……………六〇〇
 細菌學・免疫學……………六〇一
 醫化學……………六〇一
 藥物學・藥草……………六〇一
 血液學……………六〇三
 法醫學……………六〇三
 神經病學・精神病……………六〇四
 臨床學・診斷學・治療學……………六〇四
 內科……………六〇八
 小兒科……………六〇九
 產科・婦人科……………六一〇
 外科……………六一一
 皮膚科・性病科……………六一一
 耳鼻・咽喉科……………六一二
 眼科……………六一二
 齒科・口腔科……………六一三
 家庭醫學・治療法……………六一三
 健康法・預防醫學……………六一五
 性・妊娠・優生學……………六一五
 看護法・產婆學……………六一六

一六、運動・趣味・娛樂

運動一般……………六一九
 陸上競技……………六二〇
 水上競技……………六二〇
 テニス・野球……………六二二
 武術・柔道・弓道……………六二二
 拳闘……………六二二
 スキー・スケート……………六二二
 ゴルフ……………六二二
 競馬……………六二二
 釣魚……………六二二
 ダンス……………六二二
 圍碁……………六二四
 將棋……………六二五
 茶道・花道・盆栽……………六二六
 各種娛樂・遊び方……………六二七
一七、婦人・家庭……………六二九
 婦人一般……………六二九
 家事・家政……………六三〇
 育兒・お産……………六三一
 裁縫・手藝……………六三一
 料理……………六三二
 禮式・作法……………六三三

一八、受験參考書

入學案内・受験案内……………六三五
 試験問題集及解答……………六三七
 文檢參考書……………六四一
 教員・師範受験者……………六四一
 巡查受験案内……………六四三
 鐵道受験案内……………六四三
 遞信受験案内……………六四四
 國語・漢文・作文參考書……………六四四
 數學參考書……………六四六
 物理化學參考書……………六四九
 博物參考書……………六五一
 歷史參考書……………六五二
 地理參考書……………六五三
 英語參考書……………六五三
 獨逸語參考書……………六五五
 簿記參考書……………六五六
一九、兒童書類……………六五九
 (A)兒童讀物……………六五九
 少年少女小説・物語……………六五九
 副讀本……………六六二
 少年文庫……………六六三
 童話……………六六四
 兒童劇……………六六八

漫畫・滑稽……………六六九
 歷史物語・偉人物語……………六七三
 陸海軍・戰爭物語……………六七六
 算術物語……………六七六
 科學物語……………六七六
 兒童作法……………六七六

兒童年鑑・兒童辭典……………六七六
 (B)兒童學習書……………六七八
 各科學習書……………六七九
 讀方學習書……………六七九
 算術學習書……………六八〇
 國史學習書……………六八一

地理學習書……………六八二
 理科學習書……………六八二
 圖畫學習書……………六八二
 入學試驗問題集……………六八二
 二〇、昭和十二年日記類……………六八五

第四部 昭和十一年內務省納本摘錄

一、哲學……………七四二
 哲學一般・西洋哲學……………七四二
 東洋哲學・東洋思想……………七四三
 日本精神・國體明徵……………七四三
 論理・心理・倫理……………七四六
 修養……………七四六
 心靈・性理・占術……………七四六
 二、宗教……………七四七
 宗教一般……………七四七
 神道・雜教……………七四八
 佛教……………七五〇
 基督教……………七五〇
 三、教育……………七五五
 教育一般……………七五五

實際教育・學校經營……………七五六
 各科教育……………七五七
 四、圖書館・圖書目錄……………七五八
 五、文學……………七五九
 評論・文集・隨筆……………七五九
 詩歌・俳句……………七六〇
 小說・戲曲……………七六一
 國文學研究・評釋・漢文學……………七六二
 古籍複刻・古本圖錄……………七六三
 演劇・映畫……………七六六
 六、語學……………七六六
 言語學・國語……………七六六
 辭典……………七六七
 外國語……………七六七

七、美術・音樂……………七六七
 美術一般……………七六七
 畫集・諸美術圖錄……………七六八
 書道……………七七二
 音樂……………七七二
 八、歷史・傳記……………七七三
 史學一般……………七七三
 人類學・考古學……………七七三
 民族學・神話・傳說……………七七四
 日本史一般……………七七四
 東洋史・西洋史……………七七五
 史料・記錄……………七七五
 史蹟・天然記念物……………七七七
 地方史・鄉土史料・神社史……………七七七
 沿革史・事業史……………七七九

記念寫真集……………七八〇
 傳記……………七八〇
 九、地理・紀行……………七八五
 地理一般……………七八五
 內地地誌・風土記……………七八五
 內地案内・紀行……………七八五
 滿支地理……………七八五
 滿鮮・支那案内・紀行……………七八六
 臺灣・南洋案内・紀行……………七八六
 歐米案内・紀行……………七八六
 一〇、政治・社會……………七八七
 政治一般……………七八七
 政治・時局評論……………七八七
 國家・國體……………七八八
 內閣・議會・政黨・選舉……………七八八
 國際・外交・拓殖……………七九〇
 地方行政・警察・消防……………七九二
 社會學・社會思想・社會評論……………七九三
 社會諸問題・社會事業・社會運動……………七九四
 勞動問題・農村問題……………七九五
 社會記錄・社會諸相・社會常識……………七九六
 一一、法律……………七九七
 法律一般……………七九七

憲法……………七九九
 民法……………七九九
 商法……………七九九
 刑法……………八〇〇
 訴訟法・判例……………八〇〇
 國際法……………八〇二
 行政法……………八〇三
 選舉法……………八〇三
 稅法……………八〇三
 其他諸法……………八〇三
 六法全書・法令・法規……………八〇四
 一一、經濟・產業……………八〇六
 經濟學一般・經濟政策……………八〇六
 經濟學說史・經濟史……………八〇六
 財政……………八〇六
 財政・景氣・經濟諸問題……………八〇七
 國際經濟・各國經濟……………八〇八
 貨幣・金融……………八〇九
 投資・證券……………八〇九
 產業一般・資源……………八一〇
 各種產業・各種事業……………八一〇
 農村經濟・米穀經濟……………八一〇
 產業組合・各種組合……………八一〇
 貿易……………八一〇
 商業學一般・商業政策……………八一三

會社・銀行・保險・無盡……………八一三
 市場・取引所・倉庫……………八一三
 會計・簿記……………八一三
 一三、軍事・交通・遞信……………八一四
 軍事一般……………八一四
 戰爭・戰術……………八一五
 交通一般……………八一五
 海運・水路……………八一五
 鐵道……………八一五
 遞信……………八一六
 航空……………八一六
 一四、統計・年鑑……………八一七
 統計……………八一七
 年報・年表……………八一八
 調查報告……………八一八
 年鑑……………八一九
 總覽・要覽・便覽……………八二〇
 商工信用錄・名鑑・名簿……………八二二
 一五、工業・工學……………八二三
 工業・工學一般……………八二三
 特許……………八二四
 土木工學・建築・家具……………八二五

電氣工學・無線工學	八三五	科學一般	八二九
機械工學・汽機	八三六	數學	八二九
採礦・金屬・冶金	八三六	物理・化學	八二九
化學工業・紡績	八三七	天文・地理・氣象	八三〇
一六、農業・農學	八三七	生物學	八三〇
農業一般・農業經營	八三七	動物・植物	八三〇
農業機械・育種學	八三七	一八、醫學・衛生	八三二
園藝・作物	八三六	醫學・醫事一般	八三一
林業・蠶業	八三六	生理・解剖・病理・組織・細菌	八三一
畜產	八三八	藥物學・藥草	八三三
水產	八三八	臨牀學・診療學・內科	八三三
一七、理科學・數學	八三九	產科婦人科・外科・皮膚科	八三三
		耳鼻喉科・齒科	八三三
		漢方醫學・鍼灸	八三三
		家庭醫學・看護・治療法	八三三
		性・妊娠	八三三
		一九、運動・趣味	八三四
		運動	八三四
		趣味	八三四
		婦人・家庭	八三四
		二〇、雜	八三五
		二一、外國語圖書	八三八

第五部 昭和十一年度豫約配本目錄

一、哲學	八四四	八、辭典	八七九
二、宗教	八四七	九、美術・工藝・書道	八八二
三、教育	八五〇	一〇、音樂	八八三
四、文學一般	八六〇	二、歷史・傳記	八九五
五、國文學・漢文學	八六一	三、地理・地誌	八九九
六、文藝作品集	八六七	三、法律	九〇〇
七、語學	八七八	四、政治・社會・軍事	九〇二
		一五、經濟・產業	九〇三
		一六、工業・工學	九〇七
		一七、農業・農學	九一六
		一八、理科學	九一七
		一九、醫學・衛生	九二〇
		二〇、運動・修養・受驗	九三三
		二一、婦人・兒童	九三三

第六部 雜誌 總目錄

一、幼年	九八二	一三、音樂	九九六
二、少年・少女	九八三	一四、通俗科學・ラヂオ	九九六
三、婦人・家庭	九八四	一五、運動・體育	九九七
四、娛樂・漫畫	九八五	一六、軍事・航空	九九八
五、映畫	九八七	一七、青年・修養	九九八
六、演劇	九八八	一八、語學	九九九
七、文藝	九九九	一九、數學・受驗	一〇〇〇
八、詩	九九一	二〇、教育	一〇〇一
九、歌	九九二	二一、法律	一〇〇六
一〇、俳句	九九三	二二、政治・社會・評論	一〇〇七
一一、美術・書道	九九四		
一二、寫真	九九五	三三、財政・經濟・商業	一〇一〇
		三四、工業・工學	一〇一四
		三五、農業・農學	一〇一八
		三六、宗教	一〇一九
		三七、學術	一〇二二
		三八、醫學・衛生	一〇二四
		三九、趣味	一〇二六
		四〇、旅行・登山	一〇二七
		四一、雜	一〇二八
		四二、追加	一〇二九

第七部 出版關係諸名簿

發行所一覽	一〇五五	主要印刷所一覽	一一一五
全國書籍雜誌商組合所在地	一一〇〇	主要製本所一覽	一一一九
全國新聞社一覽	一一〇〇	全國高等諸學校一覽	一一二二
全國學生新聞一覽	一一〇〇	全國主要圖書館一覽	一一二七
廣告代理店並取扱業	一一二二	文化諸團體所在地	一一四六
紙及材料店一覽	一一三三		

第八部 出版關係團體規約

東京書籍商組合規約	一一五〇	東京出版協會規約	一一五六
全國書籍商組合聯合會規約	一一五〇	日本雜誌協會規約	一一五九

東京雜誌販賣業組合規約……………二六三
中等教科書協會規約……………二六七

東京編輯者協會規約……………二六九

第九部 出版關係法規及書式

出版法施行規則……………	二七三
出版法及書式……………	二七三
新聞紙法及書式……………	二七六
保證金ニ充ツヘキ有價證券……………	二七七
納本ニ就テノ注意……………	二八二
著作權ノ施行ニ關スル件……………	二八二
著作權法ノ施行ニ關スル件……………	二八六
著作權審査會官制……………	二八六
著作權法施行規則……………	二八七
著作權法施行規則……………	二九〇
登錄ニ關スル登録申請書々式……………	二九〇
文學的及美術的著作物保護ニ……………	二九四
關スル「ベルヌ」條約……………	二九四
日米間著作權保護ニ關スル條約……………	三〇〇
支那ニ於ケル發明意匠商標及著作……………	三〇一
權ノ相互保護ニ關スル日米條約(抄)……………	三〇一
支那ニ於ケル發明意匠商標及著作……………	三〇二
權ノ相互保護ニ關スル日佛條約(抄)……………	三〇二
追加日清通商航海條約(抄)……………	三〇三
第三種郵便物認可規則……………	三〇三
第三種郵便物ニ關スル願屆書式……………	三〇三
約東郵便取扱承認規則……………	三〇五
約東郵便ニ關スル注意……………	三〇六
約東郵便ニ關スル願屆書式……………	三〇七
日版法ニ據リ刻版印本ヲ差押ヘタルトキ取扱處分方……………	三〇九
差押出版物ノ分割還付ニ關スル件……………	三〇九
出版ニ關スル取締諸法令……………	三〇九
菊御紋章或禁裏御用等ノ文字濫用ヲ禁ス……………	三〇〇
御肖像ニ關スル取締方……………	三〇〇
弘曆者ノ外額曆取扱を禁ス……………	三〇〇
本曆略本頒布及一枚曆略略出版法……………	三〇〇
一枚曆略略出版ノ規定……………	三〇〇
神社寺院ノ守札及神佛號記載ノ畫像出版ニ關スル達……………	三〇一
大日、帝國憲法(抄)……………	三〇一
未發表ノ著述ノ稿本ニ關スル民事訴訟法……………	三〇一
文部省圖書推定規則……………	三〇一
文部省圖書推定規則……………	三〇一
軍隊教育用圖書推定規則……………	三〇一
軍用圖書推定規則……………	三〇一
教科書檢定ニ關スル願屆書式……………	三〇二
教科書檢定ニ關スル願屆書式……………	三〇二

掲載廣告索引

……………三二五



第一部 出版界一年史 (昭和十一年度)

出版界一年史 (昭和十一年度)

一、出版界

出版界概観

二月二十六日、帝都に於ける未層有の突發事件により、戒嚴令が布告され、七月十八日解除まで約五ヶ月に亘る準戰時状態は、東京を中心に全國に及ぼし、その影響は社會全般に顯著に表はれた。わが出版界に於ても、言論は虚勢され、いやが上にも萎縮した結果、政治、社會、思想方面の議論は勢ひ不活潑を餘儀なくされるに至つた。また前々年來の宗教物全盛も、邪宗取締と彈壓によつて、手強い陶汰が行はれ、而も世界的な人心不安、かへて加へて前述の如き事變勃發等々、暗澹たる動搖の中に置かれた人心は、部分的には勢ひ逃避的となり、反抗的となつた。しかし其反面一般的に確固たるものを追求する心理を燃え上らせ、あらゆる實際問題の解答を要求するに至つた。即ち善く云ふならば混沌たる状態の中より、一步一步自立的、建設的な方向へと進展しつゝあることが觀取された。教育方面の書、修養方面の書、就中、經濟、産業、工學方面の出版物

が著しく進出して來たのはその一例である。これ等は理論より實行時代、研究より建設時代へといよ／＼其の第一歩を踏み出した民族的飛躍の過程にある日本の姿を出版界に反影したものと注目すべき現象であつた。それと同時に昭和十一年度は、政治外交文化その他あらゆる方面に國際的色彩を華々しく加へて來たが、それが出版界にも當然鮮やかな配色を齎らすものとなつた。幾多の日本古典、現代文學の海外翻譯が行はれたことや、彼の米國の前國務卿スチムソン氏の『極東の危機』が、彼地で發行一ヶ月にして、わが『中央公論』、『改造』二大雜誌の附録として期せずして篇を削ることになつたなども、實に此の一例であつた。

本年八月獨逸ベルリンに開催の世界オリンピック大會に於て、次回開催國が日本の東京に決定を見るや否や、早くもその前奏曲として、オリンピックものが踊り出さうとした。四年後の丁度その年はわが紀元二千六百年に相當するところから、その期に當つての諸種の紀念計畫が發表せられた中に、日本文化聯盟は、松本學氏の名を以つて十數項

目の計畫事業を發表した。その中には現在の文化聯盟をより以上恒久的團體として、所謂日本文化中央聯盟を結成することを宣言し、

「日本文化百科辭典の編纂」、「日本文化史の編纂」、「日本文化大觀の編纂」、「國史記念館の新設」、「讀書館の建設」、「日本文化圖書館の新設」、「日本文化賞の設定」、「文化國際聯盟の提唱」

等々があつたが、規模の大小こそあれ、至る所に記念事業としての提案がほの見え、企圖せられんとした。かつて英國に於けるピクトリア女王在位五十年奉祝に當つてなされた文化事業の如く、本年あたりから聲を大きくしてゐたなら、四年後の記念事業も何物か出來ない事はあるまい。なほ國際的な出來事としては、南米アルゼンチンに開催の萬國ペンクラブ總會に、わが代表として島崎藤村、有島生馬兩氏が派遣され、來るべき昭和十五年(紀元二千六百年)には、これ亦わが東京に該大會を招致の事に決定を見た。かゝる劃期的事象は、海外に向ひ國威發揚の好機運をつくり出版界にも多少の影響を及ぼすものである。

殊にわが國紙業、印刷界は目狂ほしい發展振りで、印刷機械もインクも併せて印刷技術も格段の飛躍を見せてゐたが、即ちこれらは自然出版界にも及ぼし、數種に於ては、世界に一二位を争ふほど、本年度の内務省納本に現はれた數字は驚くべき状態を示してゐた。だが、種類に於て數ふ

べきものがあつても、その部數乃至發行を上々と測定することは早計である。實に出版元の簇出は應接に邊なきほどで、大資本永續の者は別として、群小のねらふ所は、期せずして特殊限定ものに始終するか、或ひは際物を目指して一擲千金を夢見るものが多く、ゾッキ屋の餌か屑屋に御奉公に終るかで、依然慘憺たるものであつた。所謂特殊限定版も、最早鼻につき、大體峠を越し切つた感があるのは、それらの資料が乏しくなつたのではないかと思はせられた。以下本年度出版物の細目につき少しく述べることにしよ。

内務省納本統計

政 治		法 律		經 濟		社 會		兵 隊		統 計		神 教		宗 教		哲 學	
一、〇四七	一、一二七	七、七四	八、七六	一、四八二	二、〇〇〇	八〇四	一、二五二	三、八三	四、一四	二、五六	一、八三	二、二〇	三、四〇	一、五五一	一、二四八	二、〇四一	二、五八一
△ 八〇	△ 一〇二	△ 五一八	△ 四四八	△ 三一	△ 七三	△ 一、二〇	△ 四五	△ 三	△ 五四〇								

教科書	二、二六〇	一、四八八	×七八二
文學	二、六六九	三、一八九	△五二〇
語學	九七六	一、三四一	△三七四
歴史	五三〇	四六〇	×七〇
傳記	五八四	五四七	×三七
地誌	一、一九一	一、三九七	△二〇六
紀行	一一〇	七〇	×四〇
數學	三七四	五九〇	△二四三
理學	六六〇	六〇二	×五八
工學	八〇四	八六〇	△五八
醫學	八二七	九八五	△一五八
産業	一、四八八	一、八八四	△三九六
交通	一四五	二四三	△九八
美術	九一五	一、一一七	△二〇二
音樂	一、四〇七	一、一八五	×二二二
娛樂	五五八	七六一	△二〇三
家庭	一、八一五	一、四五一	×三六四
技藝	一四五	一八五	△四〇
辭書	一〇二	一〇二	—
叢書	三六九	三七八	△九
雜計	二、六〇六	一、五八七	×一、〇九
合計	三〇、三四七	三一、九九六	△一、六四九

また同じく右の體裁分類は次のやうである。

體裁分類

單行本	一六、七五八	一四、九三一	×一、八二七
パンフレット	一〇、〇二一	一三、七四三	△三、七二二
ビラ	一、〇九六	一、三五九	△二六三
寄附、玩具類	二、四七二	一、九六三	×五〇九
合計	三〇、三四七	三一、九九六	△一、六四九

本年度は總數三一、九九六種で、前年の三〇、三四七種よりも一、六四九種の増加となつて居る。

先づ種類についてこれを見れば、前年に比べてその増加の著しいものは、教育の五四〇種、文學の五二〇種、經濟の五一八種、社會の四四八種、産業の三九六種、語學の三七四種、等である。續いて數學の二四三種、地誌の二〇三種、美術の二〇二種の増加が目立つた。

種類の減じたものは、雜の一、〇一九種を筆頭に教科書の七八二種、家庭の三六四種、音樂の二二二種である。他は大した増減はない。

しかしこの統計に示したものは雑誌以外の出版法による納本印刷物全部を含むものであつて、これを體裁によつて分けると、前掲の體裁分類の如くなる。即ちパンフレットに於ては三、七二二種増加して居るが、反對に單行本に於ては一、八二七種減じて居る。またビラに於ては二六三種の増加であるが、寫眞地圖樂譜圖書の類に於ては五〇九種減じて居る。如何に本年度はパンフレット、ビラの類が旺ん

に刊行されたかといふことが證明される。更に最近五ヶ年間の單行本及びパンフレットの統計を比べると

單行本	昭和七年度	一四、二四二種
	昭和八年度	一六、四七三種
	昭和九年度	一六、九二一種
	昭和十年度	一六、七五八種
	昭和十一年度	一四、九三一種
パンフレット	昭和七年度	五、五二三種
	昭和八年度	五、四六八種
	昭和九年度	七、一一七種
	昭和十年度	一〇、〇二一種
	昭和十一年度	一三、七四三種

となり、パンフレットは近年急激に増加して居る。殊に十一年度はこの傾向が著しく、次の「雑誌界」でも説く如く慌しい人心、落着無き社會相、逼迫した國際關係等を露骨に反影して、一夜漬けの小冊子が街頭に氾濫したのである。以上は内務省の納本統計であるが、次ぎに一般書店にて取扱つた單行本の新刊統計、即ち東京堂調査のものを掲げて見よう。先づ、昭和九、十、十一年度の月別比較は次の如くである。

一	月	二六四	三九四	二八七
二	月	二九九	三三八	三六四
三	月	三六七	三六七	三四九
四	月	三九五	三九四	四六〇
五	月	五四七	五二四	四八九
六	月	四二七	四二五	五〇〇
七	月	三四二	三六一	四一二
八	月	一九四	二八一	三〇四
九	月	四四二	五二八	四二八
十	月	四〇七	四二五	四九七
十一	月	三九六	四二七	四七三
十二	月	四九六	四六一	四四一
合計		四、五七三	四、八二一	五、〇〇三

本年度は昨年と比して一百七十八種の増加で、月平均四百十七種である。何時の年も、六、九、十の月は出版数は上昇の習ひであつて毎年八月は激減を示して居るが、本年度にあつては、霜枯月の八月にその現象が顯著に見えて居ないのは、一般に手控への期をねらつて、反對に出た向きが多かつた結果かとも思はれる。

次に本年度出版數種の各部門に涉つて、昨十年と比較すると消長の波線が覗へて興味あるものである。

小	教	文	兒	政	受	工	財	醫	哲	外	歷	詩	法	理	宗	農	運	美	商	地	音
四一四	三九七	二九五	三二九	三〇一	二七八	二一九	二五四	二二三	二二九	二〇八	一九五	一四八	一三五	一七一	一六六	一三四	九一	七三	六〇	九〇	四三
五一五	四六四	四一六	三〇二	二九五	二七九	二五五	二五三	二四一	二一一	一七〇	一六七	一六六	一五六	一二五	一二二	一〇七	八八	八七	七二	七〇	六六
△一〇一	△六七	△一二一	×二七	×六	△一	△三六	×一	△一八	×一八	×三八	×二八	△一八	△二一	×四六	×四四	×二七	×三	△一四	△八	×二〇	△二三

國	婦	國	作	修	民	數	演	圖	合
六五	四九	五五	四七	二七	四九	三九	三三	四	四、八二一
六五	六三	五五	五五	四九	三〇	二九	一七	一三	五、〇〇三
△一四	△一四	△一八	△二二	△一九	×一九	×一〇	×一六	△九	△一八二

右に就いてみると、小説の増加は順調と思はれる伸び方であるが、文學(評論、隨筆)の増加は著しいもので全體から云つて第一位にあり、第二が小説、第三が教育の順で音樂の二十三増加、修養の二十二増加は率から見ても非常に大きく、減少の方面から云ふと、理科、宗教、外國語、歴史、傳記、農業、兒童、哲學等々が振はなかつた。

次に定價統計を見ると

十年度	十一年度	増減
一四臺	一、八八一	二、〇五八
一四未滿	一、二八六	一、四〇九
二四臺	九五二	八九五
三四臺	三五九	三四九
六四以上	一三九	一〇八

となる。一圓は全體の四割一分強、一圓以下は二割八分強、二圓以上は一割七分、三圓以上は七分、四圓以上二分である。これを前年度に比べると、増加したものは大部分一圓臺及び一圓未滿であつて、その他は減じてゐる。要するに定價の安いものが増加し、高い方が減じてゐるといふ結果を見たのである。

讀書人を見渡すと空氣を無意識に吸込むやうに讀書する人と、米の飯を習慣的に食つてゐるやうに、讀書を必要として習慣づけられてゐる人と、いかもの食ひと云つては別弊もあるが、一種食通を氣取る讀書家……といふやうな別がある。十錢本や文庫版の流行に關聯して一二圓臺の單行本は、讀者側から云つても丁度手頃である。本年の一圓臺が四割一分を占めたのは、一般購買力からの要求ばかりでなく、出版側からも生産費をかけずに大量を多賣する可能性がある。諸物價の騰貴によつて、紙質製本材料の劣るの性は致し方ないが、實際一二圓臺の書物を取上げる時は、實用向きを主眼として、形態はさほど問題とされない。一方形態的に豪華版を欲する人々は、既にその鑑賞眼が肥えてゐるから、矢鱈に振り返す豪華版の聲には眩惑されない。内容、形態凡てに於て整備せる本當の豪華版への憧憬

は捨てない。従つて不景氣であらうと、定價が張り過ぎやうと、眞實卓絶したものに対しては、依然として需用家がある譯である。

本年度出版の部分的見方をすれば、文學ものゝ隆盛といふ現象の中には、既に一度取上げられたもの、再檢討、再吟味が行はれたこと、翻譯ものが又勢ひを増して來たことは特記しなければならぬ事實である。圓本洪水時代の總ざらひとは、少しく意味の異つた總ざらひが行はれた。一面種が品切れになつてこの現象を引起したとも見られるが、本年現はれた再見參の中には、再現すべき、結果から見てその必要のあるものが提供されて居り、純文學の畑では各種の名譽賞制定に刺戟せられた形もあつて、新進の人々のものも相當出た。

集大成といふやうな類の、相當永い時日を要するもので二十年、三十年の今日、それらの決算時期に到達したとてもしふのか、可成り幾つもの完成が送り出され、偉觀を呈した年でもあつた。『維新史料聚芳』の乾坤二巻は、明治四十四年創立の維新史料編纂會、二十五周年に當つて初めてその收獲を公表するに至つたもので、なほ『維新史料綱要』も着々完成に向ひつゝあり、大藏省編纂の『明治大正財政史』三巻も亦貴重とすべきもので十二月完成した。外務省調査部編纂の『大日本外交文書』は第一卷第一冊が公刊せられたが、我が國に於ける外交史研究に比類なき資料を提

供するものとして、學界に裨益する處は尠くない。立命館大學講師太田亮氏は、刻苦三十年にして『姓氏家系大辭典』を完成し、建國以來の姓氏と家紋の研究、並に重要人物の略歴を添へたもので、國史上、社會學上の參考として不朽の名著である。

高野山金剛峰寺山史編纂所から刊行の『高野山文書』、原物そのまゝの『法隆寺壁畫』これは二十部限定で、一部五千圓のもの、即ち十萬圓の豪華カタログである。ロンドン大英博物館を初め、パリのルーヴル美術館等世界一流の美術館を飾るものとして、贈られる筈である。

なほ對外出版物は本年度殊に目立つて盛んであつた。先年（昭和九年七月十八日）ジュネーブに開催された學藝協力國際委員會は、國民相互の理解を増進せしめる目的で、日本文化の諸相を紹介すべく、その刊行を承認し、佐藤醇造氏を編纂主任とする『日本叢書』の第一巻、『芭蕉及び其弟子の俳諧』が愈々上梓された。

國際文化振興會では、かねてより日本紹介の實を擧げつゝあつたが、新に書目委員會を設けて、日本研究圖書目錄を各國語で編輯し配布する事となつた。學術振興會の苦心の『萬葉集』が、英譯の決定版として出版される運びとなり、『春琴抄』が獨譯された。等々文化の交流は目覺しいものがあつた。

かのブラーゲ氏がわが翻譯界に齎した嵐は、俄然、日本

翻譯家協會の結成を促すものとなり、斷乎とした聲明書を同氏に送つたが、十二月二十六日、城戸四郎氏に對する公訴は、東京區裁判所で棄却の事に判決が下され、日本側が勝利に歸した結末によつて、この種の簇出してゐた事件は自然解消するに至つたが、抑々斯うした提言を持ち出される事は、此方側に不備があり、翻譯界に統制がないことに起因する。今からでも遅くはない、翻譯も一の事業化した今日であるから、宜しく背水の陣容を整へて、海外文化吸收に邁進するに如かずである。

先きにも一寸觸れたが、本年度の全集ものは、その特殊性を自覺して、堅實に進みつゝあり、再び全集隆運を示す結果となつた。『現代日本小説全集』は菊池寛氏の主唱する文藝會館設立資金の一部を援助すべく企てられたものであり、『横光利一全集』は氏の洋行を控へて發表され、相當に人氣をあほり、轉向後寵兒扱ひされてゐた片岡鐵兵氏の全集之れ又好調、『室生犀星全集』は第一回配本が全然書下しものであつた點は、無節操なもの、多い時代に、一寸愉快を覺えた。また決定版『鷗外全集』は良心的な編輯で識者に感謝された。隨筆ものでは、『寺田寅彦全集』（文學篇）は頗る優秀な成績であつた。

岩波講座の東洋思潮第九回配本に所收の、友松圓諦氏の印度社會經濟思想は、剽竊の事實が明白とされるに至り、同書店は出版社として良心ある善後處置を講じ、右を廢棄

して速かに補充するところがあつたが、眞に業界の清話であり、常に、出し度いものは損をしても出版する口にしてゐる岩波氏なればこそと専らの噂となつた。なほ同書店から『國寶刀劍圖譜』全百六十枚、『能面』全九十面が上梓されたが、何れも有意義な仕事として認められるものである。

次に翻譯ものは『モンテニエ思想録』が文藝懇話會賞を獲得したことを皮切りに、ジイドもの又依然として流行の波にのり、完譯『大トルストイ全集』は多年努力の結晶として受けた。しかし大體翻譯もの全集の半数以上は蒸返しものが出てゐるのは情けない氣がした。其他かなり特殊な全集ものが出てゐる。『十竹齋書畫譜』、『新興基礎電氣工學講座』、『現代教育學大系』、『シナリオ全集』、『映畫教育叢書』等々色とり／＼であつた。就中『新法學全集』は

非常な好成績を収めて豫約出版界をおさへた。讀本ものも隆盛であつたが、本年を流行の絶頂とするものではなからふか。幾多出版された中に、書名の酷似する數種があり、日本書院の『愛國少年讀本』は登録済みであつたので、金星堂、厚生閣、實業之日本社、並に野ばら社の愛國讀本に對し抗議が起つたが、それ／＼圓滿な解決を見た一挿話もある。しかし、誰々文學讀本といふのは拔萃的編纂になるもので、かつて流行した何々美辭名句集の類に近いのであるが、大衆的に迎へられてゐた。禁止本と檢閲の方面を一瞥すると、時局多端の折から、

左翼分子の徹底的一掃が行はれ、特に輸入書は嚴重を加へた。而して一般は緊張裡に始終した故か、思想もの風壞も

の共に筆禍禁書の累は少なかつた。當局は發禁檢閲制度の合理化、即ち全國的に檢閲網の統制を計り、萬遺憾なきを聲明し、且つ文中〇〇の一掃を企圖して圖書發行物の明朗化を宣言するなど、努力の跡は見えた。が、また聞くところによれば、内務省では衛生保健策として、近來文明病の一である近視眼の激増に鑑み、出版物の活字の過小、粗悪、紙質等の制限取締を意圖するとの事である。これも亦重大視せられなければならない事柄ではあるが、實際問題としての困難は免れまい。

本年主なる出来事としては、合資會社富山房は、小野梓氏創業を引繼いで以來五十年に渉る業績を紀念して、本年十月十五日東京會館に於て祝賀の催があつた。社會事業の爲め文部省に五十萬圓を寄附し、益々文化奉公の實を擧げた。社長坂本嘉治馬氏は實業精勵の廉で、綠授褒章を下贈せられた。

佐藤義亮氏の新潮社は、十一月廿六日その四十周年に當り、社長の胸像建設を行ひ、且つ新潮賞の制定を發表した。わが新聞界論壇の最高權威徳富蘇峰氏も亦『新日本の青年』以降、正に文章報國五十年に當り、蘇峰會により祝賀會が帝國ホテルに催され盛會を極め、一代の著作目錄を兼ねた紀念出版物が頒布された。

出版文化展覧會は第二回を四月六日より九日まで東京堂ギャラリー並に富山房ホールを會場として意義ある催がなされた。主催は新聞之新聞社である。

東京印刷同業組合は、その創立二十五年に當り、五月二十五日印刷祭を舉行した。因に同組合は、明治二十四年創立の東京活版印刷組合と、明治二十五年創立の東京石版印刷業組合の二者が、明治四十四年併合し現在に至つたものである。

出版協會としては、本年度を通じて改革、研究等事項は種々あつたが、主なるものは、

- 一、機構改革 二、機關新聞發行 三、販賣店調査
 - 四、廣告料の値上げ対策 五、電報略號の制定
- 等々、相當機能を發揮し、就中機關新聞は、日本讀書新聞の設立を急ぎつゝあつて、十二月十日、株式會社日本讀書新聞社の株式は、申込超過の好成績で締切つたが、綜合的機關の結成は、自他共に慶賀すべき事であつた。

雜誌界

一流雜誌の編輯方針が、一年と綜合的色彩の濃度を増し、且つ全然その手法で着手創刊されるものが増加しつゝある現象は、まことに華やかな外観を呈してはゐるが、そ

の事は一面各々の特異性を喪失せしめてゐる。昭和十一年中に、都下大新聞は夕刊を増大して、下町、山手版に馬力をかけ、凡ゆる手段方策を盡して綜合に之努め、接戦を演じたが、この勢力は綜合雜誌に及ぼす影響が多大なものとなり、兩者の軋轢は免れなかつた。そこで各々の獨自性、將來性に就いて賑やかな論議を醸すに至つたが、事實兩者の反省すべき危機にあることはいなめまい。此の新聞の雜誌化と並んで、一つの問題は、雜誌の單行本化の強調せられつゝある形勢が、之亦顯著を加へつゝあることである。近來雜誌の特輯號が夥しいといふことは、即ちその證左とみなす事が出来よう。

新聞、雜誌、單行本とが、互に纏る因果關係に置かれ乍らも、各自がとるべき正道と、伸展して行く方面とが、眞に熟視せられ、認識されなければならぬ。

新聞と雜誌——特に新聞法に依る雜誌——とは、如何に酷似し、類化しようとも、日刊と月刊の相違は各自の弱味でもあり、強味ともなつてゐるから、ハンデキャップは自づと附加されてゐる。だが併し、今茲にジャーナリズムの上から、その根本的立脚點を辯じ立てる要はないが、雜誌界にあつて、先づ指摘しなければならぬ事は、その綜合雜誌の、餘りにも綜合的、といふ點である。勿論この言葉は、一流インテリ雜誌の場合に於ても、亦婦人雜誌にも當嵌るものであるが、大衆に向つて、その一利一失は止むを

得ない——と云つて退ける事は、つまりは大衆の意志を意志としないことに陥るものではなからうか。迎合せんとし

て却つて背馳を招く恨みがないとは云へない。事實、雜誌の尅大化は、愈々分厚い形態を呈し、携帯に不便は云ふも更なりであるが、盛澤山、おまけ、サーピスを看板に浮身をやつしてゐる。讀者にも質よりも量で求める者も無きにしもあらずだが、その反面には持て餘してゐる嫌ひも確かにある。そこで辻賣、驛賣に現はれたパンフレットが羽が生えて賣行を見せることになつた。といつても、パンフレット氾濫が、一流誌、單行本を震駭せしめた

と云ふ程のものではないが、兎も角出版業者が問題にし、注意を拂はせられたこと、その事が既に何をか意味するではないか。そも／＼パンフレットの内容が、責任ある著作に匹敵しないことは當然と云へるが、内外逼迫した時局に處するに一般大衆は、最早や悠々大冊をとつて研究するゆとりもない状態にあるから、皮相な結論であつても、速かに到達する事を欲し、且つは經濟的立場からも、十錢本は時代の要求と合致したものと成り、新聞のやうに讀んで捨て、來ても惜氣はない。だから流出するパンフレットの種類は蓋し内容的に永久性は持たない。持つ必要もないのだ。その出版の多くは實際生活又は實利に傾いた類ひとか、時局もの——際もの——が大部分である。新聞に比して之れは總括

的であり、簡易なる解説でもある事が、誰でもに喰付き易く出来てゐる。さうして一般常識は辻賣本で討議せられる程度で間に合つて居る世の中である。日本精神に關するものも多く出てゐるが、さすがに時代反映と目される、二・二六事件はじめ外交事情、戰爭物、税制改革、邪宗暴露等々、際物が相當出てゐる。畢竟短命でそれだけの價值のないことは争へぬが、徒らに量を多くする雜誌への反動として、本年の特異な流行ではあつた。前掲出版物の内務省納本一ヶ年統計に示されたのを見ても明らかであるが、パンフレット数は近年急激に増加してゐる。

さて、しからば雜誌界の賣行はどうかであつたらうか。次の統計は、日本雜誌協會發行の有効雜誌にして、昭和二年以來繼續發行せるもの(途中廢刊のものは、同種を補充してある)八十三種を選定して得た數字である。

(有力雜誌八十三種一ヶ年總賣上部數) (増加)

昭和二年	四〇一〇〇、〇〇〇
昭和三年	四四八〇〇、〇〇〇
昭和四年	四八六〇〇、〇〇〇
昭和五年	五二二〇〇、〇〇〇
昭和六年	五二三五〇、〇〇〇
昭和七年	五二四五〇、〇〇〇
昭和八年	五八〇一〇、〇〇〇

五五六〇、〇〇〇

昭和九年 六二一六〇、〇〇〇 四一五〇、〇〇〇
昭和十年 六五四七三、〇〇〇 三三〇七、〇〇〇
昭和十一年 六八五八四、〇〇〇 三一一一、〇〇〇

右の部数は発行部数から返品部数を差引いた正味賣上げで、東京堂統計部の調査によるものである。
本年度の増加率は、四分七厘で、十年度増加率五分四厘に劣るものである。九年度七分一厘、八年度一割一分の増加率に比較すると、上昇率は次第に鈍つてゐる。
次に雑誌の種類別に視察して見よう。先づ婦人雑誌に就いて云へば昨十年度に於て大變調を見せ、三十七萬部の減少を示したのであつたが、本年度はこれを稍取戻してゐる。併し九年度の一千九百七十五萬部にはまだ及ばず、未だ擴大の餘地を供へてゐるとは云へ、九年度の發展は異様な現象で、八年度の一千九百二十二萬部から見ると十年十一年は順次適應な伸方をしてゐるものと見做すことが出来る。

(婦人雑誌八種總賣上部數)

昭和二年	九、四五〇、〇〇〇
昭和三年	一一、一〇〇、〇〇〇
昭和四年	一三、〇〇〇、〇〇〇
昭和五年	一四、五〇〇、〇〇〇
昭和六年	一五、八五〇、〇〇〇
昭和七年	一六、八〇〇、〇〇〇

昭和八年	一九、二二〇、〇〇〇
昭和九年	一九、七五〇、〇〇〇
昭和十年	一九、三八〇、〇〇〇
昭和十一年	一九、四四九、六〇〇

大衆娛樂物は、昭和二年度に於て一千二百三十萬部、ぐんぐ伸びて一時は二千一百五十八萬七千部と上昇し、昭和五年度に稍退下したが、九、十年度に於ては、斷然雑誌界の王座を占めるに至り、本年度に於ては婦人雑誌と比較して三百五十八萬を抜いてゐる。

(大衆娛樂雜誌十一種總賣上部數)

昭和二年	一二、三〇〇、〇〇〇
昭和三年	一三、九〇〇、〇〇〇
昭和四年	一三、六〇〇、〇〇〇
昭和五年	一三、三〇〇、〇〇〇
昭和六年	一三、七〇〇、〇〇〇
昭和七年	一四、二〇〇、〇〇〇
昭和八年	一五、九〇〇、〇〇〇
昭和九年	一八、七四〇、〇〇〇
昭和十年	二一、五八七、〇〇〇
昭和十一年	二三、〇三五、二〇〇

右増加率は九年度に於いて一割八分、十年度に於て一割五分二厘を示し、本年度は増加率は六分六厘であつた。

少年少女物は伸長率は遅々としてゐるが、年次上騰を示し、幼年物は、昭和五年度を全盛時代として、六年度七年度は下降し、十年度に至つて多少増加を見せたが、本年度増加率は八分五厘を示してゐる。

(少年少女雜誌十三種賣上部數)

昭和二年	七、一〇〇、〇〇〇
昭和三年	七、七〇〇、〇〇〇
昭和四年	八、三五〇、〇〇〇
昭和五年	九、二〇〇、〇〇〇
昭和六年	八、五〇〇、〇〇〇
昭和七年	八、四五〇、〇〇〇
昭和八年	九、二一〇、〇〇〇
昭和九年	九、七四〇、〇〇〇
昭和十年	一〇、三八二、〇〇〇
昭和十一年	一一、二六四、八〇〇

(幼年雜誌三十種總賣上部數但し十一年度二十八種)

昭和二年	五、五〇〇、〇〇〇
昭和三年	六、七〇〇、〇〇〇
昭和四年	八、三〇〇、〇〇〇
昭和五年	九、四〇〇、〇〇〇
昭和六年	八、五〇〇、〇〇〇
昭和七年	七、一〇〇、〇〇〇
昭和八年	七、三〇〇、〇〇〇

昭和九年 七、四八〇、〇〇〇
昭和十年 七、七一六、〇〇〇
昭和十一年 八、〇九三、〇〇〇

幼年ものは七年度の衰退を八年九年と盛り返して來たが、本年度は廢刊が多き爲め茲に現れた數字は二十八種から得た部數である。昭和五年の膨脹九百四十萬になほ遠くないものである。
この方面は僅かな弛張を示し乍ら、それでも七八年以降漸時好調を續けてゐて八年度と本年度を比較すると六分九厘の増加率を示してゐる。堂々たる高級雑誌も、賣上部數から見ると、幼年雑誌の約二分の一、少年少女もの、約三分の一といふことになる。

(政治經濟文藝及科學雜誌十種總賣上部數)

昭和二年	三、七五〇、〇〇〇
昭和三年	三、二〇〇、〇〇〇
昭和四年	三、二五〇、〇〇〇
昭和五年	三、六〇〇、〇〇〇
昭和六年	三、五〇〇、〇〇〇
昭和七年	三、七五〇、〇〇〇
昭和八年	四、〇五〇、〇〇〇
昭和九年	四、二七〇、〇〇〇
昭和十年	四、一四二、〇〇〇
昭和十一年	四、三三一、一〇〇

(青年雜誌十一種總覽上部數)

昭和二年	二、〇〇〇、〇〇〇
昭和三年	二、〇〇〇、〇〇〇
昭和四年	二、〇〇〇、〇〇〇
昭和五年	二、〇〇〇、〇〇〇
昭和六年	二、三〇〇、〇〇〇
昭和七年	二、一五〇、〇〇〇
昭和八年	二、三三〇、〇〇〇
昭和九年	二、一八〇、〇〇〇
昭和十年	二、二六六、〇〇〇
昭和十一年	二、四一一、〇〇〇

青年雜誌は就中増加率の最も少ないもので、昭和二年度の二百萬部から二百三十萬部の間を上下してゐたが、本年漸く二百四十一萬一千部を示した。

これを要するに雑誌賣上は逐年増加の一途を辿りつゝあるのであつて、單行本が賣行不振をきはめてゐる間に、雑誌は漸次讀者を獲得し、大衆の層へ讀書力を植えつけつゝある。殊に本年度喜ぶべきことは、「中央公論」級の雑誌の次第に部數を増して來たことで、一つには二・二六事件以來、時局問題に國民の關心が高まり、その關係にて讀者の増加となつたものと云はれる。また娯樂大衆雑誌の部數増加は、本年度産業界の好景氣により講談社系その他諸雑誌の臨時増刊をよく賣りこなしたといふ點に大きな原因が

ある。いづれにせよ新聞紙に對應して雑誌が愈々日常生活の中に混み込みつゝあることは明白である。

次に本年度の創刊雑誌數を調べると、左の通りである。

一月 (七種)	學術一、綜合一、演劇一、美術一、建築一、農業一、娛樂一
二月 (七種)	文藝二、詩二、學術一、教育一、演劇一、映畫一
三月 (十七種)	美術二、工學一、經濟一、教育八、學術一、綜合一、演劇一、映畫一、幼年一
四月 (十五種)	工學二、趣味一、文藝二、詩一、歌一、映畫二、社會一、教育一、經濟一、數學一、娛樂一、少年一
五月 (十五種)	學術一、文藝三、演劇一、婦人家庭三、工學一、社會評論綜合一、美術書道一、教育一、醫學衛生一、少年一、娛樂一
六月 (八種)	詩二、婦人家庭一、農業農學一、工學一、教育一、財政經濟商業一、宗教一

七月 (四種)	演劇一、文藝二、少年少女一
八月 (八種)	通俗科學一、教育一、演劇一、文藝二、政治社會評論一、詩一、語學一
九月 (十二種)	教育一、學術二、少年少女一、政治社會評論一、娛樂一、文藝二、數學一、寫眞一、詩一、雜一
十月 (九種)	婦人家庭一、語學一、通俗科學一、政治社會評論三、少年少女一、財政經濟商業一、文學一
十一月 (五種)	寫眞一、政治社會評論二、文藝一、婦人家庭一、幼年一
十二月 (十種)	教育三、法律一、學術二、政治社會評論一、娛樂一、演劇一、運動體育一
十一年度合計 (一一八種)	學術九、綜合一二、演劇七、美術四、建築一、農業二、娛樂五、文藝一五、詩五

以上は一般書店扱ひの雑誌から見た調べであるが、この外に市場に表れぬ創刊雑誌も相當數に上るであらう。右のうち目ぼしいものを記して見るならば、日本古典もの復興の潮流に乗つて生れた「むらさき」に呼應して今度は今井邦子女史主宰の「明日香」が生れた。またそれ等と文學の香氣高いものに對抗して、實業之日本社は十二月「新女苑」(新年號より)を創刊した。かつて「婦人世界」は永い歴史を誇るものではあつたが、同誌の衰退は實に時の運命であつたと云へる。新裝の「新女苑」は近代女性の憧憬を指して花々しくデビューしたが、純然たる家庭雜誌ではなし、純文學的でもなく、「令女界」に似て、稍家庭に親しむ程のものと云へるものである。

一と頃烽火を揚げて互に死線を脅かしつゝあつた實話ものは、片端から凋落して行つたが、自然淘汰の結果か、案外地歩を固めて旺盛なのは「實話雜誌」である。東京社から「奥の奥」といふこの種のものが創刊され、その向ふを張つてか萬里閣は「裏」を出した。初め裏の裏と付けてみ

たださうである。表題の奇抜なもの、其意味のわからぬものでも、内容次第で、押し通して行かれる事情や、表紙の繪柄寫眞等が頭字よりも目につき易く、手に取つて見るといふやうな傾向を語つて居る。「333」といふ表題だけでは何の意味かわからぬ寫眞と讀物を載せたスマートな雑誌が、エナメル塗の華麗な表紙で近代的感覺を表し、自然内容の意圖するところを理解させたなどは之一例である。尙ついでながら「333」が其小説の部分に挿繪を入れ二色刷にしたのは外國雑誌の眞似であるが新しい試みとして特筆したい。

探偵物は單行本が多くなつたのと共に、雑誌も活氣を呈して來た。「新青年」は依然博文館雑誌の花形であるが、「ぶるふいる」、「探偵文學」、「探偵春秋」、「月刊探偵」など、數も相當多く出るやうになつた。

映畫方面は、十一年度に於て異狀な伸展を示した。研究ものもあるが、何と云つても映畫レビユーファン爲めの甘いものが斷然優勢を示してゐる。歐米の出版界で、映畫に關する方面の最も盛なのは英國かと云はれてゐるが、その双壁と云はれるのは蓋し日本ではあるまいか。却つて世界の映畫國アメリカは出版物に於ては落ちる。彼が映畫そのものを生活の圈内に取入れてゐるのに反して、此方では何でも専門化さうとする態度の相異と、一つには實際製作能力の缺陷が、智識的研究の出版に向けられる——と

いふ結果のやうに思推されるが、兎も角事實日本の映畫方面の出版は世界的上位にあり、知識人に向つての單行本も相當あつた。映畫が民衆娛樂の重要な地位を占める以上、その映畫ファンは全國津々浦々に憧れのスター雑誌を取上げる、この種の續出は素張らしい勢ひにあつた。

三省堂の「科學ペン」は、科學ペンクラブが支持するもので、瀟灑なモダン味を帯びた科學隨筆雑誌である。之等は専門的職務を離れてもする隨筆風作品で、そのグループの人々に讀まれる時も、全然別な立場の者が讀んでも亦楽しい味がある。單行本でも同じであるが、政治家の隨筆、畫家、醫家……又よきものである。如違ひといふやうな境界線は次第に失はれてゆきつゝある。

さて、少年少女ものゝ勢力は、本年度に當つて振幅を廣げられた觀がある。學年別小學雑誌も殖えたが、一方學齡以下の幼兒に贈られるものと、上は高一、高二に向つて贈られた。即ち年齡が上と下へ擴大された。この事は、教科書中心の豫習、復習といふ編輯方法が効果的である事を、出版側に自信づけた結果であらう。

純然たる雑誌ではないが、幼兒向として講談社から出た繪本は、十二月に送り出されたが、豫想以上の成績を納めてゐるやうだ。中でも漫畫の本はピッチを揚げてゐる。宣傳も亦大童で、「子供のよくなる繪本」の標語をかざし、講談社一流のやり方で邁進してゐる。

次に特増大號に就いて考察すれば、東京堂の統計は左の如くで、平均一ヶ月百種ほど出てゐる。尤もこの表には娛樂物の増刊特増等は除いてある。

特 輯 號 表

學術・宗教・教育	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
文學・詩歌	二七	二七	一八	三一	二〇	三三	二五
美術・音樂・映畫	一一	一一	一〇	二二	一〇	一六	一八
軍事	二	三	四	五	四	四	三
政治・社會・經濟	一三	一〇	一五	一一	一一	一〇	一一
工業・農業	六	二	六	七	四	五	一〇
通俗科學	二	三	二	三	四	三	五
受 驗 書	五	七	八	一一	五	六	八
運動・趣味・家庭	三	四	六	六	六	二	七
紀 行	〇	〇	〇	〇	二	二	三
醫 學	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇
婦 人	〇	〇	〇	〇	〇	二	一

講談社は上半期だけで六種の臨時増刊を發行し、部數は普通號よりも二割方程度の減刷をしたやうだつたが、悉くが賣切、而も普通號に大して悪影響もなかつたことは驚くべきことで、この一事を以ても本年度の大衆物の好調を物語るものだ。尙、カメラの流行につれて寫眞雑誌の著しい進出振りは、特筆するに足りるであらう。

装 釘 界

裝釘界華やかなりし頃とは、最早過去を指すやうな氣がする。實際顧ると、二三年前は相當喧嘩も賑はつたものだが、昨今鳴りを鎮めたかのやうだ。これは裝釘に對する關心が常識として全面的に擴大された故でもあるし、一方殊更に奇型を銜ふものゝ影を潜めたものにもよるだらう。従つて現在是一種の沈滞の姿を呈してはゐるが、闇中摸索して無暗矢鏢に自信もなく飛出してゐるものが、漸く認識を深めて、正しき方途に向はんとするポイントに辿り着いた沈吟と思はれるのである。

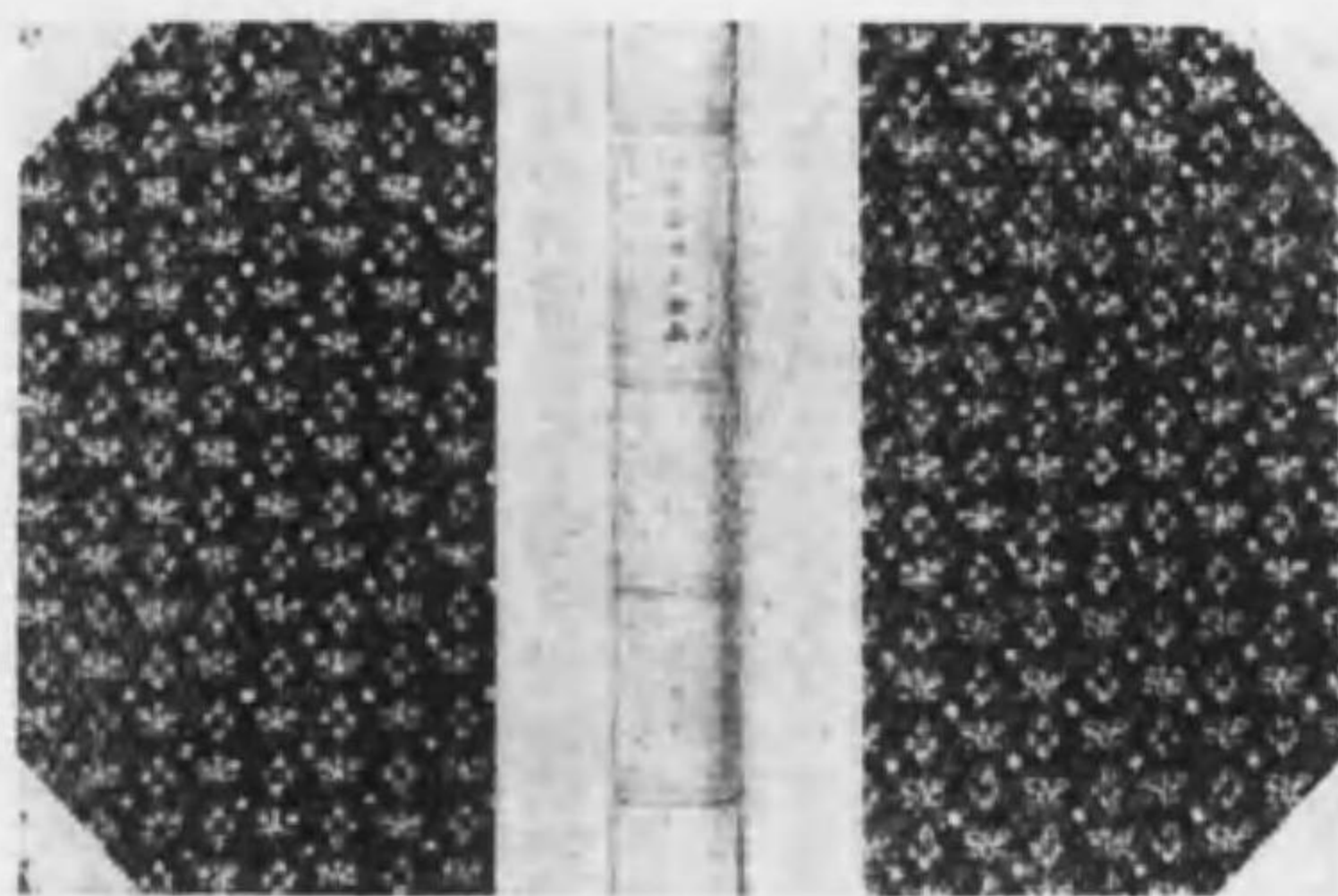
扱、本年度に於ける出版物で印象に残るものを顧るならば、一品一品採上げて見るとき、魂のこもつた佳品がなかつたのではない。凝りに凝つたもの、巨匠が藝術に打ち込むが如き精神でなされたもの……等々逸品がなかつたのではない。しかし裝本工藝は一般工藝美術品に比べると、より多く經濟的拘束を受けてゐる。尠くとも五百の千のといふ商品である故に、一方的に理想を唱へ、一方的に犠牲を要求する事は許されない立場にある。であるから實際上、果し得ない點は多々あるし、それをしも一概に難色するとは酷である場合もある。

多年華麗本を續刊して殆んどその第一期の使命を果した



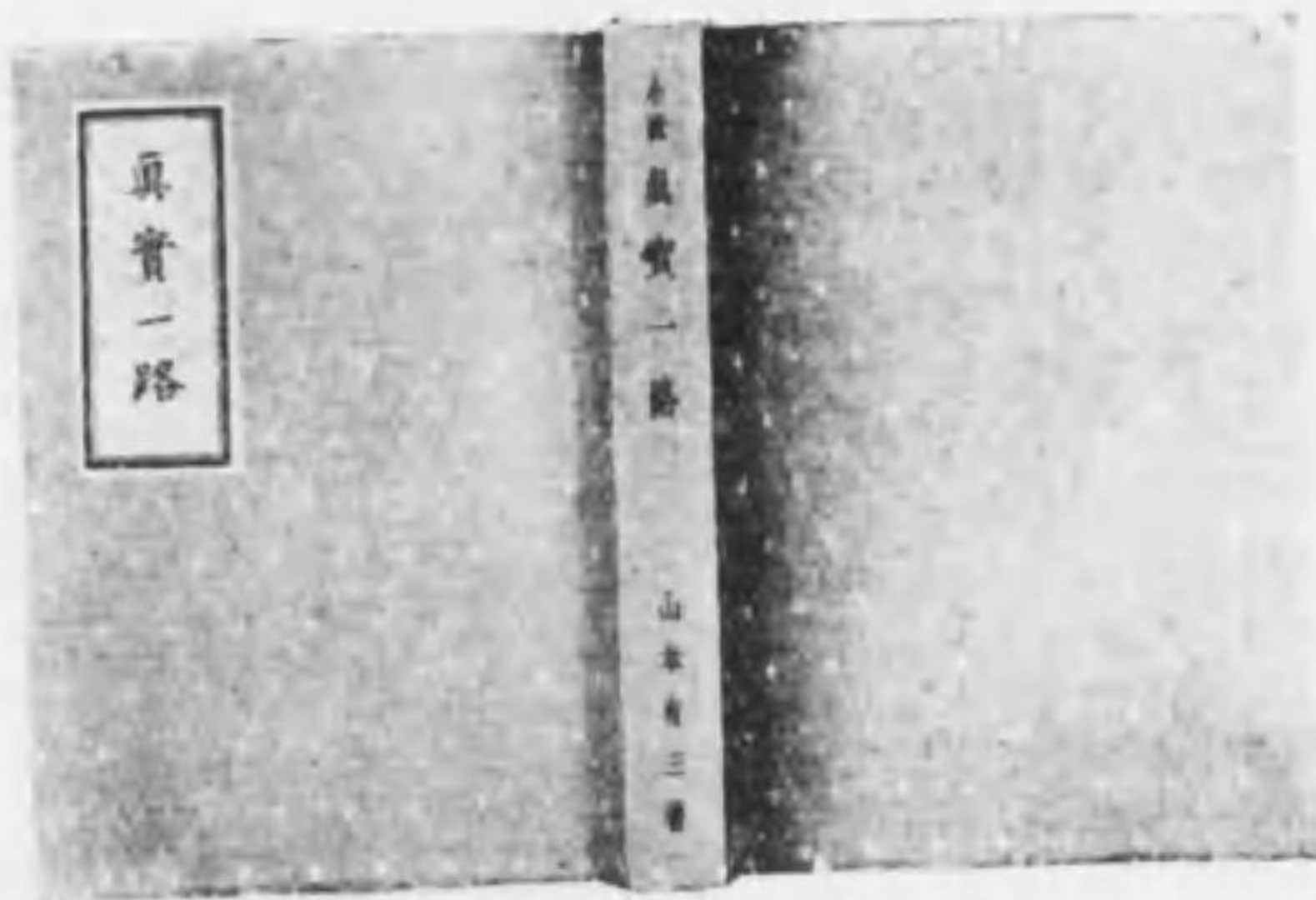
紙表『繪赤萬』

かの観がある第一書房は、本年もやゝ第一線から退いた形で一般文學愛好者向きの清酒な程度のもので通して来た。今、眼に残るものでは堀口大學氏の『闘牛士』（フランス現代小説）や、萩原朔太郎氏の『廊下と空房』、太田黒元雄氏の『現代音楽論』位に止まる。中央公論社もその出版物は變化に富んでゐたが、森田たま氏の『もめん隨筆』は異色であつた。即ち、先覺の言の如く「内容及びそれを表現すべき材料、用紙と活字の書體、組方、製本と裝飾、それ等のもつ美を一括した綜合美によつて、その本をより以上美しいものにする」といつたが、正にこの『もめん隨筆』は右の言葉にちかひ。豆紋模様の外函と、和紙に木版刷りの市松模様の表紙に、如何にも、婦人の作にふさはしく『もめん隨筆』といふ名にふさはしい好みである。次に年末近くなつて志賀



紙表『全集新金』

直哉氏の『萬曆赤繪』を、深澤氏の版畫と志賀直三氏の裝案で濛い日本趣味で出版し、野上彌生氏の『妖精園』は中川一政氏の裝釘で紹介されたのが優れてゐた。改造社も時折好ましい裝幀を出すやうになつたものゝ、本年は『アウシキン全集』に於てシークな手法を見せた外、林美美子の『愛情』を挙げ得るに過ぎない寂しさだつた。本年創業四十周年を迎へた新潮社は、依然として裝本にはさまざま關心を拂ふ跡も見えなかつたが十一月に入り、山本有三氏の『眞實一路』で萬丈の氣焔を吐いた。本書は南澤用介氏の裝釘で菊判假裝であるが、紙、活字、製本、凡て間然せざるなく、なまじつかな限定版と銘打つものよりも遙かに豪華で、壯麗であつた。その他限定版社として目されてゐるもので本年中活躍した



紙表『全集新金』

のは野田書房、版畫莊、書物展望社、双雅房、竹村書房等がある。野田書房には、本年度有数の作たる芥川龍之介氏の『地獄變』がある。これは百七十部の限定版、現代の愛書家、徳富蘇峰翁は、書籍は讀むばかりのものではなく、實に愛すべきもの、樂しむべきもの、一度目を通しただけで、高閣に束ね、積埃の推中に埋葬し去るが如きは、いまだ書齋その物に對する道を知らぬといはねばならぬと云はれたが、本書は事實上讀み、且つ愛玩すべき好個の書物である。その東洋風的な手織木綿藍染の軼入れとして、幅廣の太子持輪廓に、筆のじみ出した木版刷りの題簽など、心憎きまでの出来栄である。用紙は越前産別瀧鳥の子、一枚おきに著者の文字が漉込になつてゐる贅澤さ

である。其他アポリネール作『贖世主アンフィオン』、井伏鱒二氏の『肩車』、堀辰雄氏の『狐の手袋』、『聖家族』、小林秀雄氏の『Xへの手紙』、成瀬正勝氏の『明治文學管見』等相當の收獲を挙げ、版畫莊は萩原朔太郎氏の『青猫』の定本、佐藤春夫氏の『FOU』、『世はさま〜』の記、平井肇氏譯『外套』、木々高太郎氏の『人生の阿呆』、川上澄生氏の『少々昔噺』、百田宗治氏の『跳橋』等數に於ても野田書房に劣らぬ成績を見せてゐる。次手ながら此所の出版は、表紙、衣裳、用紙と印刷には苦心し乍ら、未だ製本に注意の届いてゐないのは惜しまれる。竹村書房は紙や活字に細かい神經は使つてゐないが、一體に讀みよしい輕快な感じのもので成功してゐる。中川一政氏の『庭の眺め』を第一に、加藤健氏の『詩集』、室生犀生の『印刷庭苑』、丹羽文雄氏の『若い季節』、双雅房は平田禿木氏の『揺落』、花柳章太郎氏の『紅皿かけ皿』、久保田万太郎氏の『ゆきげがは』、宮島幹之助氏の『蛙の目玉』、丹羽文雄氏の『女人禁制』、小野賢一郎氏の『佛魔抄』等々數も相當あるが、この社従來の限定版の行き方を、本年はやゝ異にして特製版を目ざしてゐたやうに見える。新進の昭森社は限定版社としてスタートしたもので、小出楯重氏の『大切な雰囲気』、井上和雄氏の『遊船考』、堀口大學氏の『マリイロウランサン詩畫集』、東郷青児氏の『手袋』と矢張りばやに出したが、その中で柳亮氏の『巴里すうぶにい



長谷川徹三『地獄變』

る』は傑出して
みた。うぐひす
色の染紙に「巴
里の屋根の下」
に出て来るやう
な街の音楽師の
影繪を薄鼠であ
らはし洋字を筆
で無難作に書き

なくつたなど、大膽且つ繊細なやり方は印象的であつた。
その他俳句集を多く出してゐる龍星閣は、なか／＼手際
のいい装本を出して居り、川島理一郎氏の『旅人の眼』、里
見勝蔵氏の『異端者の奇蹟』、山口青柳氏の『春籠秋籠』、
故片野文吉氏譯『ルビヤット』の定本など、何れも好感
が持てる。殊に外函は、各種とも統一され、一見龍星閣本
の型を作つてゐた。矢張り俳書を主としてゐた沙羅書店
は、本年は数をあまり出さなかつたが、水原秋櫻子氏の『葛
飾』、山口晋子氏の『凍港』、中村草田男氏の『長子』、川田
順氏編『菊舎尼全句集』などがよい方であつた。
岩波書店からは、小泉信三氏著『學窓雜記』がある。背
の天地子持野のうち細線だけを赤色にした所など、いつも
ながらのアカ抜けさである。表紙は和紙の持ち味を十分に
生かし、白地をのぞかせた藍刷りは無技巧の技巧といふべ

きか、装頓としてはとにかく正道を行くものとして推賞し
てもよい。又同時に推すべきものに入澤達吉氏の『楓萩集』
がある。清楚なうちにどこかおかし難い装釘である。
木下幸太郎氏の『藝林間歩』、愛子未亡人の『徳富健次郎
日記』、谷川徹三氏の『文學の周圍』など數へられ、いづ
れも活字、用紙に一貫した堅實味を現はし、岩波ならでは
と思はせるものがある。

白水社は例のフランス文學關係の書物で内容にふさはし
い装本の妙を示してゐたが、本年も、辰野隆氏の『あ・ら
・かると』をはじめ、岸田國士の『現代演劇論』、關根秀雄
譯『撰抄モンテニユ隨想錄』等があつた。しかし大體假
装本を多く出してゐた。

装本啓蒙に盡力して来た書物展習社は、本年は至極平凡
に終つた。小島鳥水氏の『アルピニストの手記』は蔭繪装
で苦心の跡は見えしたが、往年の漆塗りに比較すれば衣裝を
凝らしたゞけの効果はなかつた。少雨莊の自著自装『紙魚
供養』は名士の古封筒を表紙に生かしたのであるが、選り
取り見どりで、早い者にはよかつたが、甲、乙のムラがあ
るので一部の讀者には氣の毒だつた。關口泰氏の『山頂漫
歩』、石川啄木肉筆版『悲しき玩具』とは別々の意味でそ
れ／＼取り柄があつた。

岩波の流れを汲む小山書店からは、吉村冬彦氏『橡の實』
を出した。岩波スタイルの看取されるのは當然だ。表紙も

見返しも和紙、四つ目模様の菱形地紋、雙方共草色下りで
いや味のない上品の出来である。

新英社の『童心隨筆』（安岡正篤）、山本書店の『志賀直
哉の手紙』（武者小路實篤）、青燈社の『机邊の記』（永井
荷風）、耕進社の『印象派畫家の手紙』（式場隆三郎）、媽
祖書房の『墳墓』（矢野峰人譯）、壽岳文章氏私家版『書物』、
柳宗悅氏私家版『茶道を想ふ』などある中に、『墳墓』は七
十五部の限定の綴つたもの。『印象派畫家の手紙』は和紙に
漆で玉模様を塗つた變つたものである。『書物』は積皮装と
丹念紙装の二種を出し、壽岳氏の日頃の信念を實際の形で
表現しようとしたものであるが、活字等に於ける吾國の宿
命的缺點は何としても清算することは出来ず惜しまれた。
柳氏の『茶道を想ふ』は、紙布装清整な書物で、組版其他
申し分のない出来栄であつた。

「書窓」の發行所アオイ書房は、本年『季節標』と『竹
久夢二遺作集』の二冊を送り出した。前者は恩地孝四郎氏
の詩集で、著者自ら装釘したもの、一尺に一尺三寸といふ
龍大なもので、自信ある作品である點、諸經費から見ても
全く讀者への犠牲出版であることは判るが、折角の美装本
も、綿入表紙が、眞の綿入れになつてゐないのみならず、
製本そのものが帳簿工とも洋木工ともつかぬ技術が施され
てゐることは、珠に疵で、一枚濾さの和飾畫も之ではどう
であらうか。鳩居書房から出た伊藤貴麿氏の文藝童話集

『龍』は本文はコットン紙四號組みで、表紙の題箋も凸版
三度を手際よくやつた程度で、一見平凡に見え乍ら、表紙
の青も銀の背文字の調和に落付きがあつた。

尙、多大な期待がかけられた谷崎氏の『六部集』は、第
一回配本『蓼喰ふ蟲』も折角の模範版に挿繪が雁皮紙へ鞆
版でなされたのは、讀者の期待を裏切るものではなかつた
らうか。よい挿繪本の少い折柄、これを木版に出来かつた
ことは、かへすがへすも残念だつた。

以上通觀し來つて思ひ當ることは、各出版者が、外觀的
にのみ注意して、一般人の眼に觸れぬ個所に手抜かりのあ
ることに氣付いてゐないことである。今後は今一步進めて
製本所を嚴重に監督して、歐米の裝本に比して遜色のない
までに水準をあげなければならぬ。此の製本の點では
『子規を中心にして』の版元、學藝書院の製本は、當今の
ものとしては親切の出来である。

終りに、近頃「美術批評家協會」なる團體が創立され、
近刊の裝釘批評を試みつゝあることは時代の要求に應じた
結構な計畫と思ふが、評者は今の所一人のやうだが、もつ
とその方面の權威者を加へて、嚴正な批評を加へ、斯界の
發展に資して欲しいものである。

尙、諸新聞雜誌の最新批評に於て、裝釘評の附記される
ことの多くなつたのは、本年度の特に目に立つ傾向であつ
たが、之も亦一層の盡力を要望して歇まぬ。

出版廣告界

出版物の廣告が藥品や化粧品と同じやうに日刊新聞紙上を賑かしてゐるのは日本だけで、外國ではいづれも新聞の片隅に上品な廣告をのせる程度である。これに就いて、我が出版界はしばしば識者達の嘲笑を買つてゐる。しかしながら、實際問題として、日刊新聞の廣告が最も有効であり、宣傳力が大きくこれを利用せねば出版物が賣れぬとすれば、誰も彼も廣告費の豫算を先づ第一に日刊新聞に振り向けるのは餘りにも當然な話である。全廣告費の六割乃至七割位が新聞に取られ、残りが雑誌廣告やパンフレット類の費用に振り當てられるのが普通であらう。

然るに、本年あたりから、多少この定石が變化しつゝあるか、或は變化しようとする機運を孕んでゐる有様が觀取された。

前年秋、東西兩朝日新聞廣告料が大幅の値上げを實行した折、講談社はこの値上の割合を承認せず、兩者折衝を重ねたが物分れとなり、その結果本年上半期の數ヶ月は、講談社雑誌の廣告は、しばらく紙上に姿を見せぬことがあつた。その間講談社はパンフレット、ピラ、ポスター其他を作り、或は書店を通し、或は街頭に配布して大童に宣傳を努め、兎に角定期部數の減退を來すこともなく相當の成績

を擧げ續けてゐた。この經驗は如何であつたらうか。新聞廣告に比して結局割高であつたか、割安であつたか。秘中の秘としてしばらく不問に附して置くが、新聞廣告が必ずしも絶對唯一のものであるとばかりは云ひ難いことが證明された。

一般單行本類の如く、五百部、千部、千五百部といふ程度のもものでは、全く高い新聞廣告料は拂ひ切れぬ。従つて止むなく新聞を利用する場合にも、自然僅かの行數のものとなり、寧ろ綜合雑誌、或は専門雑誌にその費用を振り當てるといふ傾向が見えて來たのである。

さて然らば、本年度新聞廣告界は如何な状態であつたらうか。萬年社版昭和十一年度の「廣告年鑑」によれば、大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、東京朝日新聞、東京日日新聞、讀賣新聞、時事新聞の七大新聞に於ける本年度(但し昭和十年十月一日より昭和十一年九月末日迄)の掲載廣告總件數並に行數は、

三十一萬八千〇二十九件	三、四三五、二八六行
四千三百二十三萬九千二百三十行	四三、二二九、二二〇行
昭和三十七年、一割強の減少である。	
昭和十年十月	二七、二四六件
同 十一月	二六、六四一件
同 十二月	二七、二八四件

同 九月 三、四三五、二八六行

合計 四三、二二九、二二〇行

以上の如くで件數に於て前年度より一割強の減少を示して居るのにつれ、行數に於ても九十三萬一千八百三十行を減少し、前年度の四千四百七十七萬一千〇六十行に對する九割七分八厘九毛強に止まつてゐる。減少率としては小さいが、數年來上昇の途を辿つて來つた現象を顧慮の必要がある。云ふ迄もなく一般經濟界の不況も原因の一であるが、主要大新聞の廣告料金値上げも起因でなければならぬ。即ち昭和十年秋に大阪二紙は一割餘の値上げをなし、一圓八十錢が二圓となり、東京日日新聞、東京朝日新聞兩紙は一圓五十錢が一圓七十錢に、時事新報一圓六十錢を一圓七十錢に、讀賣新聞は一圓六十錢を一圓七十錢に改正してゐる。

さて、新聞廣告に於ける主要廣告品は何かと云へば、依然として藥品廣告で、第二位が化粧品、第三位圖書雑誌、第四位飲食料品、第五位百貨店の順である。

藥品廣告は本年度總行數一千三百十三萬六千〇十四行で全行數の三割強を有してゐる。

化粧品は總行數七百〇八萬四千三百二十一行で、占有率一割六分を示し、圖書雑誌は五百五十六萬五千八百〇九行で、占有率一割二分八厘を示す。

昭和十一年一月	二六、八〇四件
同 二月	二五、七一七件
同 三月	二七、四五一件
同 四月	二六、二八二件
同 五月	二六、九〇一件
同 六月	二六、一〇〇件
同 七月	二六、八一三件
同 八月	二五、一九三件
同 九月	二五、五九七件
合計	三二八、〇二九件
昭和十年十月	三、六四八、三六九行
同 十一月	三、五九一、〇四三行
同 十二月	四、一三七、三二七行
昭和十一年一月	三、四〇〇、五六八行
同 二月	三、一三七、三二七行
同 三月	三、五六六、九五五行
同 四月	三、六六六、〇九九行
同 五月	三、七二八、五三〇行
同 六月	三、五七九、二五九行
同 七月	三、八八五、〇七九行
同 八月	三、四六二、七八六行

右の表の如くで、最高件數の月は三月で、最底の月は八月である。行數から見ると

飲食料品は四百〇三萬七千〇八十二行で、占有率九分三厘。

百貨店は三百二十九萬三千〇七十九行、占有率は七分五厘を示してゐる。

これらの五大商品廣告の全廣告に對する率は七割六分五厘で、全廣告の四分の一以上を占めるものである。

此の内特に圖書方面を見るに、昭和十年十月より昭和十一年九月までの各月に涉つては左の通りである。

月	件数	行数
十月	二、〇一六	三五一、一一五
十一月	一、六九六	三九七、八九二
十二月	一、四五四	三一七、九一一
一月	一、二三六	一九七、七九八
二月	一、二一四	二六〇、四九七
三月	一、三二三	二九一、二五〇
四月	一、三三〇	二八三、五九九
五月	一、三四三	二六九、八九二
六月	一、四二六	三一〇、八四二
七月	一、三三〇	二四六、九二八
八月	一、二一八	二一九、四五八
九月	一、三六七	二七七、三六六
合計		三、四二四、五六九行

なほ月順に見ると、十一月、十月、十二月、六月、三月、四月、九月、

五、二、七、八、一の順である。

次に新聞雑誌の廣告は

月	件数	行数
十月	一、〇二六	二五九、二三六
十一月	六四九	二二二、七八〇
十二月	九三六	三六八、五七五
一月	六七四	二〇四、五三一
二月	六六四	一九二、八三四
三月	八四九	二六一、八二八
四月	八四二	二四八、五七二
五月	八四一	二五五、〇六五
六月	六九二	二三五、三四二
七月	八七三	二九七、〇二八
八月	八八二	三〇二、〇六八
九月	八四二	二九三、四〇二
合計		三、一四一、三二一行

右は新聞廣告中の雑誌並に圖書の占有する行数であるが、廣告機關としての最大能力を有する新聞が、本年度に於ける減少の形を示す半面に、圖書出版の廣告が雑誌に向つて相當伸びてゐる事は前にも述べたが、勿論雑誌は發行日の限定があり、讀者の範圍はそれより、限界されてゐる嫌ひはあつても、第一生命が長い。より多くのスペースをと

り得る。讀者の範圍限定といふことも、考へやうでは却つて特殊な書物を特殊な範圍に紹介することの可能性もある

ところから、専門的特殊な出版物は益々その種の専門雑誌にたよる事が多くなるであらふし、發行部数は少なくても、

云はば無駄の少ない宣傳が出来る事になる。廣告料金に就いては、勿論主要新聞に比して低廉ではあるが、近來一流

雑誌、大部数の婦人雑誌等の料金は相當大なものとなつてゐる。ところで一にも宣傳、二にも宣傳の相互に止むに

止まれぬ火花を散らすは勇壯で頼母しいが、婦人雑誌はど

の頁も化粧品品の混戦を演じてゐる観があるし、一流評論

雑誌にして、これ又、本文の間に小廣告が散見して、讀者

の側から見て甚だ煩はしいやうで不快でさへあるのは何と

か出来ないものかと考へる。

兎も角廣告意匠に於けるスマートさ、廣告方法に於ける

洗練とは、一目で効果を狙ひ取らうとする機智を條件とする。廣告術は不斷の進歩がなければならぬがこの種の研究

は商業美術の一部門をなし、雑誌或は出版物によつて専門的研究は進められてをり、印刷術技術方面、材料の進歩と

相俟つて、ポスター、カタログは優秀なるものを生み、日

日、凡ゆるものを對照とし、凡ゆるものを行使して宣傳範圍をひろげてゐる。

本年度新聞に現はれた廣告の中、特に目立つた實例を又

少しく挙げるならば、

『大言海』

論語のごとく、聖書のごとき永遠の書

『大トルストイ全集』

さながら人間教育の學校

『現代日本小説全集』

菊池 寛

この全集は、文藝會館建設のための勸進帳である。日本の首都に、文藝に關する建物が、何一つないといふことは、國際的にも情けないことではないか、軍國日本もよい、産業日本もよい、オリンピック日本もよい、だらうが、そうした日本の標識である多くの建物の中に、精神文化の花である文藝に關する建物が一つも見出されないことは、日本の耻ではないだらうか。

我々は急遽「文藝會館」の建設を思ひ立つたのもその爲めである。我々は財的に甚だ微力である。何等國家からの庇護もない、たゞ頼むは文藝を理解して下さる一般大家である。本全集の印税は、主として會館の基金に充てられるのであるから、その一部を購讀して下さることは我々の勸進に應じて一紙半銭の喜捨に付かれる事である。その功德や必ず廣大ならん。

と云つたもので、この全集購讀者は同會館の准會員の資格を得るといふ特典を高唱してゐた。

『随想録』

發賣六日忽ち三十五版

故高橋是清翁の遺著であるが、この文案たるや、文字通りの事實であるならば、四時間に一版づゝ出た勘定で八百版はたちどころであらう。

『私の見たソビエット、ロシア』

面白くても書けぬ事を思ひ切つて書いた本はこれ！

尙、本年度出版廣告界の出来事としては東京出版協會、日本雜誌協會が母胎となつて出版界の宣傳機關誌「日本讀書新聞」が生れる運びとなつたことだ。折から多年、出版物の廣告で賑つてゐた讀賣新聞が一擧に大幅の値上を發表した爲その反動として全出版界がこれを支持應援した。果して、同誌がどの程度の宣傳力を持つかは、同誌の發展如何にかゝつてゐる。

又、新しい宣傳機關として隣邦滿洲國ではラヂオを利用する放送廣告を許可し十一月一日より取扱ひ開始することになつた。我國よりも一足先きに實行したのはさすがに新興國だけのことはある。滿洲國方面に於ける出版物の購買力旺盛の折柄、参考の爲、その規則の全文を掲載してこの項を終る。

イ 廣告放送規程

第一條 滿洲電信電話株式會社の取扱ふ放送無線電話に依る廣告（以下廣告放送と稱す）は放送無線電話に關する法令に依るの外本規程に依るものとす

第二條 廣告放送は有料とす

第三條 廣告放送は全滿中繼放送及ローカル放送の二種とす

第四條 廣告放送は左の方法に依り之を行ふ
（イ）直接廣告
（ロ）間接廣告

直接廣告とは放送に依り廣告を爲さんとする者（以下廣告主と稱す）の提供する廣告事項のみを放送從業者に於て放送するを謂ふ。間接廣告とは廣告主の提供する放送種目中又は其の種目の前後に出演者若は放送從業者に於て廣告事項を放送するを謂ふ

第五條 廣告放送時間は其の日の放送時間の百分の廿を超えざるものとす、但し直接廣告に在りては百分の十を超えざるものとす

第六條 直接廣告の放送時間は第一放送に在りては一回二分以内とし第二放送に在りては一回二分及五分の二種とす、前項の放送は何れも連續十分を超ゆるを得ざるものとす

第七條 廣告放送時刻を大別して午前六時より午後六時迄を晝間放送とし午後六時より午後十一時迄を夜間放送とす

第八條 廣告の放送日時はその廣告主の申込に基き會社に於て決定するものとす、但し一旦決定したるものと雖も已むを得ざる場合は會社に於て變更することを得るものとす。前項但書の場合に於て之が料金に不足を生ずるも追加收受せざるものとす、料金表に明示なきものは其の都度の協定に依るものとす

第十條 廣告放送にして公益上必要ありと認むるときは其の料金を減免することあるものとす
第十一條 同一廣告主に依り繼續的に爲さるゝ廣告に對しては其の回数又は料金額に應じ減額を爲すことあるべし
第十二條 廣告放送の爲に要する出演者の謝禮金、準備費及材料費は廣告主之を負擔するものとす
第十五條 收受したる廣告放送料金は左の場合を除くの外拂戻を爲さざるものとす

（一）會社の過失により受入れたる場合（二）第八條第一項但書の場合において料金に剩餘を生じたるとき（三）第十四條第一項により契約解除したる場合及同條第二項により料金により剩餘を生じたるとき（四）第十七條に定められたる場合において廣告主より返戻の請求ありたるとき
第十六條 廣告主の故意又は過失により廣告放送の實施不能に陥りたる場合、廣告主は第十三條の契約により未だ

料金を納めざるときと雖もその放送の實施なき故をもつて料金の支拂を拒むことを得ざるものとす

第十七條 已むを得ざる事故發生し又は一般に謹慎を要する場合、其他の事情により必要ありと認めたる場合は、廣告放送の全部若しくはその一部を休止することを得るものとす

第十八條 廣告放送の實施に當り會社の過失に依り廣告を毀損したるときはその毀損の程度輕微なるものに在りては其の部分に就き訂正の放送を爲し重大なるものに在りては廣告主と協議の上再放送を爲すものとす、前項の場合に於て再放送に要する經費は會社之を負擔するものとす

第十九條 廣告放送の内容の構成及用語に就き必要ありと認めたる場合は廣告主と協議の上之が改訂削除を爲すことあるものとす

第二十條 廣告主は廣告放送の實施に當りては會社當事者の指揮に従ふべきものとす

第二十一條 廣告放送により生じたる事故に關しては會社は一切の責を負はざるものとす

ロ、廣告放送料金表
一、全滿中繼放送料

イ、直接廣告
第一放送（日本語を主とし、鮮露語を含む）

二分以内	三〇圓	四五圓	夜間	二〇圓	三〇圓	夜間	一〇圓	一五圓
第二放送（満語を主とし蒙古語を含む）	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
二分以内	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間
五分以内	四〇圓	六〇圓	晝間	夜間	四〇圓	六〇圓	晝間	夜間
所要時分	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
五分以内	六〇圓	九〇圓	晝間	夜間	六〇圓	九〇圓	晝間	夜間
十分以内	一〇〇圓	一五〇圓	晝間	夜間	一〇〇圓	一五〇圓	晝間	夜間
十五分以内	一三〇圓	一九五圓	晝間	夜間	一三〇圓	一九五圓	晝間	夜間
二十分以内	一六〇圓	二四〇圓	晝間	夜間	一六〇圓	二四〇圓	晝間	夜間
三十分以内	二一〇圓	三一五圓	晝間	夜間	二一〇圓	三一五圓	晝間	夜間
所要時分	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
五分以内	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間
十分以内	三五圓	五〇圓	晝間	夜間	三五圓	五〇圓	晝間	夜間
十五分以内	五〇圓	七五圓	晝間	夜間	五〇圓	七五圓	晝間	夜間
二十分以内	六五圓	九五圓	晝間	夜間	六五圓	九五圓	晝間	夜間
三十分以内	九〇圓	一三五圓	晝間	夜間	九〇圓	一三五圓	晝間	夜間
所要時分	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
五分以内	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間
十分以内	三五圓	五〇圓	晝間	夜間	三五圓	五〇圓	晝間	夜間
十五分以内	五〇圓	七五圓	晝間	夜間	五〇圓	七五圓	晝間	夜間
二十分以内	六五圓	九五圓	晝間	夜間	六五圓	九五圓	晝間	夜間
三十分以内	九〇圓	一三五圓	晝間	夜間	九〇圓	一三五圓	晝間	夜間
所要時分	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
五分以内	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間	二〇圓	三〇圓	晝間	夜間
十分以内	三五圓	五〇圓	晝間	夜間	三五圓	五〇圓	晝間	夜間
十五分以内	五〇圓	七五圓	晝間	夜間	五〇圓	七五圓	晝間	夜間
二十分以内	六五圓	九五圓	晝間	夜間	六五圓	九五圓	晝間	夜間
三十分以内	九〇圓	一三五圓	晝間	夜間	九〇圓	一三五圓	晝間	夜間

一、第二放送にはローカル扱を設けざるものとす
 二、全滿中繼以外二局以上を指定して中繼する場合は各局分の累計に依る、但し此の場合と雖も全滿中繼料金を超へざるものとす
 三、廣告放送規定第十九條に依る廣告の審査は本手續に依るべし
 四、廣告放送規定第十九條に依る廣告の審査は本手續に依るべし
 五、左記各條に該當若は關聯する廣告放送は之を改訂削除せしむべし

新 京	一〇圓	一五圓	夜間	一〇圓	一五圓	夜間	一〇圓	一五圓
哈爾濱	五圓	八圓	晝間	五圓	八圓	晝間	五圓	八圓
奉 天	一〇圓	一五圓	晝間	一〇圓	一五圓	晝間	一〇圓	一五圓
大 連	一五圓	二五圓	晝間	一五圓	二五圓	晝間	一五圓	二五圓
所要時分	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
五分以内	六〇圓	九〇圓	晝間	夜間	六〇圓	九〇圓	晝間	夜間
十分以内	一〇〇圓	一五〇圓	晝間	夜間	一〇〇圓	一五〇圓	晝間	夜間
十五分以内	一三〇圓	一九五圓	晝間	夜間	一三〇圓	一九五圓	晝間	夜間
二十分以内	一六〇圓	二四〇圓	晝間	夜間	一六〇圓	二四〇圓	晝間	夜間
三十分以内	二一〇圓	三一五圓	晝間	夜間	二一〇圓	三一五圓	晝間	夜間
所要時分	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間	晝間	夜間
五分以内	六〇圓	九〇圓	晝間	夜間	六〇圓	九〇圓	晝間	夜間
十分以内	一〇〇圓	一五〇圓	晝間	夜間	一〇〇圓	一五〇圓	晝間	夜間
十五分以内	一三〇圓	一九五圓	晝間	夜間	一三〇圓	一九五圓	晝間	夜間
二十分以内	一六〇圓	二四〇圓	晝間	夜間	一六〇圓	二四〇圓	晝間	夜間
三十分以内	二一〇圓	三一五圓	晝間	夜間	二一〇圓	三一五圓	晝間	夜間

一、皇室の尊嚴を目潰す虞ある事項
 イ、皇族御成、侍從御差遣の語句を使用したもの
 ロ、宮内省又は宮内府の許可なくして天覽、台覽、宮内省（又は府）御用達の語句を使用したもの
 ハ、獻上、賜御嘉納、賜御買上之榮等の語句を使用するに當りその年月日、場所、氏名と共に用ひられざるもの
 二、朝憲紊亂の虞ある事項
 三、豫審中に關する事項
 四、軍事外交機密に關する事項
 五、官公署、議會に於て公にせざる事項
 六、犯罪の煽動、曲庇、刑事事件容疑者の賞恤、救護、陷害に互る事項
 七、他人の名譽を毀損し又人身攻撃に互る事項
 八、公序良俗を害する虞ある事項
 イ、虚偽誇大にして不正の利を計る恐れありと認むるもの
 ロ、不當に低廉を装へる販賣廣告
 ハ、亂倫猥褻に互り又は残忍醜惡の感を與ふるもの
 ニ、診療、醫具、藥品の廣告において墮胎を暗示、醫治無効の暗示、醫師の誹謗、全治の保證を爲し又は無効の場合返金を約するもの
 ホ、藝娼妓妾婦の周旋、募集、妓樓の營業案内及阿片の販賣に關するもの
 ヘ、暗號通信に類するもの
 九、前各條の外各種法令違背の事項、放送禁止事項に抵触する事項、聴取者をして會社の放送及其他の件の業務に對し不信疑惑を抱かしめ、又は會社の品位に關する事項及放送内容を損壞すると認めらるゝ事項
 第三條 二以上の廣告事項にして相互連續放送するときに於て、公序良俗を害する結果を生ずる恐あるものは、連續放送することを得ず（例へば月經藥と産兒調節法に關する廣告を相互連續放送する場合の如し）
 第四條 放送内容を損壞すると認めらるる廣告は左の標準に依り處理すべし
 一、レコードの放送は特別の場合を除くの外レコード製造業者又はレコード販賣業者のレコードに關する廣告に限るべし
 二、社會的に響きせらるべき者の出演は斷るべし
 三、放送の種類にして一列の他の放送種目と調和を缺くものの放送は時刻を編替する等機宜處理すべし
 四、音樂、演藝、講演その他の内容及技術にして甚しく低劣なるものの放送は斷るべし
 五、其他通常放送プログラムの編輯方針に基き會社の放送内容を低下せしむる恐ありと認むるものは斷るべし以上

全輯 百問隨筆 全六卷

内田百閒著

川上澄子訳

昭和十一年二月二十日出版

第六卷 小説家と読者

庄画版



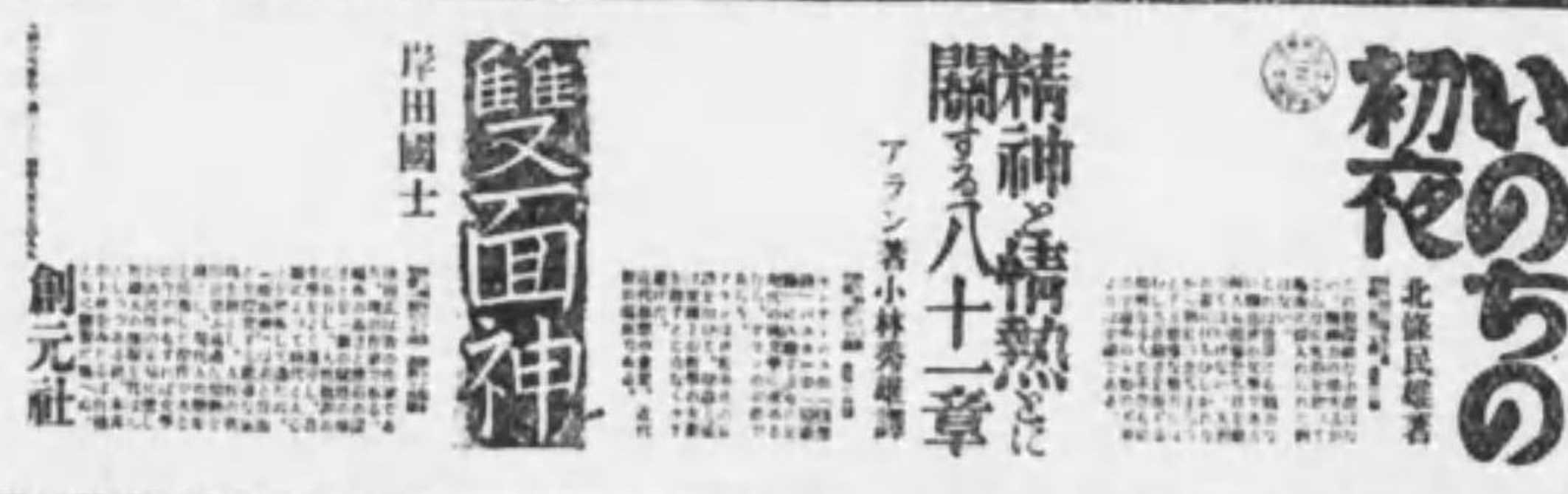
いのちの初夜

北條民雄著

精神と情熱を
關する八十一章

岸田國士

創元社



迎春の準備は
此の日記から！

昭和十一年版
INHAN日記

美しい繪とお話で一杯!!

お子様の喜ぶ上品で氣の利いた贈答品

模範家庭文庫

橋山正雄全譯

青い鳥



切 集全語物スケッチ 締

中央公論社發行

この全集は、現代の生活と、その背景を、簡潔明快に描き出した。...

全巻 10冊

1. 生活の風景 2. 人情の風景 3. 社会の風景 4. 自然の風景 5. 歴史の風景 6. 文化の風景 7. 科学の風景 8. 政治の風景 9. 経済の風景 10. 教育の風景

— 相々種の告廣聞新 —

二、印刷・製本・紙業界

印刷界

元來、東京印刷同業組合に於ける、組合員設置機械の調査問題は、同業者間の統制をとる上に於いて、當然進行さるべき緊急事項であつた。即ち、現在組織されてゐる東京印刷工業組合は、商工省調査に依れば従業員五十人以下が總数の九三・三%で、昭和九年に於ける印刷製本業の全國統計は、従業員五人以上使用の工場数は三千二百三十四工場であり、その内譯は

- 五人乃至五十人 九四・三%
- 五十人乃至百人 三・六%
- 百人乃至二百人 一・二%
- 二百人以上 ○・九%

以上の數字から見ると、如何に小工場の多いかは想像出来る。従つて未だ印刷同業組合に加入せぬものも夥しくあるわけで、勢ひ統制が困難とされ、料金の點も區々になら

出版界一年史（昭和十一年度）

ざるを得ないのである。故に組合長大橋光吉氏も就任中に、舊東京市内と新市場との統制は、本年度にも亦懸案として持越された形であり、一部中心の人々も瞻入りに努めたのであるが、實際上の發現は矢張り困難であると見られてゐる。

右は從來存在する東京印刷工業組合としては、標準を十馬力以上の原動力を有する工場を含むものとして居り、その他はこの工業法に恵まれてはゐないことになるのであるが、一般小工場にしても、何等かの條件で合流する方法はないものであらうか。元々印刷の種類は多様に分れてをり、工場の規模も亦大中小雑多を極めて居るので、その點等級を何とか區別しての工業法が設置されるならば、それら凡ての統制が無理なく自然的にとり行はるゝ可能性はあるやに考へられる。そこで、右賦課金を決定すべき審議検査であるが、何分昭和六年以來現在まで調査するに至らなかつた位で、一般的に見て機械臺數並に動力の増大は考へられても、減少しつゝある業者は少いと見られるので、業界不況の聲が叫ばれるゝ現今、賦課金割當の上昇には相當

波瀾もあらうが、大體に見て業界の向上を示すものと見るべく、従つて調査完結の上は賦課金の上昇率を示すことゝならう。

かの東京印刷同業組合の料金規定に關する認可申請にしても、十一月當局より却下となつたといふ始末は、内容の複雑なため、實行困難と認められた理由によるものであつたが、之れとても、此の種の工業が大なるものは圖抜けて大きく、小なるものは全く家庭工業と目せらるゝ類のもので、そこに雙方の開きの差は極端に大きいものとなる結果である。而してその仕事から見ても、機械並に技術の點から見ても、千差萬別であるのは至し方ないのである。これは紙業界の如く統制された獨占的事業と大いに異なる點であり、又各自が標準値段を公開することを躊躇する所でもある。要するに從來久しきに渉り、隱忍の立場に置かれた弱味の止むを得ざる習慣に基くもので、各自既に死線に立つ今日では、先づ自らの立場を自覺して、自營更生の方策上、合理的な手段を講ずるのは緊急事と云はねばならぬ。

たとへば、料金統制が許可になつた曉としても、斷乎たる確信を以て、統制を亂さざる覺悟が相互にない以上、條文のみでは永続せぬことは云ふまでもなく、故に法規類の制定などは第二義の問題であつて、各個に精密な原價計算を作成し、それに依つて標準値段を決定提示すべきで、競

争のために忽ち制規を崩す如きは、お互ひに共倒れを招く許りでなく、優秀な仕事を提供することすらも出来ぬ結果となる。

それ故、主張すべきものは主張し、技術の凝らすべきは凝らして、誠意ある實果を擧げること、斯界の繁榮發達の途であるのみならず、我國文化に貢獻する重大な責任でもあるのである。

諸材料の騰貴は益々迫り、來るべき年度を境として印刷界も當然二三割の値上げは止むを得ぬ情勢にあり、近く堂々と合理的値上げも實行期に迫つてゐる。

近時印刷機械の改良進歩は著しく、技術的生產的規模工作も躍進して、國內に於ける需要は殆ど國産品で満たされてをり、印刷業者の漸増と大小各印刷所の機械増設、擴張乃至新規取換のための需要は、益々旺盛であるばかりでなく、進んで朝鮮、滿洲國、印度方面まで相當輸出を見る發展振りで、その他活字鑄造機、タイプライターの製造も向上しつゝあり、某鑄造機械會社の如きは、來年度上半期分までの仕事を、手一杯に引受けたといふ好況にあり、インキの方面も輸出は愈々旺盛を示し、新興滿洲國は勿論支那に向つては、外交上の排日問題など尻目に、先方から要求の聲は相當に高いとも聞くし、印度方面への需要も満たしてゐる有様で、印刷原料、機械、而して印刷物も漸次國際的發展を示して來た事は、業界の前途大いに祝福すべきもの

がある。

本年度の印刷業界に於ける特殊事項を少しく拾へば、先づ版面浚へ機械二種が同時に完成したことで、即ち我が製版界に多年待望されてゐたルウチングマシン又はラウターが、新春早々中馬鐵工所と吉松貞彌商會が苦心終に完成を見たので、今後のわが製版界が蒙る便益は多大なるものであらう。

日本印刷學會々長の矢野道也博士は十年度末、滿洲事變の論功行賞に依り旭日重光章を授けられたので、同會では一月廿九日丸ノ内永樂俱樂部で、その祝賀會が盛況に行はれた。

大阪印刷美術協會では三月二十日より二十四日まで、大阪朝日新聞社後援の下に大阪朝日會館展覽場に於て、第四回印刷美術展覽會を開催した。出品物は現在印刷技術のあらゆる部門にわたり、その工程、發達を示したもので、連日非常の盛會であつた。

内閣印刷局長杉精三氏は辭任したので、四月二十四日同局書記官土屋耕二氏が昇任した。杉前局長の在任は八年で穩厚篤實の良局長として好評であつた。

印刷業者の東京に於ける最大團體として、組合員二千名を擁する東京印刷同業組合は、創設以後爰に二十五周年を迎え、益々健全なる發展を見て來たので、五月二十五日午後一時より東京劇場に於いて盛大なる印刷祭を舉行、來賓

總代として商工大臣、府知事、市長其他の祝辭あり、式後組合員一同觀劇會を催し、和氣瀛々裡に散置した。

同會は更に七月十日午後二時より、府立商工獎勵館に於いて例年の如く勤続十年以上の組合員雇傭の従業員を表彰したが、今回は其二十四日に當り八十一工場より拔擢の六百三十五名を表彰した。この表彰式中、從來の慣例なる祝辭の羅列を全廢して、一席の精神講話に代へたのは大好評であつた。

國定教科書出版社の一なる東京書籍株式會社は、王子區堀船町に工場新築中のところ、五月全部竣工したので小石川區指ヶ谷町の舊工場から移轉し、六月末關係者數百名を招待して披露したが、新工場は敷地三千七百六十五坪餘、建物は十四棟二千七百八十坪、近代様式の建築として内外の設備至らざるなく、別に瀧ノ川區四ヶ原に東書文庫と稱する圖書館兼慰安所をも新築したが、同所には古今内外の教科書數百點を所藏してゐる。

全國工場安全週間には、國の礎産業安全の標語を高揚して、第九回目を七月一日から一週間、全國一齊に實施した。八月十六日には、創始以來五十有餘年の歴史ある東京鉛版工業者組合は、組合最初の従業員表彰式を舉行したが、この榮譽に與つたもの八十九名であつた。因に本組合長は長瀬直次郎氏、顧問は天沼藤太郎氏である。大阪の中島機械工場主中島茂三郎氏は、九月十日畏きあ

たりより縁綬褒章を下賜されたのは、同業界の榮譽であつた。同氏は明治十八年先代幾三郎氏の創業以來今日まで、印刷機械製造界のために幾多の發明改良をなし、國産振興に寄與したのは萬人周知のことである。

大阪印刷同盟會では九月十一日、大阪中央公會堂に於いて第八回従業員の表彰式を舉行した。同會は創立以來三十年、業界に寄與する所多大で、表彰されたもの前後を通じて五回、總計二千九百九十九名の多數に上つてゐた。

凸版印刷の井上源之丞社長は六月十一日東京で、歐米印刷界の視察並に見學に向つたが、十一月十五日無事歸朝した。同氏の多年の希望であるチューブ製造及び現在の印刷事業に對し、副期的擴充するところの大であるべきを期待されてゐる。又、共同印刷は印刷の多角經營を目ざして、一大飛躍を試み、東洋モスの大宮工場を買収して増築中であつたが、今まで共同印刷内の舊工場の一部に染工部を置き、捺染を試験中であつたのを、愈々輸出向廣市物人絹の捺染に大規模の着手をなし、社長大橋氏の理想たる衣食住綜合の印刷供給に向つて着々歩を進むるに至つた。

尙、印刷出版研究所よりペンローズに比すべき『印刷需要家年鑑』が新たに創刊されたのは本年度の一收穫であつた。又、東京印刷同業組合は既報の如く、本年を以て創立二十五周年を迎へたので、近く一大記念出版が豫定さるゝに至つた。

製 本 界

東京製本同業組合は組合長金子福松氏、副組合長は本位田鶴吉氏、三俣三十郎氏にて、着々機能發揮に努力しつゝあつたが、本年度の特筆事項としては價格協定、相互の結束便益を考究協議したことで、各委員の盡力も効を奏し、本年九月一日より實施を見るにいたり、その機關雜誌「製本」は第十巻を重ね、會員は市内に一、一七二人の多きを數ふるに至り、十周年の祝賀會は十一月一日を以て舉行されるに列つた。

東京市の工業調査による昭和九年の報告によれば、市内工場中、紙工業を含む化學工業は、九年度末に於て工場數二千六十に達し、前年度より百九十八増加となつてゐた。然るに印刷製本業者に就いて檢するに、九年末の工場數は三千四百十三で、前年に比すると三十五工場の減少を示してゐた。これは斯業者の大部分が中小工業者であつて、従つて一般的不振を物語るものと云へよう。諸物價騰貴に伴つて、印刷、原料すべて値上げに際し、大量需要の雜誌社、出版社にあつては、その對策として、印刷製本費の一部でバランスを取らうとする傾向もあるもので、製本界としては印刷界と同様、前述の如く製本工賃の協定を計るに

至つたので、生命線を守守する必要上、同業組合に於ては業者一千餘名の實行を要望し、既に各區自治會ではよりより協會に關する大會を開催、その結果を團結一九として實行に邁進、終に九月を以て商工省の認可を得、爰に初めて全組合員の實施を見るに至り、製本界も漸く明朗化の喜ぶべき機運に向つたのであつた。

尙、この上は現在勞働時間の一定の限度を規定し實行し得たならば、業界として一層有益な發展を期せらるゝと思ふが、この方は適用工場にあつては官憲の監督もあり、勞働時間の限度もあるが、非適用工場にあつては徹夜の勞働も続けられるだけに統一も相當困難であり、注文者の希望に依り日限の急に應ずるか否かは、機械並に職工の圓滿を欠く場合をも考慮せねばならぬので、中々一朝一夕の問題ではない。然し、幸ひ價格協定の實施を見、組合員にも趣旨の諒解が出來たので、今後は更に一步を進めて技術の競争へ轉向すべきである。

所で、製本業者と不可分の關係にある折本業者は、右協定の趣旨を無視した行動に出たのであつたが、折本組合は無認可組合の故を以て、商工省より解散を命ぜられ一大センセーションを起すに至つた。即ち、折本同業組合としては、製本組合の價格協定を見た翌十月、全東京の有力者が發起し、同業五百餘名を以て組合を結成したが、未だ認可組合に至らず、製本組合に對する値上交渉も破壊的行動あ



り、且つ年末多忙を覗つての露骨的態度に出でた。結果、監督官廳より注意警告を與へられるに至つた。本年紙落紙の建値は二月中は上白（純白）凡て一貫匁の値段四十六錢、中白（特白）三十二錢、白更（普）二十四錢であつたが、四月に入り上白四十三錢、中白三十一錢、白更二十三錢を示しやゝ下落し、そのまゝ持談して、今秋値段は上白四十二錢、中白三十錢、白更二十二錢となり十二月まで同値を以て通すにいたつた。

紙 業 界

近年人造纖維（ステープル・ファイバー）工業は世界的躍進をとげ、需要増加は驚くべきものがあるが、就中濠洲

羊毛の輸入制限問題を契機として、一層の拍車加へられ我が國斯業の將來性は愈々重大化しつつある。ところで、右原料たるバルブは、今や生産不足の嘆を深くし、その血路を何處に求めるかは、緊急切實な問題となされて来た。少量のセラニーズ、ペンベルグを除いては、悉く木材バルブに仰いでゐる關係上、バルブの需要供給を如何に解決すべきかは、鐵、石炭の缺乏と並んで、これ又輕視することの出来ない運命に置かれてゐる。元來、人絹バルブと製紙用バルブとは、その製造に於て何等根本的な相違を持つてゐない。而も人絹の需要は驚くべきものがあり、益々製紙界への脅威となりつゝある。従來我が國の原料は、主として樺太材、北海道材が當てられて来たが、それらに對する悲觀説が高まり、最早や新らしき土に依る他なく、滿洲朝鮮等の主要山林地域を獲得すべく餘儀なくされた。又一方新原料の發見に努力が拂はれ、種々紹介されたもの、又は試験臺に登つてゐるものは頻々として發表されてはゐるが、それらの中から低廉にして有利な、而も豊富な原料が發見されるならば、單に一國家的見地からのみでなく、世界人造纖維工業の調期的發展を齎らすものであらう。

扱て製紙中、その大部分を占める洋紙に就いて見るに、その製産高は、昭和九年度の十五億九千一百四十七萬四千九百〇八封度に對して、昭和十年度は、十七億一千九百六十三萬七千四百九十封度となり、一億二千八百十七萬二千

五百八十二封度の増加を示したが、十一年度製産高は十八億二千五百八十四萬八千一百〇四封度で、前年より一億〇六百二十一萬〇六百十四封度(六分一厘増)の増加を示してゐる。

販賣高を見るに、十年度の十六億八千〇六十七萬〇〇九十九封度に比較して、本年度は十八億七千二百六十四萬〇四百四十三封度で、即ち一億九千一百九十七萬〇三百四十四封度(一割一分四厘増)増加であつた。販賣率は九年度は十割九厘、十年度九割七分七厘に對して、本年度は十割二分五厘を示してゐる。

之れを本年度各月に涉つて示すならば、十一年一月の洋紙製産高は、一億四千一百七十七萬九千二百〇五封度、販賣高一億三千一百八十四萬五千五百八十六封度、販賣率は九割二分九厘で、これを前月に比較すると、製産高に於て二百十萬三千三百四十二封度(一分四厘減)、販賣高に於て一千七百九十九萬一千二百四十四封度(一割二分減)を夫々減少した。尙ほ前年同月に比すれば、製産高に於て六百二十萬七千九百八十封度(四分五厘増)、販賣に於て七百三十一萬九千三百〇四封度(五分八厘増)である。

二月は製産高一億四千六百三十一萬七千三百八十九封度、販賣高一億五千五百五十三萬三千四百六十封度、販賣率一割三分五厘である。之れを前月に比較すれば、製産に於て四百五十三萬八千一百八十四封度(三分二厘増)、販賣に

於て一千九百六十八萬七千八百七十四封度(一割四分九厘増)を夫々増加した。なほ之れを前年同月に比較すれば、製産に於て五百〇七萬五千〇十七封度(三分五厘増)、販賣に於て二百〇二萬三千一百二十六封度(一分三厘増)を増加した。

三月の製産高は一億四千三百四十四萬四千三百七十三封度、販賣高一億四千八百七十七萬九千五百七十九封度、販賣率は十割三分九厘を示した。前月に比すれば、製産に於て三百〇七萬二千七百八十六封度(二分一厘減)、販賣に於て三百十九萬五千七百八十九封度(二分一厘減)で、前年同月に比較すれば、製産に於て一千〇九百十三萬〇六百十八封度(八分二厘増)、販賣に於て二千〇四十七萬六千三百八十八封度(一割五分九厘増)を夫々増加してゐる。

四月の製産高は一億五千一百七十三萬六千五百十五封度、販賣高一億五千八百九十九萬八千〇四十封度、販賣率十割四分七厘を示してゐる。之れを前月に比すれば、製産に於て八百五十九萬二千一百四十二封度(六分増)、販賣に於て一千〇二十一萬八千四百六十一封度(六分八厘増)を夫々増加し、前年同月に比較すれば、製産に於て七百六十五萬九千六百五十三封度(五分三厘)、販賣に於て八百八十七萬八千〇〇九封度(五分九厘増)を夫々増加してゐる。

五月の製産高は、一億五千二百四十五萬二千四百七十六封度、販賣高一億四千九百〇四萬六千九百八十八封度、販賣

率七割七分七厘を示し、之れを前月に比較すると製産に於て七十一萬五千九百六十一封度(四厘増)、販賣に於て九百九十五萬一千一百二十二封度(六分三厘減)、なほ前年同月に比すれば、製産に於て八百八十七萬四千一百七十五封度(六分一厘増)、販賣に於て二千〇九十一萬七千八百三十封度(一割六分三厘増)を夫々増加してゐる。

六月の製産高は、一億五千二百八十三萬七千六百四十九封度、販賣高一億四千九百二十二萬九千〇七十八封度、販賣率九割七分六厘を示した。之れを前月に比較すると、製産高に於て三十八萬五千一百七十三封度(二厘増)、販賣高に於て十八萬二千一百六十封度(一厘増)を夫々増加してゐる。尙ほ之れを前年同月に比較すると製産高に於て七百六萬四千九百六十七封度(四分八厘増)、販賣高に於て三百二十六萬二千七百八十四封度(二分二厘増)を夫々増加してゐる。

七月の製産高は一億四千九百二十六萬七千四百八十七封度、販賣高一億四千〇三十五萬三千二百八十八封度、販賣率九割四分を示し、前月との比較は製産に於て三百五十七萬五千七百九十封度(五分九厘減)、販賣に於て八百八十七萬五千七百九十封度(五分九厘減)を夫々減少した。なほ之れを前年同月に比較すれば、製産に於て五百二十六萬五千五百三十四封度(三分六厘増)、販賣に於て七百五十六萬二千四百二十二封度(五分六厘増)を夫々増加してゐる。

八月の製造高は一億五千四百七十六萬一千四百四十四封度、販賣高は一億五千〇五十五萬一千四百三十八封度、販賣率は九割七分二厘を示し、前月に比較すれば製造に於て五百四十九萬三千九百五十七封度(三分六厘増)販賣に於て一千〇十九萬八千一百五十七封度(七分二厘増)を夫々増加してゐる。尙前年同月に比較すると製造に於て七百六十九萬一千七百三十四封度(五分二厘増)販賣に於ては一千九百八十三萬〇九百十封度(一割五分一厘増)を夫々増加してゐる。

九月の製造高は一億五千三百二十五萬二千一百四十八封度、販賣高は一億六千〇七十三萬五千五百二十七封度、販賣率は十割四分八厘を示したが、之を前月と比較すると製造高に於て百五十萬九千二百九十六封度(九分七厘減)を減少し、販賣高に於て一千〇十八萬四千〇八十九封度(六分七厘増)を増加してゐる。尙ほ之れを前年同月に比較すれば、製造に於て四百九十四萬〇二百八十封度(三分三厘増)販賣に於て一千八百二十五萬五千九百九十二封度(一割二分八厘増)を夫々増加してゐる。

十月の製造高は、一億五千五百四十一萬八千〇四十六封度、販賣高は一億五千七百六十八萬一千〇九十二封度、販賣率は十割一分四厘を示し、前月との比較は製造に於て二百十六萬五千八百九十八封度(一分四厘増)を増加し、販賣高に於て三百〇五萬四千四百三十五封度(一分九厘減)を

減少した。尙ほ之れを前年同月に比較すると、製造高に於て九百八十二萬六千三百七十九封度(六分七厘増)販賣高に於ては一千五百八十六萬七千三百〇五封度(一割一分一厘増)を夫々増加してゐる。

十一月製造高は一億六千三百四十七萬三千九百五十二封度、販賣高は一億九千一百八十八萬五千八百三十封度、販賣率は十割七分三厘を示し、前月との比較は製造に於て八百〇五萬五千九百〇六封度(五分一厘増)販賣に於ては三千四百二十二萬四千七百三十八封度(二割一分六厘増)を夫々増加した。なほ前年同月に比較すれば、製造に於て一千五百十八萬九千四百五十五封度(一割二厘増)販賣に於て三千五百三十三萬二千四百七十七封度(二割二分五厘増)を夫々増加してゐる。

十二月に於ける洋紙製造高は、一億六千一百五十萬七千六百五十二封度、販賣高は一億八千一百六十三萬八千六百九十九封度にして、販賣率は十一割二分四厘を示してゐるが、之れを前月に比較すれば製造に於て一百九十六萬六千三百封度(一分三厘減)販賣に於て一千〇十六萬七千一百三十一封度(五分三厘減)を夫々減少してゐる。尙ほ之れを前年同月に比較すると、製造に於て一千七百五十八萬五千一百〇五封度(一割二分二厘増)販賣に於て三千一百八十萬一千八百九十九封度(二割一分二厘増)を夫々増加してゐる。

次に右販賣率を検するに各月累計は左の如くである。

一月	九割二分九厘	二月	十割三分五厘
三月	十割三分九厘	四月	十割四分七厘
五月	九割七分七厘	六月	九割七分六厘
七月	九割四分	八月	九割七分二厘
九月	十割四分八厘	十月	十割一分四厘
十一月	十割七分三厘	十二月	十一割二分四厘

之れを前年々々と比べると

昭和九年度	十割九厘
昭和十年度	九割七分七厘
昭和十一年度	十割一分四厘

となつてゐる。

本年度バルブ輸入の状態は、本年度十ヶ月累計によれば數量は六億一千〇八十萬封度、價額にすると五千四百六十六萬四千二百七十七圓となつてゐる。之れを昨年十ヶ月累計數量と比較すると、九千三百二十五萬四千八百〇五封度の増加を示し、價額は七百六十七萬二千二百三十圓の増加となつてゐる。右輸入バルブの内譯は、輸入量二十七萬二千六百七十八噸の内、製紙用バルブは、十三萬五千八百四十九噸(四割九分八厘)人絹用バルブは十三萬六千八百二十九噸(五割二厘)を占めてゐる。

而して輸入國は、從來北米合衆國、加奈陀、瑞典、諾威の外に芬蘭が十年以來新たに加へられ、以上の五ヶ國が相

互に競争し、時に盛衰はあつたが、依然合衆國が、製紙用人絹用共に首位を占めてをり、瑞典、諾威、芬蘭、加奈陀の順位である。近年芬蘭の優勢なるに反して、加奈陀は約半數に減じてゐる。

輸出の方面を見るに、十一年中の十ヶ月累計を示せば、數量は一億〇九萬九千〇六十六封度で、價額は七萬八千三百五十二圓である。昨年の十ヶ月累計と比較すると、數量五十五萬三千二百〇一封度の減少を示し、價額に於ては三萬一千二百〇七圓の減少となつてゐる。併し製紙用バルブと其他の紙類を合せての本年度十ヶ月の輸出高は、前年同期に比して數量に於て七分六厘、價額一割五分三厘の増加をなし、紙製品と相俟つて輸出進展の状況を見せてゐる。

本邦紙類の東洋諸國への輸出は、滿洲國を背景とする關東州が、東洋市場の王座で、往年の支那をも壓倒するに至つた。尙支那に就いて見るに、從來は北部が第一位を占めてゐるが、本年は南部が旺盛であつたことは、排日の中心をなす地方だけに注目するものである。滿洲及關東州は板紙、書籍印刷物、紙工品等が多く、支那及香港は専ら印刷用紙である。

十二月の日本製紙聯合商議會に於て、洋紙協定價格の決定に對して各社の主張が一致せず、再三熟議の結果一封度に就き王子製紙品は七厘、他社製品は一錢の値上げを決議し即日實行の申合をなした。十二月上旬より、更紙、

ル紙等の相場の大暴落を來たし、市場は一齊に一割乃至二割の暴騰を示し、而も品薄の状態で、この相場は年末年頭共にその儘持續せられるものと豫想される。

輸入紙は、國産の更紙値上げに追従して、是亦約二割見當の暴騰を見、パラピン紙亦一割見當の値上げを見た。

最近、板紙の需要は頓に増加し、世界の生産量は約六百五十萬噸と推算されてをり、一九三五年の北米合衆國の同生産量は、同國々民板紙協會の統計學者ホワイト氏により三百七十六萬八千噸（三三六四〇〇英噸）と推算された。

即ち世界に於ける板紙の半數以上の生産額である。現在日本の板紙生産高は、米國の二十分の一に過ぎず、平均年七分七厘の増産を示してゐる。昭和九年の本邦板紙製造會社の主なるものは、二十九會社、三十五工場を有し、その内一ヶ年一萬噸以上生産するものが六會社に過ぎなかつた。

關東に於ては、東京を中心として、茶、白板紙の生産が多く、關西は大阪を中心として、薬板紙工場が多い。

本年二月、板紙聯合會は、東西とも噸當り三圓方の値上げを申合せたが、追次原料高に伴ふ値上げを迫られ、十二月に至り茶板紙は噸當り十圓、黄板紙は同じく五圓の値上げを決定した。

本年和紙界の商況は稀に見る波瀾の多かつた年で、久しく沈滞してゐた業界に頗る明朗色を興へられた感がある。楮製の手漉紙の騰貴は比較的小さかつたが、三権製の手漉

紙に至つては、春以來暴騰に次ぐ暴騰で、素張らしい活況を呈し、十月に入つて幾分落付きを見せたが、原因は昨冬より本春にかけ稀有の降雪の爲め、原料出廻り遅延による品不足並びに不作に依るものであつた。

パルプ及マニラ麻を原料とする器械製紙に於ては、九月以降の原料相場奔騰に連れて、目ざましい昇騰振りを呈した。而も前途も一段躍進の氣運を漂はせてゐる。その足跡を示せば

和紙同業會發表表（パルプ製半紙）

- 第一回 九月十六日 約五分値上げ
- 第二回 十月十六日 "
- 第三回 十一月十五日 "
- 第四回 十二月十六日 約一割五分値上げ

薄葉會發表表（マニラ麻製改良半紙）

- 第一回 八月十二日 約一割値上げ
- 第二回 九月十二日 "
- 第三回 十一月五日 約五分値上げ
- 第四回 十二月二十六日 約二割値上げ

なほ十二月、和紙同業會例會に於ては、各社の原料買付難と賣行旺盛に依り、結局一割乃至一割五分値上げを決議し、即日實行を申合せた。

洋紙、和紙共に年末に近づくにつれ高騰の氣合が昂まつて、この状態は愈々深刻に向ひつゝ越年した。

三、圖書館界

非常時とか、准戦時とか、言葉は言ひ慣らされた感はあるが、現在時局の難關に當つて、國體明徹、國民の自覺等々聲を大に叫ばれつつあるが、結局は一般民衆の頭の問題で、教學、向上が重大性を持つものである事は云ふ迄もない。小學教育、成人教育をはじめ、卑近なる大衆的遊藝にまで教化の役割は課せられつつあり、一面ラジオ、映画の副期的發達に併せて、それを教材の資とし、指導の方途に供する勢力も異狀な進展を示すに至り、讀書に依る一般智識教養向上に悲觀説を稱へる向きすら現はれたが、寧ろ此の種の杞憂を裏切つて、年々出版界は飛躍隆盛の一途を辿りつつある現状で、文化の複雑性は益々多岐多様に培はれてゆく。即ちラジオ等の如く容易に利用し易いものに比して、讀書に於ける感興は深味があり、魅力又は迫力の強さは、それが持つ永遠性を物語つてゐる。ところで一般智

慾追求に對する施設としての機關たるべき圖書館等は、萬全を期してゐるかどうか？遺憾なく充實され、指導の任務を完ふし、讀書人を満足せしめてゐるかどうか——といふ事になると、我が國の現状は些か物足らぬものがある。

殊に外國の其の方面を觀察して來た人々の言を聞く時、暗然たるものを感じない譯にはゆかない。事毎にアメリカ模倣するに當らないが、彼地に於ける圖書館は、全國に幸福なる流行病の如く蔓延してゐる、とブラウン大學總長故ウイリアム・エイチ・フォーン氏をして云はしめてゐるのを見て、かゝる流行病の猖獗こそ望ましい限りであると羨望に堪へない。

わが國の文部省が國民教育統制の總元締であるのに反して、圖書館の全國的統制は未だ見ない。かつてのアメリカにも、それに當たるべき統制機關は持たなかつた。たゞ聯邦教育局といふのが置かれてゐたが、その職責はわが國文部省の如きものではなく、各州は各自單獨な施設に従つてゐた。然るに新たに教育局内に圖書課を新設し、二萬五千弗の豫算を以つて國家的事業として統制された圖書館網を敷くに至り、著々その完備を誇らうとしてゐる。讀つて我が國の有様は、一ヶ月經費五圓の漁村圖書館があり、京都の昭和圖書館は經費の關係上、昭和十四年まで休館を發表した——等の實例も見られる通り、實に寥々たるものであ

る。明治三十二年圖書館令が制定せられ、昭和八年に改正があつて、中央圖書館の制度が設けられた。而して圖書館會議は、本年三十回を迎へた。馬齢だけは加へたが、文部省に圖書課は未だ置かれてゐない。第六十七議會より年々提出する請願もまだ目鼻がつかない。圖書館員講習所は本年一月新建築が落成し、新學期より使用する事となり、十月三十日官報によつて、公立圖書館司書檢定試験規程が公布され、凡てが運々として歩みつゝある。

大都市の公私有数のものは別として、未だ府縣立圖書館の設置されないものが、一府十縣に及んで居り、市町村で圖書館を持たないものは、全市町村数の過半を占めてゐるに至つては、頗る心細い。

一體都會と農村の生活程度が懸隔を持ち過ぎて居り、知識、思想に於ては殊に偏差が著しい。此の事は國家全體の不幸と云はなければならぬ。國際運動競技のやうな派手な事もそれ自身は悪くはないが、都會ばかり發達した補助のやうな類型は困る。國民全體のレベルを引上げる、その意味で各地に小なりと雖も圖書館の置かれる事は急務であらう。

數年來、郷土文學復興の浪にのつて、郷土的資料蒐集やそれに關聯した材料を中心とする地方々々の小圖書館を型づくる事は、又時宜を得たものとも考へられる。併し要諦は資金にあるのであるから、理想境は遠いが、經費五圓、

十圓なりと雖も、それが無いよりも有る方がよい。といふのは存在することによつて圖書又は圖書館に對する注意を喚起する一助とはなるからである。帝國圖書館ですら毎年六百萬圓の豫算を提出し、博物館は三百五十萬圓の計畫を當局に出してゐるが、それ等も獲得は何時になるやら覺えない有様にある。先きにも云つた議會に對する請願は、公共圖書館國庫補助法制定に關する懸案で、内容は、圖書館は小學校と共に國民教育を完成すべき重大機關であるにも拘らず、府縣立圖書館を有しないもの十有一、中央圖書館を有しないもの十六の多きに及び、市町村圖書館は市町村の半數にも達してゐない。既設圖書館に就いて見るも約七割は蔵書千冊に満たず、經費は百圓に達しないものがある状態で不活潑極りない。

我國教育費補助の状況を見るに、學校教育に於ては小學校教育費、師範學校教育費、實業教育費、盲啞教育費、公立學校職員年功加俸等に對し、社會教育にあつては實務補習教育費、青年訓練費に對し夙に國庫補助の途が開かれ、其總額八百萬圓(小學校員俸給分撥金八千五百萬圓を含まず)の計上を見るに拘らず、之等と並び社會教育の中心機關として最も永續的効果を擧げるべき公立圖書館に對しては、未だ之が豫算の全く計上されてゐない。右は、圖書館大會の決議により全國三萬石に近い署名者を得て、本年も又兩院に提出された。貴族院は二荒芳徳氏の

紹介を以つて、衆議院は野村嘉六氏、八並武治氏の紹介を以つて提出され、夫々採擇の事に可決され政府に回附された。一體この種の運動は、その直接關係者のみならず、社會一般が熱烈な應援を送つて強靱な努力を拂はねばならぬものである。

第三十回全國圖書館大會は五月十二日より三日間、東京科學博物館講堂に於て開催された。文部大臣諮問を初め、會員提出の協議檢討が行はれたが、その内容は

文部大臣諮問事項

一般社會人ノ圖書館ニ關スル認識ヲ高ムル方法如何

一般協議題

- 一、圖書政策ノ確立方ヲ其筋ニ建議スルノ件
 - 二、文部省に圖書館専門ノ社會教育官ヲ置カルル建議スルノ件
 - 三、帝國圖書館長ヲ社會教育官ニ兼任セラレムコトヲ其筋ニ建議スルノ件
 - 四、中央圖書館ヲ國庫補助ニ關シ其筋ニ建議スルノ件
 - 五、公共圖書館國庫補助法制定ニ關スル請願署名者ヲ全國ニテ百萬人取纏ムルノ件
- 等々二十三項に涉つて協議せられた。尙ほ公共圖書館部會に於ては、兒童圖書館施設經營に關し、並びに公共圖書館に對する社會認識の實際に就いて論ぜられた。學校圖書

館部會に於ては、文部省直轄諸學校及所管外諸學校關係官制中改正の件、その他につき協議せられた。

來るべき昭和十五年は、我が皇紀二千六百年に相當するを以つて、その記念事業として全國道府縣市町村に、實力ある圖書館を設けしめ、國家的に一大圖書館網を完成してわが國文化の發展上一新機軸を劃するやう大方針を樹立する事に意見の一致をなし、決議に基いて府縣立圖書館未設置の十府縣知事、市立圖書館未設置の大都市々々長、並に公立理事長より、右記念事業としての圖書館設置方を懇請する意見書を、六月二十五日に發送した。

文部省に於ては本年度中央圖書館の事業獎勵の趣旨を以つて、三月末左記の十館に對し金五百圓宛の獎勵金の交付があつた。

- | | |
|-----------|----------|
| 北海道中央圖書館 | 宮城縣中央圖書館 |
| 福島縣中央圖書館 | 千葉縣中央圖書館 |
| 長野縣中央圖書館 | 鳥取縣中央圖書館 |
| 山口縣中央圖書館 | 長崎縣中央圖書館 |
| 鹿児島縣中央圖書館 | 徳島縣中央圖書館 |
- 四月二日は第四回全國圖書館記念日に當り大々的に諸種の催しが行はれた。十一月一日より七日迄、第十回圖書館週間が行はれ、圖書祭は、東京出版協會、東京書籍商組合と共同主催で舉行され、日本圖書館協會理事長、松本喜一氏のラヂオ放送があり、文部省推薦圖書陳列は、東京に於

ては東京堂、三省堂、丸善、三越、高島屋、松屋、松坂屋、伊勢丹に、地方に於ては主要都市の図書館、書肆、百貨店にそれら陳列せられた。

本年開催の特別図書館としては、鹿兒島縣立図書館に皇室文庫設置の計畫があり、昭和十年、聖上陛下の陸軍特別大演習行幸を記念とし、皇室並に國體に關する典籍を蒐集所蔵することを發表した。

豊島區瀧ノ川西ヶ原の東京書齋株式會社に於ては、同所内に東書文庫を設置し、藏書一萬冊を擁してゐる。

坪谷善四郎氏は、その郷里なる新潟縣加茂町町立図書館に曩に圖書資金三千圓を寄附したが、更に本年五月建築中の同館に對し金一萬圓を寄附した。

安田文庫で聞えてゐた安田善次郎氏は、本年十月二十三日突如として病歿したが、生前、氏は圖書館事業に對し深甚なる理解と應援を惜しまなかつた許りでなく、氏の貯藏の稀觀書も、實に後世に誇るべき蒐集であつた。

慣例の文部省主催の圖書館講習會は、八月二十一日より六日間、岡山醫科大學に於て開催せられ、その他、福岡縣圖書館、朝鮮總督府圖書館、千葉縣圖書館、神奈川縣圖書館等々、各地にも講習會が催された。

さて、本項欄兼に當り、我等が同慶とすべき一事を披瀝すべき責任がある。かねて、獨逸圖書價格値下問題は、第二回國際圖書館會議に於て定期刊行書に關する小委員會を

設置して審議され、今回の委員會に日本側委員として、東北帝大附屬圖書館司書吉岡孝治郎氏が選舉せられた。同氏は早くよりこの重大問題に注目し、周到なる調査がなされてゐたが、本年マドリッドで開催された國際圖書館會議に於て、日本代表は佐藤醇造氏が列席し、遂に九月以降輸出の獨逸書は二割五分の値下を見るに至つた。此の事は世界各國共通の便益であり、その功績は多とすべきで、吉岡氏に敬意を表する所以である。

出版界 彙報 (昭和十一年度)

一月

出版關係の各團體總會

出版、販賣關係の各團體に於ては一月十日の東京書籍商組合を始め、それら左記の如く定時總會を開催した。

東京書籍商組合の定時總會

恒例の東京書籍商組合の十一年度定時總會は、都下同業諸團體に魁けて一月十日午後一時から九段坂下の軍人會館で開催された。總會に先立ち午前十一時から勤続従業者二百五十八名の表彰式を舉行、役員三十一名、被表彰者六十餘名列席山崎組長病氣缺席のため岸副組長これに代り式辭を朗讀、代表者に表彰狀を贈り十一時四十分式を閉ぢ、一同地階食堂で晝餐を共にし和氣霽々裡に散會した。

出版界一年史(昭和十一年度)

ついで定期より半時間遅れて午後一時半から定時總會を開會、出席者千五百名、組長山崎信興氏病氣にて缺席のため副組長岸他丑氏議長を代行、開會の辭として過去一ケ年間の回顧、今年に對する希望及び今年度から更改されることになつた評議員選舉に於ける投票方法を述べ審議に入つた。型の如く勞働前年度に於ける庶務の報告があり、無事承認されついで十年度會計報告に入つた。同議事進行中端なくも事務員退職手當問題に打つかつて停頓一波潮を生じたが結局榊原副組長の折衝によつて無事解決、原案の可決を見、颯風一過後の和やかな氣持ちで一瀉千里十一年度豫算案を審議可決して午後八時閉會した。

同日午後二時から議事と並行して行はれた評議員選舉の開票は翌十一日組合事務所に於て行はれ、左の諸氏の當選を見た。(印は新當選)
林平書店 三省堂 博文館
中川治三郎 飯島竹次郎 小川勝藏

滴集 人文書院

工業毛織

(るけ於に告廣籍書 ろいろいの廓輪)

次郎 ▲取引規程に關する調査委員長 福田金次郎 ▲圖書月報發行委員長 西村辰五郎 ▲出版年鑑發行委員長 飯島竹次郎 ▲退任評議員功勞調査委員長 鈴木銅一

大阪書籍雜誌商組合の定時總會

大阪書籍雜誌商組合の十一年度定時總會は一月十四日午前十時から松屋町筋の實業會館樓上に於て組合員四百六十餘名出席の下に盛大に舉行された。開會に先立ち午前十時から勤続店員の表彰式を舉行、表彰式終了後一旦休憩午後一時十五分總會開會、昭和十一年度庶務報告、十年分決算、十一年度豫算案を審議いづれも異議なく承認、ついで内規の制定及び修正の件に移り、一、郡部町制地距離に關する件、一、行商の新規加入に關する件、一、百貨店加入に關する件を審議、これまた滞なく原案通り可決して三時開會、閉會後同席上で今年度評議員の選舉を行ひ開票の結果左の諸氏が當選した。

政治 松本善次郎 千葉徳松 村上英四郎 藤谷芳三郎 此村庄助 小賣岡評議員——米原一之 中村清三郎 別所謙 松本政治 森川茂太郎 所貞一郎 今西時太郎 法西保藏 大塚豊二 四方耕太郎 丸山英一郎 田中庄二 松葉重造 今井平次郎 杉本宇造 杉岡惣吉 森田勝太郎 高橋貞二 稻森啓藏 細川爲次郎 向同組合では新評議員決定後、同日午後六時から實業會館に於て新評議員初選合せを行ひ正副組長の選衡をなし、また一月二十五日午後四時から美津濃五階に於て本年第一回の評議員會を開會、本年度の役員を決定した。

館で開會された。出席者六十七名、増田會長の開會の辭があつて議事に入る。十一年度の庶務報告は組合員の動議により便宜省略、次いで十年分決算、十一年度豫算は何れも異議なく可決、議事を終つて評議員の改選を行ひ投票後直ちに開票、其結果左の諸氏が當選した。

京都書籍雜誌商組合の定時總會

同組合では一月十九日午後一時から下京區木屋町通り松原上ル榎鶴樓上で本年度定時總會を開會した。組合員約二百餘

名出席、先づ總會に先立つて恒例の勤続店員表彰式を舉行、被表彰者三十四名に夫れ々賞状を贈り午後二時半式を了つた。續いて前年の雜誌週刊優勝旗の返還及び今年度の優勝者への優勝旗授與式を舉行、更に引續いて今年初めて制定を見せた組合旗の入式を行つた。以上の三舉式を終つて同三十分から總會開會、昭和十一年度の庶務報告に次いで十年度の決算報告に入つたが、支出の部の審議に移るや經費節約要望の聲しきりに起り曲折波瀾を極めたが結局該決算を承認、次いで十一年度豫算案を審議、組合員中より今年度豫算を前年度豫算額と同額にまで削減の動議が提出され採決の結果削減動議が成立した。以上で豫算案の審議を終り規約更改の審議並びに圖書館の庶務報告に移り執れも異議なく承認、ついで木村五郎氏を滿場一致組長に推薦同氏の就任を見、それより評議員の改選を了へ新年宴會に移つた。評議員當選者は左の如くである。

加入調査委員長——服部勤太郎(副) 中村清三郎 ▲販賣調査委員長——米原一之(副)今西時太郎 ▲販賣研究委員長——大塚豊二(副)脇坂要太郎

評議員——伊藤嘉市 田中源太郎 森留吉 宮崎則忠 井上治作 山本錦次郎 中島善南 岡田大吉 木村頼之助 井上藤三郎 岩田駒次郎 河村一學 松田善六 中西喜一郎 清水友吉 松

井爲三郎 山内正次郎 河原武四郎 野口孝次郎 仁木勝司 山本常吉 久保澄雄 丹保治郎七 前田喜久郎 北口一雄 中西馬治郎 同組合では第一回評議員會を一月二十日午後三時から中京區富小路四條上ル湖月亭で開會、副組長以下の新役員を互選し、組長は總會席上に於て決定済——左の如く決定した。

評議員——伊藤嘉市 田中源太郎 森留吉 宮崎則忠 井上治作 山本錦次郎 中島善南 岡田大吉 木村頼之助 井上藤三郎 岩田駒次郎 河村一學 松田善六 中西喜一郎 清水友吉 松

組長 木村五郎 副組長 宮崎則忠 木村頼之助 ▲議長——中島善南 ▲副議長——松田善六 ▲會計——岩田駒次郎 ▲加入調査委員長——中西喜一郎 ▲販賣調査委員長——山本錦次郎 ▲時報係——河原武四郎

評議員——伊藤嘉市 田中源太郎 森留吉 宮崎則忠 井上治作 山本錦次郎 中島善南 岡田大吉 木村頼之助 井上藤三郎 岩田駒次郎 河村一學 松田善六 中西喜一郎 清水友吉 松

中等教科書協會の定時總會 中等教科書協會では一月二十日午後三時から東京會館に於て昭和十一年度定時總會を開會した。出席者六十四名、坂本會長病氣缺席の爲め森下副會長議長席につき昭和十一年度庶務並びに會計報告、十一年度豫算を諮り異議なく可決、議事を終つて役員の選舉に移り開票の結果左の諸氏が當選。(印は新當選)

東京出版協會の定時總會

東京出版協會では一月二十三日午後三時から上野精養軒に於て昭和十一年度定時總會を開會、目黒會長病氣缺席の爲め江草副會長代つて議長席に着き開會の辭を述べ十一年度の庶務報告に入り、出版法規(藤田)、廣告(坂本)、通信市會(三樹)、新刊月報(中土)、分類目錄(藤田)、圖書祭(大橋)、記念特賣(藤田)の順に委員長或は同代理より報告、異議なく承認、次いで十年分決算、十一年度豫算を審議、滿場一致これを承認して四時四十分議事を終り、少憩後協議員の選舉を行ひ

六時その結果を発表、續いて懇親宴に移つた。當選の協議員は左の如くである。

- 協議員——目黒甚七 矢島一三 坂本守正 明治書院 江草重忠 興文社 岡本正一 博文館 橋本福松 三省堂 神戸文三郎 丸善 長坂金雄 中土義敬 藤田知治 鈴木種次郎 松邑孫吉 學智社 榎原友吉 小林又七 福岡益雄 和田利彦 大日本圖書株式会社 小川菊松 大倉保五郎
- 尙同協會では同日午後八時から協會事務所樓上に於て改選後初の協議員會を開き正副長の選任を行つた。大正十三年以降會長として信望篤き目黒甚七氏は後進に道を拓く意味で豫め辭任を申出でてあつたので役員中より五名の交渉委員を設けて目黒氏方に赴き正式に就任を懇請したが辭意固く受諾を得ることが出来なかつたので満場一致を以て副會長江草重忠氏を會長に推した。次に小林又七氏も亦目黒氏と同様の理由で副會長辭任を申出たので詮衡委員を設けて詮衡兼ねて會計をも詮衡、左の如く今年度の役員決定を見た。

- 會長 江草重忠
- 副會長 松邑孫吉 大橋進一
- 會計 矢島一三 中土義敬

東京雜誌販賣業組合の定時總會

東京雜誌販賣業組合の昭和十一年定時總會は一月二十四日九段坂下の軍人會館に於て開催された。開會に先立ち午前十時から新春恒例の勳績店員の表彰式を舉行、表彰店員百九十二名に表彰状及び記念品の授與があり十一時半式を閉じた。午後二時から總會開會大野組長病氣缺席の爲め岸副組長議長席に着き開會の挨拶を述べ直ちに日程に入り、昭和十年度庶務報告は異議なく承認、同決算報告は支出の部に於て二三質問のあつたのみで異議なく承認、ついで昭和十一年度豫算の審議に入り調査費と諸給の編換問題で紛糾を見たが、これ又原案通り無事承認可決、次の日程なる共濟會會計の十年度決算及び十一年豫算案を一括して審議、午後六時議事を終り幹事の改選を行つた。本年度選當の幹事は左の諸氏である。

- 第一區——赤井健 福田滋次郎
- 第二區——山本岸他五 相川治平
- 第三區——伊藤芳之助 鶴岡周作 福島孝太郎 淺見文林堂 中川治三郎
- 第四區——伊藤貫一 土屋右近 市川松之輔 大橋信

- 一、三澤朝一 ▲第四區——塚越都四郎 岡崎傳五郎 ▲第五區——島田和助 越石保文 芳根次朗 中川謙 門坂吟一郎 小澤一男 ▲第六區——中山軍治 酒巻修三 紅谷安久 小澤作次郎 本間龍藏 ▲第七區——大川義雄 大曾根銈治 長谷川留吉 林五郎 ▲元取次——東海堂 大東館 東京堂 北隆館
- 尙同組合では一月二十九日午後二時半から改選後初の幹事會を組合事務所で開催、全員出席の下に組長以下本年度各委員の選任を行つた。組長には満場一致をもつて大野前組長を推薦、ついで副組長の選任を行ひ、會計は全部留任と決定、常任他各委員は選舉によつて選任、左の如く本年度役員決定を見た。

- 組長 大野孫平
- 副組長 塚越都四郎 岸他五
- 會計主任 東海堂 北隆館
- 常任幹事——長)土屋右近 伊藤貫一 林五郎 小澤作次郎 藤井誠次郎 ▲規約執行委員——(長)大曾根銈治 市川松之輔 長谷川留吉 大川義雄 中川治三郎 稻川佐八 酒巻修三 福島孝太郎 越石保文 紅谷安久 ▲共濟會委員(長)本間龍藏 中山軍治 芳根

著作權に関する供託金制度の運用便法

近代文化生活の特殊所産たる所謂無體財産、即ち著作權乃至意匠權等は社會生活進運の實情に適合するため著作權法、國際著作權保護同盟條約等により國內的並びに國際的保護を加へられてゐるが、その反面には所謂ブライゲ旋風をはじめ幾多の「權利濫用」による弊害事例が續發し他人の著作を利用することの多い演奏、レコード作製、ラヂオ放送、寫眞、繪畫、出版等の關係業者中には、此の惡意の權利主張に脅かされるものが多く、最近には内務省に對し著作權株式會社と稱し著作權者から廣汎な權利代行の委任を受けて、權利侵害訴訟提起を専門とする會社設立の認可を申請して來た者さへある状態に鑑み、内務省ではこれら著作權の保護と著作利用者の保護との間に均衡化を圖る具體的方策を講ずることになり、これに必要な現行著作權法の改正文

- 次朗 大橋信一 岡崎傳五郎 中川謙 福田滋次郎 淺見四郎 門坂吟一郎 山本芳之助 ▲加入移轉調査委員——土屋右近 林五郎 伊藤貫一

小學館相賀氏の美譽

小學館社長相賀宏氏は貧困者救済の一助にもと濟生會診療所に一萬圓、東京府社會課に三千圓の寄附を申出た。府社會課では特に寄附者の意志を尊重してこれを府下の社會事業に頒ち、保護されてゐる子供老人の救護費に充てることゝした。

大阪出版組合の二十周年祝賀會

大阪圖書出版業組合は今回が創立二十周年に相當するのでこれを記念すべく一月十六日午前十一時から新大阪ホテル大食堂でいと盛大な記念祝賀會を催した。來會者約二百五十名、全國から知名の書店主の參集があつた外、東京出版協會、中等教科書出版協會等から夫々觀電祝辭が寄せられた。尙同宴終了後一同は、有馬温泉一中之坊に於ける同記念大市會に臨んだが、總出來高は定價で三十五萬圓(正味十七萬圓)に達し近來に稀な素晴らしい出來高であつた。

書籍商同志俱樂部の店員慰安會

書籍商同志俱樂部の第十四回書店員慰安會は一月十九日午後一時から九段下の軍人會館で開催された。第三日曜で且つ好晴に恵まれたので定刻には來會の店員並びに家族連によつて一階から三階まで超満員の盛況、君が代の合唱に次いで小澤寛氏の開會の挨拶、二宮海軍中將の「昨秋米國より歸りて」と題する有益な講演、ついでニュース漫才、小品舞踊講演、落語等數番の餘興があり、最後に最近アメリカの講演旅行から歸朝した鶴

見輔輔氏が「世界と日本」の題下に氏一流の雄辯を揮つて聴衆に多大の感動を興へ午後五時頃閉會、一同は手に手にお土産物を携へ薄暮解散したが近來稀に見る盛會であつた。

箏曲の樂譜にも著作權を認む

箏曲家伊藤淳子さん並びに音楽著作家井上才藏を相手取つて提起された箏曲樂譜の「著作權不存確認及び登録抹消」請求の訴訟事件の上告審は、箏曲界の注目裡に昨秋來大審院神谷裁判長係で審理中であつたが、一月二十四日午前上告棄却の言渡しがあり、被告の勝訴となり伊藤、井上兩氏の著作權が確認される結果となつた。

問題となつた樂譜は「大内山」「夏」「冬」「秋」の各曲外十一曲で、これを伊藤淳子さんが明治四十二年來原作者の各檢校から樂譜としての出版を許され發行して來てゐたが、原告渡邊氏は高橋市作氏が各檢校の相續人から作曲そのものを譲受けたのを更に譲渡されたから自分の方に所有權があると主張し訴訟となつたものである。大審院に於ては「著作權法

第二十二條には特異の技術を用ひて著作物を複製したる時はその複製物に著作權を認めてゐる、また同第十四條には編纂物にも著作權を認め、更に同第二十三條には繪畫を圖案化したものにも著作權を認めてゐるから音楽の作譜に著作權の存せぬわけがない」との伊藤氏側の主張を認めたもので、著作權の存在を明確ならしめた事例として注目せられてゐる。

十一月

國定教科書の大改訂

文部省では本年四月の新學年から使用せしめる尋常二年算術書、三年修身書、四年讀本(卷七)、高等小學校一年歴史、二年國畫の五教科書の改訂を完了し、印刷會社に廻附したが何分にも全國多數の小學兒童の用に供するの各印刷會社で晝夜兼行右改訂圖書の製作に精進してゐる。今回改訂の主要點は、舊來教員の教授上の目的を主として編輯されたものを兒童の興味本位へと注目の教育をすて啓蒙教育主義になほしたもので、尋常二年には從來算術書がなかつたのを本年

名古屋新本協会の誕生

名古屋市内新本業者唯一の團體であつた中京書籍雜誌商組合は、昭和七年名古屋業界未曾有の大紛糾により組合員内に分裂を來たして以來兎角シツクリと行かず萎微振はない状態に陥つたまゝなので一月二十六日開催の第五回定時總會に於

て解散と決定したが、大勢は純新本業者のみによる親睦機關結成の必要を認めてゐるので、前幹事一同が起つて新團體結成の計劃を進め連名發起人となつて新規約草案を發表し同志を募り、二月四日市内富澤町芳蘭亭に創立總會を開催、創立の新團體を「名古屋新本協会」と命名、規約其他を決定、各役員を選任を行ひ、こゝに純新本業者の親睦と營業上の研究を目的とする新團體の誕生を見た。

排日教科書使用事件

駐日支那人の學校で堂々と兒童に排日思想を注ぎ込んでゐたといふ排日教科書使用事件は、警視廳外事課の活動によつて東京で或る一校が摘發されたがその後取調べによつて東京のほか横濱及び大阪の支那人學校が各一校、神戸で二校、長崎で一校、いづれも摘發されるに至つた。それ等の學校は昭和七年頃から支那本國から競争問題などを巧みに取扱つた排日教科書を取寄せ六校約六百人の支那兒童に公然と排日教育を行つてゐたものであることが判明、内務省警保局では直に關係府縣當局へこれが詳細取調べ方を通牒したが、日支國際關係の整調親善の叫ばれてゐる際斯うした排日教育の行は

れてゐるのをおもしろからずとし二月十七日内務省に同省並びに外務省、文部省檢事局思想部その他の關係當局者の會議を開き對策を議したが、協議の結果成るべく穩便解決の方針を執ることとし取敢へず六校に對し教科書の改訂と教育方針の変更とを嚴命した。

中教協會組織改善案の決定

中等教科書協會では昭和八年十月教科書制度研究委員を設け宣傳、統制(種類)定價及び協會組織等に關し研究をつゞけること二年餘、昭和十年四月前三事項に關する研究を完了して具體案を製作委員の承認を得たが、協會組織の改善に就いては更に委員を設けて(一)法人組織として改善を圖る方法(二)現状の儘改善を圖る方法の二部に分ち、主査各三名をして討議研究せしめること九回に及んだが、法人組織とする案は暫くこれを保留とし後者即ち現状のままに於ての改善方法につき研究、主査五名をして原案を作成せしめ幹事會を経て二月十九日開會の常集會に提案その承認を得た。同原案は宣傳、生産、販賣の三部會を設けそれぞ

れ組織的に調査研究を行はしめることを規定したもので、これで昭和八年以來の懸案も大體一段落ついた譯である。部會の規定は左の通りである。

中等教科書協會

- 第一條 本會に宣傳、生産、販賣の三部會を設く
- 第二條 各部會は部會の任務を遂行すると共に本會全體の統制に留意し且つ會員相互の權益を擁護するものとす
- 第三條 各部會の部員は會長の指名による其の員數は左の如し
 - (一) 宣傳部會 四十名(内支部十名)
 - (二) 生産部會 二十名(内支部五名)
 - (三) 販賣部會 二十名(内支部五名)
- 第四條 各部會部員の任期は一箇年とする
- 第五條 各部會は部員の互選により部長及副部長一名を定む
- 第六條 部長は部會を統理し會議の議長となり副部長は部長を輔佐し部長事故ある時は之に代る
- 第七條 各部會は隔月一回定時部會を開く
- 但し必要に應じ臨時部會を開く事を得
- 第八條 部會の決議は部員半數以上出席し其過半數を以て之を決す

第九條 各部員の任務次の如し

- (一) 宣傳部會ハ左ノ事項ニツキ調査研究ス
- (1) 宣傳方法ノ現状
- (2) 宣傳協約ノ實行ニ關スル件
- (3) 宣傳方法ノ合理化ニ關スル件
- (4) 懲戒委員會規程ノ實行ニ關スル件
- (5) 見本及教授參考書ノ頒布ニ關スル件
- (6) 共同教科書目錄ノ調製頒布ニ關スル件
- (7) 會員外ノ宣傳ニ關スル件
- (8) 其他宣傳ニ關シ必要ナル事項
- (二) 生産部會ハ左ノ事項ニツキ調査研究ス
- (1) 定價ノ現状
- (2) 現行定價標準ノ適否ニ關スル件
- (3) 生産標準規程ノ實行ニ關スル件
- (4) 生産標準規程ノ改訂ニ關スル件
- (5) 印刷ニ關スル件
- (6) 用紙印刷製本等仕入ニ關スル件
- (7) 見本及教授參考書ノ生産ニ關スル件
- (8) 其他生産ニ關シ必要ナル事項
- (三) 販賣部會ハ左ノ事項ニツキ調査研究ス

- (1) 販賣ノ現状
- (2) 取引規定ニ關スル件
- (3) 返品ニ關スル件
- (4) 見本及古本ニ關スル件
- (5) 地方販賣協會ニ關スル件
- (6) 取次業者ニ關スル件
- (7) 其他販賣ニ關シ必要ナル事項

チエンバレン氏の英譯「古事記」に日本青年畫家挿繪を描く

昨年米國から三高教授に赴任したパーキン氏の骨折で日本の一青年畫家の繪を挿繪に、英譯「古事記」の豪華版がアメリカで出版されることになった。この青年畫家は昭和八年の帝展に「盲目物語繪卷」で初入選の藤田安正氏である。氏は曾てラフカディオ・ハーンの「怪談」に挿繪を描いてアメリカに紹介され、その名を知つてゐたパーキン氏が來朝、藤田氏をわざと下谷區下根岸の橋居に訪ねて二人の交友が始まつたが、パーキン氏は藤田氏がかねて神國日本の誇り「古事記」の挿繪を描きたい希望をもつてゐることを知り、自分のことのやうに熱心に米國出版會社に交渉、最近漸くフオートン・ミフリン會社から承諾の返事があつた。その條件は日本通だつた故チエン

ンバレン氏が二十數年前英譯した「古事記」に藤田氏の挿繪を入れて豪華版として出したといふのである。日本古典を世界に紹介する絶好の機會であると思氣込んだ藤田氏は、古事記研究の權威次田潤氏について神代の風俗考證に就き教へを乞ひ向ふ半年間に三十枚の挿繪を完成する豫定である。

目黒前會長の表彰式

大正十三年一月前會長三樹三平氏の後を承けて東京出版協會會長に就任して以來在任十二ヶ年會長の名を恣にした目黒甚七氏は、後進に道を拓くため全會員より惜まれつゝ一月を以て會長の任を辭したので、同協會の彰功委員會ではその彰功方法に就いて研究中であつたが、輝く氏の功績を表彰するため二月二十七日午後五時半から丸の内永樂俱樂部で表彰式を舉行した。當日は二・二六事件突發の翌日で市民一同不安に驅られてゐる折柄であつたが出席者は協議員、協會員百餘名、先づ神田伯龍師の講談「鉢の木」があり表彰式に移り江草會長の挨拶、感謝狀朗讀後純銀製三ツ組盃を贈呈、式を閉ち續いて懇親宴に移りデザートコースに入るや目黒前會長の町重な謝辭があり

江草會長の發辭にて目黒前會長の萬歳を三唱、八時過ぎ盛會裡に散會した。

三月

出版協會の機關新聞發行に就いての諮問書

東京出版協會では圖書宣傳の機關紙發行に就いて左の諸項目を列擧した諮問書を各會員に發して意見を徴した。

- (第一) 諮問書
- (イ) 宣傳機關紙を作ることの可否
- (ロ) 作るか、作らないか
- (ハ) 讀者本位か、同業本位か、二者兼併か
- (ニ) 新聞體か、雜誌型か
- (ホ) 發行回数は月何回か(月刊、旬刊、週刊、日刊その他)
- (ヘ) 紙名(誌名)はどんなのがよいか
- (ヘ) 無代紙か、有料紙か
- (ニ) どこから發行するか
- (イ) 出版協會でやるか
- (ロ) 別の組織でやるか
- (ハ) 經營資金はどうするか(A會員の賦課金か、B株式組織か)

- (ニ) 經營者はどんな人か
- (ホ) 凡そどの位の資金が入用か
- (第三) 購讀に關する研究
- (イ) 定價一部いくらか(A讀者にはB同業者には)
- (ロ) 廣告撤布紙として書店には一部いくらで賣るか
- (ハ) 寄贈紙の送り先範圍
- (ニ) 發行部數の基礎計算
- (第四) 配給の方法
- (イ) 大取次の手を通じる方法
- (ロ) 本社より地方書店へ直送する方法
- (ハ) 他の方法例へば新聞取次店に配達させる様な方法もある
- (ニ) 地方書店より讀者への配布方法
- (イ) 他團體との聯絡に就いて
- (第五) 大取次店との聯絡
- (イ) 雜誌協會との聯絡
- (ロ) 全國聯合會(又は地方協會等)との聯絡
- (ホ) 地方書店との聯絡
- (第六) 記事、廣告面に關する研究
- (イ) 大體どんな傾向の新聞を作るか
- (ロ) 記事の種類
- (ハ) 仲介事業はどんなことがあるか
- (ニ) 雜誌の廣告は載せるか

聖徳太子の「憲法」獨逸語に翻譯さる

西洋諸國に於ける東洋殊に我國の研究が旺盛を極めてゐる折柄、日本帝國の憲法は千三百餘年前すでに確乎たる成文の憲法により確保されてゐたといふ神國日本の眞相を廣く世界各國に紹介するため阪の日本文學研究の第一人者大阪外國語學校教授ヘルマン・ポーター博士は、過去三ヶ年かゝつて聖徳太子の憲法十七條をドイツ語に逐條解釋し近く同校山本教授の斡旋で外務省國際文化事業協會の援助のもとに出版され世界に紹介されることになつた。ポーター博士は二十年前歐洲各國が東洋研究に興味をもちはじめたころ既に支那の四書五經を翻譯したフランクフルト大學のウィルヘルム博士の高弟で歐洲大戰前ドイツが青島に獨支大學を設立した時ウィルヘルム博士と共に渡支、支那文化の研究に著手し大正十一年四月大阪外語の創立と同時に迎へられ同校教授に著任ドイツ語教授の傍ら學生のために山本有三氏、菊池寛氏等の現代戯曲を翻譯、日本文學に興味をもちはじめ

たが數年前から我國の古典文學の研究に轉じ聖德太子の「憲法」の獨譯解説を企圖し三ヶ年間の努力精進の結果これが完成を見たものである。

陸上日本を各國へ紹介の英文機關紙

陸上日本の評價は近年その實力向上著しく各國競技會の注目は日に加はりつゝあり、各國からの問合せ等も頻々とあるので、日本陸上競技聯盟ではこれ等の問合せに答へると共に廣く各國に日本の現況を傳へる英文の月刊機關紙「ニッポン・アスレチックス」を發行し各國陸上競技團體並びに主要新聞社等に送付することとなり三月からその第一號の作成にとりかゝることになつた。この雜誌は陸聯内情報委員が資料を蒐集しこれを明大教授松本滿藏氏が英文に翻譯することになつてゐる。

アイヌ教化の父パチエラ翁の『アイヌ語辭典』完成

アイヌ教化で世界的に有名な英人神學博士勳三等ジョン・パチエラ翁が、明治十年秋から手をそめ畢生の事業として爾來血の滲むやうな努力をつゞけて來た

「アイヌ語英譯和譯辭典」が星雲賞に六十年、翁八十四歳の今日漸くにして完成した。この間に於ける翁の努力たるや全く想像に餘りあるもので耳は聳し眼はかすんだこゝろ三年なほ老軀に鞭ち、タイプライターとメモを相手に闘つた超人的勞力こそ信仰ある者にして始めて可能な業である。翁がアイヌ教化に神からの使命を感じ北海道に渡つたのは明治十年であつた。二十代の若い信仰の使徒パチエラ

翁は何よりも先づ言語の障壁を取除かねばならぬと決心し一つ一つ覚え込むアイヌ語を後生大事に記録した。二十代、三十代、四十代、五十代——も過ぎて何時しか八十代に足を踏み込んだ時翁のメモには無慮一萬のアイヌ語が感激に満ちて躍つてゐた。最後の補填や整理に寢食を忘れて書齋に閉ぢこもり遂にこの草稿が完成したものである。辭典は日本語、英語の二つで實に正確そのものであるが經濟的に惠まれてゐない翁にはこれを自費出版に附するほどの餘力もなかつた出版の目算もついてゐないといふことである。

京都の昭和圖書館休館となる

三月十三日開催の京都書籍雜誌組合の本年度第一回評議員會では、同組合の直

屬經營となつてゐる昭和圖書館の存廢問題に當りも廢止論、繼續論が續出し兩説の對峙を見たが、維持經費捻出困難から一先づ休館するのが至當であるとの結論に達し、歴史ある同圖書館は結局昭和十四年まで一時休館することに決定された。

日本雜誌協會前正副會長表彰式

日本雜誌協會前會長増田義一、同代理小倉秀道、副會長佐藤義亮、同代理中根駒十郎の四氏に對する感謝及び彰功の宴が三月十六日午後六時から芝公園内紅葉館で開催された。出席者は正副會長以下二十名で會長代理奈良氏前正副會長兩氏に對する感謝狀を朗讀、記念品を贈呈し、次いで前正副會長代理小倉、中根の兩氏に表彰狀並びに別紙目録金一封を贈呈、小倉後懇親會に移り奈良氏の謝辭、増田小倉、中根三氏の答辭大野氏の挨拶があり紅葉館獨特の手踊り等に興じ十時頃散會した。

坂本前中教協會長の彰功慰安會

大正十五年就任以來本春辭任するまで

前後十年の長きに亘つて中等教科書協會の會長として協會發展の爲めに力を盡し顯著な功績を協會史に残した富山房社長坂本嘉治馬氏に對する彰功慰安晩餐會が三月二十七日午後五時から丸の内東京會館で開催された。五時から餘興として圓生の落語、太平洋の奇術並びに竹本朝太夫の義太夫等あり、式に移り森下會長感謝狀を朗讀し記念品目録を贈呈、小憩後晩餐會に移りデザートコースに入るや森下會長起つて坂本前會長在任中の功績を讃へ、これに對し坂本氏の謝辭があり九時過ぎ散會したが當日の出席者は約六十名に上り非常な盛會であつた。

四月

文部省で標準教科書を編纂す

廣田内閣の重要な政綱の一つにあげられ、文部省でもそのために三十萬圓の豫算を計上してゐる「國體明徴」の徹底化を計るにはまづこれを幼少年の頭腦にしみ込ませるのが急務であるといふので小學校の國定教科書編輯方針も今後この

點に力を注ぐことになつてゐるが、文部省では、更にこれを思想發達期中の中學生の頭腦に深く印象せしめることの緊要であることに注目し、中等程度各學校の教科書のうち國體明徴、中等密接な關係ある國史、修身、公民(舊法制經濟)の三科目に一層明確な國體觀念を織り込んでこれを徹底化を計る方針を樹てた。國定教科書國史を使用してゐる師範學校を除くの外は、現に中學、高女、實業學校何れも民間會社發行の教科書を使用してゐる關係から、これをどういふ風に處置するかは實際問題として相當難問題視されてゐるので、これ等三科目の教科書に限り文部省で編纂し國定としてはといふ説もあつたが、結局右三科目の標準教科書を文部省で編纂して改正の標準を示し文部省編纂のもの、民間編纂のものとの何れなりと自由に使用せしめるといふ案を中心として名案考究中である。尙實業學校では歴史が隨意科となつてゐる關係から、國史教科書を使用してゐるのは一部の商業學校だけであり、しかも國史授業に教科書を使用せしめないで東洋史や西洋史教授に教科書を使用せしめてゐる學校の方が多く、まるで國體明徴と背合せの觀を呈してゐるので新に教授要

目を改正して歴史と關係の深い地理と共に國史を必修科目とし、また、國史の授業は低學年よりも高學年に課する方が最も効果的なので現在低學年が教へてゐる高女の國史を高女令の改正をまつて高學年に改める方針であると。

青年聯合會本部の教科書編纂

大日本青年聯合會本部では、今や加盟團員が三百萬を突破し從來のやうな幹部教育のみでは到底十分の訓練を施し得ない状態となつたので、從來の講習會開催、幹部教育と共に文書による一般團員教育に乗出すことに決定、その具體的方策として青年學校教科書を作成する事となつた。右教科書は全五巻に分け何れも青年聯合會本部に於て編纂、今後は青年團にも右テキストを使用せしめ廣く公民教育と共に實務的な教育を施す事になつた。

豫約刊行物の一時拂込みに豫約出版法の適用

最近出版界に於て豫約刊行物の申込金不要のものに對しても一時拂を承認したるときは豫約出版法規が適用されるにも拘らず所定の手續を執らない發行元が多

いのに鑑み、取締官省では各發行元にこれが勵行を通告するところがあつた。これは豫約出版法第一條に代金の全部又は一部を前收して文書圖書の頒布を豫約する出版に對しては出版法適用の外尙豫約出版法規が適用されることになつてゐるがためである。

櫻の文獻展覽會

燎亂の春に魁けて「櫻の博士」で通つてゐる東大名譽教授三好學博士は、四月三、四の二日間上野の科學博物館で開かれる日本植物學會總會で過去三十四年間にわたる苦心の結晶『櫻に關する文獻と資料について』といふ季節向きの研究を發表、同時に三日から一週間、同博物館内に櫻の展覽會を開き博士の苦心蒐集した櫻に關する興味ある文獻數百點を陳列して一般に公開した。博士が荒川、小金井、吉野、櫻川その他の櫻の研究に指を染め文獻の蒐集を始めたのは明治三十六年でそれから今日まで三十四年間に集めた文獻資料は實に八百數十點に達し、單に植物學上の貴重な研究資料としてばかりでなく昔から國華としての櫻に特殊の讚美と愛護を注いで来た我國民性考證の資料としても得難いもののみであつた。

第二回出版文化展覽會

新聞之新聞社主催、文部省後援の第二回出版文化展覽會は、四月六日から九日まで第一會場神田神保町東京堂ギヤラリ1、第二會場富山房ホールで開催された。操風界權威の個人出品をはじめ全國新聞社、王子製紙並びに各出版元から門外不出の稀書珍籍が陳列せられ、名實共に備つた綜合デパートナリズム展を現出、極めて有益な催であつた。

海外廣告資料展覽會

日本廣告俱樂部では昨春來外務省通商局を通じて英、米、佛、伊、獨、蘇聯、瑞西、チエツコ等から廣告資料主としてポスター、カード、ショウカード、小型看板、新聞、雜誌等を蒐集してゐたが先き頃その第一回蒐集を完了したので、これを機會にそれ等の蒐集の資料を陳列、海外廣告資料展覽會を四月十八日から二十二日まで東京堂小賣部階上ギヤラリで開催した。

勸工場式書籍の陳列

新宿の紀伊國屋書店に於ては最近店の陳列棚を出版社別にして書籍を陳列し坪

代を各出版元から徴收するといふ企てを實行してゐるが、一般讀者に於ては第一に出版所の名前に注意を注ぐものか或は書籍自體にか？兎に角初めて出現した勸工場式書籍の陳列がどこまで歓迎せられるか？興味ある問題である。

五月

吉田絃二郎氏の「感想」を剽竊

文壇の特異な存在吉田絃二郎氏の感想隨筆を過去十數年に亘つて剽竊し毎月諸雜誌に自分の名で發表するのみでなく堂々單行本としても數冊發行してゐる者があることが知れ、而もこの前代未聞の奇怪な剽竊行為が某女子専門學校並びに某高女兩校の教頭の重職にあり倫理を擔當してゐる宗教家朝日融溪氏と列するに至つて關係方面の人々を呆然たらしめてゐる。この常識を越脱した珍しい剽竊事件は雜誌『旅と傳説』の四月號に寄稿してゐる朝日氏の隨筆が吉田絃二郎氏の眼にとまり、その隨筆が大正十一年作の吉田氏の隨筆そのまゝであることが發見され

たことから曝露したもので、調査するに従つて出るわ出るわ！朝日氏が昨年からは今年にかけて著した單行本『人生の道』『真理を生かすもの』の二冊の全ページ残らず吉田氏の著書からそつくり引抜いて集めたものであるとのことで、著作権問題の喧しい折柄同權擁護の上からも許すべからずとして問題視されてゐる。

標準教科書案につき文部省當局陳情

前項(四月期)に記したやうに文部省では國體明確徹底のため修身、國史、公民の三科目の標準教科書を製作する方針を樹てたので、中教協會に於ては五月四日午前十時から教科書制度研究委員會を開催しこれが對策を協議し松本副會長以下五委員は同日午後文部省に出頭芝田圖書局長、谷原發行課長、藤岡編輯課長等と會見「御趣旨の明示さへ得らるれば民間の發行業者の手によつても同じ成果の得らるゝ教科書の製作が出来る」と信ずる故民間業者の營業を脅すが如きことは成るべく避けて頂きたい旨陳情、これに對し「當局としては既に豫算を計上して議會へ提案の方針ではあるが出来るだけ期待に添ふ様考慮する」との答を得て引

上げた。

猥褻刊行物の禁止條約

第三回國際聯盟總會に於て議決された猥褻刊行物の流布及び取引の禁止に關する條約は、樞密院の御諮詢を経て御裁可となり五月十六日の官報を以つて同條約を御批准あらせられた旨公布された。

戰爭物語の取締

國際時局に刺戟されて將來の戰爭を想像した物語が雜誌の讀物或は單行本となつて大衆の興味をそそつてゐるが、それ等の物語を面白く讀ませるために往々にして他國の感情を害するやうな記述の少なくなく某海軍豫備少佐の執筆した『日英必戰論』といふ書籍が日濠通商關係にまで悪影響を與へた等の事實があり、有田外相はこの種戰爭物語の出版の取締りを當局に要請し、外務省としても國際親善を害するがごとき無責任なる書籍の出ないやう相當の處置を講ずる事になつた。

『日英必戰論』なる書物は昨年ロンドンで英譯出版されたところ、その中にある「若し日英が戦端を開けば日本は容易に濠洲を占領することが出来る」といふ文句が痛く濠洲政府に恐怖を抱かせるに至

つたもので、それ迄レヴィサム外相等が來朝して日本に信頼を寄せてゐた濠洲はその様な考へを日本が持つてゐるならば今後必要の物資は日本から買はないで英本國から買ふと言ひ出したのに對し當局は其の釋明につき非常に苦勞したとのことで、ために、徒らに他國の神經をたかぶらせる様な戰爭想像物語の出版には今後嚴重な取締りの手がのびることゝなつたわけである。

米國で「現代日本詩歌集」出版

ワシントンの議會圖書館日本部主任として米國人の日本研究に良き指導者となつてゐる坂西しほさんが、日本文學の珠玉たる和歌を英譯、今度「現代日本詩歌集叢書」としてボストンのマーシャル・ジョンズ書肆から出版するといふ快ニュースが我が短歌界を喜ばせてゐる。坂西さんは一九二二年渡米ミシガン大學を出てドクタア・オヴ・フィロソフィの學位を得た人、まづ石川啄木の『一握の砂』を英譯その第一巻として出版し、このほど第二巻として與謝野晶子さんの歌集も翻譯出版した。つづいてアララギ派の故鳥木赤彦、伊藤左千夫、北原白秋、齋藤

茂吉諸氏の歌集も翻譯、全六巻とする由である。

六月

ベル又會議突如無期延期となる

國際著作權保護について第三回ベルヌ條約改訂會議が九月七日から四週間ブリュッセル市で開かれることになつて居り我國から赤木前内務次官、中里書記官、小林事務官、來栖駐白大使その他司法商工各省の帝國代表八名が出席することになつてゐたが、六月三日突如ベルギー政府から外務省を通じて内務省宛に右會議無期延期方を通告して來た。内務省としては例のブラーゲ旋風から我國國際文化を救はうと意氣込んでゐる際なのでその延期理由を調べると去る四月パリで開かれた民間専門家會議で「國際會議は紛糾を招くのみで利なし」と建言したのに基づき、ベルギー政府が各國に照會なしに獨斷で延期を決定したことが判明したので内務省でも直ちにベルギー政府の意志を確め、場合によつては會議脱退の肚を決

め歐米中心主義打破と將來日本委員の参加した統一準備會開催の要求を含めた嚴重な抗議を申し込むことになつた。日本は現在ベルヌ條約加盟國であると同時に米國との間には日米著作權條約の締結があり兩國間の翻譯の自由を確保してゐるが、歐洲諸國のみから成る委員會の一方的意見で兩條約が統一される場合には日米條約は無効となりブラーゲ問題よりも更に大きな波瀾が起るので、とりあへず日本全權の出發を延期し慎重な態度をもつて成行きを注目してゐるが、日本當局はこの不意討に憤激、ベルギーが會議主催國になることを忌避することになる模様である。

小、中、高専學校の教科書を再検討

學制改革とともに文教一新の基幹をなす教學刷新に關しては、特別議會に於て經費豫算の協賛を得たので文部省ではこれが實行に著手することとなり各局でそれぞれ準備を進め既に國體の本義に關する書籍の發行については委員を委嘱、編纂に著手したが、教學の基調をなす小學校、中等學校、高等専門學校の全教科書

にわたる再審査、中等學校の國史、修身公民科教科書の編纂、教授要目の改正などについてもそれぞれ調査並びに審議機關を設けて國體明徴を主眼とする大改正に着手することとなり、一方近く開かれる教學刷新評議會の答申についてもその採るべきものは着々實行に移し、これによつて正しい國體觀念と確固たる國民精神を涵養せんとしてゐること前記(四月期参照)の如くであるが、その施設の概要は次の通りである。

教科書の再審査

小學校から高等専門學校に至る各種學校の全教科書に亘つて主として國體明徴の観点から再検討を行ひ、これが審査は七十五名の學者權威者に委嘱し、この内五名の専任囑託を置いて審査の結果改正意見などを整理綜合してこれを教科書審査會(名稱未定)に附する。教科書審査會は關係各省官吏、學者、教科書著者、實際教育家などの權威者四十名を以つて構成、審査は大體十二兩年度で完了する豫定であるが、中等學校並びに高等専門學校の教科書は現在七千種、一萬五千冊に上る尨大なものでこれが再検討は可なりの大努

力である。

中等學校の國史、修身、公民科教科書の編纂

各主任監督官ならびに編纂囑託を置いて國史、修身、公民科のいはゆる標準教科書を編纂し、國體明徴の徹底を圖らんとするもので、これには權威者二十名からなる教科書調査會を設けて審議する。従來學務部長會議、學校長會議などに於てしばしば中等學校の教科書國定の要望が現はれて居り、この標準教科書が完成すれば現在の各種檢定教科書は自然に整理されて教科書の統一が實現するわけである。

教授要目の改正

中、小學校、高等學校及び大學豫科などに於ける修身、歴史、公民科、國語、漢文、地理などの教授要目を國體明徴の主旨に副ふやうに改正するもので各關係監督官、圖書監督官、學校教授、教諭をもつて調査會を設け各教授要目の再検討に着手する。

東北讀本の編纂

東北地方の特殊事情に鑑み産業振興と

自力更生の基礎知識と精神力を養ふため同地方の實際に即した地理、農業、家内工業などを主とする高等小學校の副讀本を編纂する。これが監修には東北六縣の學務部長、農學校長、農事試験場長などに委嘱して十分教材を取入れ編纂委員にも同地方の權威者を加へる管で、この讀物は遅くとも明年九月から使用出来るやう準備を進めてゐる。

外務省から公刊の『大日本外交文書』

領國の夢醒めて七十年、伸び行く日本の姿をそのままに寫した門外不出の外交文書『大日本外交文書』の公刊は外務省多年の懸案でその淵源は古く明治初年にまでも遡ることの出来るほどであるが、その編纂刊行が具體化し六月二十日を期し第一巻が公刊され、以後續々と公刊されることとなつた。外務省では將來の外交政策に資する爲め外交文書の集大成の必要を痛感し、昭和八年調査部を設置して以來特に一課を設けて蒐集編纂に當らせてゐたが、昨年度豫算に外交史料蒐集費として一萬圓を獲得、永田第一課長以下全課員が非常な努力を拂つて整理に掛つた結果この程漸く第一巻として明治元

年の分が公刊の運びに至つたものである。第一巻は二冊に分たれ各千頁に垂んとする尨大なもので、條約、往復文書其他の記録を細大洩らさず記載して我が黎明期の外交を剩すところなく描き出してゐる。第一巻に引續き明治二年の第二巻に、同三年の第三巻といふ風に一年分宛を分けて刊行の計劃である。歐米諸國では早くから此種のもので政府の手で編輯刊行してゐるが我國では今回の舉が初めてで勿論外務省はじまつて以來の大規模な編纂事業で、明治年間分だけの刊行にでも爾後十五年を要することとなる。しかし東西文化交流の跡を歴然と遺す事は單に外交政策の上のみでなく極めて重大な文化的意義を有するものとして外務當局では永久的にこの事業を續ける意嚮で、全部完成の暁には難しい我外交の金字塔として渴仰されるものと期待されてゐる。

業界機構改革座談會

現下の非常時に當り業界に山積する重要問題に對しこれが正しい解決を誤らざる様その指針となすべく出版タイムズ社及び出版研究所の兩社が協力「業界革新パンフレット」の發行を企てたが、その

第三輯「業界機構の改革問題」の資料を得べく六月二十三日午後二時から麹町區九段下の軍人會館に於て業界各團體代表の座談會を開催した。全國聯合會長目黒氏を始め出版協會江草、大橋、松島の正副會長、森下中教會長、大野鐵販組長、岸東書副組長、塚越小賣組長他各方面の有力者出席、帆刈氏進行係の下に議題たる「東京出版協會の獨立強化案を如何に見るか」外數項に亘り各自自由に意見の發表をなし或は熱心にこれを傾聴し午後六時頃意義深い座談會を終り別室で晚餐を共にして散會した。

東京書籍株式會社々屋の落成式

東京書籍株式會社は豫て王子區堀船町一ノ八五七に新社屋を建築中であつたが、この程竣工したので六月二十五日午前十一時から午後四時迄朝野の名士並に一府十九縣の特約販賣所代表者を招待して盛大な新築披露を舉行了。當日は一般披露に先立つて午前八時から天照皇太神を祀つた構内神社の遷座祭を、同九時から落成式典を石川社長以下各關係者參列の下に嚴肅に舉行、同十一時より一般の披露に移つた。この日同社では王子驛

と同社間に十數臺の自動車を頻繁に往來せしめて來賓の送迎をなし一同は東書文庫、印刷工場、製本工場、書籍倉庫、事務所の順で社内を參觀、會社から石川社長以下渡邊、目黒、榊原、三樹、石川、川合の各重役並びに社員總出で歡待にとめた。當日の主な參觀者は田中前文相夫妻、芝田圖書局長、藤原銀次郎、大橋新太郎、大川平三郎、池田前印刷局長、宮田光雄、濱田國松の諸氏を始め業界の名士多數であつた。同新社屋は昭和九年五月起工、十一月竣工したもので、建坪二千四百九十坪、事務所、食堂、製版工場、印刷工場、製本工場、圖書倉庫、材料倉庫等に分類、就中工場倉庫の建築は獨逸ユンケル航空會社の新案なるダイヤモンド・トラステ型で我國には餘り例を見ない最新式の工場であり、社屋前に建築された東書文庫は東西古今内外に亘る小學教科書及び參考文獻を集めた貴重な圖書館である。

東京出版協會の強化案

東京出版協會を強化して業界機構の根本的改革を爲め數句に亘り鋭意これが具體策を研究中であつた同協會の規約修正は、六月二十八日の委員會に於て左の如き大綱の下に規約を修正することに案を決定、二十九日鈴木委員長から發表された。

- 一、本協會員發行の圖書は本協會の承認したる組合の組合員に限り販賣せしむ
- 二、本協會の承認したる取次業者の協會又は組合の傘下に在る取次業者に限り取次販賣を爲さしむ
- 三、各地組合の組合員は本協會員發行の圖書に非ざれば販賣を爲さず
- 四、圖書は定價を以て販賣す但し不正競争に亘らず且販賣者の利益を害せざる範圍に於て期間を限り特賣の方法を認む

これによると出版協會員發行の圖書は同協會の承認したる組合の組合員に非ざれば販賣し得ず、また各地組合員は同協會發行の圖書に非ざれば販賣を爲さずとの條項を各組合の規約中に設けさせることになる結果、こゝに出版協會は従来の俱樂部的存在を脱して業界に於ける中心的な團體となり、これに伴つて必然的に現業界機構に根本的改革が齎されるに至るであらうと見られてゐる。

國定教科書の値下げ

現在全國の小學校、高等小學校で使用

してゐる文部省編纂の國定教科書は、兒童用教師用を合して二十六種類、年八千五百萬部の發行を見て居り總額約八百萬圓に及ぶが、文部省では最近販賣組織の簡易化、農村の疲弊等に鑑みかねて國定教科書定價引下げを計劃慎重に研究中であつたが、漸くその具體案が決定し日本書籍、東京書籍、大阪書籍の三發行會社とも打合せを終へたので、明年四月以降の分に實行すべき新定價を今月末の官報を以つて發表することとなつた。新定價は諸種の事情から現定價維持の尋常科用國語讀本(刷卷一、卷二の二種を除いては約二割強の値下げを見るところの國史から一割弱の修身まで各科目毎に多少値下げ率を異にするが、平均一割五分の値下げとなるのでこれによる國民の負擔軽減は年約百二十萬圓となるわけである。尙國定教科書の値下げと同時に准國定教科書ともいふべき唱歌、裁縫、家事、農業、英語の各教科書もそれぞれ一割程度の値下げとなることになつてゐる。

大阪出版組合の先人慰靈祭

大阪出版組合では同組合二十周年記念事業の一つとして計劃中であつた享保以來の大阪出版物の目錄の完成を見たので

それを先覺の靈前に供へ且つ先人の靈を慰める意味で六月一日午後四時から住吉神社内招魂社で盛大な先人慰靈祭を舉行了。

友松圓諦氏著書に剽竊問題

竊には吉田絃二郎氏の隨筆感想文を剽竊し著書としてまで公けにしてゐた奇怪な剽竊事件が曝露して世人を呆れさせたが、こんどは逆に有名人が無名人の著作からの剽竊問題が持ち上つた。それは例の「眞理運動」を主宰する慶應大學講師友松圓諦氏の著作が自己の卒業論文の剽竊であるとして謝罪文の廣告を要求、場合によつてはこれを法律化しようとする一少壯學徒が現れたことに端を發するものでその経緯は下の如くである。昭和四年東大文學部印度哲學科出の學徒帝國少年團協會主事大島長三郎氏が、その卒業論文の一部を「四姓制度に關する一考察」の標題下に東大印哲の機關誌「宗教研究」五月號に載せたと、最近某宗教新聞から、同論文は友松圓諦氏の著書からの剽竊であるとの非難を受け驚いて友松氏の論文を調べて見ると、その大部分が昭和八年から昨年まで乞はるま

英國貴族の勞作『陸栗毛』

日露戰役の前年長崎の街で不圖古い木版刷りの『陸栗毛』を手にしたのが機縁で、爾來三十年間公務の餘暇を徳川時代の戯作研究にうち込んで來た老英國貴族が、最近漸く『陸栗毛』の下譯を完了、彪大なノオトと資料とを携へて歸國し悠々たる老後を英譯校註陸栗毛の著述と戯作研究に送るといふ——前英國大使館書記官ハロルド・パーレット卿が話題の主である。この英國貴族が『陸栗毛』の翻譯を思ひ立つたのは明治三十六七年頃のこと、その後大連に赴任、函館、大連、東京、大連と歐洲大戦迄の間暇さへあれば『陸栗毛』を座右にペンを握つてゐた。斯くして大正十二年卿が大使館に奉職する頃には下譯原稿が完了、若干の加筆訂正を加へさへすれば出版されるばかりになつてゐた。そこへ襲つて來た關東大震災にこれら全部を灰燼に歸せしめられ卿の落膽は一時その研究を全く抛棄せしめ

たほどであった。九年前公職を解かれて本國に歸つたが最近断然再起を決定し英國にあつては研究に不便なところから昨年秋來朝大使館内に起居しつゝ資料の蒐集と研究とに専念した結果、ほゞ蒐集を終つたのでこれらをはじめ徳川時代の戯作數百冊をトランクに詰めて六月下旬歸國することとなつたものである。

七月

國際著作權法改正案の諮問

無期延期となつた萬國著作權會議に對し我國としては場合によつては日、滿、支等の諸國だけで東亞著作權會議を結成する肚を決め、内務省の手で我國の態度を決めるべく六月下旬以來文藝家協會、日本放送協會、東京出版協會等關係の民間十三團體に著作權法改正案を諮問中のところ七月十四日その答申が全部まゝつたので、同省ではこれを綜合して二十日頃著作權審査會を招集、警保局の小林事務官がこの決定案を携へて歐洲に向ひ會議開催の場合にはこれに附議、萬國共

日本翻譯界の實狀を歐洲各國に想ふ

舊冬日本ペンクラブ、文藝家協會を主體とし作家、翻譯家、出版業者を以て組織された國際著作權協議會では、かねてベルヌ條約に對する翻譯權問題に就き協議を重ね、内務省の日本草案に對しても意見を開陳したが、同會ではそれと別箇に「我が國翻譯界の實狀」を述べたりフレットを作成、歐洲各國に想へることとなつた。その内容は
一、日本の翻譯は創作と同様の努力を必要とする
二、日本の翻譯書の多くは翻譯權の消滅した古典的なもので翻譯權料を必要とする近刊書少きこと
三、翻譯料の印税は百五十圓乃至三百圓で翻譯家出版者共に利益の少きこと
四、外國では翻譯されると原著が賣れなくなるのに日本では反對に高等、専門學校の教科書として原著の方が餘計に賣れること
五、従つて法外な翻譯料を支拂ふことは不可能だから外國文學を紹介することは困難となる

等で日本翻譯界は各國とは違つた特殊事情にあることを訴へたものである。

機構改善座談會

東京出版協會の業界機構改善問題に關する市内有力販賣業者の招待懇談會は七月十六日午後五時から上野精養軒で開催された。協會側からは正副組長以下規約委員、販賣者側からは塚越、岸、土屋、伊藤氏の諸氏を始め四十餘名出席、江草會長開會の挨拶と共に機構改善運動の大意を説明、更に鈴木委員長から改善工作の經過を詳細説明、販賣者側數氏の質問があり直ちに晚餐に移り、終つて兩者の懇談を行つたが、鈴木委員長は委曲を盡した説明によつて販賣者側も今回の運動の主旨を諒解したので敢て反對意見を唱ふる者もなく、一貫して希望が出たのみで和氣霽々裡に隔意なき懇談を遂げ九時半頃散會した。

文部省で自然科學研究の貴重論文を公刊

文部省では大正七年中橋文相時代から年々十五萬圓の自然科學研究獎勵金を支出して官民の學者研究者に分割交付してゐるが、それ等の貴重な研究成果は一々

論文として文部省に報告され放し、それ等の報告書は倉庫に積まれたままになつてゐる。現在では補助金も年額五萬圓に減されてゐる。しかしこの獎勵にあづかつた研究は百二十項目を超え、中には昨年の矢追秀武博士の「天然痘の治癒及豫防に就いて」といふ痘瘡の皮下注射、宇田新太郎博士の「超短波長電波の研究」田中館秀三氏の「三原山硫黄島等の活火山研究」等々世界的なものがあるので、文部省では近く委員會を設けて二千餘にのぼる論文を一舉印刷に附し、公刊、國內の各大學各圖書館に頒布、世界各國にも發送し、眞實の意味に於て學問を象牙の塔から巷へ出すこととなつたが、今後は年度毎に惜みなく公刊發表する豫定である。

帝國圖書株式會社設立

昭和十一年度から文部省が高等小學校の商業教科書を編纂することになつたので、従來同種類の教科書を發行してゐた同業者の出資によつて會社を作り各教科書の發行權の認可を申請すべく文明社、大正洋行、三鈴社、東京實業社が創立委員となり有力教科書發行元十數氏を糾合著々計劃を進めてゐるが、大體文部當局と

の諒解もついたので名稱を帝國圖書株式會社とし今後大に活躍する事になつた。

兵庫縣書籍協會結成

全國小賣書店の讀者に對する賣掛代金の固定額は尠くとも五六百萬圓に上ると言はれ、これは現下小賣店經營の痛として最近掛賣廢止、現金賣制の必要の聲が各方面に起り既に岡山に於ては義に縣組合が主體となつて管理組合を設立し販賣統制及び現金賣に因る不良未收整理を行つて好成绩を収め遂に本年の定時總會に於てこれを縣組合に合體したが、今回兵庫に於ても縣下の有力書店が發起人となつて現金販賣を目的とする兵庫縣書籍協會を設立することになり、神戸市實文館他九氏の發起人の名に於て趣意書及び規約草案を送附、縣下同業者の参加を求め近く創立總會を開くこととなつた。

八月

巴里で『日本叢書』を刊行

全世界の碩學を集めて國際聯盟内で構成されてゐる學藝協力國際委員會では、國民間の理解は精神文化の理解にはじま

るといふ建前から、昨年七月十八日ゼネ
グアの會合に於て、今日まであまり知ら
れてゐぬ日本文化の諸相を代表すべき諸
作品を英佛譯として刊行することを決議
し、「日本叢書」公刊の準備中であつたが
愈々その第一巻として「ハイカイ」(俳諧)
が出版され、外務、文部兩省その他關係
各方面へ送達して來た。これが實現には
同委員の姉崎正治博士の盡力が多く編纂
には主として在バリの學藝協會事務局の
佐藤醇造氏が當つた。第一巻には芭蕉、
其角、嵐雪、許六などの俳句百餘句がス
タニルベル、オーベルラン、松尾邦之助
兩氏の譯で収録され藤田嗣治畫伯の淡彩
畫が挿入されてゐる。第二巻として近く
明治時代の小説を上梓し、第三巻徳川時
代小説、第四巻現代の學術的著述、第五
巻日本古典中外國に未紹介の作品等々と
續々刊行される豫定である。

民族博物館建設の計劃

過般巴里の萬國博物館準備會から外務
省に明春の萬國博覽會を機會に巴里に世
界各國の民族研究資料を蒐めてこれを博
覽會記念として永久に保存するから「近
世史上特筆すべき躍進日本を紹介する資
料をお送り願ひたい」と懇請して來たこ

とから、我國にもこの種の博物館建設の
必要を痛感、巴里へ日本民族を語る種々
の雛形を送る一方、俄に東京に日本民族
博物館の建設を計劃することになり八月
五日午後零時半から明治生命ビル内國際
文化振興會でこの打合せを開いた。外務
省から柳澤健氏、文部省から石丸學藝課
長、文學博士白鳥庫吉氏、濠澤秀雄氏、
岡部長景子など集まり協議の結果、東京
郊外の適當な場所にオーブン・エヤの
大民族博物館を建設し、園内には日本文
化の發生當時の天地坤元宮造りから佛教
傳來によつて受け續いだ大陸の文化七堂
伽藍の模型から天平、白鳳、桃山、鎌倉
各時代の寢殿造りや農家屋敷武家屋敷等
を造つてこれを陳列場とし、これに日本
民族を縱横に語る冠婚葬祭農漁具等あら
ゆる民族文化史資料を蒐集、すでに京都
の某實業家から約三千點の民族的、土俗
的な衣食住の資料寄附の申込みがあり、
これを皇紀二千六百年祭祝典準備事務局
に提議し、政府と民間でその費用を半々
に募り時恰も國際オリムピックの開催さ
れる東京にスエーデン、ストックホルム
市郊外のスカンセン民族博物館をも凌ぐ
大日本文化の金字塔を建設せんとする計
劃が進められてゐる。

九月

第四回雜誌週間

創立廿週年記念事業の一つとして昭和
八年日本雜誌協會主催によつて企てられ
その所期の目的たる「雜誌の發行倍加と
雜誌文化の正しい認識」との上に顯著な
効果を齎らしつゝ、年を閲すること、四箇
年、新秋讀書シーズンに於ける我が國年
中行事の一つと目せられるに至つた。一、
誌週間」は、今年も恒例により九月七日
から二十日までの二週間全國一萬二千の
販賣店を動員して開催された。
東京雜誌組合では何分今年は雜誌週間
舉行支出豫算の不十分なため前年度のや
うな大規模の計劃をもつて舉行出来な
い憾みはあつたが、委員はじめ各販賣店
の努力によつてその缺を補ふことを期し各
店に對し雜誌總目錄をはじめ「雜誌週間」
と染抜いたノレン一枚づつ、雜誌から寄
贈の百枚宛と合して計四百枚宛の葉を配
付して準備を進め、九月一日午後一時か
ら九段下軍人會館に於て組合員懇話大會
を開催その前景氣を煽つた。この日の入

場者約一千餘名、一階席は殆ど満員の盛
況、日本雜誌協會會長奈良靜馬氏、東京雜
販組合長大野孫平氏の講演があり、日廻
出家一座の曲藝ナンセンス、筑波雪の浪
花節、青葉會櫻子さんの舞踊、一龍齋貞
山の講談、スボーツ漫才、笑藝等盛り澤
山のプロを終り五時盛況裡に閉會。各發
行元では例年の如く十月號は特に内容を
充實し或は特別號、或は大増頁増刊、附
録の添附などを敢行、興廢此一戦の決意
をもつて讀者奉仕の實を擧げた。併し東
京市内の週刊色は殆ど目につかない程に
淡く、週間のポストターも大雑誌のポスト
ターに壓倒されて影が薄く、表紙の週間マ
ーカも僅かに一流雑誌の或る一部が入れ
てゐる位のもので歩調を缺いてゐる感が
あり、店頭に立つ客さへ雑誌週間に全く
氣つかぬ者が多いやうであつた。
▽各地の雜誌週間——本年度の雜誌週
間は東京の案外振はなかつたのに反し京
阪方面は大阪書籍組合、大阪參文社、盛
文館の共同作戦に依り非常な盛況を呈し
雑誌週間を殆ど一手に奪つたかの觀があ
つた。大阪では「讀者の大増加を圖り書
店各位の繁榮に貢獻すると共に書店各位
と本社との親睦を増し共存共榮の實を擧
ぐるために」特別に組織された講談社の

映畫班數隊の來阪を機に、上福島小學校
を皮切りに中央公會堂、天王寺公園音楽
堂等々と一日から十九日迄連夜、第四師
團から貸與された貴重な映畫「防空の日
本」及び講談社提供の教育映畫四本を以
つて宣傳映畫大會を開催し有力販賣業者
が世話人として活動し來場の少年少女へ
サービスマス、各所とも大入満員の素晴し
い盛況を呈した。更に京都、神戸兩市も
大阪の延長として同映畫班が出動、各所
に映畫大會を催し大人氣を呼んだ。三重
縣雜誌商組合では昨年は都合上雜誌週間
を中止し何等の對策も講じかつたが、今
年は伊勢新聞社後援の下に新計劃を立て
雑誌一冊買上毎に参加章一枚宛を呈し
「一、雑誌を讀んで有益と感じた感想文、
二、雑誌に關する標語」の二課題のうち
の何れかに應募した讀者に對し審査の上
一等文部大臣賞以下それ〴〵知名の士の
賞品を贈呈することとし雑誌文化宣傳に
ついて百パーセントの効果を擧げた。

伏せ字を斷乎一掃

内務省では從來一般出版物に對し特に
思想的、或は風壞的な辭句は伏字に置換
へて檢閲を通して來たが、その後筆者の
巧妙な手段と一般讀者の知識の向上によ

つて却つて逆効果を生じ、しかもそれを
また筆者がねらつて逆効果を生ずるやう
にわざと巧みに伏字を使つて記述描寫す
る現狀となり、特に二、二六事件以來そ
の傾向は益々激化するに至つたので、内
務省警保局では老婆心を裏切られたもの
とし近く斷乎この魔術的伏字の一掃を斷
行することになり九月八日午後の全國特
高課長會議の席上の議題にのぼせその方
針を明示した。この伏字取締は別に獨立
した單行法を作る必要もなく現行の出版
法を嚴重に施行し、從來見逃して來た程
度のものを嚴密に取締るやうにすれば不
都合はないが、當局の企圖する所は言論
の弾壓ではなくて伏字一掃による言論界
の明朗化にあるので、近く一般文筆家、
編輯者に警告を發し漸次檢閲を嚴にし、
それでも肯じない者に對しては將來は斷
乎發賣禁止又は一部削除を命ずること
になつた。

伯林から第二のブラ

ーゲ旋風

ヨーロッパ各國の文藝家協會、出版者
協會の委任狀を振り翳してわが文壇、樂
壇、出版界に國際著作權問題の低氣壓を

投げつけ所謂ブライゲ旋風の暴威を揮ふこと四年に及んだ例のブライゲ博士は今春一月ドイツへ歸國したが、またもやペルリンから出しぬけの一石をわが翻譯出版界に投じて来た。ブライゲ氏の新提案はヨーロッパの権利者と日本の使用者の間に介在する利害關係を調和するとの名目でわが翻譯家出版業者の賛成を求めて来たものだが、提案の内容は

- 一、將來一切の翻譯はその出版前に原権利者の許可を求めること
- 二、日本の翻譯者出版者の便宜のため仲介手續は小生の事務所取扱ふ
- 三、原作と日本譯とは同価値であるべきで、出版者は少くとも定価の一分五分の印税を原作者と翻譯者に二分して支拂はるべきだ

ほか二項目から成つてゐるが、第三の印税の平等分配はわが國では從來原作者に對する報酬はなく、ただ翻譯者に定価の七、八分乃至一刻の印税が支拂はれてゐるに過ぎない有様で、この報酬額では出版業者翻譯者とも自滅の外ないので、わが國際著作權協議會では提案一切を黙殺して近く同會から歐洲各國へ發送されるわが實情を説明したパンフレットに打開の途を講ずることになつた。

日本を誣むる外國圖書に發禁

最近世界各國に於ける素晴らしい日本研究熱の反映として日本の政治、經濟、文化に關する英、獨、佛各國語の圖書雜誌の刊行は日覺ましい流行を呈してゐるが、其の中には依然として日本精神の認識を缺き日本を誹謗するものがあるため内務省警保局では嚴重注意中のところ九月二十六日付で近着の元駐日ロシア大使館附陸軍武官グイクトル・A・ヤコントフ將軍の名著『アイズ・オン・ジャパン』(『日本を注視す』)を不敬並びに不穩の言辭あるを理由として發賣禁止處分に付した。同書は「本書は日本最良でもなければ日本反對でもない」と主張しながら第一章「日本は如何にして今日の地位を築いたか」から第十二章「日本の今日の問題」に至るまで全章惡意ある日本の誹謗で埋められ「明治維新から日清、日露兩戰役を経て滿洲、上海兩事變」を一貫する日本の對外政策を侵略主義として露骨に曲解し、剩へ不敬の言辭さへ並べてゐるため斷乎發禁處分に附されたものである。

十月

圖書大市會

東京書籍商組合の第三十四回圖書大市會は、昨年の日取りの通り九月一日から七日まで第一回通信市、十月一日から十一日まで第二回通信市、十月七、八の兩日を陳列市として開催された。第一回の通信市に於ての出来高は昨年のそれを突破して十一萬圓にのぼる成績を挙げ、十月一日から同十一日までの第二回通信市及び同七、八日の兩日に亘つて神田區一ツ橋の教育會館で開かれた陳列市の兩市に於ても十萬圓に垂々とする出来高を示し總出来高二十一萬圓、昨年の飛躍的出来高二十萬二千圓を更に凌駕するの好成績を挙げた。

全國書籍雜誌商組合 地方協會の定時總會

全國書籍雜誌商組合地方協會の第十四回定時總會は十月八日午後一時半から日比谷山水樓に開催された。出席者は各府

縣組合正會員、特會員を合して六百六十名これに來賓として江草、鈴木、西村、大橋、森下、大野、石塚、藤井、岸、塚越の諸氏が列席、柏委員長議長席に着き開會を宣し昭和十年度の庶務報告に移り、議長より雜誌原價問題、運賃、上京折衝、規約修正等に亘る説明があり二三質問があつたのみで異議なく承認、ついで昭和十年度決算報告及び昭和十一年度收支豫算を審議いづれも一瀉千里異議なく承認可決直ちに各組合提出建議案の審議に移つた。本年は鹿兒島、高知、岡山、山口、鳥取、廣島、名古屋の七組合から建議案の提出があり議案項目計十六、可なり盛り澤山の感があつたが、特筆さるべき異色ある乃至重大な提案は見當らなかつた。たゞ全般を通じて注目されたことは殆どいづれの組合の提案中にも、雜誌正味引下要望に關する件乃至これと關聯ある問題——書籍運賃發行元負擔、荷造費發行元負擔實現促進等の如き提案が含まれてゐる、雜誌正味の引下が全國同業者の如何に熾烈な要望となつてゐるかが明白に窺はれたことであつた。右六縣提出の建議案を無事議了後役員の改選に移り、議長指名により監衡委員を任命、同委員會の監衡の結果、京都、大阪、新潟、愛

知、福岡、熊本、北海道、滿洲、信濃、鳥取、廣島、兵庫、愛媛の各縣を役員に決定午後五時半閉會。別席に於て懇親會開催九時半頃盛會裡に散會した。

全國書籍商組合聯合會

會總會

全國書籍商組合聯合會の第十八回定時總會は十月十日午前十時二十分から九ノ内工業俱樂部で開催された。出席者は五十組合七十名、外に傍聴者五十餘名、日黒會長開會を宣し一場の挨拶を述べて議事に入り、昭和十一年庶務、昭和十一年度會計、昭和十二年度豫算案を執れも滿場異議なく承認可決、それより規約修正の件に移り逐條審議、第十條の修正で議論續出したが結局修正原案通り可決、第十六條まで審議、晝食のため一旦休憩、晝食後記念撮影をなし一時二十五分再開、實業之日本社増田義一氏が「増税問題と將來の豫測」と題して四十五分に亘り講演、ついで規約修正案の審議續行に入り第四十四條まで一瀉千里議了、建議案の審議に移り名古屋、山口、鹿兒島組合より提出の大體同一主旨の建議案「書籍雜誌掛率歩引實現並に書籍雜誌運賃荷造費

第二回出版販賣懇談會

昨年、全國聯合會總會終了後地方代表者の滯京を機會に出版元との懇談會を開き兩者隔意なき意見の交換を行ひ極めて有意義な會合を了したのに鑑み、今年はその第二回出版販賣懇談會を秋雨降りしきる十月十三日午前十時四十分から日本工業俱樂部に於て開催した。出席者は合計二百餘名、日黒聯合會長トツプを述べ指名に依り江草出版協會會長トツプを承つて販賣者側に起つてゐる正味引下要求に對して意見を開陳、販賣業者の現金賣勵行を希望して降壇、中村清三郎氏、山本鐵太郎氏交々起つて、今年度より實施せられる増税や一般物價騰貴を考慮して近く雜誌の定價引上げを行ひ以て正味引下げを斷行せられんことを要望、正味引下問題を中心に高妻秀季氏、前原北海道代表、長坂金雄氏等より意見の開陳が

あり、丸岡、大塚の両氏はカード問題について述べ更に土屋氏は出版販賣業者の接近の必要を説き、久永鹿兒島代表は例を擧げて版元との直接取引反対を絶叫、最後に柏氏の挨拶で三時半閉會した。

日本翻譯家協會の結成

國際著作權問題に對して我が國翻譯者出版者によつて結成されてゐた國際著作權協議會は此の度豫定の事業も大體終了したので一旦解散し、新たに日本翻譯家協會を組織することになり、其の創立準備會が堀口大學氏司會の下に十月二十四日午後七時九ノ内A1で開催された。同會の席上採り上げられた問題は例の翻譯權中間業者ブライゲ氏に對する我が國翻譯者の立場で、九月十五日附の同氏の書翰に依ると日本の翻譯家並びに出版者と原作者との間に仲介者を自身で設定これが管理に當り、翻譯者と原作者に對し定價の一分五分の印税を支拂ふ事を要求してゐるので、これに對し同會より決定的に同氏の新提案は友誼的國際文化交流の精神を阻害し、其の條件も我が國出版界の實狀を無視した實行不可能の要求として刻々つける事に協議、近くその聲明書

をベルリンの同氏宛に送る事になつた。

書籍の賣上及營業收 益税免除運動

文明社の楠田龜補氏は來年度から新設増徴される事になつた賣上税及營業收益税を新聞雜誌同様免税されたいと大藏大臣宛に陳情書を提出すべく「圖書出版並に販賣業の賣上税並に營業收益税免除期成同盟會」發起人の名で同業に飛徹し右陳情書に記名調印を依頼した。此の運動については本問題に最も關係深い大藏政務次官中島彌次氏を始め鳩山一郎氏、安藤正純氏、鈴木種氏令弟渡邊鏡造氏等有力な人があるから目的の貫徹必ずしも困難ではなからうと見られてゐる。

書名登録に注意が肝要

書名の登録されてゐる本に類似の名前の本を出版すると飛んだ目に逢ふから出版元は注意しなければならぬといふ實例——時節柄「愛國讀本」といふ書名はよほど魅力があると見え、茲二三年の間に金星社から『少年愛國讀本』野ばら社から『愛國讀本』厚生閣から『少年愛國讀本』實業之日本社から『少年愛國讀本』

等々が發行されたが、「愛國讀本」なる名稱は既に日本書院の手によつて書名登録がしてあつたので、同書院は次々と以上の各社に嚴談、損害賠償金を提供した金の星社、野ばら社、厚生閣の各社とは示談解決を見たが、實業之日本社のみは態度強硬だったので目下緊争中の由である。以上の各社の中には日本書院と同時に或は先に出した社もあるのが書名登録をしなければならぬ目を見た譯、出版元諸氏は同じことを再び繰返さぬやう御注意が肝要である。

機關紙に關する出版協會の懇談會

最近業界の問題となつてゐる書籍専門の機關紙を東京出版協會若くは協會員が主體となつて發行する件に就き、去る二月の定例協議會に於て新刊月報委員西村辰五郎氏より提案があり、以來新刊月報委員附託として慎重研究を重ねしめてゐたが、右委員會の原案が成り、過般の臨時協議員會に於て慎重審議を行ひ同原案を可決したので、十月二十七日午後一時から出版協會樓上に於てこれが報告を兼ね會員の懇談會を開催した。當日の出席者は約五十名で二時間會、江草會長開會

の挨拶と共に機關紙發行の主旨を述べ、次いで西村委員長起つて今日までの経過と發行の主旨に就いて江草會長の説明を敷衍して詳細に説明、更に左の原案につき各項目毎に朗讀説明をなし小憩後、江草會長から意見を徴し宮下、楠田の諸氏から二三質問があつたのみで和氣瀟々裡に懇談を了した。

各國語の日本研究圖書目錄

最近海外諸國の我國に對する關心度が急に高まつた結果、外務省や國際文化振興會に對し文化資料に關する問合せが殺到しこれが調査や回答に關係者は忙殺されてゐるが、この大部分は海外の日本研究者が日本關係の書物や資料の存在に氣がつかなくなつたり、その入手に困難であるための場合が多いので、國際文化振興會では簡單なる日本關係外國圖書目錄を編纂して海外に廣く配布し日本文化研究者に基礎的な指導を與へたいと一昨年姉崎正治博士を委員長とする書目委員會を設けて「英語日本關係圖書目錄」を出版し更に佛、西、葡語の圖書目錄の編纂を急いでゐるがこのほど漸く完成、近く海外へ送り出すことになつた。尙同會では獨、露、波、智、瑞典、諾威、丁抹

等の北歐諸國語の圖書目錄を出版すべく準備中である。

「春琴抄」英獨譯なる

翻譯困難で定評のある大谷崎の名篇『春琴抄』の英譯とドイツ譯が時を同じうして現はれ歐米讀書界にセンセーションを起さうとしてゐるといふニュースが齎された。英譯は在上海の英人日本通ロイ・ハムパーソン氏と上海日本人小學校教師沖田一氏との共譯にかゝり『春琴抄』の外に『蘆刈』をも加へて去月中旬出版されたが、更にドイツ譯は全然別箇に企圖され三年間苦心の結晶として此程漸く完成、オーストリアの文豪ステフェン・ツァイグ氏の斡旋で維納に於て明春早々出版の運びとなつてゐるとのこと、譯者は四年前オーストリアから來朝現在丸ノ内の埃國領事館に勤務するフォン・ヴイテック夫人並びに昨年獨佛から歸朝新進翻譯家として賣出した帝國美術學校教授大野俊一氏である。

「實談藏」出版の機運

元駐日アメリカ大使館參事官ポスト・ホイラー氏が三十年の精根を傾倒して昨秋十月漸くこれが完成を見た日本の神

代から徳川時代に至る二千年の國史を飾る神話、傳説、稗史、講談の集大成『實談藏』(別名『日本の萬寶の藏』)は、何分にも全十二卷五千ページといふ大冊のことゝ一時出版の實現を危まれてゐたが愈々日・米・英三國協同の空前の國際出版によつて晴れの榮光を浴びる事になつた。出版費の中日本政府から一萬五千弗(約五萬圓)の補助を仰ぎたいと申入れて來てゐたホイラー氏の要求に對しては經費支出の途がないのでそのまゝ中絶状態になつてゐたが、最近國際文化振興會では、この世界的事業を何とかして實現させたいとこれが斡旋に乗出し史實、英文及び浮世繪の三つの觀點から全原稿の閲讀檢討を開始すると共に三省堂その他の英文出版書肆に對し出版の見積りを行はしてゐる。何分アメリカではドッド・ミッド社、イギリスではウイリアム・ハインマン社の一流書肆が既に自國內の出版を引受済みのため日本としても空前の國際出版に日本の印刷技術を誇る絶好のチャンスとして大體七、八萬見當で出版實現に努力することとなつた。

スチムソン著「極東の危機」

滿洲事變中對日干渉の主役を買つて出

で日米關係及び國際外交史上に種々の波紋を描いた問題の人物前米國々務長官スチムソン氏が今回『極東の危機』といふ標題の著書を公けにした。氏の描いたところのものは滿洲事變を題材としそこに踊る主人の彼自身——フーゲアー内閣の國務長官たりし當時の彼自身の行爲を百パーセント正當視せんとする巧利主義的な自己辯護書であると同時に現在の支那の抗日運動を煽動せんとする意圖の下に書かれたかと疑はれるほど露骨な排日檄文で、最近世に出た元國務長官ロバート・ランシング氏の『戰爭回顧録』と共に好一對の抗日書と目されるべきもの、「改造」中央公論は早速これを別冊附録として譯載した。

一部五千圓の世界的超豪華版

一部五千圓、しかも出版部數僅かに二十といふ超豪華なカタログが完成後世に傳へられやうとしてゐる——日本古美術の精髓として東洋美術史上に貴重な一頁を占めてゐる奈良法隆寺の壁畫は推定される揮毫の時なる天平時代から既に千三百年、名畫の數々も次第に色褪せ何時までその絢爛たる美しさを保てるか判らぬ状態にあるので、法隆寺管長佐伯常胤氏

が痛くこれを憂慮し、この世界の寶物を何とかして保存すべく法隆寺が主體となつて精巧なその寫眞を撮る企劃を立て昨年八月からその難事業に着手しこの程漸く完成を見たので、一部五千圓、二十部限定版の豪華カタログとして世界に送り出すことになつた。二十部の中十部は日本にとどめ残り十部をロンドンの大英帝國博物館、巴里のルーヴル美術館等の世界一流の美術館を飾るべく、先づ英、米、佛、獨、伊、蘇、埃、瑞典等の各日本公使館宛外務省からカタログのサンプルを贈ると。

ナチスの國の雜誌が日本特權號を出す

獨逸が我國に寄せる絶大な好意は今夏のオリムピックを通してはつきり解るが、ナチスの國の日本熱は今や朝野を擧げてみなざり此のほど同國の雜誌『ノイエリニ』(『新しき線』)から國際觀光局へ「一九三七年の一月號に日本特權號を出したいから是非援助を請ふ」旨編輯ブラスンに添へて見本を送つて來たので、觀光局ではニッポン紹介の絶好の機會とし國際文化振興會、東京商工會議所等とも連絡をとり提供材料を蒐集して送達した。

創立五十年記念に富山房社長的美譽

書肆富山房社長坂本嘉治馬氏は同社の創業五十周年に當り、學術振興發明獎勵補助費として金五十萬圓を寄附することとなり、十月十五日の記念祝賀會を期としてこれが寄附を文部省に申出た。氏は既にその郷里高知縣の圖書館建設、育英資金等にも多大の援助をして居り其の他の公共事業、義捐金等常に率先して據金し篤志を以つて知られてゐるが、今度の寄附金の使途は文部省側に一任して各學術團體の研究費、同發明獎勵費として適當に分配される筈で、惠まれぬ眞摯な研究家、發明家等に對しても種々の便宜を與へるものと期待されてゐる。尙同社創立五十周年記念祝賀會は十五日午後五時半から東京會館で行はれ、學界財界政界新聞雜誌界の名士五百餘名出席、坂本社長の挨拶に始まり折相永田秀次郎、早稻田大學名譽總長高田早苗、井上哲次郎、永井柳太郎氏等來賓の祝辭について諸種の餘興があり盛會を極めた。尙長き過りで十五日坂本氏に對し斯業の進展を圖り實業に精勵、衆民の模範として綵綬褒章下賜の御沙汰あらせられた。

十一月

第四回全國圖書祭

毎年秋たけなはの十一月一日をトシ嚴かな祭典を舉行、敬虔な心を以つて精神生活の糧なる圖書の廣大無邊の恩恵に感謝の念を捧げ圖書敬愛の美風の振興に資せんとする主旨をもつて業界の重大な年中行事の一つと定められた圖書祭は今年で四たびの秋を迎へ、全國一萬五千の同業を總動員して十一月一日全國一齊に舉行された。

東京の圖書祭

東京の第四回圖書祭は今年は東京出版協會、東京書籍商組合、日本圖書館協會の三團體の共同主催で一日午後一時から神田區一橋の商大一橋講堂に於て舉行された。参列者約三百名、式は嚴かに修祓の儀にはじまり降神、奉幣、獻饌、祭司の祝詞に次いで主催者江草出版協會長の左の祭文朗讀

祭文 東京出版協會長江草重忠敬テ白ス

出版界一年史(昭和十一年度)

惟フニ克ク先人ノ偉業ヲ顯揚シ前代ノ文化ヲ傳ヘテ以テ後人ノ知識ヲ啓發シ現代ノ開明ヲ資クルモノハ全ク之ヲ圖書ノ功績ニ歸セサル可カラズ今圖書ハ知識ノ父タリ文化ノ母タリ吾人ハ苟クモ圖書ノ恩恵ニ狃レテ之カ敬愛ヲ遺ルルカ如キコトアル可カス況ヤ我等日夕圖書ニ親近スル者ハ常ニ感恩ノ精神ヲ持シ大ニ圖書ノ洪徳ヲ顯彰スルコトニ努ム可キハ亦當然ノ責務ナリト謂フ可シ乃チ吾等皆謀リ嘉辰ヲトシ菲典ヲ修メテ圖書ノ靈ヲ祭リ虔テ報本ノ儀忱ヲ表ス靈尙クハ饗ケヨ

昭和十一年十一月一日

東京出版協會 會長 江草重忠

ついで松本圖書館協會理事長、江草東京出版協會會長、山崎東京書籍商組合組長(岸他丑氏代理)文部大臣(代理)内務大臣(代理)東京府知事(代理)東京市長(代理)目黒聯合會長、森下中等教科書協會會長、主催團體會員總代坪谷善四郎氏の順に玉串奉奠が行はれ、山崎東京書籍商組合長(岸氏)代理の左の式辭があり

式辭 昭和十一年十一月一日東京書籍商組合

ハ日本圖書館協會、東京出版協會ト共ニ茲ニ恭シク祭壇ヲ設ケテ第四回圖書祭式典ヲ舉ク

惟フニ國運ノ發展ハ文明ノ進歩ニ伴ヒ文明ノ進歩ハ學術ノ普及ヲ意味ス故ニ學術普及ノ程度ハ以テ國家ノ隆替ヲ知ルニ足ルヘク圖書ハ吾人生活ノ進歩發展ニ密接ノ關係ヲ有シ精神的糧トシテ日常缺クヘカラサルモノニシテ其ノ恩惠ノ鴻大ナルコト計リ知ルヘカラス此ノ鴻大ナル恩恵ニ浴シ吾人當業者ハ勿論有ニル讀書家ニ向ツテ圖書ニ對スル感謝ト敬虔ノ念ヲ一層深カラシムル風習ヲ布カントス希ヒ願クハ益々國家文教ノ發達ヲ誘導シ我當業ノ隆昌ヲ守護セラレンコトヲ茲ニ恭シク予輩本組合員三千三百有餘名ヲ代表シ謹ミテ祭詞一章ヲ奉ル

昭和十一年十一月一日

東京書籍商組合 組長 山崎信興

ついで文相(代理)内相(代理)横山東京府知事(代理)牛探東京市長(代理)等の祝詞があり劉曉たる奏樂裡に撒饌、撤幣、昇神の儀をもつて午後二時式典を終り、式後圖書まつりに關する講演を聞き、徳富蘇峰氏の「書籍と讀書」と題す

る興味ある講演に傾聴同四時盛會裡に閉會した。

尙右主催三團體は共同圖書祭親睦會を四日午後一時から九段下の軍人會館大講堂に於て開催したが、盛り澤山の餘興が人氣呼んで家族連れの入場者引きもきらず三千人を容れたいふ大講堂も超満員の盛況、梅坊主連中の深川踊かつぱれ、春日亭清鶴の浪花節、柳家小さんの落語大島伯鶴の講談、グラントシヨ一の舞踊とダンス、映畫等に觀を盡し午後五時半頃和氣瀧々裡に散會した。

各地の圖書祭

▽大阪組合——大阪書籍商組合では二日天満神社に全役員が参列祭典を舉行、御神樂を奉奏したが一般組合員には特賣目錄宣傳物、圖書祭の精神を説明したり一フレット等を配布する一方、大阪出版業組合と共同で一般顧客から圖書獎勵の標語の募集を行ひ讀書の奨励と圖書敬愛の精神の徹底化に努めた。

▽京都組合——京都組合では圖書祭事業を五部制に分つて役員総出で活動した。第一部は一日午後零時半華頂會館に於て聖德太子を祭神に嚴肅な祭典を舉げ式後記念講演會を開き京都都大羽漢文學

博士を聘して有益な講演に傾聴した。第二部は圖書祭店主店員懇親會を同會館に開催、模擬店を設けて大繁昌。第三部は引つゞいて午後五時から同會館に講演會を開催、龍谷大學栗野教授の「日本文化と聖德太子」と題する講演があつた。第四部は奉仕部、第五部は宣傳部として圖書祭有終の美を期して活躍した。

▽名古屋組合——名古屋組合の圖書祭々典は一日午後零時半から熱田神宮大樂殿に於て舉行されたが、同組合では祭典の賑はしとして十月二十七日の東新小學校を皮切りに十一月二十日まで市内二十箇所で講演社のトキー大会を開催しつづけて何處でも超満員の盛況であつた。

▽栃木組合——一日午前十一時から二葉山神社で祭典を執行、午後零時半から記念講演と映畫の會を催し、内山副組長の開會の辭、相馬組長の式辭について沖野岩三郎氏の「將來の日本」村岡花子女士の「現代女性の使命」須藤宗次郎氏の「感激の力」と題する講演及び映畫があり盛會裡に閉會、尙同日及び翌日の兩日二回に亘り講演社の圖書祭記念オールトキキー大会を催しこれまた非常な盛會であつた。

▽鹿児島組合——一日午前十時から磯

圖書館週間

天神菅原神社に於て圖書祭々典を執行したが、縣下各地から參集の組合員三十餘名、來賓として奥田縣立圖書館長その他參列の上久米社掌外三神官によつて嚴かに祭典執行、修祓、獻饌、祝詞奏上後久永組合長代理、奥田圖書館長の玉串奉奠あり祭典終了後記念撮影をなし引續き田の浦風景樓に於て祝宴を張つた。

圖書文化の普及を目的とする日本圖書館協會主催の「圖書館週間」は、恒例により秋深む讀書シーズン、十一月一日から七日まで一週間全國主要都市に於て一齊に開催された。東京では週中銀座松屋、上野松坂屋、新宿伊勢丹、新宿三越の各デパート書籍部と丸善、富山房、三省堂、東京堂等の各書店に協會の推薦圖書百種づつ(書名は別項参照)を陳列し圖書目錄をリーフレットにして一般に無料配布、二日にはラヂオにより幸田成友博士の記念講演を放送し、週間の意義の普及と讀書熱の鼓吹につとめた。尙市教育局ではこの催しを後援して、過去一年間に市立圖書館に於て一番多く讀まれた圖書と児童讀物としての推薦圖書とを

各百種づつ各デパートに陳列、有終の美を收めしめることに努めた。

書道博物館完成す

洋畫家の中村不折畫伯が明治二十七年日清戰役當時から本職の繪を描く傍、過去四十年に亘り全財産を投じて蒐集した書道に關する珍書、古美術品等一萬六千點を收藏する「書道博物館」が下谷區上根岸一二五の畫伯邸内に見事に完成し十一月三日の明治の佳節に開館、一般に公開することになつた。

東京出版協會制定の

電報通信符號

東京出版協會では電報通信符號を次の如く制定、十二年一月一日よりこれを實施することとなつた。

バイ	注文書	バロ	注文品	バカ	間ニ合フ	バヨ	間ニ合ハス	ビハ	送ツタカ	ビニ	送ツタ
バハ	注文品ノ内	バニ	注文シタ	バタ	何日出ル	バレ	出ルカ	ビホ	直送セヨ	ビヘ	直送スル
バホ	注文アリ	バヘ	注文ナシ	バソ	注文部數訂	バツ	注文取消ス	ビト	直送シタカ	ビチ	直送シタ
バト	品アルカ	パチ	品アリ	バナ	改正注文ス	パナ	直接注文	ビル	返送セヨ	ビス	返送スル
バリ	品ナケレバ	パチ	品切レ	パネ	追加注文	パム	追加頼ム	ビカ	再送シタ	ビワ	再送セヨ
バル	發行元品切	パチ	品切レ	パウ	帳合ニテ			ビタ	到着シタ	ビレ	到着セヨ
		パワ	間ニ合フカ	パノ	第四種郵便	パオ	小包郵便ニテ	ビソ	出荷中止セ	ビツ	出荷中止シタ
				パク	小包郵便ニテ	パヤ	便ニテ	ビネ	何日送ルカ	ピナ	何日何ニテ
				パマ	送レ	パケ	客車便ニテ送	ピラ	發送ノ日知ラセヨ		
				パフ	代金引換客車便ニテ	パコ	宅扱便ニテ送	ピム	昨日	ピウ	本日
				パエ	宅扱便ニテ	パテ	代金引換宅扱便ニテ	ピノ	何日(イツ)	ピオ	一昨日
				パア	大貨物便ニテ送	パサ	大貨物便ニテ送	ピク	明日	ピヤ	明後日
				パキ	自動車便ニテ	パユ	船便ニテ	ピマ	四五日中	ピケ	一週間
				パメ	混載扱ニテ	パミ	積合せ便ニテ	ピフ	今月中旬	ピコ	今月下旬
				パシ	代金引換ニテ	パビ	航空郵便ニテ	ピエ	今月上旬	ピテ	来月中旬
				パモ	後便ニテ	パセ	運送店	ピア	来月下旬	ピサ	先月
				バイ	直送	ビロ	送ル		照會・應答		
									照會見タカ	プロ	手紙見タ
									知ラセヨ	プニ	通知スル
									詳細ハ手紙	プヘ	電報ニテ
									電報見タカ	プチ	電報見タ
									返電頼ム	プヌ	照會中

ブル	間達デナキ	ブル	間達デナシ	ベカ	荷爲替附ニ	ベヨ	約束手形ニテ	ボラ	何日頃檢定	ボム	檢定済ノ見込
ブル	重復デナキ	ブヨ	重復デナシ	ベタ	貨物引換證	ベレ	船荷證券	ボウ	檢定不要	ボム	雜項
ブカ	承知ヲ乞フ	ブレ	承知シタ	ベソ	送金セヨ	ベツ	送金スルカ	ボク	全部	ボオ	殘部
ブタ	承知出來ヌ	ブツ	變更額ム	ベネ	送金シタカ	ベナ	送金シタ	ボク	不足	ボヤ	確定
ブソ	變更額ム	ブナ	變更出來ヌ	ベラ	卷別	ベム	上卷	ボマ	未定	ボケ	不明
ブラ	ニテ宜シキ	ブム	ニテ宜シ	ベウ	中卷	ベノ	下卷	ボフ	採用	ボコ	至急
ブウ	ニテハ困ル	ブノ	何レナリヤ	ベオ	正篇	ベク	續篇	ボエ	學校名	ボテ	學校へ
ブオ	延引スル	ブク	重ネテ	ベカ	後篇	ベマ	中篇	ボア	未出荷分	ボサ	返品
ブヤ	著者名知ラ	ブマ	新舊版何レカ	ベコ	舊版	ベフ	新版	ボキ	誤送品	ボユ	出荷案内
ブケ	書名不明再	ブフ	卷數不明再報	ベテ	各	ベア	編ヒ	ボソ	入日記		
ブコ	報セヨ	ブエ	電文不明再報	ベサ	補習科用	ベキ	初級用				
ブテ	取調ベ頼ム	ブア	帳合先知ラセ	ベユ	上級用	ベメ	教授參考書				
ブサ	猶豫額ム			ボイ	發行所	ボロ	取次店				
ベイ	定價	ベロ	正味(又ハ掛)	ボバ	見本	ボニ	内容見本				
ベハ	代金	ベニ	計算書	ボホ	教科書目録	ボヘ	出版圖書目録				
ベホ	明細書	ベヘ	不足金	ボト	新聞廣告	ボチ	未刊				
ベト	殘金	ベチ	振替貯金ニテ	ボリ	豫約申込	ボヌ	絶版				
ベリ	郵便爲替ニ	ベヌ	電信爲替ニテ	ボラ	印刷中	ボワ	製本中				
ベル	銀行爲替ニ	ベワ	當座振込ニテ	ボソ	發行日	ボレ	發賣日				

兵庫縣書籍雜誌商組合の創立三十周年記念會は十一月六日恰も神戸のお祭「港祭」の第一日たる佳日、神戸商工會議所樓上で華々しく舉行された。市内縣下から組合員多數參列、湊川神社の宮司嚴修の下に嚴かな式典を舉行、式後記念式に移り當組合のため多年に亘つて功績ある

◎この符號表以外の文字には括弧をお認め下さい

◎卷附・學年・冊數・日附等數字は凡て一般略記法により一五とか三〇など、お記して下さい

兵庫縣組合の創立三十周年記念會

柏組長、川瀬、石丸、竹内その他の諸氏を表彰、意義深い記念會を終了、次いで四階大廣間に設けられた宴會場に入り祝宴を擧げ午後九時盛會裡に散會した。

機關誌發行會社の發企人會

東京出版協會の手によつて進められつゝあつた圖書宣傳の機關誌發行會社創設の計劃はその後着々と進捗し右具體案の決定を見るに至つたので十一月廿一日午後三時から同社の發企人會を東京出版協會樓上に於て開催した。當日の出席者は江草、大橋の正副會長、西村、神戸、永田氏等外數名で、西村氏が座長となり發企人會迄の經過を説明、定款(草案)を附議して重役の數、株主總會の期日、事業年度、重役並に其の引受株數等を決定して午後五時過ぎ散會した。尙創立總會は十二月十一日に開催される豫定、創立事務所は東京出版協會である。

新潮社の創立四十周年記念

新潮社創立四十周年及び『日本文學大辭典』完成記念のため島崎藤村、徳田秋聲の兩氏が發企人となり佐藤社長の胸像

を贈呈することとなり朝倉文夫氏に囑して製作中であつたが、この程見事に完成したので十一月廿六日同社に於て其の贈呈除幕式が舉行された。當日の來會者は約二百名、高須芳次郎氏の開會の挨拶について降神、玉串奉奠の儀が行はれ、發企人を代表して徳田秋聲氏贈呈の辭を述べ、目錄贈呈後社長令息亮一氏除幕を行ひ來賓諸氏の祝辭演説、佐藤社長の答辭があつて午後五時舉式を終つた。續いて午後六時から東京會館三階廣間に於て記念祝賀會を開催、來會者五百餘名、數番の餘興があつて後、四階大食堂で晚餐祝賀の宴に移り盛會裡に九時過ぎ散會した。

發禁の英文日本史

外國語で書かれた日本歴史中で、最良書として外務省でも推薦し外國人間に評判の高いワシントン大學東洋史教授ハーパー・H・ゴウエン博士の名著『日本歴史大綱』(一九二七年刊)が外務省筋で知らぬ間に意外にも去る八月十七日付で警保局から發賣禁止の處分を受けてゐることが最近に至つて判明し關係方面を驚かせてゐる——同書發禁の理由は日本武尊並びに雄略天皇の御武勇に關する記

述が不敬にわたるといふにあるとのことであるが、なほ調査によると同書の佛譯(一九二九年刊)は昭和八年既に我國で發禁處分に付されてゐ、三年後の本年八月はじめて原本が發禁となつたといふのは檢閲の不統一を示すものと非難してゐる向もある。

第三種郵便値上げに對する反對運動

明年度から一般増税と共に郵便切手類も値上げとなり殊に第三種郵便物はこれまで二十匁まで五匁であつたものが日刊新聞以外は全部倍額の壹匁に値上げが決定せる旨過般通信省から發表されたので東洋經濟、婦女新聞、醫界時報、教育週報其他旬刊及び週刊の雜誌新聞を發行する業者は、過日會合し同じ様に保證金を納めて新聞或は雜誌を發行してゐるものに日刊新聞だけを優遇して他のものゝ取扱ひを異にするのは不公平だとし種々對策について協議した結果、日本雜誌協會と合流して當局へ陳情することに決定し協會へ申込んだところ、雜誌協會内でも同様の聲があり、對策を研究中だつた折柄なので、神田一ツ橋教育會館内の雜誌事務所にて臨時協議員會を開き前記

旬刊誌發行者側の代表者も出席して協議の上、當局を訪問して陳情を行ふことになつた。

英譯萬葉集決定版

日本古典の眞髓を廣く海外に紹介する國家的文化事業の第一計劃『萬葉集』の英譯は昭和九年四月、日本學術振興會第十七委員會によつて着手され、外務省情報部小畑薫良、埼玉縣粕壁中學教諭石井雄之助兩氏の手で翻譯が進められてゐたが、漸く十二卷に及ぶ下續譯を完了この程神田如水會館に開かれた同委員會に提出された。この委員會は英文、國文界の第一人者十三氏を以つて組織されて居り萬葉集四千四百六十九首中から長歌、短歌、旋頭歌の代表一千首が選出され、小畑、石井兩氏の翻譯を東北帝大の有名な英詩人ラルフ・ホヂソン教授が閲讀、更にこれをこの委員會で明春三月末までに推敲を重ね、市河教授によつて序説、脚註、作者の傳記、索引等がつけられて明秋までに日本趣味豊かな豪華本として世に送り出される豫定である。萬葉集の翻譯は既にチエンバレンの抄譯、オランダのピアソン教授等があるが、いづれも遺憾な點があり、今回初めて日本學界總

動員の決定版が完成する譯である。

十二月

讀賣新聞廣告料値上げに對する對策

近年著しい躍進振りを示してゐる讀賣新聞社では十月下旬廣告料金の値上げを各廣告主へ通知して來たが、これは矢つぎ早の第三回の値上げであり而かも今回の値上げは一行當り三十錢以上といふこれ迄にない高率のものなので、東京出版協會日本雜誌協會の兩團體ではこの値上げをば商取引の實際を無視した暴舉として委員を置いてこれが對策を研究すると共に數日前臨時協議會を開催して對案を協議、五日附で左の如き報告を組合員に發送した。

拜啓 最近に於て讀賣新聞は廣告料金の高率なる値上を發表致居候が現下に於ける我出版界の實狀に於ては遽に受諾難致候につき本會に於ては特別委員に依り之が對策に就き慎重なる調査検討を遂げたる結果協議會の全一致を以て左記の通り本會の態度を決すること

に相成り居り候
讀賣新聞の今次に於ける廣告料金の値上要求に就ては同紙最近の伸展を認めざるに非ざるも斯の如き高率なる値上要求は現下の我出版界の實情に照して遽に之を受諾し得ざるの實情にあり仍て本會は同社に對して本問題に關し適正なる解決方法を得べく本會の意の在る所を表明し充分の考慮を要求せるも未だ満足すべき回答に接せず更に同社に再考を促し最善の方法を盡さんことを期す

右御合み迄に取急き御報告申上候

滿洲で常用日記の發禁

大阪市西區北堀江及び東京市神田區淡路町の積善館發行の昭和十二年常用日記中に滿洲國の實情と甚だしく相違する記事が掲載されて居り、在滿關係當局では慎重にこの處分方法を協議中であつたが十二月十九日植田全權大使の名を以つて全滿に亘つて右日記の發賣禁止を命ぜられた。

イタリー政府から寄贈の「イタリー文庫」

日伊新協定の公表によつて日伊兩國の

政治的親善が深められた折柄、大倉喜七郎男とムツソリーニ宰相の文化的協定によつてローマに豪華な「日本文庫」を、また東京に宏壯な「イタリー文庫」を建設交換をする大計劃が進められてゐるといふ快ニュースが齎された。日伊文化提携に新紀元を劃するこの計劃は、大倉喜七郎男が今夏五月イタリー訪問の際ムツソリーニ宰相の知遇に感激し十萬圓を投じてローマに世界無比の「日本文庫」を寄贈することを約し、歸朝後これが具體化を急いでゐたが、圖らずもイタリー政府からわが政府側でも東京に同様の規模を以つて「イタリー文庫」を建設したい意圖を有する旨を通じこれが一切の實行案を大倉男に一任して來た。よつて男は計劃の國家的意義に鑑み詳細の具體案を杉村駐伊大使に委嘱すると共に大倉組重役としてフランス及びイタリーに駐在する比西誠氏を代理としてイタリー政府に委細交渉近く成案を得次第明春早々開設の準備に着手する段取となつた。大倉男寄贈の「日本文庫」の開設されるのはローマの都心に在る六階建の宏壯な「中亞極東協會」内部の最大の特別ホールで、こゝに日本に關する一切の知識を集成した美術館、博物館、圖書館を實現するプ

四十年前ドイツで出版された萬葉集

世界の學界に日本の古典文學が再認識され萬葉集の英譯が企てられてゐるが、既に四十年前にドイツのライプチヒ大學に留學してゐた日本の一學徒がドイツに於て萬葉集及び日本文學史をドイツ語に翻譯して出版し、ドイツの文學界にセンセーションを巻き起した事蹟が判明し、關係者、遺族はドイツ大使館の諒解を求め近くこの歴史的な二著書を記念すべく凸版にして帝國大學はじめ學界に寄贈することになつた。この著者は岩崎彌太郎氏の執事岡崎惟素氏の養子となつた岡崎遠光氏である。氏は苦學して帝大を卒業の後岡崎家の養子となり明治廿八年ドイツに赴いてライプチヒ大學に入学、書店の依頼でこつそり獨文の萬葉集を出版し

たところ忽ちライプチヒ大學教授會の注目を惹き、この著書のため在學僅か一年足らずで卒業證書を授與された。氏はなほもライプチヒ大學に残つて研究し日本文學史を出版これもドイツで非常な反響を呼び起したといふ経緯の著書である。

「内科撰要」の原書発見される

徳川後期洋書の禁を解かれ陳腐な漢法醫學に代つて科學的なオランダ醫學が漸く隆盛に赴いたころの寛政四年、蘭學の大家宇田川玄陽がオランダ醫書を翻譯して「内科撰要」全六冊を出版し多大の貢獻をなしたが今までその原書が不明で兩國の學者間に遺憾とされてゐたところ今回からはオランダで発見された。日本學の泰斗で特に萬葉集の研究家として知られてゐるオランダ、ユトレヒト大學のピアソン教授はかねて親交のある福井縣立小濱中學校長齋藤靜氏の依頼もあり前記原書の發見に努めてゐたが、今回オランダ、ライデンで發見早速齋藤氏の許に送られて來たものである。

書籍會館建設の議

書籍會館設立の必要に就いては業界各

方面で叫ばれてゐたが、何分にも相当多額の資金を要する事業なので實現の機會が無かつたところ業界機構改革運動を始め最近革新的な氣分の横溢してゐる東京出版協會内に皇紀二千六百年のオリムピツタ迄に是非これを實現させたいとの要望が高まつて來、十二月十二日の同協會協議員會に於て江草會長から會館建設についての建議案が提出されたところ満場一致を以つて賛成、會計主任を擔當する矢島一三氏の如きは即座に一萬圓の贈金を申出るあり、幹部大所の贈金のみよりするも會館の一つや二つ何でないといふ氣勢となり、席上日黒甚七、小林文七、杉山常次郎、鈴木種次郎、矢島一三、中土義敬、丸善の諸氏が研究委員に指名され來春早々日本雜誌協會、中等教科書協會とも連絡をとり各團體と協力してこれが實現を期することになつた。

世に出る『明治時代重要史料』
明治維新の認められた真相をことごとく集録した維新裏面史ともいふべき『明治時代重要史料』が集録後七十餘年を経て最近に至り漸く刊行の運びとなつた。これは明治天皇が時の臣多田好間に命じて岩倉公を中心に公をめぐり當時の重

博土坪井九馬三氏は正月以來風邪のため本郷區向ヶ岡編生町三の自邸で療養中であつたが同月二十一日午後四時十五分遂に逝去した。享年七十九歳。博士は安政五年十二月攝津國西成郡九條村に生れ明治十四年東京大學(現東京帝國大學)文學部を了へ更に同大學理學部に學んで同十八年同學部を卒業、翌十九年文科大學



坪井九馬三氏

講師を囑託せられ同二十年六月史學修業のため滿四箇年獨逸に留學を命ぜられベルリン、ブライグ、ウイーン、スウイスのチューリヒの諸大學に於て史學を研究、同二十四年文學博士の學位を授けられ、同年十月歸朝文科大學教授に任ぜられ爾來大正十二年三月東京帝國大學停年退職申合に從ひ退職するまで三十三年間一日の如く研究と教授とに力を盡し後進の誘掖に顯著な功績を挙げた。大學退職後も一日も研究を怠らず其の研究を『史學雜誌』その他の専門雜誌に發表、大正十三年三月には宮内省より臨時御歴代史實考査委員會委員を仰付けられ拮据事に當り昭和元年十月その業を完成、また考

臣、女官、財閥等の公私文書を丹念に集めさせられたもので、時代は孝明天皇の御代から明治十年前後に及び集録文書の数は千二百餘點に達してゐる。それ等の文書は漸く幕府政治から天皇政治へ、封

逝ける人々

一月

◇生田 長江氏(文藝評論家)

文藝評論家として有名な生田長江氏は一月二日來風邪のため澁谷區代々木山谷三一四の自宅で療養中であつたが八日肺炎を併發し、十一日午前零時五十分逝去した。享年五十五歳。氏は名を弘治といひ鳥取縣の出生、明治三十九年東大哲學科を卒業、一時萬朝報の記者をしてゐたこともあるが、のち文藝思潮の紹介に努



生田長江氏

力し特にニイチエの研究に名があつた。その譯著『ツアラトーストラ』などは當時名譯として文壇に喧傳されたものであつた。多年の研究になる釋尊傳の脱稿を間近にして急逝遂に未完成に終つた。明治、大正を通じて自然主義の唱導のよき指導者と認められてゐたが概して不遇であつた。著書には前記『ニイチエ全集』をはじめ、『オディッセー』『神曲』『死の勝利』『消えぬ過去』『懺悔録』等の翻譯、多くの評論集、創作『落花の如く』『釋尊』等があり、没後故人の友人森田草平外七氏によつて『生田長江全集』全十二卷の刊行が企てられた。

◇坪井 九馬三氏(帝國學士院會員)

村小路の阪神國道に於て乗つてゐたタクシーとトラックと衝突、前額部に重傷を負ひ神戸東明病院で加療中であつたが、腦出血のため二十八日午後八時半逝去した。享年三十八歳。氏は軍事通として軍事方面の評論により新聞雜誌界に花々しく活躍してゐた。著書には『われ等若し戦はば』『一九三六年の爲に』『われ等の陸海軍』等がある。

◇沼田 笠峰氏(頌榮女學校長)



頌榮高等女學校長沼田笠峰氏

分日黒區三田一八二の自宅で逝去した。享年五十六歳。葬儀は校葬として二月一日午後一時から頌榮高女校講堂で執行された。氏は號を笠峰といつた。明治十四年十月二十二日兵庫縣中村町に生れ縣下の中學を卒へ上京國民英學會に學んだ。同文館に入つて『教育學界』、『日本の家庭』等の編輯に當つてゐたが後博文館に轉じ『少女世界』を主宰すること十四箇年少女雜誌界にその名を馳せた。大正

十年頌榮高等女學校長に招聘せられ爾來専ら子女の養育に盡瘁今日に至つたものである。著書には婦人問題に關するものが多くその數數十種に及んでゐるが、その主なるものは『わかき婦人の行くべき道』、『若き婦人の結婚と自覺』、『現代少女とその教育』、『手帳の中より』等であり、他に『最新家事教科書』、『新編女子作文』等の編者がある。

◆中條 精一郎氏(建築家)

建築家中條精一郎氏は箱根宮ノ下ホテルで自ら異常の疾患を發見し時を移さず歸京一月十一日慶應病院に入院西野博士の手當を受けてゐたが腎臓結石のため一月三十日午前二時十分遂に逝去した。享年六十九歳。葬儀は二月一日午後二時から三時まで青山斎場に於て會彌中條建築事務所葬を以つて神式により執行され



た。氏は周知の如く創作家中條百合子女史の嚴父である。氏は明治元年四月十八日米澤に於て出生、第一高等學校を経て明治三十一年七

月東京帝國大學工科大学建築科卒業と同時に同大學醫科大學病室及び教室建築工事監督補助囑託となり、同三十二年文部技師に任ぜられ三十六年十二月退官し舊主上杉家の憲章世子補佐の任を帯びて英國に渡航、劍橋大學に建築科を修め同四十年六月歸朝文部省技師となつたが翌四十年一月更にこれを辭し同年工學博士會彌達藏氏と共に會彌中條建築事務所を創設、専ら建築設計監督及び顧問の職に應じ今日に至つた。氏の建築設計監督に成つた知名の廳舎學校ビルヂング等舉げて數へられないほどである。氏はまた傍ら諸學會協會等に關係、建築學會副會長、衛生工業協會會長、國民美術協會々頭に擧げられたことがあり就中建築士會には最も心力を傾注し建築士法案の議會上程と實施運動に昭和六年以來不斷の努力を續けてゐた。氏の設計になる建築物は多數あるが大日本雄辯會講社の壯麗な建築は氏の手によつて完成した一つである。

◆龜井 忠一氏(三省堂顧問)

三省堂、學習社、東都書籍會社の各顧問たる龜井忠一氏は老衰のため永らく小石川區戸崎町の自邸で療養中であつたが一月三十日午前十時遂に逝去した。享年

八十一歳。告別式は二月一日午後一時から二時まで本郷駒込蓬萊町の浩妙寺に於て執行され會葬者四千名を超え非常な盛儀であつた。翁は安政三年舊幕臣中川市助氏の五男として小石川に生れた。明治維新の際に慶喜公に隨つて駿府に移り住んでゐたが、明治七年上京四谷に於て下駄商を営み、同十四年の大火に燒け出されてから現在の三省堂の地に小さな古本屋を開店、漸次出版にも進出、辭典及び教科書等で斯界に重きをなすに至つた。『大日本百科大辭典』の如きは實に國家的事業といはるべきものである。大正三年三省堂を株式組織に改め出版部を資本金五十萬圓の三省堂、小賣部を資本金四十萬圓の三省堂書店となし翁はその顧問となつて縦横の奇才を揮ひ我が國出版界のために顯著な功績を遺した。



助氏の五男として小石川に生れた。明治維新の際に慶喜公に隨つて駿府に移り住んでゐたが、明治七年上京四谷に於て下駄商を営み、同十四年の大火に燒け出されてから現在の三省堂の地に小さな古本屋を開店、漸次出版にも進出、辭典及び教科書等で斯界に重きをなすに至つた。『大日本百科大辭典』の如きは實に國家的事業といはるべきものである。大正三年三省堂を株式組織に改め出版部を資本金五十萬圓の三省堂、小賣部を資本金四十萬圓の三省堂書店となし翁はその顧問となつて縦横の奇才を揮ひ我が國出版界のために顯著な功績を遺した。

二月

◆松田 源治氏(文部大臣)

身で安政四年二月廿五日出生、明治廿三年上京日本橋區村木町に於て出版業をはじめ同三十年現在の地に移轉堅實な營業を以つて知られてゐる。明治廿八年以降八箇年東京書籍商組合の評議員として業界の爲めに盡した功績は多大であつた。

◆夢野 久作氏(探偵小説家)



故杉山茂丸翁の嗣子で夢野久作のペンネームをもつて知られた探偵小説家杉山

松田文相は二月一日午前十一時頃風邪の氣味と持病の糖尿病のため帝大眞鍋内科で診察を受け正午頃自邸に歸つた。すると間もなく「氣分が悪いから」とて家人に床を展べさせ寢に就いたが午後一時頃から急に重態に陥り急性心臓麻痺を發し卒去した。氏は民政黨の領袖の一人で岡田内閣成立の際岡田商相と共に入閣したが、氏の經歷と性格はよく黨内に重きをなし濱口内閣成立の際は折務大臣となり或は民政黨幹事長として令名あり、更に岡田内閣の文相となるや文政改革のため大いに努力し最近宗教制度の改革を企て文相としての功績は漸次舉らんとしてゐた際のこととしてその急逝は政府並びに與黨その他政界各方面から痛く惜しまれた。氏は大分縣松田銀兵衛の二男として明治八年同縣宇佐郡柳ヶ浦に生れた。日本大學卒業後司法官試験を拜命、明治三十一年辯護士を開業、同四十一年以來衆議院議員に當選九回、衆議院副議長、政友本黨總務等に就任、濱口内閣成立と共に折務大臣となり、昭和九年七月岡田内閣成立と共に文部大臣として今日に至つた。

◆若林 實藏氏(三重書籍組合長)

三重縣書籍雜誌商組合長若林實藏氏は豫て病氣中のところ二月十日午前三時十二分逝去した。葬儀は十三日午後二時から津市馬場報恩寺で執行された。

◆田中 榮治郎氏(大阪榮進堂主)

大阪書籍雜誌商組合販賣調査委員、榮進堂主田中榮治郎氏は二月二十四日腦溢血のため逝去した。享年五十二歳。氏はまた「阪エハガキ組合幹事」としても業界のために盡すところが多かつた。

三月

◆河出 靜一郎氏(成美堂主)



古くより農園藝書類出版の書肆として知られ最近では河出書房を併稱文學方面にも進出し業績を擧げてゐる日本橋區通り三の成美堂主河出靜一郎氏は豫て病氣靜養中であつたが、三月二日午後三時品川區大井北濱川町一〇二一の自宅で逝去した。享年八十七歳。氏は岐阜縣の出

君とは全然別の道を歩んではゐたもの
變り者として一脈相通する氣骨を有して
ゐた。著書としては『ドグラ・マグラ』
『水の涯』『暗黒公使』『夢野久作集』『近
世快人傳』『少女地獄』『押繪の奇蹟』等
があるが氏の全作は現に續刊中の『夢
野久作全集(全十卷)』中に収録せられる
ことになつてゐる。

◇入江爲守氏(御歌所長)

皇太后大夫兼御歌所長從二位勳一等子
爵入江爲守氏は、三月十九日平常通り大
宮御所に仕仕午後五時半迄區余丁町の自
邸に歸り夕食後家族と會談してゐたが、
俄に腦溢血を起し同夜九時半迄に逝去し
た。享年六十九歳。畏き邊では同子爵危
篤の趣き聽召され同夜寛待醫を同邸に御
差遣御見舞あらせられた外葡萄酒一デー
スを御下賜遊ばされた。また皇太后陛下
には御紋菓などの御見舞品を御下賜あら
せられた。子爵は舊公卿冷泉家の出で明
治十六年殿掌となり同十九年依願免、同
四十一年には御歌所參候となり大正三年
東宮侍從長に任ぜられ同四年御歌所長を
兼ねた。大正十年十一月兼侍從次長と
なり昭和二年皇太后大夫に任ぜられ御歌
所長を兼ね、この間貴族院議員に當選す



◇橋戸信氏(野球界元老)

野球界の元老として麗筆を振ひ頑鐵の
ペンネームで野球ファンに親しみ深かつ
た東京日々新
聞客員橋戸信
氏は三月二十
三日午前六時
五十分日本橋
矢尾板病院で
急、肺炎のため急逝した。享年五十八
歳。氏は明治十二年三月十日芝區金杉で
生れた。青山學院を経て早稻田大學に入
り同大學野球部創設と共に初代主將とな
り名遊撃手として謳はれ押川、河野、獅
子内氏等と共に打倒一高の霸業を樹て明
治三十八年足袋はだしで米國へ初の遠征
を行つたことは有名な語り草として残さ
れてゐる。同大學の哲學科卒業後米國に
遊學、歸朝後萬朝報、大阪朝日、大正日
々新聞を経て東京日々新聞に入社、爾後
本邦野球界に貢献するところ多く殊にそ
の豊富な經驗と犀利な筆とをもつて後進

四月

◇小林盈氏(元東京府立第三高等女學校校長)

元東京府立第三高等女學校校長小林盈氏
は豫て中風で療養中であつたが、腦溢血
のため四月四日午後八時四十五分澁谷區
羽澤町四四の自宅で逝去した。享年七十
歳。氏は長野市の出身、明治二十五年東
京高等師範學校を卒業、同三十五年府立
第三高等女學校創立と同時に校長となり
以來昭和四年引退する迄在職二十八年教
育界に顯著な功績のあつた人である。

◇生沼大造氏(富山房支配人)

富山房支配人生沼大造氏は腸不通症で
帝都筑内科に入院加療中餘病を併發し
四月五日逝去した。享年六十六歳。氏は
明治四年五月三重縣伊賀上野に生れた。
明治二十二年上京して現東京開成中學校
の前身共立學校に入學、卒業後富山房に
入社し勤続四十餘年に及び社長坂本嘉治
馬氏を輔佐し大富山房建設の基礎を築い
た功勞者である。明治三十八年都下の中
教發行元をもつて明治圖書株式會社の設
立されるやその支配人をも兼ね自ら生文

◇牧野信一氏(小説家)

懐古的ロマンチックな作風をもつて文
壇に特異の地位を占めてゐた小説家牧野
信一氏は三月廿四日午後六時半頃神奈川
縣小田原町新玉町二ノ四〇〇自宅寢室で
縊死してゐたのを發見された。原因は藝
術的にも經濟的にも行詰りを來たし豫ね
て神經衰弱に悩んでゐたもので發作的厭
世自殺らしいと推せられてゐる。氏は明
治二十九年十一月十二日小田原町に生れ
大正八年三月早大英文科を卒業、中戸川
吉二氏その他同人雜誌「十三人」を創
刊その後時事新報社に入社約一箇年新聞
記者生活を送つたことがあり、雜誌「隨
筆」の編輯に當つたこともあつた。後間
もなく作家生
活に入り文壇
的には處女作
「爪」を發表し
て以來知られ
「蟬」「南風譜」



◇岡島敬治氏(慶大醫科教授)

慶大醫學部解剖學教室の創設者であり
同教室主任教授であつた岡島敬治博士
は、四月九日午後四時四十分牛込區余丁
町四二の自宅で腦溢血のため急逝した。
享年五十五歳。逝去の直後博士が豫て認
めて置いた遺書が發見された。それには
一遺骸は學校にて解剖を行ひ全身骨格を
標本として保存すること、といふ意味の
一節があり、その眞摯な學究の良心は並
みある人々を感激せしめた。博士は自分
の育て上げた慶大の解剖學教室が帝大等
のそれより歴史の新しいため標本の少い
のを遺憾とし、せめて一つでも満足な標
本を残したいといふ考へを早くより持つ
てゐたものらしい。その日博士は二高在
學の令息を仙臺まで送り歸京直ちに大學
に出勤この三年間心血を注いで纏めつつ
あつた「日本解剖學文獻集」の整理を續
け夕刻歸宅長逝したものである。博士は
富山縣の出身、明治三十四年金澤醫專を
卒業陸軍三等軍醫として日露戰役に從
軍、同三十九年長崎醫專の教授、同四十
年京大醫學部助手、大正二年醫學博士の

「ゼーロン」等の作品を發表最近には「西
部劇通信」の短篇集を世に送つてゐた。
著書には『牧野信一集』(平凡社發行)新
進傑作小説全集の第十二卷、『西部劇
通信』小説集『鬼涙村』同『酒盗人』等が
ある。没後友人の手により『牧野信一全
集』が第一書房より刊行されることにな
つた。

◇橋本文吉氏(實業之日本社取締役)

實業之日本社取締役兼編輯局長橋本文
吉氏は三月二十九日小石川區大塚仲町四
一の自宅で腦
溢血のため倒
れ帝大島内
科に入院中
あつたが同月
三十日午後四
時五十七分迄に逝去した。享年五十二歳。
告別式は四月一日午後一時半から築地本
願寺で執行された。氏は明治十八年九月
十七日の出生、明治三十九年高田師範學
校を卒業、同四十三年實業之日本社に入
社、同社に勤続すること二十五年出版部
主任となり、ついで出版部長を経て取締
役に擧げられ編輯局長を兼ね同社の爲め
に大いに盡すところがあつた。



學位を受け、京都府立醫學教授を経て現在に及んだ。

成瀬 正一氏(九州帝國大學教授)



九州帝國大學 學法文學部教授 成瀬正一氏は四月十三日午後五時三十分腦溢血のため急逝した。享年四十五歳。氏は明治二十五年四月二十六日の出生、一高を経て大正五年東京帝國大學英文科卒業、同年歐米に留學、同八年一旦歸朝、大正十年再びフランスに留學して同十四年歸朝、同年十月九州帝國大學講師、翌年五月教授となりフランス文學講座を擔當令名があつた。研究論文の主なるものとしては「デュ・ベレエの佛語據護論」(佛蘭西文學研究)第三輯、「十八世紀に於ける文藝サロン」(文學研究)第二・三輯、「新舊兩派の文藝論争」(文學研究)第七輯)等、翻譯にはロマン・ロオランの「トルストイ」がある。

田中 義一氏(醫海時報社長)

醫海時報社長田中義一氏は昨夏發病以

小石川駕籠町一二一の自宅で療養中であつたが四月十四日午前七時五十二分遂に逝去した。享年六十八歳。氏は明治二十六年醫學雜誌「醫海時報」を創刊多年醫政界に貢献した。

久保田 讓男(樞密顧問官)

樞密顧問官久保田讓男は去月二十五日以来左脚部に瘻質の腫物を生じ小石川區金富町の自邸に静養中であつたが、一週間前から食慾減退して衰弱を加へ十三日危篤に陥つた。畏き邊ではこの旨聴召され同日午後一時二十分を御下賜あらせられたが、四月十四日午前十一時二十六分遂に逝去した。享年九十歳。男は兵庫縣士族久保田周輔氏の長男として弘化四年に出生、明治五年文部省に入り廣島師範學校長、文部省會計局長、普通學務局長を経て文部次官となり、明治三十六年第一次桂内閣の折、前文相菊池大龍氏の後を襲ひ次官から拔擢されて文相に就任した。文相在任中日露戰役に際し主戰派を強調した東京帝大七博士問題でその責任を負ひ明治廿八年十二月辭職した。後男爵を授けられ勳選について樞密顧問官に親任せられた。謹嚴な理論家であつた。

紀 淑雄氏(早稻田大學教授)

早稻田大學教授、日本美術學校々長紀淑雄氏は四月四日腦溢血で卒倒し爾來淀橋區戸塚町一ノ四七三の自邸で療養中であつたが同月十五日午後十一時五十五分遂に逝去した。享年六十三歳。氏は星峯と號した。明治五年四月二十二日東京本所に出生、明治二十六年東京專門學校



京專門學校(現早稻田大學)を卒へ同二十六年から二十八年まで京都本願寺文學寮教授として國文學及び英文學を講じ、同二十九年母校東京專門學校講師となる。同三十年帝國博物館(現東京帝國博物館)より帝國美術略史編纂掛囑託、同三十二年帝國博物館調査課編輯掛を、ついで帝國美術史編纂委員を命ぜられた。同三十二年より大正六年まで女子美術學校講師を囑託せられ、明治四十四年早稻田大學教授となり以後東洋美術及び西洋美術の講座を擔當、同四十四年内閣より美術審査委員會委員を仰付けられ、翌四十五年及び大正二年の二回文展の審査員を拜命、大

滿川 龜太郎氏(拓殖大學教授)

拓殖大學教授滿川龜太郎氏は五月三日腦溢血で倒れ阿佐谷四ノ九二五の自宅で療養中同月十二日午後五時二十五分遂に逝去した。享年四十九歳。告別式は十四日午後三時から四時迄拓殖大學講堂で神式で執行された。氏は明治二十一年一月十八日大阪府豊能郡南豊島字原田に生れた。明治四十年清和中學を卒業早稲田大學政治科に入り中途退學東京外國語學校露語科に轉じたが學資の都合でこれまた中途退學、「民聲新聞」記者となり後「海國日報」記者となつた。大正三年雜誌「大日本」の主筆、同八年猶存社主幹となり同十三年十月拓殖大學教授に任命され爾來十三年間同校に於て東洋事情を講義してゐた。大正十四年宇都宮高等農林學校講師となり後また立命館大學講師をも兼ねた。昭和六年には興亞學藝會理事として細亞協會理事、維神顯修會理事として活躍した。著書には「列強の領土的並に經濟的發展」(大正七)、「今日の南



十八日大阪府豊能郡南豊島字原田に生れた。明治四十年清和中學を卒業早稲田大學政治科に入り中途退學東京外國語學校露語科に轉じたが學資の都合でこれまた中途退學、「民聲新聞」記者となり後「海國日報」記者となつた。大正三年雜誌「大日本」の主筆、同八年猶存社主幹となり同十三年十月拓殖大學教授に任命され爾來十三年間同校に於て東洋事情を講義してゐた。大正十四年宇都宮高等農林學校講師となり後また立命館大學講師をも兼ねた。昭和六年には興亞學藝會理事として細亞協會理事、維神顯修會理事として活躍した。著書には「列強の領土的並に經濟的發展」(大正七)、「今日の南

佐分 眞氏(洋畫家)



第八高等學校教授石井直三郎氏は二月以來胃癌で靜養中であつたが四月二十三日午後六時遂に逝去した。享年四十七歳。氏は明治二十三年七月十八日岡山縣小田郡矢掛町に生れた。岡山第六高等學校を経て東京帝國大學國文科を卒業、大正九年名古屋第八高等學校教授となつて今日に至つた。歌人として知られ短歌雜誌「水鏡」創刊に參劃これを監修して現在に及び、歌集「椎葉集」、「青樹」のほか「徒然草新釋」の著がある。

正六年には獨力をもつて本邦最初的美術研究所を設立し翌年日本美術學校と改稱し校長として藤岡經營兩方面に盡瘁、また大正十二年より帝國女子專門學校講師として美術概論を講じてゐた。我が國美術批評の先輩として明治大正の畫壇を裨益した氏の功績は時筆に値する。著書及び編著には、故郷復興一氏と共に起草編集の「日本帝國美術略史」をはじめ「日本美術集成」、「日本精華」(但し第一輯より第二十八輯まで)、「小山田與清傳」等があるが、病臥前まで執筆中の美術史其の他美術研究に關する著書起草の遺稿は目下整理編纂準備中である。

微笑の文士、ユーモリストとして賣出してゐた洋畫壇の中堅作家、舊帝展特選三回の佐分眞氏は、四月二十三日午前九時頃瀧野川區西ヶ原一〇八一の自宅アトリエ入口で癌死を遂げてゐるのを家人によつて發見された。癌死は同日午前一時頃と推定される。氏は大正十一年東京美術學校洋畫科を卒業、十年前しげ子夫人に死別、昭和三年單身渡佛、一旦歸朝し更に渡佛昭和九年に歸朝してからは小林一三氏に招かれて東寶劇場美術部囑託と

五月

米(大正八)、『奪はれたる亞細亞』(大正一〇)、『東亞人種闘争史觀』(大正一三)、『黒人問題』(大正一四)、『世界現勢と大日本』(大正一五)、『世界維新に而せる日本』(昭和二)、『黒人問題大觀』(昭和三)、『ユダヤ禍の迷妄』(昭和四)、『大日本外交史』(昭和五)、『東洋問題十八講』(昭和六)、『激變渦中の世界と日本』(昭和七)、『太平洋及濠洲』(昭和八)、『大變動期の世界と日本』(昭和九)等がある。

◇福永 渙氏(詩人)



詩人挽歌福永渙氏は胃病で臥床中五月五日午前十一時四十分移並區阿佐ヶ谷五ノ六五の自宅で逝去した。享年五十一歳。氏は山口縣の出身、明治四十一年早大英文科を卒業、名古屋新聞より萬朝報社に入り文藝部長を永く勤めた。退社後は著作の傍ら、日本大學、日本女子高等學院等に教鞭を取られた。氏は一時若山牧水等と共に詩歌壇に活躍し小説も書いたことがある。著作には散文詩集『習作』、短

篇小説集『夜の海』、翻譯にはロマン・罗兰著『マハトマ・ガンヂー』の譯其の他がある。

◇鬼頭 伊八良氏(文政書店主)

名古屋市西區傳馬町五ノ三文政書店主鬼頭伊八良氏は豫て病氣療養中のところ五月六日午後十時遂に逝去した。享年六十六歳。氏は明治四年十一月二日名古屋市に出生、十六歳の時川瀬書店に入り約二十年勤続、明治三十八年退店と共に文政堂を繼承、從來の小賣をやめて取次業を始め愛知、三重、岐阜、静岡其の他の近縣に販路を擴張し盛業をつづけ今日に至つた。温厚篤實な人格者で名古屋組合の販賣事故調査委員長及愛知組合の顧問に推され組合のために貢獻する所少なからざるものがあつた。

◇山本 松之助氏(元東朝社會部長)

元東朝日新聞社會部長元山本松之助氏は、昨年来氣管支喘息に罹り臥床中であつたが肺炎を併發して五月十日正午逝去した。享年六十四歳。氏は明治六年十月五日深川木場の舊家の主人としてまた淺草花屋敷創業者として知られる山本金藏氏の長男に生れた。長谷川如是閑氏



及び大野静方畫伯の實兄に當る。少年時代を本郷眞砂町の坪内逍遙氏の塾に送り明治二十七年やまと新聞の記者となり後中央新聞に轉じ明治三十一年東京朝日新聞社會部に入り大正八年同社を退くまで三十餘年間新聞生活を送つた。江戸時代及び明治時代文化の研究をもつて名があり、曾て樂山庵の名をもつて朝日新聞に連載した明治文藝起原に關する研究を纏め『明治世相百話』と題して公刊したのは死に先立つ半月前のことであつた。傍ら狂歌に興味をもち多數の作を残した。

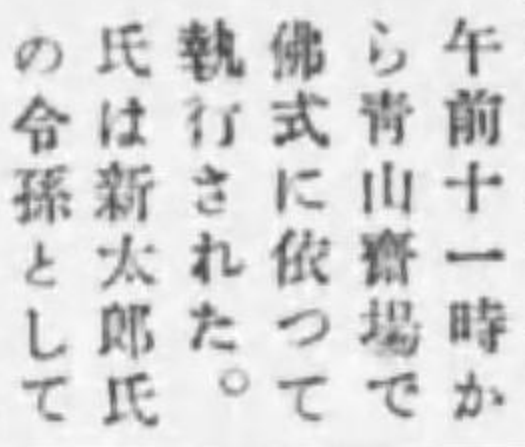
◇納所 辨次郎氏(元學習院教授)

もし、龜よを始め明治大正を通じて唱歌に軍歌に多くの作曲をなし全國を風靡した元學習院教授納所辨次郎氏は、昭和九年八月以來仙臺市仲ノ町に居住老後を愛孫達と共に送つてゐたが、五月十一日午前十時動脈硬化症のために逝去した。享年七十二歳。

◇大橋 太郎氏(博文館取締役)



博文館社長大橋太郎氏の嗣子、同館取締役兼支配人大橋太郎氏は豫て腹膜炎のため鎌倉長谷の別邸で療養中であつたが、五月二十日午後零時四十分遂に逝去した。享年二十九歳。告別式は二十二日午前十一時から青山齋場で佛式に依つて執行された。氏は新太郎氏の令孫として



◇松村 瞭氏(理學博士)



東京帝國大學理學部助教理學博士松村瞭氏は五月廿一日午後八時半延髓球麻痺のため麹町病院で逝去した。享年五十

七歳。告別式は二十四日午後一時から二時まで駒込吉野寺で執行された。氏は故東京帝國大學名譽教授松村任三氏の長子として明治十三年八月一日出生、明治三十六年七月東京帝國大學理學部助教授に勤務、大正十三年十一月理學博士の學位を受け同十四年五月東京帝國大學助教授に任ぜられ人類學の講義を擔當、傍ら太平洋學術會議委員、學術研究會議太平洋學術調査委員、東京人類學會總務幹事として人類學の爲めに盡瘁した。専門は體質人類學方面であつたが民族學考古學方面の業績も亦尠くなかつた。著書及び研究報告の主なるものには『人類名彙』(明治四一)、『Contribution to the Ethnography of Micronesia』(大正七年)、『東京帝國大學理學部大紀要』、『琉球荻原貝塚』(大正九年)、『東京帝國大學理學部人類學教室報告』、『世界人類實觀』(大正十年)、『On the Cephalic Index and Stature of the Japanese and their Local Differences』(大正十四年)、『東京帝國大學理學部紀要』等がある。

◇松岡 靜雄氏(海軍大佐)

退役海軍大佐松岡靜雄氏は神奈川縣藤



澤町鶴沼の自邸で病氣療養中五月廿三日午後零時五十五分遂に逝去した。享年五十九歳。氏は明治十一年五月一日兵庫縣神崎郡田原村辻川に生れた。柳田國男氏の弟、松岡映丘畫伯の兄に當る。明治二十八年海軍兵學校に入學、同三十二年海軍少尉に任官爾來果進して海軍大佐に任じ大正七年病を得依願豫備役に編入された。その間明治三十三年軍艦八雲の廻航員としてドイツに派遣され、日露戰役には軍艦千代田の航海長として彈雨の間を潜り軍令部參謀、塙國大使官附武官等を歴任、大正三年の日獨戰役には軍艦筑波の副長として南洋諸島に活躍、ボナベ島を占領、軍政署長として功績を立てた。退官後は日關通交調査會理事に就任激務に狹掌、大正十三年病氣のために遂に再起不能に陥るや豫ねて趣味として研讀してゐた日本語學の研究に没頭し、これに畢世の事業としての意義を見出し病軀を驅つて死に至るまでペンを持たず學徒としての生涯を畢つた。ミクロネシア民族の研究の權威、また國學者としても知

られてゐる。著書の主なものを著作年月順に挙げると、『南溪の秘密』『蘭和辭典』『爪哇史』(譯補)、『通俗文法講話』『太平洋民族誌』『日本語學』『チャモロ語の研究』『日本語學』『ミクロネシア民族誌』『中央カロン語の研究』『日本國體本義』『マインシャル語の研究』『日本古語大辭典』(二卷)、『パラウ語の研究』『歌學』『紀記論究』(十四卷)、『萬葉集論究』(第一輯、第二輯)、『ミクロネシア語の綜合研究』『有由縁歌と防人歌』等である。

◇柳澤保惠伯(貴族院議員)

貴族院議員伯爵柳澤保惠氏は尿毒症で芝三田の自邸で療養中であつたが、五月二十五日午後八時三十分途に逝去した。享年六十七歳。伯は明治二十七年學習院大學科を卒業後宮内省留學生としてドイツに赴きベルリン大學及びウィーン大學等で社會學、國家學を學び、歸朝後は統計學の權威として柳澤統計研究所の總裁となり、帝國政府代表として國際統計會議に列席すること前後十一回、餘力を實業界に注ぎ現に第一相互その他銀行會社に關係し、曾ては東京市會議長の椅子に

就いたこともあつた。明治三十七年以來貴族院に席を占め研究會の重鎮であつた。その趣味は廣く演藝、將棋、金魚、また食通として知られてゐた。

◇大森痴雲氏(劇作家)

劇作家痴雲大森鶴雄氏は咽喉癌のため大阪府下八尾町山本住友住宅地の自宅で療養中であつたが、五月二十六日午後九時半逝去した。享年六十歳。氏は肥後縣本藩士の家に生れ曾て朝日新聞社會部員たりしこともあり、大毎社を経て松竹に入り重に脈治郎付作者として活躍し代表作『菅公』『お夏清十郎』『舊染』『戀の湖』『櫻屋お仙』等の外舞臺に上せた劇作百五十種、關西劇壇の重鎮であつた。最後の上演作は舊藤延若等によつて中座の舞臺にかけられた『五千兩尼庄』であつた。

六月

◇尾竹竹坡氏(日本畫家)

竹坡尾竹染吉畫伯は舊冬以來氣管支喘息のため本郷區蓬萊町六ノ一の自邸で療養中であつたが六月二日午前五時途に逝

去した。享年五十九歳。氏は明治十一年新潟市に生れ川端玉章畫伯に師事し明治時代には實弟の國觀畫伯と共に國定教科書挿畫を執筆、舊帝展では推薦となつた。その後獨力で八火社を創立、個展に精進してゐた。

◇長尾半平氏(禁酒同盟理事長)

禁酒宣傳旅行の爲に京城に滞在中であつた長尾半平氏は、六月九日午後四時頃總督府農林局長室で矢島局長と對談中腦溢血で卒倒したが、手當の果斐もなく遂に同廿日午後四時逝去した。假葬儀は京城貞洞日本キリスト教會堂に於て行はれた。長尾氏は明治廿四年東京帝大工科大學を卒業、臺灣總督府を振出しに各地鐵道局長を歴任、昭和五年代議士となり現在日本禁酒同盟、東京キリスト教青年會各理事長に推されてゐた。同氏の禁酒宣傳は有名なものであり、禁酒に關する著書もある。

◇南部修太郎氏(前作家)

三田出身の作家として令名のあつた南部修太郎氏は数日前腦溢血で倒れ自宅で療養中であつたが六月二十二日午前九時途に逝去した。享年四十五歳。氏は明治



二十五年十月十二日仙臺市に生れた。大正六年慶大文科を卒業後『三田文學』の編輯に當り、處女作『修道院の秋』をもつて文壇からその將來を囑望され爾後幾多の創作を発表中堅作家として堅實の地位を占めてゐた。著書には『修道院の秋』『若き入獄者の手記』『返らぬ春』『露草の花』『湖水の上』『月光の曲』『過ぎ行く日』『鳥籠』その他がある。

◇網島佳吉氏(番町教會名譽牧師)

番町基督教會名譽牧師網島佳吉翁は動脈硬化症で芝區三田町一の自宅で療養中であつたが、六月二十七日午前一時四十五分逝去した。享年七十七歳。翁は岡山縣に生れ明治十八年同志社を卒業牧師となり同廿六年米國エール大學神學科を卒業神學博士の稱號を受け、明治四十二年以來煩悶相談所を開設、惱める子女の良き相談者として有名であつた。氏はまた大正十三年三月、日本國際基督教徒聯盟を代表して震災に際し熱烈な同情を寄せた米國民への答禮使として渡米、日米

親善のため盡す所大であつた。

◇鈴木三重吉氏(作家)

童話作家、日本騎道少年團理事鈴木三重吉氏は持病の神經痛のため帝大眞鍋内科に入院してゐたが六月二日午前六時三分逝去した。享年五十六歳。氏は明治十五年九月二十九日廣島市猿樂町に生れた。縣立第一中學校を経て明治三十七年九月東京帝大英文學部へ入學、漱石門家として在學中小説『千鳥』『山彦』を発表作家として名を成す。明治四十一年九月帝大を卒へ同十月成山中學校に赴任、同四十五年四月中央大學講師となつた。大正七年七月童話雜誌『赤い鳥』を創



刊わが國童話文學のために盡した功績は顯著であつた。小説には前記『千鳥』『山彦』の外『小鳥の巢』『桑の實』『櫛』『民子』『瓦』『八の馬鹿』等、童話集には『湖水の女』『をどりのたき火』『かるたの王様』『十二の星』『少年王』等がある。最近の著述『綴方讀本』は洛陽の紙價を高めた名著である。



◇石割松太郎氏(劇評家)

劇評家、早大講師石割松太郎氏は萎縮腎で慶應病院に入院加療中であつたが六月二十九日午前一時四十五分途に逝去した。享年五十六歳。氏は明治十四年一月二十四日堺市柳之町に生れた。明治三十一年七月早稲田大學文學部を卒業後一時出版及び國書刊行會の仕事に従事してゐたが後新聞記者生活に入り日本新聞、都新聞、帝國新聞、大阪新報を経て大正六年大阪毎日新聞社に入り同十四年同社調査課長に進み翌十五年六月社内職制改革により學藝部調査課長となつた。昭和七年早大の講師となり江戸文學、人形淨瑠璃研究家として知られてゐた。著書には『人形芝居雜話』(昭和五)、『人形芝居の研究』(昭和八)、『祥瑞の研究』(昭和九)、『近世演劇雜考』(昭和九)がある。

七月

◇太田 馬太郎氏 (日本書籍社常務取締役)

日本書籍常務取締役、共同印刷監査役太田馬太郎氏は、五月下旬痲疾の喘息に悩み萎縮腎を併發し牛込區拂方町二〇の自宅で加療中であつたが七月四日午前三時三十分遂に逝去した。享年六十八歳。氏は明治二十年八月志を立て、上京勝伯爵家に勤仕すること八年、明治二十八年博文館に入社し購買係主事に擢でられ同三十四年博進社工場支配人に就任し同三十六年國定教科書制度の決定に伴ひ日本書籍株式會社(現會社と異なる)が創設せられるや轉じて同社に入つたが、後大橋新太郎氏の創立せる東亞公司に招かれて其の書籍部を擔當して敏腕を揮つた。明治四十二年現在の日本書籍株式會社創立と共に入社取締役兼支配人に昇進し、更に昭和七年十二月大橋光吉氏社長に昇任の後を享けて常務取締役に推され今日に至つた。濃厚篤實情義に篤く又非常な活動家であつた。



會社(現會社と異なる)が創設せられるや轉じて同社に入つたが、後大橋新太郎氏の創立せる東亞公司に招かれて其の書籍部を擔當して敏腕を揮つた。

◇鈴木 友三郎氏 (明治書院取締役)

株式會社明治書院取締役鈴木友三郎氏は數年前から糖尿病を患ひ淀橋區西大久保の自宅に於て療養中であつたが、最近病勢昂進肺炎を併發して七月十日午後四時四十五分逝去した。享年七十一歳。別式は十一月十一日午前十一時から十二時迄深川區清澄町本誓寺に於て執行され頗る盛儀であつた。氏は神田三河町に於ける數百年の由緒ある舊家に生れ明治書院の創立者故三樹一平と同じく神奈川師範學校の出身で明治書院創立以來社業興隆のため盡瘁、大正十三年三樹社長逝去後社長に推され昭和六年病氣のため辭任して取締役之列してゐた。

八月

◇南 次郎氏 (北海道帝大前總長)

北海道帝大前總長、名譽教授農學博士南次郎氏は八月九日午後零時十二分札幌市南十八條西八丁目の自宅で逝去した。享年七十八歳。氏は安政六年三月十六日長崎縣彼杵郡大村町に生れた。明治十四年北海道帝大の前身札幌農學校第二

九月

◇伊藤 銀三郎氏 (大日本圖書支配人)

大日本圖書株式會社支配人伊藤銀三郎氏は今春來胃癌のため大森區久ヶ原町四五九の自宅に於て加療中であつたが、八月二十二日午後零時三十分遂に逝去した。享年六十八歳。氏は同社生え抜きの社員で會社の爲め盡瘁せる所頗る大であつた。

◇奥田 艶子女史 (女子高等職業學校校長)



東京女子高等職業學校校長奥田艶子女史は九月二十三日午前三時心臓麻痺で急逝した。享年五十七歳。女史は明治十三年二月廿五日兵庫縣淡路郡志村に生れた。幼少から發明研究心が強く明治三十三年

より五箇年間印度カルカッタで手藝研究、大正八年五月文部省生活改善會で奥田式裁縫の發表を行ひ大正十年四月東京小石川區大塚町に奥田裁縫女學校を設立して校長となつた。大正十五年四月東京市杉並區馬橋に校舎を新築同校を移轉、昭和三年九月北米合衆國視察旅行に出で滞在研究三箇年昭和五年十一月に歸朝、翌六年四月同所に東京女子高等職業學校を設立して校長となり今日に達んだ。著書には『新しき裁縫書』『奥田裁縫全書』等がある。

◇野澤 藤吉氏 (元二六新報主幹)

元二六新報主幹編輯局長、日本新聞協會常任理事野澤藤吉氏は豫て病氣のため芝區濱松町一ノ一の自宅で療養中であつたが、九月三十日午後二時遂に逝去した。享年六十八歳。氏は號を枕城と言つた。山梨縣の生れ、明治三十五年横濱新報(現横濱貿易新報)を創刊續いて二六新報、ホノル、新報、ハワイ新報の編輯長たりしことがあつた。

十月

◇加島 虎吉氏 (至誠堂書店主)



至誠堂書店主加島虎吉氏は腦溢血のため十月三日午前六時三十五分自宅で急逝した。享年六十六歳。氏は明治四年一月十日兵庫縣城崎郡豐岡町に生れた。神戸商業學校に學び十六歳の時志を立つて上京、本所の石材及び請負業の青木商店に入り後獨立して古本業を營み明治廿八年日本橋區人形町に書籍小賣店を開き、ついで和田垣博士の『青年訓話』を振出し出版界にも進出、更に日露戰役後圖書雜誌の取次をも兼ね日本橋區本石町に本店を設け隆々たる商勢を示し東都の出版及び取次界に覇を稱へたが、中途事業に蹉跌し大正十四年五月巨額の債務のため一旦店を閉ぢ整理を行ひ事業の挽回に努めたが意の如くならず、昭和七年よりは女學校用教科書の出版に専念してゐた。

◇草間 滋氏 (慶應醫學部教授)

慶應醫學部教授、北里研究所部長草間滋氏は肺炎のため慶應病院に入院療養中



十月八日午前七時三十分逝去した。享年五十八歳。告別式は十一月後芝白金三光町の北里研究所所葬として佛式に依り執行された。氏は長野縣の出生、明治廿九年東京帝大醫科を卒業同大學病理教室に入り後傳染病研究所技師を経て現在に至り我が國病理細菌學の權威であつた。

◇下田 歌子女史 (女子教育家)

我が女子教育界の先覺者下田歌子女史は九月末以來老衰病のため赤坂區青山北町六丁目の自邸で療養中であつたが、十月八日午後十一時遂に逝去した。享年八十一歳。告別式は十三日午後一時から實踐女學校で校葬をもつて神式で執行された。女史は安政元年八月八日岐阜縣美濃國惠那郡舊岩邑藩士平尾家に生れた。號を香雪、前名を「せき」といつたが、畏くも昭憲皇太后より歌子の名を賜はり宮様方の御養育に功があり一時華族女學校の學監に任せられたこともあつた。明治三十二年實踐女學校を興しその校長となり同三十九年には華族女學校の後身學習

院女學部長に任ぜられたが、翌年非職仰付けられ専ら實踐女學校の經營に當り傍ら大正九年より昭和元年まで愛國婦人會々長の要職にあり、その後愛國婦人會顧問、實踐女專、實踐高女、同第二高女、順心高女の校長として女子教育界に重きをなしてゐた。女史の著書及び編著はこれこそ汗牛充棟も齊ならぬほどの數に上つてゐるが、その殆どすべてが女子教育に關する著書、教科書である。その主なものは『和文教科書』(明治一八)、『小學讀本』八卷全九冊(同二〇)、『家政學』全二冊(明治二六)、『泰西婦女風俗』(同三二)、『女子の修養』(同三九)、『婦人常識の養成』(同四三)、『ボケット女大學』(同四三)、『婦人禮法』(同四四)、『日本女性』(大正二)、『婦人修養十講』(同三)、『家庭』(同四)、『女子の禮法』(同五)、『女子の修養』(同六)、『家庭文庫』全十二冊(明治三〇—三四)、『少女文庫』全六冊(明治三四—三五)、『子女教育全書』全六冊(明治三五)、『女子自修文庫』全五冊(明治三七—四五)、『婦人文庫』(明治四二)、『香雪派書』全六冊(昭和七一)、『源氏物語講義』(昭和一一)等である。

◆安田善次郎氏(安田同族會總長)

安田同族會總長であり安田銀行頭取の安田善次郎氏は十月十六日より麹町區平河町の自宅で病臥中であつたが十二指腸潰瘍のため病臥に革まり同月二十三日午後五時二十分急逝した。享年五十八歳。氏は明治十二年三月七日の出生、號を推園といつた。安田家は先代中富山から江戸に出て兩替商から身を起し明治の實業界に乗り出したことによつて家名が揚つた。故人は先代善次郎氏の長男として幼名を善之助といつたが大正十年家督を相続するに及んで父君の名を襲ひ安田一門の頭梁として先代以來關係の安田系銀行會社を統率、安田保善社總長、安田銀行、安田貯蓄銀行各頭取、安田信託社長の外第三十七、大垣共立、第三十六、第九十八、四國各銀行の顧問であつた。昭和三年十二月功勞により特に勳三等瑞寶章を賜はり同十一年十一月正五位に叙せられた。『芝居評判』年表稿本『假名書論語』(安田文庫叢刊第一



安田善次郎氏(先代)

◆三樹 胖氏(明治書院監査役)

明治書院監査役三樹胖氏は豫て中風のため小石川區丸山町三〇の自宅で療養中であつたが十月三日午後五時五十分遂に逝去した。享年六十一歳。氏は初代一平氏の令弟で明治九年神奈川縣津久井郡中野町に生れた。東京府立尋常中學校(現府立一中)を病のため中途退學、同二十九年明治書院創立と共に入つて令兄の事業を扶け大正三年株式會社に改組せらるゝに伴ひ監査役に就任、始終一貫社業興隆のために盡瘁顯著な功績を擧げた。



三樹胖氏(豫て)

◆岡倉由三郎氏(學者)

わが實業界の泰斗岡倉由三郎氏は豫て郷駒込病院に入院加療中であつたが十月三十一日午前七時五分遂に逝去した。享年六十九歳。告別式は十一

月二日午後一時から板橋區中新井町三ノ二二三〇の自宅で佛式によつて執行された。氏は明治元年二月廿二日元福井藩士岡倉勘右衛門氏の四男として横濱に生れ令兄豊三氏より分れて一家を立て夙に英人サンマース氏に就き英語を學んだ斯界の先覺であつた。幼少の頃は病弱のため諸塾を轉々し明治二十三年東大の選科を卒業、同二十四年朝鮮京城の日本語學校校長として赴任、同二十七年鹿兒島高等中學校道土館教授、二十九年九月東京高等師範學校に轉じ、三十三年には外國語學校の朝鮮語教師を兼任明治三十五年より向ふ三年間主として英獨に外遊、歸朝後高等師範學校の英語科主任となり同校には大正十四年春まで奉職。尙立教大學には明治四十年に出講してより本年三月まで教鞭を執つてゐた。育英事業に盡すこと前後實に四十有五年傍ら著述に從事、研究社「英文學叢書」の監修及び註釋、『英和大辭典』の編纂等の大事業を完成、またラヂオの英語講座では放送開始以來の擔當で、その名調子はA氏の寶とされてゐたものであつた。著書及び編纂書には、前記の外『日本語學一編』(明治二三)、『日本新文典』(明治二四)、『日本文典大綱』(明治三〇)、『新撰日本文典』(明

十一月

◆小倉伸吉氏(理學博士)

海軍技師理學博士小倉伸吉氏は鴨埵轉のため十月二十六日以来杉並區醫院で療養中であつたが、十一月一日午後五時二十八分遂に逝去した。享年五十二歳。葬儀は四日午後二時から世田谷區上北澤町三ノ八七七の自宅で佛式に依り執行された。氏は宮城縣の生れ明治四十一年東京帝大理學部を卒業、東京天文臺に入り大正六年海軍省水路部に轉じて技師となり昭和三年理學博士の學位を受けた潮汐、天文の權威であつた。

◆岡田朝太郎氏(法學博士)

早大講師、明大教授法學博士岡田朝太郎氏は神奈川縣葉山町堀ノ内二〇一の自宅で病氣療養中十一月十三日午前六時半遂に逝去した。享年六十九歳。葬儀は十五日午後二時から三時まで青山賣場で執行された。博士は刑法の大家で明治三十九年支那政府の招聘で渡支、同國現行の刑事訴訟法、法律院編制法、違警律等は總て博士の起草になつたものである。博士はまた古川柳の研究に於ける第一人者として著名であつた。



岡田朝太郎氏(豫て)

◆谷 孫六氏(著述家)

『岡長押切帳』で知られた谷孫六こと矢野正世氏は十月下旬より胃潰瘍を患ひ浦和市中野原三七二ノ一の自宅で療養中であつたが十月十七日午前七時十五分逝去した。享年四十八歳。氏は明治二十二年一月十二日茨城縣北相馬郡大野村野木崎に生れた。佛號を不孤庵有隣といつた。母方の曾祖父に能登の人で谷孫六と



いふ人があり後年これをとつてペンネームとした。大正二年東京毎夕新聞に入社

新聞人としてのスタートを切り震災後萬朝報社、内外通信社、讀賣新聞社等を経て昭和六年花王石鹼長瀬商會常務取締役となつたが、昭和十一年三月一切の編輯を離れて宿願の機關雜誌「財の教」を創刊これが經營に全力を傾けてゐた。著書には右の外『孫六錢話』(昭和四)、『貨殖全集』全十五冊(同上)、『日本永代藏』(昭和七)、『頑張ズム』(昭和八)、『岡辰分限帳』(昭和一〇)、『逆説法』(同上)、『着眼の天才』(同上)、『絶好のチャンス』(同上)、『孫六の戦法』(同上)、『孟子の説法』(同上)、『ガンバリズム』(同上)、『生きた富豪術』(同上)等がある。

◇中山 秀三郎氏(帝國學士院會員)

帝國學士院會員、東大名譽教授工學博士中山秀三郎氏は、今夏來老病のため本郷區駒込西片町一〇の自邸で療養中であつたが、肺炎を併發十一月十九日午前二時逝去した。享年七十三歳。博士は愛知

縣に生れ、東大卒業後同大學土木工學科助教授となり歐洲留學歸朝後教授に進み工學博士の學位を受け、河川港灣學の第一人者として學界に重きをなしてゐた。

十二月

◇寺田 鼎氏(作家)

作家寺田鼎氏は腦溢血のため十二月七日急逝した。享年三十七歳。氏は明治三十四年二月六日鹿兒島縣日置郡吉利村に生れた。幼少の時米國人の家庭に住み英語をよくした。十九歳横濱でガイドをしたことがあり後ジャパン・アドヴァタイザー社に入社、大正十年思想關係で入獄二年、出所後映畫界に入りパラマウント、ユナイテッド・アーチスト、ビーデーシー、ワーナーブラザー、内外商事、大同商事等を経る傍ら、『ゼンダ城の虜』『金のない猶太人』『世間知らず』『精熱の焰』『暗殺引受業』『トレント殺人事件』等の譯著を出し、雜誌「舞臺」に毎號映畫批評を執筆、晩年は宿願の演劇方面に専念し「肉眼」「宥されぬ罪」「空想部落」等を脚色上演して前途を囑望されてゐた。

◇飯田 忠純氏(文化史家)

アラビア文化史研究の新進學徒として囑望されてゐた飯田忠純氏は十二月十四日腦溢血で急逝した。享年三十九歳。氏は史學專攻以外に音樂評論家としても知られてゐた。



治三十五年四月入店勤續十二年、大正四年九月退店して獨立、本郷區本郷五丁目玉屋書店を開きこれが經營に當つてゐたが、昭和十年十二月聘せられて株式会社上田屋書店の専務取締役に就任、社業の隆盛に獻身今日に及んでゐた。

◇齋藤 義範氏(上田屋書店専務取締役)

上田屋書店専務取締役齋藤義範氏は十一月二十六日以来心臟を患ひ帝大病院に入院加療中であつたが十二月十日午後二時十五分逝去した。享年四十七歳。氏は明治二十三年十二月二十六日の出生、明治三十五年四月入店勤續十二年、大正四年九月退店して獨立、本郷區本郷五丁目玉屋書店を開きこれが經營に當つてゐたが、昭和十年十二月聘せられて株式会社上田屋書店の専務取締役に就任、社業の隆盛に獻身今日に及んでゐた。

日本滞在二十年浮世繪の研究家として知られてゐた早稲田第一及び第二高等學院講師米國人ジョン・スチュワート・ハッパ―氏は、十二月十九日夜滋谷區伊達町七七の自邸で心臟麻痺を起し急逝した。享年七十三歳。氏は浮世繪に造詣深く「ヒロシゲ・ハッパ―」の異名もあり最近『日本のスケッチと日本の錦繪』を出版し日本の錦繪を世界に紹介したばかりのところであつた。

◇牧野 菊之助氏(元大審院長)



元大審院長法學博士牧野菊之助氏は豫て病氣のこの十二月二十四日杉並區成宗三ノ三五四の自邸で長逝した。享年七十一歳。氏は慶應二年十二月二十一日江戸に生れた。明治二十四年七月東京帝國大學法科大學佛法科卒業後司法部に入り前橋地方裁判所判事を振出しに東京控訴院判事、同部長、大審院判事、京都、東京各地方裁判所長、名古屋、東京各控訴院長、大審院部長に歴補、昭和二年八月大審院長に親任同六年十二月停年退職、

純粋の意味の司法官で温厚篤實の君子であつた。著書には『日本親族法論』(明治四一)、『日本相續法論』(明治四二)、『民法要綱』(大正一五)、『陪審法大意』(昭和二)、『法憲餘瀝』(昭和一一)等がある。

◇安藤 和風氏(秋田魁新報社長)

秋田魁新報社長安藤和風氏は本年七月下旬頃より狭心症で自宅に於て療養中であつたが、胃潰瘍を併發し十二月二十六日午前零時四十分遂に逝去した。享年七十一歳。氏は少年時代より詩才に富み獨學俳諧の道に精進し明治三十四年俳句雜誌「初しぐれ」を創刊し當時正岡子規の日本派とは別に月並打破の運動を起し初心者の指導に力を竭す傍ら東北古俳人の事蹟に就いて續々研究を發表、俳諧史上に致した貢獻の洵に大なるものがあつた。翁の著作で刊行されてゐるものは餘技の歌集『裸』を加へて二十冊であるがこれを大別すると俳諧關係の十三冊と郷土史關係の六冊となる。前者の主なるものは『古今俳家逸話』(明治三四)、『戀愛俳句集』(明治三七)、『閑秀俳句集』(明治三八)、『俳諧新研究』(大正六)、『類題大成五明句集』(昭和九)、及び翁四十餘年間の句生涯中に於ける收獲を集めた『旅

◇三品 長三郎氏(東朝客員)



一筋『仇花』『朽葉』等である。

東京朝日新聞社客員三品長三郎氏は萎縮腎のため十二月二十六日午後三時二十五分順天堂病院で逝去した。享年七十九歳。氏は安政四年一月一日の出生、明治三年大學南校を中途退學、工部省技手となつたが明治十五年東京繪入新聞に入社新聞記者の傍ら小説の筆をとり柳亭派高島斐泉を師として柳亭亭彦と號した。大阪の諸新聞を経て明治二十九年東京朝日新聞に入社、三品蘭溪の筆名で半井桃水、櫻庭蓬村等と小説壇に活躍したが、昭和五年朝日新聞社勤續三十年の表彰を受けて引退し以來客員として赤坂區氷川町一六の自宅に自適の生活を樂しんでゐた。著書には『小夜千鳥波之音信』『浮沈』『流辰辰五郎之傳』『幕府餘情忠勇談』『雪問の紅梅』『戀の執念』『影と光』『戀愛外道』『心の幻影』『血染の短刀』『色變化』『青年士官』『錢屋五兵衛』(實錄全書第十七卷)その他數種がある。

創刊・改題・廢刊雜誌

一月號

- ◇**讀物雜誌**……大衆讀物、實話講談等を掲げた娛樂雜誌。四六判、月一回、三十五錢、大日本讀物社。
- ◇**文藝雜誌**……有望なる氣鋭の新進作家を中心とする文藝雜誌。菊判、月一回、三十錢、砂子屋書房。
- ◇**新劇人**……新劇運動を發達助長せしめんとする雜誌。菊判、月一回、三十錢、新劇人社。
- ◇**青年學校**……青年教育の重要問題、青年學校の教材を解説せる雜誌。菊判、月一回、四十錢、南郊社。
- ◇**性科學研究**……性の諸問題を凡ゆる方面から研究せる雜誌。菊判、月一回、四十錢、性科學研究社。
- ◇**日本文英語**……詩歌俳句の英譯、小説の譯註、實驗本位の英語の研究をせる雜誌。菊判、月一回、二十錢、日本英語社。

二月號

- ◇**小教員受驗**……小教員獨學受驗者に必要な知識を記述した雜誌。菊判、月一回、二十五錢、新生閣。
- ◇**山陵**……皇陵に就ての研究雜誌。菊判、月一回、大日本皇陵史刊行會。
- ◇**生活**……評論、創作、研究隨筆等を掲載せる文學雜誌。菊判、月一回、三十錢、芝書店。
- ◇**文藝懇話會**……文藝懇話會會員が交互に編輯する文藝雜誌。菊判、月一回、三十錢、文藝懇話會。
- ◇**つづ**……映畫、レヴューに關する記事並に小説等を掲げた雜誌。菊判、月一回、十五錢、とつづ發行所。
- ◇**現實**……リアリティを革新し高めてゆかうとする文學雜誌。菊判、月一回、三十錢、三笠書房。
- ◇**アリア**……寫眞知識……アマチュアカメラマンの爲の作品と記事を収めた雜誌。四六倍判、月一回、二十錢、明朗社。
- ◇**進む日**……時事評論、思想評論、皇道の研究、人物評論、憲法問題。

三月號

- ◇**浮世繪**……浮世繪を主として
- ◇**モダン演劇**……事實物語、歌謠、小説、映畫記事、趣味の話、コント等を掲載した娛樂雜誌。四六倍判、月一回、十五錢、衆文社。
- ◇**小説**……小説、評論、感想隨筆、詩等を収めた同人雜誌。菊判、月一回、三十錢、歩行社。
- ◇**南**……支那を中心として國際外交政治軍備問題を扱つた評論雜誌。菊判、月一回、三十錢、南湯會。
- ◇**幼年畫報**……一月號より「紀元」「食道樂」一月號のみ休刊。
- ◇**改題**……「蒲田」は「オール松竹」に、「犬」は「犬界」に、「詩精神」は「詩人」に、「ライカ」は「月刊小形カメラ」に、「東邦時論」は「政經交通評論」と、以上何れも一月號より改題。

〔廢刊〕「文藝放談」一月號より廢刊。

二月號

- ◇**地理と經濟**……日本經濟地理學會の編輯になる經濟地理の研究雜誌。菊判、月一回、四十錢、日本經濟地理學會。
- ◇**ミネルヴァ**……原始文化、人類學考古學、民俗學等を研究せる雜誌。菊判、月一回、三十錢、翰林書房。
- ◇**演劇評論**……演劇時評、戯曲其他演劇に關する記事を掲げた演劇研究雜誌。菊判、月一回、三十五錢、演劇評論社。
- ◇**農業雜誌**……農業に關する新研究、新知識を實際的に説明せる雜誌。菊判、月一回、十五錢、農業雜誌社。
- ◇**讀書感興**……隨筆と趣味の雜誌。菊判、隔月一回、五十錢、双雅房。
- ◇**訓育**……眞實の教育に精進する水戸市竹隈小學校を中心とする雜誌。菊判、月一回、二十錢、第一出版協會。

〔話と小説〕「モダン演劇」二月號より廢刊。

三月號

- ◇**新評論**……當代の若い世代が悩んでゐる問題を追究せんとする文學雜誌。菊判、月一回、三十五錢、新評論社。
- ◇**現代詩**……伊福吉部隆氏編輯の詩雜誌。菊判、月一回、四十錢、現代詩發行所。
- ◇**人文庫**……武田麟太郎氏編輯の小説を主にした文藝雜誌。菊判、月一回、二十五錢、人民社。
- ◇**藝界よみもの**……映畫、演劇、音楽舞踊界等の各種藝界よみもの、グラフィックを収めた雜誌。四六倍判、月一回、十錢、日本藝術家聯盟。
- ◇**映畫日本**……自由な立場から映畫界を批判し育て上げ様とせる雜誌。四六倍判、月一回、二十五錢、映畫日本社。

江戶文化並に一般美術の研究をなせる雜誌。菊判、月一回、一圓、浮世繪同好會。

四月號

- ◇**青年教育資料**……日本青年教育研究會の機關雜誌。菊判、月一回、二十五錢、日本青年教育會。
- ◇**觀**……築地を中心とした新劇團の活動並に新劇界の狀況を紹介せる雜誌。菊判、月一回、二十錢、築地小劇場後援會。
- ◇**復活**……「財界之指針」三月號より復活。
- ◇**東陽**……新しい傳統を作り今日の作品を産む事を主張とせる東邦美術雜誌。四六倍判、月一回、一圓、集林書房。
- ◇**設計資料**……各種の設計を圖面を中心にして掲載した雜誌。四六倍判、月一回、四十錢、工業圖書株式會社。
- ◇**ゼネヴァ俱樂部**……ゼネヴァ俱樂部の機關雜誌で、財政經濟文藝に關する記事を収む。菊判、月一回、五十錢、勞働立法研究所。

◇女子と子供の體育……女子と子供の體育に關する理論と實地指導の要領を掲載せる女子體育振興會の機關雜誌。菊判、月一回、三十錢、女子體育振興會

◇舞踊教材……幼稚園及び小學校兒童に適應した舞踊教材を収めた雜誌。菊判、月一回、十五錢、東冠書房

◇學校童話……心の教育を興へる童話を聴方資料中心に収めた雜誌。菊判、月一回、三十五錢、白鳥社

◇高一學習指導……教材研究を豊富に収めた高一の解説雜誌。菊判、月一回、六十錢、小學館

◇高二學習指導……教材研究を豊富に収めた高二の解説雜誌。菊判、月一回、六十錢、小學館

◇高一研究……高一の教育教授上重要な問題を検討せる雜誌。菊判、月一回、五十錢、泉文社

◇高二研究……高二の教育教授上重要な問題を検討せる雜誌。菊判、月一回、五十錢、泉文社

◇大衆の哲學……唯物論の大衆化を目的とせる雜誌。菊判、月一回、十錢、三一書房

◇明……綜合雜誌の持つ文化的價値と大衆雜誌の興起とを兼ねた

◇雜誌。菊判、月一回、五十錢、信正社

◇日本映畫……大日本映畫協會の機關雜誌。四六倍判、月一回、二十錢、大日本映畫協會

◇小三年俱樂部……美しい繪と爲になる文を収めた三年生の雜誌。菊判、月一回、四十錢、中央閣

◇木香通信……創作、詩其他を掲載せる文藝雜誌。菊判、月一回、二十錢、昭森社

◇時事往來……政治、社會、財政經濟其他の時事問題を批判、検討、紹介せる雜誌。菊判、月一回、二十錢、時事往來社

◇師道……師道の本質を闡明すると共に教育精神を復興するを以て目的とする教育雜誌。菊判、月一回、三十錢、弘學社

◇受験者の爲に代數……幾何、三角を講義し、入試問題を掲げた雜誌。菊判、月一回、十錢、天元社

◇獨語研究……四月號より復活。

五月號

◇電氣工事人……電氣工事人として心得ておかねばならぬ事を解説せる免許試驗指導雜誌。四六倍判、月一回、十五錢、選試社

◇機械及電氣……機械と電氣の理論と實際に亘る研究雜誌。三三判、月一回、五十錢、養賢堂

◇日本刀及日本趣味……日本刀趣味の普及と國粹日本趣味の復興作振を圖れる雜誌。四六倍判、月一回、三十錢、中外新聞社

◇歌謡劇場……歌謡、音樂、舞踊評論等を収めた白木楓葉氏編輯の歌謡雜誌。菊判、月一回、三十錢、現代歌謡出版社

◇作家精神……高木卓、野口富士男、直下五一、木暮亮氏等を同人とせる文學雜誌。菊判、月一回、二十錢、作家精神社

◇明日……今井邦子氏主宰の短歌雜誌。菊判、月一回、四十錢、明日香社

◇映畫創造……藝術としての映畫と映畫理論の確立を叫ぶ雜誌。菊判、月一回、三十錢、映畫創造社

◇實用雜誌……すぐに役立つ實用的記事のみを掲げた雜誌。菊判、月一回、二十錢、スタイル社

六月號

◇回、四十錢、實用雜誌社

◇映畫ファン……グラフィック、讀物等を収めた興味本位の大衆映畫雜誌。四六倍判、月一回、三十錢、映畫世界社

◇コドモ漫畫……すてきな漫畫、面白い讀物を収めた漫畫雜誌。四六判、月一回、二十錢、大陸社

◇洋裁春秋……洋裁に關する一般知識及びそれに附隨する記事を収む。菊判、月一回、二十五錢、クララ洋裁學院出版部

◇ゲラ……硝子工業に關し世界各國の技術、經濟其他の研究やニュースを發表せる雜誌。四六倍判、月一回、三十錢、東洋硝子新聞社

◇中日文化……中日兩國の問題を檢討し、兩國の理解を深める爲の雜誌。菊判、月一回、二十錢、中日文化社

◇(休刊)

◇(詩人時代)「食道樂」「臺所と浴室」五月號より休刊。

◇(慶刊)

◇(醫學)「醫學」五月一日號限り廢刊。

◇(改題)

◇(滿蒙時代)五月號より「魂」と改題。

◇(創刊)

◇國文學……國文學中の名篇を解釋し、鑑賞と批評をなせる藤村作博士主宰の雜誌。菊判、月一回、三十錢、至文堂

◇文學讀本……創作、評論、詩等を収めた同人雜誌。菊判、月一回、三十錢、鳳文書院

◇文學生活……創作や評論を収めた外村繁氏編輯の文學雜誌。菊判、月一回、三十錢、文學生活編輯所

◇行動文學……行動主義文學作品の發達を圖るための雜誌。菊判、月一回、二十五錢、西東書林

◇中央演劇……木村錦花氏主宰の演劇雜誌。菊判、月一回、五十錢、中央演劇社

◇女性科學……科學をやさしく日常生活に取り入れられる様に説いた雜誌。四六倍判、月一回、二十錢、女性科學社

◇スタイル……洋裝、美容、流行に關する記事とグラフィックを収めた宇野千代氏編輯のスタイル・ブック。菊判、月一回、二十錢、スタイル社

◇(創刊)

◇(復活)

◇(改題)

◇(滿蒙時代)

◇(醫學)

◇(慶刊)

◇(休刊)

◇(詩人時代)

◇(慶刊)

◇(改題)

◇(滿蒙時代)

評論社。

◇農村研究……農村に於ける社會經濟的諸問題を研究せる雜誌。菊判、月一回、四十錢、壬生書院。

◇商工經濟……世界政治、經濟の動向其他商工經濟一般に就ての研究雜誌。菊判、月一回、三十錢、森山書店。

◇萬教歸一……萬教をして今日の時代に適應したる思想、信仰、生活を樹立せしめんとする雜誌。菊判、月一回、三十錢、萬教歸一社。

(休刊)

「文藝雜誌」「街歌」六月號休刊。

(改題)

「我觀」六月號より「東大陸」に、「受驗時代」六月號より「陸海軍受驗時代」と改題。

七月號

(創刊)

吟……日本精神を基礎とし、質實剛健の氣風を作興するに必要な詩吟の研究雜誌。菊判、月一回、三十錢、古今莊。

◇詩吟界……國民精神の作興と共に復活擡頭して來た詩吟の研究雜誌

菊判、月一回、十錢、二松堂。

◇耕 地……文藝雜誌「經緯」にみた人達が發刊せる文藝同人雜誌。菊判、月一回、二十錢、耕地發行所。

(休刊) 「文藝雜誌」「手形法研究」「學生文壇」七月號休刊。

(復活) 「國策」七月號より復活。

八月號

(創刊)

◇兒童劇場……兒童演劇を廣汎なる分野から検討せる雜誌。菊判、月一回、三十錢、東京童話劇協會。

◇小受驗の友……中等學校へ入學する小學生の爲に受驗に必要な知識を説いた雜誌。菊判、月一回、十五錢、白潮社。

◇文 筆……「文藝雜誌」を改題創刊せる文學雜誌。菊判、月一回、二十錢、砂子屋書房。

(休刊)

「群鳥」「カレント・ヒストリー」「八月號」「東京醫事新誌」八月廿九日號休刊

「月刊探偵」八月號より廢刊。

(改題) 「大日活」は「日活畫報」に、「教育東西南北」は「日本文化と國民教育」に「文藝ざつろ」は「文藝アパート」に何れも八月號より改題。

九月號

(創刊)

◇實踐國史教育……國民教育の實踐記録を收録せる雜誌。菊判、月一回、三十錢、國民研究會。

◇演劇行 動……戯曲、演劇評論、時事問題、批評其他を收めた演劇雜誌。菊判、月一回、三十五錢、昭英書房。

◇想 苑……論文、小説、戯曲、詩歌、俳句、感想、隨筆を收めた雜誌。菊判、月一回、十五錢、東京閣。

◇今日の知識……今日の國民が心得べき政治、經濟其他の知識を解説せる雜誌。菊判、月一回、二十錢、民衆法令普及會。

◇日本民 謡……濱田廣介氏主宰の作品を本位とせる民謡雜誌。菊判、月一回、三十錢、日本民謡社。

◇英語俱樂部……英語の原文に解釋

ロ書房。

◇雜 話……社會の種々相を扱つた雜誌。四六四倍判、月一回、二十錢、雜話社。

(休刊) 「讀物雜誌」「婦人文藝」十月號より休刊。

(復活)

「ムジカ」「歷程」十月號より再刊。「教育の實際」十月號より「文教」と改題す。

十一月號

(創刊)

◇夢の國……兒童の心の健全な成長を助けることに理想を置いた童話雜誌。菊判、月一回、二十五錢、夢の國社。

(休刊) 「紀元」「國藝之友」十一月號のみ休刊となる。

十二月號

(創刊)

◇小學校體育……兒童體育に對象を置き、改正學校體育の實踐知識を掲載

十月號

(創刊)

◇科學ペン……科學者でペンを執る人々の全國的なクラブたる科學ペンクラブの機關誌。菊判、月一回、三十錢、三省堂。

◇探偵春秋……論說、創作、翻譯隨筆等を收めた探偵小説雜誌。菊判、月一回、二十錢、春秋社。

◇饗宴……文化、哲學等に關する研究、批判を收録せる學術雜誌。四六倍判、月一回、二十五錢、刀江書院。

◇小學校體育……兒童體育に對象を置き、改正學校體育の實踐知識を掲載

せる雜誌。菊判、月一回、三十錢、成美堂。

◇大眾政治經濟……日本政治經濟研究所編輯の雜誌。菊判、月一回、二十錢、同人社。

◇3 3……グラフを多く入れた時事問題、趣味、映畫等の記事と小説を收めた雜誌。四六倍判、月一回、五十錢、スタア社。

◇雜 記 帳……松本俊介氏編輯の隨筆雜誌。菊判、月一回、三十錢、綜合工房。

◇文學精神……研究、評論、創作等を收めた文學雜誌。菊判、月一回、三十五錢、文學精神社。

◇古典研究……我國の古典を縱横に批判論究せる雜誌。菊判、月一回、五十錢、雄山閣。

◇高 數 研 究……藤森良藏氏主宰の高等數學の研究雜誌。四六倍判、月一回、五十錢、考へ方研究社。

◇カメラクラブ……カメラ界の權威鈴木八郎氏編輯の大家寫眞雜誌。四六倍判、月一回、三十五錢、アルス。

◇民 謡 讀 本……民謡及び童謡の本質を究明し、多數の作品を收めた民謡雜誌。菊判、月一回、二十錢、トロカ

◇カメラアングル……何かの暗示、諷刺短文等を満載せる綜合感覺文化雜誌。菊判、月一回、十錢、支陽社。

◇新評論……言論界に確固たる主張を掲げて進まうとする評論雜誌。菊判、月一回、三十錢、新評論社。

◇文藝創作……無名作家の向上を計れる文藝雜誌。菊判、月一回、三十錢、日本創作社。

◇國際日本……正當な輿論を指導せんとする雜誌。菊判、月一回、三十錢、國際日本協會。

◇洋裝クラブ……洋裝の正しい指導雜誌。四六倍判、月一回、四十五錢、東京社。

(慶祝)
「エクリベン」「版藝術」十二月號限り廢刊となる。

昭和十一年 豫約本總覽

新規募集

日蓮主義大講座 一〇卷一・五〇 アトリエ社
 觀世流改訂本 二卷一・〇〇 本行發行
 嶺山陽名著全集 八卷二・五〇 華陽社
 横光利一全集 一〇卷一・五〇 非凡社

日本哲學全書 二卷一・五〇 第一書房
 フランス現代小説 一〇卷一・五〇 第一書房
 日本名文鑑賞 八卷一・五〇 厚生堂
 相馬御風隨筆全集 六卷二・〇〇 厚生堂
 運命學大成 八卷二・三〇 東學堂
 綜合工學全集(電機) 一六卷二・〇〇 新評論社
 綜合工學全集(機械) 一五卷二・〇〇 新評論社
 綜合工學全集(土木) 一三卷二・〇〇 新評論社
 綜合工學全集(建築) 一三卷二・〇〇 新評論社
 綜合工學全集(農工) 一三卷二・〇〇 新評論社
 綜合工學全集(工業) 一三卷二・〇〇 新評論社
 電氣工事人講習録 八卷二・〇〇 新評論社
 大日本史講座 一八卷二・〇〇 雄山閣

最新蠶絲業講座 二卷一・〇〇 成美堂
 唯物論全書(第二卷) 九卷一・六〇 三笠書房
 唯一學教育講座 二卷一・〇〇 三笠書房
 現代教育學大系(原論) 二卷一・〇〇 成美堂
 漢詩大講義 二卷一・〇〇 成美堂
 現代教育學大系(原論) 二卷一・〇〇 成美堂
 木材工藝叢書 四〇卷一・〇〇 成美堂
 日本少國民文庫 一六卷一・〇〇 成美堂
 書道大講義 六卷一・三〇 新評論社
 婦人書道講座 六卷一・三〇 新評論社

尋四學級教育講座 二卷一・〇〇 四海書房
 世界長篇小説全集 一〇卷一・五〇 三笠書房
 日華大辭典 三卷一・〇〇 東洋文化社
 標準世界書目全集(兒童部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(文學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(科學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(藝術部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(宗教部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(社會部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(地理部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(歷史部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(政治部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(法律部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(醫學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(農学部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(工學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(商學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(教育學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(心理學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(社會學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(倫理學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(宗教哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(科學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(藝術哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(社會哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(政治哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(法律哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(醫學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(農學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(工學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(商學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(教育哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(心理學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(社會學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(倫理學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社
 標準世界書目全集(哲學哲學部) 二卷一・五〇 春秋社

新銳大眾小説全集 一六卷一・〇〇 アトリエ社
 藝術資料(第一輯植物) 二卷一・〇〇 雄山閣
 大トルストイ全集 二卷一・八〇 中央公論社
 汽機士講座 六卷二・〇〇 共立社
 教育學辭典 五卷六・五〇 成美堂
 新法學全集 三卷一・五〇 アリス
 新機械工學大講座 一八卷二・八〇 アリス
 二物語日本文學 二四卷二・〇〇 至文堂
 歐外全集(著作) 二卷一・五〇 特選書店
 新興日本叢書 一〇卷一・〇〇 日本青年館
 實用支那語講座 一〇卷一・〇〇 光明堂
 生命の實相 一〇卷一・〇〇 光明堂
 アリス土木工學大講座 一八卷二・五〇 非凡社
 長田幹彦全集 一六卷一・〇〇 非凡社
 紅薔薇十人全集 一〇卷一・〇〇 新評論社
 受胎基礎講座 八卷一・二〇 正印社
 花袋全集 七卷二・二〇 成美堂
 現代教育學大系(各科) 二四卷一・〇〇 成美堂
 伊東忠太建築文獻 六卷六・〇〇 成美堂
 佐藤紅録全集 一六卷一・五〇 アトリエ社
 熔接工學講座 八卷二・〇〇 太田閣
 二世界歷史大系 二六卷三・〇〇 平凡社
 續異國叢書 六卷四・〇〇 出版教育館

日本庭園史圖鑑 二四卷四・八〇 有光社
 千字文十種 一四卷一・二〇 平凡社
 千子文十種 三卷三・五〇 白水社
 子費文庫 一〇卷一・〇〇 家の教育社
 戀愛小説選集 六卷一・〇〇 三笠書房
 二美術大講座(素描) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(水彩) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(油彩) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(日本畫) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(西洋畫) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(工芸) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(建築) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(園藝) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(音樂) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(舞蹈) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(戲劇) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(文學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(歷史) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(地理) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(政治) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(法律) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(醫學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(農學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(工學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(商學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(教育學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(心理學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(社會學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(倫理學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(宗教哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(科學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(藝術哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(社會哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(政治哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(法律哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(醫學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(農學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(工學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(商學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(教育哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(心理學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(社會學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(倫理學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社
 二美術大講座(哲學哲學) 五卷一・〇〇 アトリエ社

<p>能 國寶刀劍圖譜 一〇編四・〇〇 岩波書店 二 作業科講座 二〇編二・〇〇 岩波書店 九 月 實生渡地拍子舞々六十番集 二卷一・八〇 乙八や書店 日蓮上人講文大講座 二卷一・五〇 平凡社 現代長篇小説全集 五卷一・五〇 三笠書房 アマチュア寫眞講座 八卷二・〇〇 アルス フルゲート全集(普及版) 一〇卷一・〇〇 六福社 室生犀星全集 一四卷一・五〇 平凡社 現代日本小説全集 二六卷一・五〇 アトリエ社 大 辭典 二六卷四・五〇 平凡社 ユウゴオ 詩集 三卷二・〇〇 岩波書店 土木工学ポケットブック 二卷一・〇〇 山海堂 邦枝完二代表作全集 一〇卷一・五〇 新日本社 寺田寅彦全集(文學部) 一六卷一・五〇 岩波書店 人生讀本叢書 八卷 八〇 六福社 國語教育(普及版) 二卷一・五〇 岩波書店</p>	<p>二 日本判例大成 二五卷二・八〇 非凡閣 木村泰賢全集 六卷三・八〇 岩波書店 銀行實務全集 七五卷三・五〇 文芸堂 工 百科大圖鑑 一〇編 八五 工業行會 鐵兵傑作全集 八卷一・五〇 非凡閣 シニツツライ等語全集 五卷一・〇〇 河出書房 二 赤城和漢名蹟叢書 二四卷一・〇〇 赤城出版部 信仰聖話大集 六卷一・五〇 健文館 實用金屬材料講座 一〇卷二・五〇 共立社 工業經營講座 二卷一・五〇 非凡閣 ホフマン全集 六卷二・〇〇 三笠書房 二 歴史教育講座 一五卷一・五〇 研究教育 秋 聲全集 一五卷一・五〇 非凡閣 チツケンス物語全集 一〇卷一・〇〇 中央公論社 美術寫眞大成 八卷三・〇〇 平凡社 犬 野動物學叢書 八卷一・五〇 新小泉社 算術新教育叢書 七卷五・五〇 誠文堂 二 牧野植物學全集 一三卷三・五〇 誠文堂 二 動物原色大圖鑑 一三卷三・五〇 誠文堂 國說天文講座 八卷一・八〇 非凡閣 二 國文全集 二六卷一・八〇 非凡閣 木竹基本工作講座 八卷一・五〇 非凡閣 日本教育家文庫 二四卷一・八〇 北海出版社 高等機械設計 八卷二・八〇 共立社</p>	<p>正 地理學講座 一〇編一・八〇 地人書院 シナリオ文學全集 六卷一・五〇 河出書房 十一 月 二 佛書解說大辭典 二卷六・〇〇 大東出版社 最新科學の驚異 二卷二・五〇 太陽閣 二 近世日本國民史 二五卷二・五〇 明治書院 觀世流昭和版袖珍本 二〇編二・五〇 梅田書局 佛敎大辭典 六卷二・五〇 佛敎大學 映畫教育叢書 六卷一・〇〇 成美堂 百問隨筆 六卷一・五〇 成美堂 人生讀本全集 二卷一・五〇 成美堂 ロレンス全集 二卷二・〇〇 三笠書房 國語講座 一〇卷一・三〇 刀江書院 シーボルト文獻類聚 六卷三・〇〇 岩波書店 小泉八雲全集(家庭版) 二卷一・五〇 第一書房 トルストイ人生叢書 八卷一・五〇 六福社 國策大家講座 六卷一・〇〇 人文社</p>	<p>十二月 大家佛敎全集 二卷一・三〇 大東出版社 三 國語教育科學 二卷二・〇〇 文芸堂 國歌大觀 二卷全二・六〇 中文館</p>
--	---	---	--

<p>日本全書 三六卷一・六〇 岩波書店 二 ドストイエフスキ全集 二二卷一・五〇 三笠書房 現代素描全集 八卷一・五〇 アトリエ社 二 展大古法帖 一八卷一・五〇 高松屋 東海道五十三次 六卷全三・五〇 高松屋 富嶽三十六景 一八卷二・〇〇 高松屋 物語日本史 二卷一・八〇 岩波書店 最新工業材料叢書 二卷 七五 岩波書店 性教育叢書 六卷一・〇〇 岩波書店 寺田寅彦全集(科學部) 六卷七・〇〇 岩波書店 本 靖獻遺言精義 二卷全二・〇〇 精興社</p>	<p>二月 明治財政經濟史料集成 二四卷四・〇〇 岩波書店 前 大百科事典 二六卷四・五〇 平凡社 芥子園畫傳 一三卷一・三〇 アトリエ社 家庭音樂全集 二二卷三・五〇 春秋社 華道全集 二二卷二・〇〇 非凡閣 モーパッサン傑作短篇集 六卷一・〇〇 河出書房 佛書解說大辭典 二二卷七・〇〇 大東出版社 藤田東湖全集 一〇卷 八〇 岩波書店</p>	<p>三月 書道大講座 六卷一・三〇 新誠社 吉屋信子全集 二二卷一・五〇 新誠社 教育者の獨逸語講座 六卷一・〇〇 建文館 二 吉田弦二郎全集 一八卷一・五〇 新誠社 二 新作探偵小説全集 一〇卷一・五〇 新誠社 續日本畫實習帖 六卷一・五〇 アトリエ社 現代隨筆全集 二二卷二・〇〇 金星堂 三 大藏經 五五卷二・〇〇 株式會社 世界音樂全集(學生版) 六〇卷一・〇〇 株式會社 萬有科學大系(正集) 二二卷三・〇〇 株式會社 分 俳句全集 六卷二・〇〇 中央公論社 獨逸犬シエパート犬 二二卷一・五〇 中央公論社</p>	<p>四月 キリスト教兒童文庫 二二卷一・〇〇 出版部 かな名蹟集成 八卷二・五〇 興文社 物語日本文學 二二卷二・〇〇 興文堂 二 吉田松陰全集 一八卷一・五〇 新誠社 二 日本繪巻物集成 二二卷二・〇〇 岩波書店 書道全集(漢字部) 一三卷一・五〇 平凡社 土田杏村全集 一五卷一・五〇 第一書房 玩 具叢書 八卷三・〇〇 建文館 昭和長篇小説全集 一六卷一・三〇 新誠社 二 輓近初等數學講座 二二卷一・五〇 共立社 寶生流中形正本 二二卷三・五〇 乙八や書店</p>	<p>五月 かな名蹟集成 八卷二・五〇 興文社 作者別萬葉評釋全集 八卷一・五〇 非凡閣 世界音樂全集 八卷一・八〇 非凡閣 日本佛敎聖者傳 七卷一・三〇 日本評論社 銀行實務講座 八卷一・五〇 非凡閣 商業實務全集 八卷一・三〇 非凡閣 三 國譯大藏經(經部) 一六卷四・〇〇 國民文庫 四 國譯大藏經(律部) 一六卷四・〇〇 國民文庫 小林多喜二全集(普及版) 三卷一・八〇 刊行力社 古 事類苑 六〇卷六・〇〇 刊行力社</p>
--	--	---	--	---

出版界一年史(昭和十一年度)

一〇五

佛教大學講座 二回二〇〇 佛敎大學社
喜多流四季の友 四回三・五〇 喜多流發行
現代連續漫畫全集 八回一・〇〇 アトリエ社
寶生流囃子仕舞形附 四回五・〇〇 ぶんや書店

六月

三上於菟吉全集 二回一・〇〇 平凡社
現代英文學叢書 一三回三・七〇 研究社
二卷合刊科學叢書(化學之部) 七回二・〇〇 培人書館
二卷合刊科學叢書(物理之部) 七回二・〇〇 培人書館
科學叢報叢書 一五回一・八〇 培人書館
觀世宗家正木貞和版 一五回二・〇〇 培人書館
維新歷史小説全集 二回一・二〇 培人書館
大衆語新講座 八回二・八〇 培人書館
世界名曲文庫 三〇回一・五〇 培人書館
佛敎思想大系 一〇回二・〇〇 培人書館
世界歷史大系 二六回二・八〇 培人書館
近世繪世相史 八回三・〇〇 平凡社

七月

山岳講義大系 八回二・〇〇 共立社
佛敎聖典講義大系 二二回二・〇〇 佛敎大學社
名作挿繪全集 二七回二・〇〇 東方書院
大藏經講座 七回一・五〇 中央公論社
兵法全集 十回一・五〇 中央公論社

八月

寶生流諸曲大成 八回二・五〇 ぶんや書店
二日本精神講座 二回一・三〇 新文館
阿彌陀全集 二八回二・〇〇 培人書館
二國語國文學講座 一六回二・〇〇 培人書館
二書道大講座 六回一・二〇 培人書館
二實用經濟講座 一〇回一・〇〇 培人書館
二パイロン全集 五回二・〇〇 培人書館
二チエーホフ全集 一八回二・五〇 培人書館
二モンテニウウ隨想錄 三回三・五〇 培人書館
二ウズ生命の科學 八回二・八〇 平凡社
二スルズ生命の科學 八回二・八〇 平凡社
二最新寫眞大講座 二〇回二・〇〇 アルス
五山文學全集 五回二・〇〇 培人書館
相馬御風隨筆全集 八回二・〇〇 培人書館
現代ユーモア小説全集 一八回一・五〇 アトリエ社
二イヂエ全集 二回一・五〇 培人書館
二法蘭西手本全集 一四回一・三〇 培人書館
短歌作法講座 三回五・七〇 培人書館
大芭蕉全集 二回二・〇〇 培人書館
土木工學オクトブツタ 一〇回二・〇〇 培人書館
日本名文鑑賞 八回一・五〇 培人書館

九月

豫約改正
陶器大辭典 六回二・五〇 培人書館
木竹基本工作講座 六回一・五〇 培人書館
フランス現代小説 一〇回一・五〇 培人書館
大思想文庫 一三回一・五〇 培人書館
最新寫眞科學大系 二回二・〇〇 培人書館

十月

二師範大學教育・心理 二回一・五〇 培人書館
現代金融經濟全集 一四回一・六〇 培人書館
フロオベール全集 九回二・五〇 培人書館
二果物原色圖説 二回二・〇〇 培人書館
二婦人書道講座 六回一・三〇 培人書館
二結核征服全集 三回三・〇〇 培人書館
國史大辭典 七回二・八〇 平凡社
佛敎大辭典 六回六・〇〇 培人書館
牧野植物學全集 七回五・〇〇 培人書館
商學全集 四回一・五〇 培人書館
二音樂大講座 二回二・二〇 培人書館
二偉人傳全集 一八回一・〇〇 培人書館
二大衆法律講座 二回一・三〇 培人書館
二電氣工學大講座 二回二・〇〇 培人書館
二藥學大辭典 一〇回三・八〇 培人書館
二續感實話全集 六回一・〇〇 培人書館
二チエーホフ全集 一八回二・五〇 培人書館
山崎延吉全集 七回三・〇〇 培人書館
近世日本國民史(普及版) 二五回二・五〇 培人書館

十一月

東洋思潮 一八回一・五〇 培人書館
大バルザック全集 一六回二・五〇 培人書館
相馬御風隨筆全集 六卷 八卷 培人書館
刀劍金工名作集 二卷 四卷 培人書館
日本名文鑑賞 六卷 八卷 培人書館
日本名文辭典 八卷 一〇卷 培人書館
二藥學大辭典 二卷 二卷 培人書館
二國語國文學講座 一五卷 一六卷 培人書館
二プロオベール全集 八卷 九卷 培人書館
二日本國寶全集 七卷 八卷 培人書館
二支那南畫大成 一六卷 二二卷 培人書館
二最近寫眞工學名著叢書 二卷 三卷 培人書館
二現代洋畫大全集 二卷 三卷 培人書館
二法帖論叢集 二卷 三卷 培人書館
二佛敎大辭典 六卷 七卷 培人書館
二電氣工學大辭典 六卷 八卷 培人書館
二千字文十種 一〇卷 一四卷 培人書館
二令女讀本全集 一〇卷 三卷 培人書館
二頼山陽名著全集 一〇卷 三卷 培人書館
二子寶文庫 一〇卷 七卷 培人書館
二文藝作り方講座 六卷 七卷 培人書館
二生田長江全集 一五卷 八卷 培人書館
二世界音樂全集 九卷 八卷 培人書館
二最新寫眞科學大系 二卷 一五卷 培人書館

二大辭典 二六回四・〇〇 平凡社
二我が子の育て方全集 一〇回一・五〇 平凡社
二明治編年史 一五回七・〇〇 培人書館
二日本蠶絲業史 五回六・〇〇 培人書館
二織工業大系 一〇回一・八〇 培人書館
二國歌大觀 一〇回一・〇〇 培人書館
二千文字大觀 一〇回一・〇〇 培人書館
二内燃機工學講座 二回二・八〇 培人書館
二唯物論全集 九回一・六〇 培人書館
二唯物論全集(第二卷) 九回一・六〇 培人書館
二日蓮主義大講座 一三回一・五〇 アトリエ社
二法華經大講座 一三回一・五〇 培人書館
二受驗基礎講座 八回一・二〇 培人書館

現代ソヴエト文學全集 八卷 六卷 培人書館
世界歴史大系 二四卷 二六卷 培人書館
三國譯大藏經(經部) 一四卷 一六卷 培人書館
三國譯大藏經(律部) 一四卷 一六卷 培人書館
三國譯大藏經(論部) 一四卷 一六卷 培人書館
二日本刀講義 一八卷 二二卷 培人書館
二現代ユーモア小説全集 一八卷 二二卷 培人書館
二實用建築講座 一八卷 二二卷 培人書館
二最新寫眞大講座 一六卷 二〇卷 培人書館
二チエーホフ全集 一六卷 二〇卷 培人書館
二歴史教育講座 一六卷 二〇卷 培人書館
二陶器大辭典 五卷 六卷 培人書館
二電氣工學大講座 二〇卷 二二卷 培人書館
二日本史蹟大系 二〇卷 一六卷 培人書館
二佛敎思想大系 二〇卷 一〇卷 培人書館
二佛敎思想新講座 二二卷 八卷 培人書館

ベルグソン著
廣瀬哲士譯

最新刊

四六判二五〇頁上製
定價金一圓五十錢
送料金十四錢

夢と折口學

「夢」とは何か？「哲學」とは何か？

本書こそは「物質と記憶」「創造的進化」に先だつ名著であり、正しくベルグソンの哲學に入る最初の階梯である。

夢の研究は有史以前から始められてきたやうで、實生活に於て甚だ密接な意義をもつてゐた。古代の賢人は夢判斷に優越な人であつたので想像せられる。パピロンの古跡から掘出された楔形文字は夢に關するものか、占星術のものであつたとか傳へられてゐる。占星術から天文学が立派な科學として生れることになつたが、未だに夢からは大したものゝは生れて來てゐない。夢も今世紀に入るとは、夢は情けない昔からの位置であつた。夢によつて衣食する人は詩人や小説家もこの部類に屬するかも知れない。少くからが、心理學者で眞に實證的研究を徹底させた人はまづなかつた。然るに今世紀に入つてから、夢の研究熱は俄然として擡頭して來たのである。(中略)ベルグソンの見解はわれらの實證的精神にフロイド教授の説以上に首肯し得られる興味のものもある。讀者はこのベルグソンの夢の研究を讀んで、恐らく私の言葉に偽りないことを悟られるであらう。(著者序文の一節)

笑の哲學

蘇

ベルグソン著
廣瀬哲士譯
價二・〇〇
廣瀬哲士譯
價一・五〇
稅一・四

東京堂 振替七〇 東京 呈進録目版出 下段九京東

書籍發賣禁止一覽

二月

人生と運命(一部) 大谷良寛 發行所
被禁書 ユーモア物語(一部) 杉森鷗程 發行所

三月

大和民族皇道生活運動 鄭然 主編 廣業時代社
日蓮主義大講座三回配本(一部) 田中智學 外七氏 主編 フトリエ社
物語日本文學本増録(一部) 藤村作外七氏 主編 文堂
廣文庫(一部) 末弘嚴太郎 主編 廣文庫刊行會
憲法選錄(一部) 中里義一 主編 廣人之友社
變態醫學話(一部) 高田義一郎 主編 千代田書院

五月

ゲルゼン學說の批判 美濃部達吉 日本評論社
性と優生學(一部) 赤津誠 春潮社
日露の危機爆發するか? 二木貫今 元著 時局新聞社
百萬人の洪笑 土屋喬雄 廣文堂新光社
五十年生活年譜(一部) 秋田雨雀 廣文堂新光社
生命の實相(一部) 谷口雅春 廣文堂新光社
モリバ作短編集六回配本の談(一部) 小林秀雄 外四氏 主編 河出書房

六月

小林多喜二全集三卷 袋 小 林 多 喜 二 ナウカ社
手 日本文學史(一部) 袋 東 郷 青 兒 昭 森 書 院
日本文學史(一部) 袋 東 郷 青 兒 昭 森 書 院

出版界一年史(昭和十一年度)

七月

陽(一部) 岩ロレ 具ン ス著 作品社
 鋼はいかに鍛へられるか 稲田定雄外三氏著 文藝案内社
 鋼はいかに鍛へられたか 杉オストロフスキイ著 ナウカ社

八月

水戸學再認識(一部) 西村文則 集文閣
 少年滿洲事變と上海事變(一部) 山縣信敬 大同館

九月

大過渡 期(一部) 小茅田巖 第一書房
 罪無き罪(一部) 菊地甚一 サイレン社

十月

溝口アバート(一部) 神戸政郎 四條書房

十一月

思想問題年表(一部) 河村只雄編 青年教育會
 旋風裡の極東外交と軍事(一部) 角猪之助 赤鳥秀雄家

新ロシヤ語講座二卷
 近代支那農村の崩壊と農民闘争 田中忠夫 白揚社
 漢詩大講座(七回配本)(一部) 國分青崖盛修 アトリエ社
 日本哲學全書(十一回配本)(一部) 三枝博音編 第一書房
 荆慮星霜史 ナルチスミ 友情の(一部) 不二書房
 ナルチスミ 友情の(一部) 不二書房

(B) 雜誌

日本評論(一部) 三月號	更生時代 三月號	日本及日本人(一部) 四月號	經濟情報(一部) 三月號	我空(一部) 三月號	人生と道 四月號	日本評論(一部) 四月號	世界知識(一部) 四月號	社會評論(一部) 四月號
光(一部) 一月號	小學繪讀本(一部) 二月號	國際評論(一部) 二月號	座(一部) 二月號	星(一部) 二月號	宙(一部) 二月號	裝(一部) 二月號	文(一部) 二月號	性(一部) 二月號
十一月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月

六月

經濟市場(一部) 四月號 一九三六(一部) 六月號
 時潮(一部) 四月號 短歌至上主義 六月號
 教科集録 四月號 經濟公報 六月號
 性科學研究(一部) 四月號 中日文化 六月號
 經濟研究(一部) 四月號 實業展望(一部) 六月號
 女性の時代 四月號 經濟研究(一部) 六月號
 維新 四月號 性 七月號
 大亞細亞主義(一部) 四月號 實業之世界(一部) 八月號
 小説(一部) 五月號 都市と農村(一部) 四月號 實業之展望(一部) 八月號
 日本及日本人(一部) 五月號 内外公論(一部) 五月號 實業展望(一部) 八月號
 通俗醫學(一部) 五月號 通外公論(一部) 五月號 實業展望(一部) 八月號

七月

實業展望(一部) 八月號

八月

實業展望(一部) 八月號

九月

性科學研究(一部) 九月號

十一月

實話雜誌 十月號

文部省推薦圖書

文部省では昭和五年九月一日文部省令第廿二號に依つて圖書推薦の制度を設け、國民教化の目的の下に普及を希望するやうな圖書を選んで一般に推薦してゐるが、左の圖書は本年鑑十一年版に發表以後今日までの推薦圖書目録である。

市島翁の隨筆が當代に於ける白眉たる事は、何人も異存のない所。本書は書藝叢談、圖書漫歩、山水遊記、雜聞録、亡友録、雜俎の諸項に分けられて居るが、淡々たる中に何れも著者の圓熟せる人格が行間にはじみ出てゐる。多方面に亘り然も淡白なる蒐集趣味、又は壯年政治運動、新聞界に於ける活躍、明治大正の文人との交友談等、話柄滾々として汲めども盡きぬものがある。(昭和一〇、八一、一九 輪墨同好會 四六判四一二頁 二・三〇)

旅人の眼 川島理一郎著

著者は著名の洋畫家。「私程世界を歩き廻つた人間も少い

のではないかと云つてゐる程世界を歩いてゐる。著者の旅は自然探究の旅であり、その畫等も亦然るものゝ様である。紀行の筆も畫風の如く鮮明で印象的である。本書の後半をなすその畫談に至つては、まさに達人の言葉であり、その認識の明確さ、その思想の確固たることは尊敬に値するものである。繪畫のみならず、一般文化に關心を寄するものに取つて貴重な暗示を與へる。(昭和一一、五、二〇 龍星閣 新菊三〇五頁 二・五〇)

タイヤルは招く 大島 正滿著

タイヤルとは臺灣に住む生蕃の種族の名である。本書は動物學者たる著者が、齋を尋ねて臺灣の東蕃地を探險した際の旅行記と見られる。著者が十四年前に臺灣に住んだ頃は凶猛なるタイヤルの跳梁により首の不安なしには外来者は一歩も入れなかつたものである。爾來星移り、さしも凶猛な蕃族も王化の民として、皇恩の有難さを謳歌する身となつた。著者は今大手を振つて大印溪を朝り、多年の懸案を解決し得たのである。吾々は注意深く本書を読む事によつて、臺灣の今昔を比しその陰にかくされた理蕃當事者の献身的努力を思ひ感慨無量なるものがある。(昭和一一、二、一〇 第一書房 四六判一三六頁 一・五〇)

野鳥と共に 中西 悟堂著

本書は放飼篇と山野篇との二部に大別されてゐる。著者は普通の飼鳥家と異り、鳥類を家族の一員として飼つてゐる人で、放飼篇に於て霞五位、鶴、鶯、尾長、嘴細鳥、雀、鶇、

大瑠璃、鶴、椋鳥……の諸鳥を雛から育てて飼ひ慣した経験を細々と記してゐる。山野篇には著者が鳥類を求めて歩き廻つた東京近郊、富士山麓、榛名山等への紀行文や秋の霞縹緲の風景等が詩味と學術味とを加へた巧な文章で記されてゐる。本書は鳥類を観察すると云ふ習慣に乏しい我が邦に於て、此の方面に一般人を啓蒙指導すると共に、又學術書としても鳥類研究者の参考書とするに足る良書である。(昭和一一、二、二五 集林書房 新菊判三八八頁 二・八〇)

日本文化私観 ブルノ・タウト著 森 傳郎譯

本書は獨逸の建築家ブルノ・タウト氏の日本文化観である。前著「ニツボン」が氏の我國渡來數ヶ月目の所産であり然も主として日本建築を通して見た日本觀であつたのに對し本書はその後二年間の滯日中に獲た觀察を基礎として、藝術一般の廣い範圍から日本文化を批評したものである。勿論二年三年の短年月の間に我國國民性を知り盡すと云ふ事は不可能であるが、從來歐米人の皮相な日本文化觀と異り、或程度迄日本文化―日本精神―を理解し、犀利鋭敏な藝術的直觀を以て批評してゐる。故に云ふ所仲々肯綮に當つてゐる。一讀を要すべき書。(昭和一一、二、一〇、五 明治書房 四六判二三八頁 三・〇〇)

法 哲 學 尾高 朝雄著

著者は京城帝大教授、新進氣鋭の學徒である。本書の内容は三部に分たれてゐる。緒論に於て法哲學の概念を説明し、先づ人間の生活に於ける實踐の態度と、理論の態度との區別

から始められる。第一篇は、法哲學の傾向の概観で、簡潔の文字を以て過去及び現在の法律思想を深き洞察の下に解説してゐる。第二篇で、著者は特に純粹法學に對する、より深き理解と、現象學の最も正しき理解の上に立ちつゝ、法の本質、法の目的、法の方法等、法哲學の最も重要にして興味深き諸問題に關する著者独自の見解の展開を試みてゐる。法學上啓發される所大なるは勿論、現下の世相に就ても種々教へられる所がある。(昭和一一、二、一八 日本評論社 四六判一三一頁 一・八〇)

初歩 國際 讀 本 平野 等著

本書は、國際知識には極く初歩の人々の爲に平易を旨として書かれたもので、ベルサイユ條約後ヨーロッパ勢力の二分對立から説き起して、最近スペインの内亂に至る迄の世界の動きを歴史的に鳥瞰したもので、これ丈の事を知つて置けば、日目の新聞にあらはれる國際記事を見る眼は大いに變つて來て興味も倍加する事必定である。著者は「世界知識」の主幹として、國際知識の大衆化には充分の経験を有する人、資料も豊富で、所々に漫畫や地圖が挿入されてゐる讀者の眼を休めてくれる。唯欲を云へば、國際的動向の思想的意義についてももう少し突き込んだ説明が欲しかつた。(昭和一一、八、二〇 東白堂書房 四六判三九四頁 一・四〇)

西洋 音樂 史 乙骨 三郎著

東京音樂學校教授として三十年間音樂教育に従事された著者が、大正十年執筆に着手されてより昭和九年九月逝去に至

るまで十數年を費された遺著である。章を分つこと三十一、基督教發生以前の希臘の古代音樂から二十世紀の今日迄及んで居り、その間音の組織、對位式から和聲式への發達、樂器の變化とそれに伴ふ器樂の發達、音樂形式の變遷、ヘンデル以後の大音樂家の音樂上の事蹟、曲目の解説、その他凡ゆる方面に精粗なく説き及んでゐる。内容よく整ひ簡にして要を得てゐる。(昭和一一、一、一〇 京文社 四六判八二七頁 索引九六頁四・八〇)

支 那 思想 史 武内 義雄著

著者は東北帝大教授、「はしがき」に「私は此書に於て特に思想變遷の過程を明かにしたいと考へた結果、成る可く傳記と解題を簡單にすると共に、從來此種著作の圈外におかれてゐた經學の變遷と佛敎の影響とに説き及んでみた」と、本書の特色はそこにある。著者は時代を上世・中世・近世に分け「支那固有思想の時代」「支那思想と印度思想との交渉時代」「印度思想の刺戟によつて支那固有思想が改革された時代」として特色つけてゐる。説き方は簡約で必ずしも一般初學者に向くものとは云へないが、支那思想の大體の變遷を知らしめるものとして良書と考へられる。(昭和一一、五、五 岩波書店 三五判三四六頁 〇・八〇)

更訂 國史の研究 各説上下 黑板 勝美著

わが國史學界の泰斗黑板博士が、國史の大體を知らしめ、同時に國史研究の便宜を與へることを目的として著されたものが本書である。全體を通じて著者の國史研究に關する行き

といた識見が示されてゐるが、特に主要なる研究の紹介に意を用ひ、主要なる論文著書——昭和五年迄に發表されしもの——を、夫々の箇所にて或は列挙し、或は紹介論評してゐるのは重要な特色をなしてゐる。第一巻の總説は國史研究の基礎的ならびに補助的な諸問題を解説して、國史研究の手引を與へ、研究の態度を教へる。各説は通史であつて、上下二巻二十章から成り、八時代に大別されてゐる。諸種の問題に關しては参考文献を紹介し、主要なる主張を顧ると共に、備せざる用意を以て著者独自の見解を示してゐる。(菊判五〇〇乃至五八〇頁 岩波書店 總説三〇〇 各説各三・五〇)

協同組合 研究 本位田 祥男著

本書は著者が、雑誌・新聞紙上等に發表した諸論文を組織的に纏めたものである。著者は協同組合研究の權威であり、其研究は二十年の長きに及んでゐる。本書の内容は「協同組合の思想と理論」「消費組合の諸問題」「農村と協同組合」「反産運動批判」「協同組合と政治運動」「統制経済と協同組合」の六篇から成つてゐて、協同組合に關する問題を網羅し、理論實際の両面に亘り首尾よく整つてゐる。論述平明であつて懇切に理路を盡してゐる。知識階級一般の讀むに適してゐるが、わけても農村に於ける協同組合當事者、更生運動を背負つて立つ農村青年の必讀を希望したいものである。(昭和一一、三、二五 高陽書院 菊判五〇二頁 三・五〇)

小支那 黃 河 の 水 鳥山 喜一著

本書はもと「少年子女のために」といふ立場から書か

(昭和一一、七 日本評論社 菊判二九〇頁 一・〇〇)

石黒忠恵懷舊九十年 石黒 忠恵著

子爵は今年九十三歳、尙ほ能く健在にて、其の過去一世紀に近い間の時勢の變遷と、自ら遭遇したる國家の重大事とを極めて趣味多く、而かも實況を眼前に視るが如く、自ら筆を執り、又は口授して筆記せしめて成つたのが本書である。全篇百六十餘篇、何れの章を讀んでも趣味深く一席の話題と爲すに足るもののみで、處生の教訓なる事實を以て滿されてゐる。(昭和一一、二、一一 博文館 菊判五〇〇頁 三・八〇)

孔子の生涯 諸橋 轍次著

著者は文學博士で東京文理科大学教授である。本書はラヂオの「朝の修養」として前後六回全國に放送された講演の筆記である。七十四年の孔子の生涯を六講に分ち、大略年代順に、孔子の人と爲り、環境、思想、教育事業、及び孔子歿後の儒教發達の経路を述べたもので、尙卷末には附録として之も名著解説して放送された「老子の話」と云ふ一文も添へられてゐる。(昭和一一、六、一七 章華社 四六判一八八頁 一・〇〇)

野の鳥の生態 仁部 富之助著

著者は農事試験場陸羽支場にあつて米の研究を専門とし、鳥類の方は寧ろ餘技だが、これによつて幾多の鳥類専門家が蒙を啓かれるの奇觀を呈したほどで、著者の野鳥に對する觀察には一年がよりのものもあり、一ヶ月に亘るものもある。

出版界一年史(昭和十一年度)

れたものではあるが、大人が讀むにも恰好の本である。著者は序文に次のやうにいつてゐる「此の書に於ての試みは支那の文化史的発展のあとを最も平易な用語と敘述とで少年にもすぐ諒解し得る程度に通俗化し……」と、この書によつて從來無味乾燥と思はれて來た東洋史が始めて興味ある讀物となつた感を誰しも抱くであらう。著者は京城大學東洋史專攻の學者。(昭和一一、二、一八 刀江書院 四六判三〇八頁 一・八〇)

社會教育概論 小尾 範治著

本書は多年社會教育の實際的運用に従事せられたる著者が社會教育の主體及び運用の方法についての蘊蓄を傾けたるもので、序論として學校教育に對する社會教育の意義及び現下の社會世相に於けるその重要性を説き、併せて西洋及び我國に於ける該教育の本質的並に具體的發達の開明してゐる。社會教育の現状を知る上に甚だ便利なるものであるばかりでなく、その理論に於ても教へられるところ多い。(昭和一一、七、三〇 大日本圖書株式會社 三五判三七頁 一・〇〇)

榮 養 讀 本 鈴木梅太郎著 井上 兼雄著

榮養といふ言葉は俗語として吾々は不用意に毎日用ひてゐる。これ程生活に關係深いものでありながら、一方學問常識としては普通一般人には考慮されてゐない。本書は「榮養」と「營養素」との二つを考究の對象として「榮養篇」「食品篇」の二編に分かつて述べられてゐる。平易に書かれた「榮養學書」を得た事は誠に幸であるといふはなればならない。

これら精緻な觀察と實証は極めて輕快な筆致を以て通俗的に描寫され、隨所に鮮明な寫眞を挿入されて居り、一讀卷を惜く能はざらしむるものがある。(昭和一一、七、一〇 集林書房 四六判二七八頁 一・五〇)

續 法 窓 夜 話 穂積 陳重著

凡そ法律の本は、小むつかしくて無味乾燥なものとの相場が決つてゐるやうであるが、此の點で例外をなすものが本書である。本書は故穂積陳重博士の「法窓夜話」の續編で、陳重博士が書き残されしものに、同博士の「法律進化論」のうち或部分を加へて令嗣重博士が編纂されたものである。「法窓夜話」と同じく、法律學に關する逸話、奇聞等百話を集めたもので、いづれも極めて有益な話で、しかも肩のこらぬやう輕妙に書かれてゐる。「最も條數の多い法典」とか「片聽の陪審員」「骨董屋の論法と看屋の論法」の如く好奇的な逸話や、ユーモラスな話もあれば、又學問研究の態度についての注意等もあつて、たゞ面白く讀めるばかりでなく、そこに極めて有益なる教訓が含まれてゐる。(昭和一一、二 岩波書店 四六判三三九頁 二・五〇)

空 月 集 橋田 邦彦著

前著碧潭集に次ぎ、昭和八年以後著者の物せる論文、手記等を集録せるもので、目次は「行餘集」「語錄」「手記」「講話」「音樂雜話」「雜編」「附録」に取り纏められて居る。本書の中核をなすものは「行餘集」で、科學と宗教との關係に對する著者の信念を披瀝してゐる。「語錄」と「手記」とは共

に著者の深き内省に基づく犀利なる寸言であり、枯淡なる警句から成つてゐる。「講話」は講演集で、生理學を學び醫學に携はるもの精神を高調したものである。本書は單なる隨筆でなく、眞實の生活態度、處世の根本精神を語る絶好の修養書。(昭和一一、一一、一〇 岩波書店 四六判五八〇頁二・五〇)

釋尊の生涯 高楠 順次郎著

本書は昭和十年四月「釋尊の生涯」と題して放送されたものを根幹として書かれ、平易な青年の讀物として出版されたものである。内容は一般釋尊傳と大差はないが、著者が佛教研究の權威であること、理想的釋尊觀に促はれず人間味ある釋尊を描かんとしたこと、古來神秘的に傳へられてゐる「右腕出生」「四方七歩の寓言」「降魔」「四小出遊」等について著者の見解を示した事等が特色とすべきである。(昭和一一、六一五 大雄閣 菊判一六三頁 一・三〇)

青年頼山陽 木崎 好尚著

山陽父祖の代より筆を起し滿三十才の暮、備後神邊の菅茶山の村塾に赴く迄の青年期を扱つたもので、著者は山陽研究家としての權威である。文章は平易簡潔にして讀み易く、引用された詩文、書簡は漢文のものはすべて讀み下し文に書き改められ、意味不明の箇所は著者の補註が加へられてゐる。記述は資料を中心にして著者の主観に依る所は少い。(昭和一一、一一、一 章華社 四六判二六三頁 一・五〇)

感想集 子供と母の領分 鷹野 つぎ著

聰明にして敏感且つ文才に富める著者が、十餘年に亘り母としての様々の體驗を書き綴つた母性愛の結晶である。内容はその類似によつて子供は希む―指導への考察―子供の世界―新しき母性―無限の感謝―愛別記の六篇に分けられ、全體として一貫したものであるが、篇々悉く慈母心情の流露である。(昭和一一、一一、二 古今書院 四六判三二〇頁 一・八〇)

讀書週間選定圖書

日本圖書館協會主催の下に毎年十一月一日より向ふ一週間催される圖書祭及び讀書週間に際して、日本圖書館協會では良書推薦目録を發表してゐるが、次に掲げるものは昭和十一年度の推薦圖書目録である。

Table with columns: 著者名, 書名, 定價, 發行所. Includes titles like '國民政治讀本', '現代支那概論', '支那の遊記'.

Table with columns: 著者名, 書名, 定價, 發行所. Includes titles like '刀江書院', '平野書房', '章華社'.

Table with columns: 著者名, 書名, 定價, 發行所. Includes titles like '岩波書店', '大日本圖書', '古今書院'.

Table with columns: 著者名, 書名, 定價, 發行所. Includes titles like '自然科學・醫學', '民族問題をめぐりて', '天然記念物を探る'.

内田清之助	野鳥	禮讚	1,600	集林書房	高濱	渡子	源佛	氏語	日記	2,000	改造社
廣瀬	基	科學手工	1,000	新潮社	島崎	久基	夜明	窓前	筆記	2,000	明治書院
山田	醇	家問題	2,500	新文堂	小泉	信三	窓明	窓前	筆記	2,000	新刊社
栗原	藤七郎	農村問題	1,000	明文堂	土岐	善助	窓明	窓前	筆記	2,000	岩波書店
重森	三冷	日本庭園史	各六、000	有光社	北原	白秋	窓明	窓前	筆記	2,000	四條書房
金子	清次	日本工藝沿革史	二、500	共立社	木下	李太郎	窓明	窓前	筆記	2,000	岩波書店
乙骨	三郎	西洋音楽史	四、000	京文社	佐藤	春夫	窓明	窓前	筆記	2,000	第一書房
山田	耕翁	茶道	一、500	清和書店	戸川	秋村	窓明	窓前	筆記	2,000	第一書房
高橋	義雄	茶道	一、500	共立社	福原	麟太郎	窓明	窓前	筆記	2,000	岩波書店
波多野	完治	文章の心理	三、000	三省堂	宮城	道雄	窓明	窓前	筆記	2,000	野田書房
安倍	季雄	お話の心理	一、000	白鳥社	瀧井	孝作	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
本多	顯彰	感動の心理	一、000	白鳥社	宮城	道雄	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
成瀬	正勝	動詞の心理	一、000	白鳥社	宮城	道雄	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
眞山	青果	明治文學批評	二、500	野田書房	宮城	道雄	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
岡崎	清憲	日本文學史	三、000	岩波書店	馬場	久治	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
齋藤	清衛	新講義	一、500	育英書院	山内	久治	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
佐佐木	信綱	萬葉和歌	一、000	日本評論社	花野	久一	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
尾上	紫舟	俳句の月讀	一、000	千倉書房	原野	久一	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
荻原	井泉水	俳句の月讀	一、000	千倉書房	山本	有吉	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房
高瀬	虚子	俳句の月讀	一、000	千倉書房	山本	有吉	窓明	窓前	筆記	2,000	三笠書房

茗溪會選定圖書（昭和十一年度）

東京高等師範学校の茗溪會では、普通教育振興事業の一として、読物調査部を設け、二十年来読物の調査を続けてゐるが、昭和十一年度に於ける選定圖書は左の如きものであつた。

第七十八回（一月）

大江	文城	論語評釋	三、000	關書院	南	洋一郎	海洋冒險物語	800	講談社
松原	益太	植物学教材研究	二、500	培風館	武田	祐吉	現代語法概論	1,600	第一書房
矢澤	米三郎	日本アルプスの研究	二、800	三省堂	丸山	林平	現代語法概論	1,600	第一書房
斎藤	ハチロー	僕等の詩集	一、400	大日本図書	後藤	朝太郎	支那家庭語	1,500	第一書房
磯部	精一	佛教の心理學	七、500	東京實業社	北原	白秋	支那家庭語	1,500	第一書房
菅原	重兼	宗教心理學	三、500	金星堂	泥谷	良次郎	支那家庭語	1,500	第一書房
加藤	不可止	教育心理學	一、800	三友社	古谷	孫次郎	支那家庭語	1,500	第一書房
高田	保馬	我が國の農村問題	四、000	青年教育普及會	猪俣	倉三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
山中	峯太郎	太陽の凱歌	八、000	大日本図書	秋田	喜三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
鶴見	祐輔	張の日本	五、000	大日本図書	江原	小太郎	支那家庭語	1,500	第一書房
三木	末武	國藝作業の實際	四、500	培風館	村	上三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
高垣	武彦	歴史と生の哲學	一、五〇〇	培風館	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
高垣	武彦	歴史と生の哲學	一、五〇〇	培風館	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
得能	文哲	學汎論	二、五〇〇	中和會社	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
山崎	力之介	魂を培ふ	一、八〇〇	第一出版會社	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
山本	孫義	小學校職業指導の實踐	二、五〇〇	三友社	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房

第七十九回（二月）

前川	恒治	山崎論	二、500	西澤書店	吉屋	信子	物理學要論 下巻	3,000	培風館
安部	季雄	物理學要論 上巻	3,000	培風館	山本	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
山本	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房

丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房	丸山	有三郎	支那家庭語	1,500	第一書房
----	-----	-------	-------	------	----	-----	-------	-------	------

大島 正滿 タイヤルは招く 一、五〇 第一書房(中)

金子彦二郎 新國語教授 三、〇〇 培風館(教育)

吉田 幸憲 農村の郷土教育 四、〇〇 協和書院(大人、教育)

堀 七藏 一般理科の教育 四、五〇 中央公論社(大人、理科)

八波 則吉 婦人手紙文苑 一、五〇 講談社(大人、作文)

鈴木三重吉 綴方讀本 一、〇〇 第一書房(大人、作文)

高橋 楚仙 日本年中行事講話 一、二〇 大東出版社(大人、社会)

清原貞雄 日本精神と其の顯現 三、〇〇 青年教育普及會(大人、思想)

飯塚友一郎 演劇研究の方法 二、〇〇 同倉書房(大人、社会)

文藝家協會編 文藝年鑑1936 二、〇〇 第一書房(大人、文学)

藤井 喬 涙草の研究 一、〇〇 同倉書房(大人、文学)

小川 健作 未明の童話讀本 一、五〇 文教書院(初級)

安岡 正篤 童心の研究 二、五〇 新英社(大人、文学)

小川 健作 未明の童話讀本 一、五〇 文教書院(初級)

木村 教雄 小算術の基礎研究 三、八〇 培風館(教育)

小田 健作 未明の童話讀本 一、五〇 文教書院(初級)

土井 不曼 物理學の通論 三、〇〇 中和會書房(大人、物理)

柳沼 七郎 軍人と政治 一、五〇 紀元書房(大人、政治)

菅部 宜郎 やがて女學生の幾何學 一、〇〇 培風館(中等、数学)

今井 時郎 社會學概論 三、五〇 中和會書房(大人、社会)

山本 有三 心に太陽を持つて 一、〇〇 培風館(大人、歴史)

速沼 文範 沙門道元 一、五〇 第一書房(大人、佛学)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

櫻葉 勇 忠犬物語 一、五〇 第一書房(大人、文学)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高島平三郎 家庭・婦人・兒童 一、五〇 平野書房(大人、教育)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

岡田 起作 習字新法 一、五〇 三野書房(大人、教育)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

木枝 増一 新讀本の語法 一、五〇 第一書房(大人、国語)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

山本 笑月 明治世相百話 一、五〇 第一書房(大人、文学)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

赤澤源彌編 南洲先生遺訓 一、〇〇 培風館(教育)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

中島安治郎 暗算教育の實踐 二、〇〇 培風館(教育)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

宮瀬 健夫 隨想錄 一、五〇 培風館(大人、思想)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

高橋 三郎 現代教育史 二、五〇 培風館(大人、歴史)

松岡 讓編 夏目漱石文學選集(秋冬)	一、五〇	第一書房	(夫人、文學)
石井 庄司 國文學と國語教育	一、五〇	文藝書房	(夫人、初行)
長與 善郎 滿支このごろ	二、三〇	岡倉書房	(夫人、初行)
田中涼々子 河童陸 獸誌	二、〇〇	書物展望社	(夫人、初行)
小尾 範治 社會教育概論	一、〇〇	大日本圖書	(夫人、教育)
飛田 龍雄 社會教育概論	一、〇〇	新潮社	(初等、初級)
下村 宏 スポーツと冒險物語	一、〇〇	新潮社	(初等、初級)
下村 宏 これからの日本	一、〇〇	新潮社	(初等、初級)
板垣 市藏 國史の成績考査基準	一、〇〇	培風館	(初等、初級)
武田 勘治 國文學史綱	一、〇〇	明治書院	(夫人、文學)
石橋健夫編 長崎文學讀本	一、〇〇	秀文舎	(中等、文學)
平野 等 初等漢字の教へ方	一、〇〇	東白堂書房	(夫人、初行)
後藤朝太郎 天祖の神勅	二、〇〇	關書院	(夫人、教育)
萩原 擴 系統的倫理學	二、〇〇	藤井書店	(夫人、教育)
木幡 林助 系統的倫理學	二、〇〇	培風館	(夫人、教育)
鈴木治太郎 系統的倫理學	二、〇〇	培風館	(夫人、教育)
佐藤 義亮 系統的倫理學	二、〇〇	培風館	(夫人、教育)
川端 康成 現代の海軍	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
下村虎次郎 現代の海軍	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
森本覺丹 魂の歩む	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
北原 白秋 トルストイの生涯	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
阿部知二編 生 貌	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
久保田 清 魂の教育實踐	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
下村 海人 魂の教育實踐	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
松平 道夫 トルストイの科學物語	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
川上 澄生 少々昔 嘶一、八〇 版畫莊	一、八〇	版畫莊	(以上、版畫)
西村 眞次 日本はどだけの事をか	一、〇〇	新潮社	(初等、上級)
安部 季雄 父の夢・母の夢	一、〇〇	家の教育社	(初等、中級)
市守 謹吾 開通した作法・開通した作法	二、五〇	啓文社	(夫人、初行)
水原秋櫻子 現代俳句論	一、〇〇	第一書房	(夫人、文學)
高橋勘七編 國の御柱	二、五〇	大日本圖書	(以上、初行)
佐藤清十郎 青年各科の教授及訓練	一、八〇	成美堂	(夫人、教育)
野口源三郎 オリムピックの知識	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
山田 榮 陶治理想學	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
菊池 寛 大平記・國合體肥・大肥肥	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
大西 雅雄 教育音聲學	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
阿部七三吉 手工教育原論	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
阿藤 質 應用理科	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
小瀧 淳 日本佛敎講話	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
藤原 助市 理科教授原論	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
山崎 博 高等小學敎育の革新研究	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
十時 務 最新論理學綱要	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
櫻井 忠温 武將經營學	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
木下 竹次 學經學	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
河東碧梧編 正岡子規文學讀本(秋冬)	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
鎌田 研一 小説石川啄木	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
若山 牧水 若山牧水	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)
石川 啄木 啄木	一、〇〇	成美堂	(夫人、教育)

昭和十一年中の 書誌學(圖書書目附出版)に關する圖書及論文

(*)印は單行書、アラビヤ數字は發行月、前年の補遺を含む。

一、一般編

書誌學—總覽雜載

*古書叢話 河原萬吉著 啓文社 4 五三〇頁 四六 二・五〇	*書物 壽岳文章譯編 京都府向日町 向日庵 六二頁 菊 五・〇〇
サンダスン「完全な書物」—エル「書物」—壽岳文章	「裝本について」
*典籍雜誌 庄司淺水著 支林社 3 三四頁 四六 一・二〇	*紙魚供養 齋藤昌三著 書物展望社 5 三九頁 新四六 三・〇〇
批判的書誌學の基礎附 けに就きて 大和久伊平 國語研究 11 10 二	本邦書誌學の概念 島崎 末平 文獻報國 11 12 一
書籍の待遇 德富猪一郎 書物展望 1 六 一	聖農石川翁の書物觀 中島 耕一 書物展望 1 六 一
書物美學の諸問題 川路 柳虹 東京堂月報 3 二三 三	成田 重郎 東京堂月報 3 二三 三

美しい書物に就て 壽岳 文章 東京堂月報 5 二三 五	外國の政治家と書物 堀口九萬一 書物展望 6 六 六
書物製作に就ての覺書 國美 安彦 愛書 4 八 六輯	山本北山と目錄之學 正岡子規文學讀本(秋冬) 彌吉 光長 書物の周國 12 三一 二
古典の目錄と分類との 遠藤 元男 古典研究 12 一 一	歴史の災禍 左門 三郎 古典研究 12 一 一

*高野板目録(鎌倉期) 市川圓應編 訪書會 井上 和雄 書物展望 1 六 一	自鎌倉期至戰國期刊書 樋口慶千代 國漢 三九
一瞥 變別雜記—初印本と後 長澤規矩也 書誌學 4 六 四	印本と 長澤規矩也 書誌學 6 六 六
蕪燕偶記抄 古刻之一異例 韓板鳩業	

救急方 橋井清五郎 書誌學 6 六六
 朝鮮の文獻に就いて 荻山 秀雄 文獻報國 11 11
 高麗朝の典籍に就いて 奥田 直毅 文獻報國 11 11

* 日本國見在書目録解説稿 小長谷惠吉著 くにたち本の會
 5 三三三頁 菊 〇・八〇
 * 木朝書籍目録考證 和田英松著 明治書院 11 六六頁
 菊 〇・〇〇

支那 唐本に於ける版式の變遷
 長澤規矩也 書誌學 9 七三
 重ねて現存宋刊單疏本に就いて 長澤規矩也 書誌學 5 六五
 明代戲曲刊行者表初稿 長澤規矩也 書誌學 7 七一
 明代戲曲刊行者表初稿補 趙 景 深 書誌學 8 七二

昭和十年新刊書誌學關係書籍總目 長澤規矩也 書誌學 5 六五
 朝鮮書誌の書誌 三十四 城大圖書館 1.6 五二四
 寛文版の書籍目録 幸田 成友 讀書感興 4 二
 明治初年ノ圖書目録概観 竹林 熊彦 研究 1 九一
 「博物館書目」考 竹林 熊彦 書物展望 5 六五
 「教育博物館圖書目録」考 竹林 熊彦 書物展望 7 六七
 楊惺吾日本訪書考 長澤規矩也 書誌學 10 七四
 辨道立成に就きて一日 本國見在書目録解説稿又補遺 小長谷惠吉 書物の周旋 12 三二

書林清語料繹(續) 長澤規矩也 書誌學 10 七四
 明清族譜研究序説 牧野 巽 東方學報 2 10-12
 北平圖書館藏明代善本族譜 牧野 巽 東方學報 10 七四
 我國に残存せる隸古定尙書 島田 鈞一 東方學報 12 七四

* 書物語辭典 沼津、古典社編及發行 11 一七、二七頁 三六〇・七
 三國書籍用語集 東京古書館 1 一六四一七二
 高祖合月報 2 一六四一七二

アツシエンデン印行書誌序 澤木川一 印刷訪 書 8 二輯

* 出版年鑑 昭和拾壹年版 東京書籍商組合編及發行 3 二七六頁 四六・〇・五〇
 * 出版年鑑 昭和十一年版 東京堂編及發行 5 二二〇頁 四六・一・〇〇

* 和歌山高等商業學校書目並解題類所載目録 和歌山高等商業學校編及發行 10 二五頁 菊 非賣

* 大學出版部 11 一八頁 圖版四枚 菊 非賣
 * 歐文圖書目録(昭和十年九月末現在) 司法省調査課編及發行 3 五、九六頁 四六倍 非賣
 * 大審院圖書目録 和書ノ分 昭和十年三月現在 大審院編及發行 5 非賣
 * 農林省圖書目録 追加六 農林大臣官房文書課編及發行 3 一、二五頁 菊 非賣
 * 增加圖書目録 第八 自昭和八年一月至昭和九年十一月 鐵道省圖書館編及發行 三〇、三三頁 四六倍 非賣
 * 大連圖書館和漢圖書分類目録 大連圖書館編及發行 四六倍 非賣
 * 第六編上冊 數學理學醫學工學兵事 十年三 三六、四八頁
 * 第六編下冊 美術音樂演藝運動 1 三九、六二、四〇頁
 * 天理圖書館圖書分類目録 第六編 文學 天理圖書館編及發行 十年十二 三、七頁 四六倍 非賣
 * 東方文化學院京都研究所新增漢籍目録 昭和九年八月至十一年二月 京都、同研究所編及發行 3 四六頁 四六倍 〇・三〇
 * 擁護藏書目録 平山潜編 林正章校及發行 7 三頁 半紙判 [謄寫版] 非賣
 * 眞福寺善本目録 續輯 黑板勝美編及發行 5 五〇、七一頁 菊 非賣
 * 龜高文庫目録 (東京科學博物館附屬圖書館所藏) 東京科學博物館 5 三頁 四六倍 非賣
 * 岩瀨文庫圖書目録 愛知縣西尾町、岩瀨文庫編及發行 9 五三頁 四六倍 一・三〇

* 圖書分類目録 昭和十一年版 東京出版協會編及發行 4 三四頁 四六

* 官廳刊行圖書目録 第三六一三九號 內閣印刷局編及發行 46912 三三頁、三〇頁、四二頁、三四頁 四六倍 各一・〇〇

* 稀籍考 河原萬吉著 竹醉書房 9 三三頁 四六 (考文庫、第一輯) 一・六〇
 * 大阪出版書籍目録 大阪圖書出版業組合編及發行 5 一、三、三六、四一、五九、三〇頁 菊 非賣
 * 山田版並山田關係書目 第一輯 俳書 宇治山田市立神都圖書館編及發行 十年
 * 帝國圖書館和漢圖書書名目録 第四編 アーサ 帝國圖書館編及發行 3 二〇三頁 四六倍 非賣
 * 和漢書別置本目録 未定稿 仙臺、東北帝國大學附屬圖書館編及發行 10 〇、一八頁 四六倍 非賣
 * 京師帝國大學附屬圖書館編及發行 四六倍 非賣
 * 第三輯第三冊 3 一四九、二六頁
 * 第四輯 7 101頁

* 龍谷大學圖書館善本目録 龍谷大學圖書館編 京都、龍谷

* Catalogue of European books in the Keijo imperial university library. Vol. 3, Part 1-3. 京城帝國大學附屬圖書館編及發行 3 7 11 三九頁 四六倍 非賣
 * 早稻田大學和漢圖書分類目録(一) 總類部 早稻田大學圖書館編及發行 1 二六、三三頁 四六倍 非賣
 * 慶應義塾圖書館和漢圖書(分類)目録 第四卷(第五一八門) 慶應義塾圖書館編及發行 5 三三頁 菊 非賣

* 龍谷大學圖書館編 京都、龍谷

*刈谷圖書館分類目錄 愛知縣刈谷町、町立刈谷圖書館編及發行 8 三六頁 菊 (騰寫版) 〇・五〇
 *稀書解説 第九編 稀書複製會編 米山堂 10 一三頁 四六 非賣
 *藏書目錄 第二輯 名古屋、郷土研究同好會編及發行 12 四三頁 半紙判 (尾參郷土研究第一六號) (騰寫版)
 *大道寺家藏書目錄-浦城亭藏書目錄-「河村本」目錄
 *岡山地方圖書館藏書目錄 岡山縣立圖書館編及發行 三五丁 半紙判 (騰寫版) 非賣
 *岡山藩校文庫-閑谷齋文庫-經誼堂
 *良書百選 第五輯 日本圖書館協會編及發行 3 三三頁 菊 (思想調査資料特輯) 非賣
 *良書百選 第六輯 日本圖書館協會編及發行 3 八六頁 四六 〇・一〇
 *Catalogue of books written in European languages and published in Japan, January-August, 1935. 國際文化振興會編及發行 三六頁 四六 非賣
 *文獻索引 第一年度合冊 アチツクミウェア編及發行 三三頁 四六倍 五・〇〇
 *東北帝國大學附屬圖書館 10 七頁 四六 非賣
 *圖書展覧目錄 (開學十周年記念) 京城帝國大學附屬圖書館 5 四二頁 四六 非賣
 *富岡文庫善本展覧會目錄 大阪府立圖書館 6 三頁 菊 非賣
 *尊重すべき明治大正本 齋藤 昌三 書物展覧 23 六二頁

靜嘉堂文庫陳列書略解 靜嘉堂文庫 書誌學 3 六
 本朝書籍目錄外錄 小川壽一校 歴史と國文學 8
 汲古閣刻校考稿 原 三七 東方學報 2 第六期
 官廳・學校・研究所と其の出版物
 惜分居割記抄 靜 岳 樓 東京古書 10 一六八-七二
 好日漫錄 長澤 規矩 國史 6 五五-六
 長澤 規矩 國史 6 五五-六
 長澤 規矩 國史 6 五五-六
 *金澤文庫本圖録 下 關靖編 巖松堂和本部内幽學社 5
 *眞福寺善本集影 名古屋、眞福寺寶生院編及發行 十年
 *圖書寮宋本書影 日本書誌學會編及發行 8 圖版三枚
 *美濃判 (善本影譜 別刊) 非賣
 *富岡文庫善本書影 大阪府立圖書館編 京都、小林寫眞製版所出版部 6 圖版九枚 非賣
 *成實堂古文書影百種 蘇峰先生文章報國五十年祝賀會編及發行、明治書院發賣 12 圖版二〇枚 菊 三・八〇
 *特殊本 (繪入本、寫本、古文書)
 *江戸時代木版繪本類展覧目錄 京城、朝鮮總督府圖書館編及發行 11 〇頁 菊 (小冊子第四) 非賣
 *成實堂古文書目錄 辻善之助監修 蘇峰先生文章報國五十年祝賀會編及發行、明治書院發賣 11 四三頁 菊 五・八〇

奈良繪本の研究 下 堀田 葦男 書誌學 1 六一
 奈良繪本・明治歌書展 立命館大學 1 六一
 繪入庭訓本のくさくさ 堀田 葦男 書物展覧 12 六一-二
 繪入本 山田 珠樹 訪 書 3 二
 繪入淨瑠璃の正本 若月 保治 圖書展覧 10 三〇
 丹祿本に就いて 宮崎 晴美 *近世文學の研究 11
 高野山見存の古寫經 水原 堯榮 愛 書 1 五
 日本古文書の分類法に就いて 黒板 勝美 史學雜誌 4 四七-四
 就いて 中村 直勝 史學雜誌 4 四七-四
 古文書研究の乘 史學雜誌 4 四七-四
 圖書館 文庫
 *圖書館史 和田萬吉著 芸艸會 12 三九頁 菊 (芸艸會叢書 第四篇) 五・〇〇
 *北條實時と金澤文庫 關靖著 金澤文庫 十年 三頁 四六 非賣
 *圖書文獻目錄 昭和十年分 天野敬太郎 圖書研究 1 九一
 *日本に於ける前圖書館史に就いて 宮内 信美 文獻報國 10 二
 *明治圖書館發達史略 大西 次郎 文獻報國 10 二
 *圖書館事業の恩人外山正一博士 竹林 熊彦 教育 4 九二
 *博物館書籍室・その他 竹林 熊彦 圖書研究 4 九二
 *本邦に於ける近代圖書

館の源流 竹林 熊彦 圖書研究 7 九
 明治時代圖ノ點描 竹林 熊彦 圖書研究 9 三〇
 東京府書籍館沿革考 竹林 熊彦 圖書研究 9 三〇
 明治圖書資料トシテノ「米國學校法」 竹林 熊彦 圖書研究 10 九
 華族會館圖書館 小谷 誠一 圖書研究 9 三
 日蓮上人と金澤文庫との關係に就いて 關 靖 神奈川縣報 7 二九
 射和文庫について 植松 安 圖書研究 8 三八
 射和文庫に關する一資料 森 潤三郎 圖書研究 10 三〇
 「射和文庫について」の補遺 竹林 熊彦 圖書研究 11 三〇-二
 羽田(野榮木)文庫について 植松 安 圖書研究 9 七
 蓬左文庫に就いて 福井 保 圖書研究 8 三八
 靜嘉堂文庫に納りたる松井簡治博士の藏書 川瀨 一馬 國語 9 一一
 靜嘉堂文庫に納りたる松井博士の藏書について 飯田 良平 書誌學 9 七
 古代西洋に於ける圖書館 金 柄模 文獻報國 10 二
 西洋中世の圖書館 伊藤 桑誠 圖書研究 10 一〇-一
 歐米に於ける中世以降の圖書館發達の概略 山本 春喜 文獻報國 10 二

圖書の保存

圖書保存方法の研究	宮良 當壯	愛書	1	五輯
圖書の保存と書盜の豫防	竹林 熊彦	愛書	1	五輯
古籍保存管見(漢籍)	吳 芳雲	愛書	1	五輯
曝書・その他に就て	小林 堅三	愛書	1	五輯
失敗の漫評	橋井清五郎	愛書	1	五輯
いろ／＼の注意根本の問題	今澤 慈海	愛書	1	五輯
臺灣の愛書家は泣かされる	西田 正一	愛書	1	五輯
古書の保存について	植松 安	愛書	1	五輯
書物の敵	國府 種武	愛書	1	五輯
書物の敵	市島 春城	愛書	1	五輯

鈴木重胤の遺稿探訪記 樹ト 快淳 書誌學 12 七二一三六
 我が古典教育と所謂偽書 熊原 政男 圖書研究 3 三〇三
 始皇帝の焚書に就いて 加藤 支智 圖書研究 11 四二二
 焚書の研究 伊東多三郎 歴史地理 1,11 六八四五

製本の手解きより奥まで 庄司浅水著 印刷雜誌社 5
 實用製本技術讀本 高橋秀三著 製本出版部 一六五頁 菊
 一・三〇

裝本美術の構成 恩地孝四郎 書窓 101
 裝釘界概観(昭和十一年) 齊藤 昌三 書物展望 1 六一
 裝釘界概観(昭和十一年) 齊藤 昌三 東京堂月報 12 三三二
 書物の裝幀について 長谷川誠也 書物展望 3 六三
 裝本の使命といふ題に 恩地孝四郎 東京堂月報 3 三三三
 活字・裝幀 百田 宗治 讀書感興 7 7
 裝幀の悲劇 松崎 顯 訪書 8 8
 書物裝幀考 禿 徹 愛書 9 七輯

日本藏書票協會昭和十年報 小塚省吾編 兵庫縣魚崎町、
 日本藏書票協會 8 七頁 新菊 六〇〇 特製 一〇〇〇
 其後の藏書票二つ三つ 川崎 操 圖書研究 12 年 二二五
 獨逸の藏書票本その他 小塚 省吾 書物展望 5 六五

著作 偽書 葉書
 著作を話題にして 厚木 勝基 學 證 12 四〇二
 著者眞偽考 波多野賢一 圖書研究 8 年 二二一
 作者雜考 鈴木 行三 書物展望 12 六三、五
 變名棟考 大下 巴二 圖書研究 12 六三七
 雅號考 奧田 勝正 圖書研究 12 六三七
 翻譯疑の說 神西 清 書物展望 4 六四
 反譯雜話 市島 春城 圖書研究 11 三〇二
 忙しい翻譯家 本多 顯彰 書物展望 4 六四

藏書票 藏書印
 藏書票 青野 季吉 東京堂月報 6 二五六
 後藤朝太郎 讀書感興 7 7
 松本 喜一 學 證 6 四〇六
 松本 喜一 圖書研究 12 三〇二

印刷 活字 紙(歴史的)
 世界印刷文化史年表 庄司浅水編 ブックダム社 11 二〇
 印刷文化の縱斷面 A. グラード 圖書研究 10 年 二二、三、五
 本邦洋式活版印刷史考 川田 久長 書窓 3 一一
 朝鮮鑄字考 金 瑗根 圖書研究 6 五三四
 紙漉車寶記のドイツ譯 本に就て 大澤 忍 紙業雜誌 1 三〇二
 和紙の二三 中村 直勝 紙業雜誌 6 三二四
 雲石紙考 太田 直行 紙業雜誌 7 三二五

出版 販賣(附、出版法規・著作權)
 出版界三十年史 小林篤里著 文藝社 三三頁 一・五〇
 編輯著述便覽 編輯研究會編 改訂増補 厚生閣 4 三三六
 大阪圖書出版業組合二十年史 大阪圖書出版業組合編及發
 行 1 一八頁 菊 非賣
 名古屋書商史 堀田保編 名古屋 同刊行會 一五三頁
 富山房五十年史 富山房編及發行 三八、七三、三頁 菊
 圖書賣上増進の研究(座談會速記録) 北條館 十年 六三

芝居繪本蒐蔵之記 澁井清著及發行 一八〇頁 四六 非賣
 名紙三十六書齋 篠塚周始編影 シノヅカ寫眞室 四六倍
 へ〇〇

ふらんす愛書考(びびり)
 おふいる・ぱりぢやん 柳 亮 書物展望 4 六四
 蒐書餘談 森 潤三郎 讀書感興 4 六二
 書癡妄語 矢野 峰人 愛書 4 六輯
 愛書雜談 鈴木信太郎 中央公論 6 五二六
 わが蒐書の歴史 松井 簡治 學 證 8 七二
 愛書病診斷 禿 徹 學 證 8 四〇八
 わが書齋 長谷川 三郎 新 潮 5 三三五

讀書印の話 長澤規矩也 書誌學 2 六六
 本邦藏書印表初稿 長澤規矩也 書誌學 2 六六
 本邦藏書印表補 鈴木清一郎 書誌學 12 七六

蒐書 愛書 書齋
 讀書と修養 加藤咄堂著 春潮社 十年 二四八頁 四六
 一・五〇
 先賢讀書法 岩垂憲德編 啓成社 一五六頁 〇・六〇
 * 勞務者讀書傾向調査 日本圖書館協會編及發行 3 四六頁
 菊 非賣
 讀書法(ホルブルツク・シヤ) 庄司 浅水 圖書研究 6 三二五
 タソンの著書による 廣瀬 哲士 東京堂月報 5 二三五

頁 菊半 非賣
 *賣れて行く本の話 志水松太郎著 峯文莊 一〇七頁 四六〇・五〇
 *千二百冊書籍雜誌店開業案内 附、たばこ店・古木屋 河村清一著 誠光堂 7 三三頁 四六・一〇〇
 *書籍雜誌小賣店開業の手引き 讀書新聞社編及發行 一三五頁 四六〇・五〇
 新刊書一年史
 昭和十年度限定版願望
 丸屋善七失踪
 支那の出版界と上海の本屋
 支那現時に於ける古書之騰印
 古本界の現状及び將來
 紅毛古木屋大會
 近頃古書即賣展雜感
 古木屋雜感
 古書の價格を論ず―飯亭文庫の入札の結果を見て
 第三者から見た古書相場の公表問題
 古本相場表禁止に就ての私見
 明治後半の業界談を聴

西村 捨也	讀書研究	4	二二
反町 茂雄	書物展望	1	六一
尾瀬 敬止	書物展望	1	六一
井東 憲	書物展望	6	六六
長澤規矩也	書誌學	7	七一
靜 庵	書誌學	11	七五
石川光太郎	東京古書報	11	一七三

く(座談會)
 中等教科書業界史談
 (座談會)
 出版及著作關係法令集 内務省警保局編 日本新聞協會 8 三三頁 四六・〇・八〇
 著作權法概論 藤村專一著 改訂再版 巖松堂書店 11 三二頁 菊 二・九〇
 出版權の譲渡及び質入 東 季彦 法學志林 9 三六九―二
 新著の寄贈 土岐 善麿 書物展望 1 六一
 二、部 門 編
 著作目録 雜誌新聞 叢書
 *海外邦字新聞雜誌史 蛭原八郎著 學而書院 1 三三頁 四六 非賣
 *Catalogue of periodicals written in European languages and published in Japan. 國際文化振興會編及發行 五頁 四六 非賣
 *京都帝國大學農學部學術雜誌目録 昭和九年十二月現在 同學部圖書室編及發行 2 120頁 四六倍 非賣
 九州帝國大學雜誌目録 (List of scientific reports and periodicals) 九州帝國大學附屬圖書館編及發行 11 一九九頁 四六倍 非賣
 明治大學備付送次刊行書一覽 昭和十一年三月末現在 明

治大學圖書館編及發行 3 三、五頁 菊 非賣
 *天理圖書館雜誌目録 天理圖書館編及發行 10 五頁 菊 非賣
 *明治大正及昭和十一年度圖書全集書目 第五輯 川島五三郎編 東京古書商組合 10 三九頁 菊 二・〇〇
 *現代圖書全集書目 昭和十一年版 大觀堂編及發行 支那名家著作目録 東洋史研究 三二―三
 陳垣(愛宕松男)―陳寅恪(小野川秀美)
 カール・フロレンツ先
 生の東亞研究 上 安藤 正次 愛 書 4 六輯
 雜誌の豪華版 河井 醉茗 書物展望 5 六五
 一番長命な雜誌は何か?
 一雜誌の年齢調べ
 丁酉倫理會論議講演集
 第一四〇號總目次
 支那主要各地に於ける新聞及通信機關の現勢
 昭和十年度隨筆書目録
 年表類索引 宮澤 泰輔 讀書感興 2 一三

哲學 宗教 教育
 *經學研究序説 諸橋轍次著 目黒書店 10 五四、二八頁 菊 四・五〇
 *孔子に關係ある圖書展覽會目録 民國天津、天津日本圖書館編及發行 12 一七丁 半紙判 非賣
 東方文化學院東京研究

所經部禮類善本に就いて
 昭和十年刊行漢學關係書籍及論文目録
 *佛書解說大辭典 小野玄妙編 第一二卷(總論) 大東出版社 2 九三頁 四六倍 一・〇〇
 *佛經經典總論(經典傳譯史―餘外經典考―大藏經概説) 日本神社資料目録 大辻 鏡藏 書物展望 3 六三、五
 日本神社資料目録(刊本之部)
 神社資料的に見たる日本地誌目録 大辻 鏡藏 神 社 10 一 二
 影印宋碩砂藏經尾跋集 的屋 勝 神 社 10 一 二
 淨土宗要典目録 福光 藏 神 社 10 一 二
 中華民國佛學論文要目 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 支那佛學關係雜誌論文要目 春日禮智 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 全唐文佛學關係撰述目録 岩井 諱亮 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 宋代新譯經典索引目録 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 佛敎史料としての金刻藏經
 一特に宋譯敎目録と唐宋法相宗章疏に就て
 塚本 善隆 東方學報 2 2
 龍池 清 東方學報 2 2
 禿氏 祐祥 佛敎研究 6 6
 日本佛敎史研究文獻目録
 朝鮮版法華經異版考 江田 俊雄 佛 教 5 二 三

經典傳輪小考 朴 奉石 文獻報國 11 二
 李朝刊經都監と其の刊 江田 俊雄 新報之圖書 10 五
 行佛典 總索引(第一卷至第二五卷) 神學研究會編及發行
 現在の教育雜誌界 花岡 淳二 書物展望 3 六
 臺灣公學校最初の國語 斯波 浦人 愛 書 9 七
 婦人庭訓本のくさくさ(一附) 堀田 葦男 書物展望 1-2 六
 り、擬教訓の軟派本 堀田 葦男 書物展望 1-2 六
 歴史 傳記 地誌
 *史籍解題(國史、東洋史、西洋史) 遠藤元男、鈴木俊、原種行、田中正義編 平凡社 5 二五〇、二八三、二九八、三三三、三三頁
 *綜合國史研究 中、下卷 栗田元次著 同文書院 1 菊
 中卷 五三二-二七三頁 三・八〇 下卷 一七三-一八八頁 五・〇〇
 *國史學の方法 小中村清矩著 東學社 3 三三三頁 四六
 一・五〇
 *日本先史學序史 中谷治宇二郎著 岩波書店 十年 12 二・五〇
 *昭和十年の國史學界(附:昭和十年國史學關係論文著書目録)

錄)代々木會編 筑波研究部 6 三三、八三頁 四六倍
 (筑波研究部年刊、第七) 非賣
 松尾神社所藏文書目録 京都、松尾神社編及發行 八八頁 菊 非賣
 *東洋史論文要目 訂補 大塚史學會高師部會編及發行 三三三頁 四六 非賣(一〇〇)
 歷史書の形態雜攷 吉田 三郎 史 潮 2 六一
 史學に關する内國雜誌 古 愚 生 朝野之圖書 6 五三、四
 古事記の書誌 田中 初夫 文獻報國 9 二二
 古事記研究註釋書目 宇佐神正康 國語國文 23 六二、三
 日本書紀研究史雜考 植松 安 國語國文 4 四二、四
 朝鮮史籍解題講義 小田 省吉 青丘學叢 2 二五
 東洋史研究參考書目 有 高 巖 其神史叢書 二
 傳記資料索引 第一卷第四册 東京市立日比谷圖書館編及發行 3 三三六頁 四六倍 非賣
 近世人物資料綜覽 森 銑三 傳 記 三六二
 吉田松陰關係文獻一覽表 吉田松陰全集 4 一〇卷
 マキヤグエリ研究文獻 金倉 英一 西洋史研究 十年 12 八
 地理學關係文獻目録 第一卷(昭和十年) 大塚地理學會編及發行
 *地理學評論 總索引(自第一卷至第一〇卷) 日本地理學會編 古今書院 5 (地理學評論第一二卷第五A號)
 *A Short bibliography on Japan in English. Rev. ed. 國際文化振興會編及發行 3 三三頁 四六 〇・五〇
 *Bibliographie abrégée des livres relatifs au Japon en

Francais, Italien, Espagnol et Portugais. 國際文化振興會編及發行 五〇頁 四六 非賣
 *全國旅行案内 今治市立明德圖書館編及發行 十年 12 二六頁 橫本四六 非賣
 *函館郷土史料目録Ⅱ函館開港記念回顧展覽會出陣 市立函館圖書館編及發行 十年 11 三三六頁 菊 非賣
 *〔青森縣〕郷土文獻目録 第一編 青森縣中央圖書館編及發行 3 四八頁 四六倍 非賣
 *東京地誌繪畫寫真索引 東京市立駿河臺圖書館編 東京市役所 3 四八頁 菊 (調査資料第四) 非賣
 *富山市郷土史料圖書目録 昭和十年三月末現在 富山市立圖書館編及發行 十年 4 菊 非賣
 *和歌山文明開化展覽會出品目録 和歌山、十日會 十年 11 三三頁 四六 非賣
 *兵庫縣郷土史料綜合目録(圖書館之部) 兵庫縣圖書館協會編 神戸 兵庫縣學務部社會教育課 6 二四三頁 菊 非賣
 *讚岐郷土史料目録 昭和十一年版 高松、香川縣立圖書館編及發行 3 四六倍 非賣
 *〔長崎縣〕郷土史料目録 昭和十一年三月末日現在 長崎縣立長崎圖書館編及發行
 *東洋文庫地方志目録 支那、滿洲、臺灣 東洋文庫編及發行 十年 12 三三七、三三頁 四六倍 非賣
 *全滿洲關係和漢書件名目録 續編第一 大連、滿鐵圖書館業務研究會編及發行 十年 3 一九〇、七頁 四六倍 非賣

北支那文獻綜覽 滿鐵大連圖書館編及發行 1 六四頁 菊 非賣
 幕末に於ける世界地圖 目録 五六
 江戸時代出版の交通地圖 池田 哲郎 圖書週報 12 一四四-五
 郷土史誌の片鱗 一二 伊禮次五郎 國際觀光 4 四二
 近畿地方の古地誌に就いて 國分 剛二 歷史科學 10,11 一〇、一一
 近畿地方地理研究文獻 岩根 保重 立命館文學 5 三五
 岩根 保重 立命館文學 5 三五
 岩根 義之 朝 鮮 11-12 二五七-八
 北滿關係雜誌資料索引 哈爾濱圖書目録 六月號
 歐米人の支那學研究文獻目録 七八 青木富太郎 歷史學研究 六一二
 唐宋の地方誌に就いて 青山 定雄 福部博士古 六
 古代支那の地理學文獻 小川 豚治 地理學叢書 8-11 二二五
 支那に關する文獻についで 今中 次麿 書物展望 12 六二
 法政 經濟 社會
 *日本經濟資料索引 第一卷第一一六號 日本索引學會編及發行、巖松堂書店發賣 3 菊 各一〇〇
 *資源資料要録 外國ノ部 第一號 資源局編 國勢社 4 一七二、五頁 四六倍 一〇〇

*南滿洲鐵道株式會社刊行物目錄 昭和十年十二月末現在
同社編及發行 4 二四九頁 菊 非賣

*藏書目錄 昭和十一年六月現在 野村合名會社調查部編及發行 一三三頁 菊 非賣

*〔朝鮮銀行〕調査課刊行物目錄 自昭和十一年一月 京城、朝鮮銀行調査課 7 三三頁 菊 非賣

*滿鐵調査月報總目錄 (自昭和六年九月至昭和十一年九月) 南滿洲鐵道株式會社 9 三三頁 菊 非賣

*Bibliographie des principaux ouvrages juridiques edités dans l'Empire japonais. 日佛會館編及發行 7 一〇八頁 菊 (Bulletin de la Maison franco-japonaise, Tome 7, nos. 3-4) 二〇〇

明治初期社會經濟思想 加田 哲二 三田書房發行 5 三〇 五

文獻大要 原著對照本邦翻譯書目録 川崎 操 書物の目録 12 三一・二

明治十年までの主要新聞政治法律記事索引 トマス・スペンスの著作に就て 伊藤 久秋 商業と經濟 10 一七一

地方制度改革に關する文獻目錄 都市問題 5 三三 五

都市問題關係主要參考文獻 昭和二〇・二一・二二 日本都市年報昭和十二年用 11 二二 五

國際關係に關する文獻

目錄 昭和九年 小谷 鶴次 漢語法外史雜誌 1 三五 一

日英交通史料 一五二六 武藤 長藏 商業と經濟 3.10 一七 一

法律文獻(昭和十年四月一十一年三月) 鈴木 安藏 法律年鑑(日本法律學會會報) 8

日本憲法學文獻目錄 昭和十年度商關係法文獻解題 高田 源清 研究論集 6 九一 二

本邦英米法文獻目錄 日本の加入せる條約目錄 (昭和六十年) 小谷 鶴次 國際法外史雜誌 1 三五 一

*經濟學研究の榮 東京商科大学一橋新聞部編 三省堂 十年 6 四〇・七頁 四六 二〇〇

*經濟史年鑑 昭和十一年版 日本經濟史研究所編 日本評論社發賣 11 三四頁 菊 (經濟史研究 第十六卷第五號) 一〇〇

*Honjo, Eijiro: A bibliography of Japanese economic history, 1796-1935. 京都・日本經濟史研究所 5 三三 頁 非賣 (〇・六〇)

*朝鮮經濟關係資料展觀目錄 (開學十周年記念) 京城帝國大學法文學部經濟研究室 5 三頁 四六 非賣

昭和十年度經濟學文獻解題 大熊 信行 研究論集 6 九一 二

昭和十年度經濟史文獻解題 城寶 正治 研究論集 6 九一 二

昭和十年度商學文獻解題 諸 氏 研究論集 6 九一 二

*生命保險會社協會所藏洋書目錄 昭和九年度增加 生命保險會社協會編及發行 2 四四頁 四六倍 非賣

*滿洲農業移民文獻目錄 日本學術振興會 3 一六六頁 新菊 (學術部第二特別委員會報告第五編) 一〇〇

*本邦統計資料解説 後藤貞治著 叢文閣 9 二九三・三〇三頁 菊 (實務統計學講座 第一八卷) 二・五〇

*統計資料解説 內閣統計局編 全國經濟調查機關聯合會 12 四〇三・四一八頁 四六倍 五〇〇

*統計集誌總目錄 東京統計協會編及發行 三三三頁 菊 〇・二〇

昭和十年度社會學文獻解題 小山 隆 研究論集 6 九一 二

社會問題關係主要雜誌記事目錄 (昭和十年度) 大原社會問題研究所發賣 5 三五 一八

我國に於ける體系的勞働文獻集成 勞働立法 1 三 三一 三

都市保健問題に關する最近の文獻 都市問題 8 三三 二

款派書誌文獻 長江 銜吉 圖書週報 11 一五一 四

自然科學 數學 醫學 地質學雜誌 總目錄及索引 (第四〇一—五〇〇號) 日本地質學會編及發行 東北大學關係刊本錄の補正特に具應算法に就いて 平山 諦 時書報 2 一一〇

曆本—伊勢曆を中心と

本邦に於ける植物病害に關する文獻目錄 三村清三郎 書物展覧 3 六 三

昭和八年度分 西門 義一 農學研究九年 9 二五 卷

昭和九年度分 松本 弘義 農學研究十年 6 二四 卷

同植物遺傳學及び育種學に關する特論的著書輯録 明峰 正夫 札幌農學院會報 6 二六 一三 一

*河本文庫目錄 (舊ハルシニヤルカ藏書) (Katalog der Bibliotheksammlung von J. Hirschberg, Berlin 1901) 河本博士喜壽祝賀會 二〇・三三頁 菊 非賣

*日本齒科文獻年報 昭和五、六、七年度 齒苑社編及發行 二・〇〇

*内外新藥文獻抄總覽 第六卷 大阪、醫局及藥局社編及發行 二四頁 四六倍 二・五〇

*日本社會衛生年鑑 第十五册 (昭和十一年版) 倉敷勞働科學研究所編及發行 岩波書店發賣 9 三〇九頁 四六倍 二・〇〇

工業 工業 建築雜誌 總目錄 第一輯至第四九輯 建築學會編及發行 重要礦物資源資料目錄 資源局 內閣印刷局 4 一六三頁 四六倍 一・〇〇

*日本ポルトランドセメント同業會藏書目錄 昭和十一年三月三十一日現在 大阪、同會編及發行 4 二六頁 四六倍 非賣

本邦に於ける土壤肥料
に關する文獻目録
昭和八年度分 松野 孝夫 農學研究 九年 3 二卷
昭和十年度分 同 農學研究 十年 3 二卷
稻及米に關する邦文主
要文獻目録 第二輯 近世 萬太郎 農學研究 6 二卷
寺一 徳色 海峯 夫

美術 諸藝

東洋美術研究文獻目録
昭和十年 美術研究 五七
昭和十年度美術關係文
獻目録
古今刀劍文獻總覽
演劇書類 川尻 清潭 日本美術一覽 昭和十一年版
世阿彌研究文獻總覽 上出 幹一 東京古書報 昭和十一年版
吉原本 澁井清著 古版畫研究會 二五頁 菊牛 〇・七〇
山岳に關する本邦文獻 坂口 水 山岳講座 十年 12 二卷
山岳に關する外國文獻 (古典解題) 松方 三郎 山岳講座 7 八卷
山の本 石川 欣一 學 9 九
山の文獻抄 澗野 義雄 國語教育 11 二二

語 學

國語教育研究書目(大
正元年以降)
五十音分類體辭書の發

達
元祿期の辭書界 岡田 希雄 國語國文 10 六二〇
本邦英語辭書目録 文 岡田 希雄 立命館文學 8 三八
化八年—明治三年 東條 操 訪 書 8 二輯
方言書探査 東條 操 書物展望 7 六七
刊行方言書目解題(一—二 東條 操 方 言 2,10 六二,二〇
北部アジアの言語研究 小倉 進平 學 9 四〇九

文 學

國文學研究室展觀目録 九大國文學會編 九州帝國大學國
文學研究室 11 二頁 四六 非賣
古辭書類展觀—明治時代歌集歌書歌誌展觀
A Short bibliography of English translations of Japan-
ese literature. 日本文學會編及發行 十年 二頁 菊
明治文學研究參考書一
覽
明治大正著者別大年表 齊藤 昌三 書物展望 3-10 六三—一〇
外國に紹介された我が 柳澤 健 東京古書報 4 一六六
「文學界」總目次及内容 中頭美久子 國文國史 11
文學評論欄草紙年表 枕草子研究への示唆—
特に文獻學的方法に 關して 大津 有一 國語と國文學 4 一三四

鴨長明書誌 篠瀨 一雄 鴨長明研究 4 4
西鶴本棟話 瀧田 貞治 愛 書 4 4
續西鶴本棟話 瀧田 貞治 愛 書 9 4
去來の遺著 瀧田 貞治 愛 書 1 6
良寛和尚研究書年表 遠山 萬里 東京古書報 一七—二四
高山樗牛の重要著作 高須芳次郎 書物展望 3 六三
漱石の異本朝日組替版 に就いて 鎌倉 幸光 愛 書 4 六輯
漱石研究參考文獻目録 鎌倉 幸光 文 學 12 4
鷗外研究文獻總覽 瀧田 貞治 文 學 6 四六
小栗風葉文獻解題 陸井 清三 叢 書 一—一五
水滸作品手澤本集書目録 大橋圖書館編及發行 7 三〇頁
四六倍 非賣
藤村研究文獻 佐伯雄一郎 文 學 8 四八
*萬葉集研究年報 第六輯 (昭和十年度) 萬葉三水會編
岩波書店 6 一四四—一四頁 菊 一・三〇
愚庵參考文獻覽書 明治文學研究會 立命館文學 3 三三
覽書目録 明治文學研究會
現代歌書年表索引 小泉 冬三 立命館文學 1 三一
明治大正歌書年表補遺 小泉 冬三 立命館文學 1—6 三一—六
訂正 小泉 冬三 立命館文學 7 三七
明治大正歌書解題 小泉 冬三 ポトナム 一五—二二
明治歌書の話 小泉 冬三 書物展望 8,6 六六—八
明治時代短歌關係雜誌 藤田 福夫 榮 木 4—6 七四—六

現代歌集展覽會目録並
解題

尾上柴舟作品目録 淵 浩一 ポトナム 4 一五
尾上柴舟博士著作年表 服部聖多朗 圖書週報 4—6 一四—七九
*狂歌書目集成 菅竹浦編 京都、星野書店 二二頁 菊 二八〇
*文壇通歌俳諧書目 第一輯 杉浦正一郎編 (奈良縣丹波市町) 綿屋文庫 二頁 美濃半截 非賣
*山田版並山田關係書目 第一輯 俳書 宇治山田市立圖書館編及發行 十年 菊
古俳書について 川島 つゆ 書物展望 6 六六
誤られた俳書名と其の 原名 志田 義秀 圖書週報 9 二〇九
繪入淨瑠璃の正本 若月 保治 圖書週報 10 三〇〇
江戸長唄集について 藤田徳太郎 書物展望 10 六二〇
*戰記物語の研究 後藤丹治著 筑波書店 1 五〇三—三頁 菊 四・〇
*軍戰記展覽會目録 石川縣圖書館協會編及發行 十年 12
七—三頁、圖版五枚 四六 一・五〇
戰記物語中の詐病 渡邊 房吉 書物展望 9 六九
浮世草子 樋口慶千代 訪 書 8 一
明治の小説叢書 岡野他家夫 訪 書 8 二輯
元明兩朝に於ける戯曲 長澤規矩也 漢學會雜誌 7 四二
小説の書誌學的考察 長澤規矩也 漢學會雜誌 7 四二
*ドストイエフスキー文獻考 木寺黎二著 三笠書房 一四六
頁 四六 非賣
*エ・イー著作初版目録 根本 彦一 訪 書 3,5 一—二輯

圖書出版に關する新聞雜誌

(五十音順)

例年の通り、本年も又、刊行されつゝある圖書關係の新聞雜誌を左に採録した。その一節は本年鑑の參考乃至資料になつたものであるが、同好研究家の爲に發行回数、形態、定價、發行所等を摘録する。(但し各出版社の自家宣傳圖誌は省略した)

(A) 出版業界關係

出版名	(發行日)	(形態)	(定價)	(發行所)
出版研究	不定期	菊	非賣	早稻田大學出版研究會
出版研究所	週二回	四六倍判	五〇〇	東京市豊島區日出町一ノ二六
出版新報	月一回	菊	三〇〇	東京市神田區猿樂町二ノ一
出版タイムス	月四回	四六倍判	五〇〇	東京市神田區錦町三ノ二二
出版通	月三回	四六倍判	五〇〇	東京市神田區錦町三ノ一五
新聞之新報	日刊	新聞大判	月一、二〇〇	東京市神田區神保町三ノ二三
東京書籍商組合月報	月一回	菊	三〇〇	東京市神田區駿河臺一ノ二
日本出版新聞	月一回	新聞大判	年一、〇〇〇	東京市神田區駿河臺一ノ二
東京書籍商組合月報	月一回	新聞大判	年一、〇〇〇	大阪市南區難波新地四ノ一三

(B) 新刊目錄及紹介批評誌

官廳刊行圖書目錄	新刊	東京	月報	月報	月報	月報	月報	月報	月報
年四回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回
四六倍判	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊
一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
東京市麹町區大手町	東京市東區北久太郎町四丁目	東京市麹町區九段一ノ七	東京市神田區駿河臺一ノ二	東京市神田區森川町八〇	東京市本郷區森川町八〇	東京市本郷區宇田川町二九	東京市神田區小川町三ノ六	東京市本郷區本郷四ノ二一	濱松市連尺町二六
東京市麹町區大手町	東京市東區北久太郎町四丁目	東京市麹町區九段一ノ七	東京市神田區駿河臺一ノ二	東京市神田區森川町八〇	東京市本郷區森川町八〇	東京市本郷區宇田川町二九	東京市神田區小川町三ノ六	東京市本郷區本郷四ノ二一	濱松市連尺町二六
東京市麹町區大手町	東京市東區北久太郎町四丁目	東京市麹町區九段一ノ七	東京市神田區駿河臺一ノ二	東京市神田區森川町八〇	東京市本郷區森川町八〇	東京市本郷區宇田川町二九	東京市神田區小川町三ノ六	東京市本郷區本郷四ノ二一	濱松市連尺町二六

日本讀書新聞	日本讀書院月報	福本屋タイムス	谷島屋タイムス	Sanselido's Announcement	Martens Announcement of New Books	The Piper
月三回	月一回	年六回	月一回	月一回	月一回	月一回
四六四倍判	四六四倍判	四六四倍判	四六四倍判	菊	菊	菊
非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣
東京市神田區小川町三ノ六	東京市本郷區本郷四ノ二一	濱松市連尺町二六	東京市神田區神保町一ノ一	東京市日本橋區通二丁目	東京市日本橋區室町三丁目	東京市日本橋區室町三丁目
日本讀書新聞社	日本讀書院	福本屋書店	谷島屋書店	丸善株式會社	三越洋書部	三越洋書部

(C) 書物研究及書物趣味雜誌

愛書會	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌
不定期	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回	月一回
菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊
六〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
臺北市臺灣總督府圖書館內	東京市本郷區龍岡町一五	東京市赤坂區二ノ八	秋田縣南秋田郡一日市町	東京市中野區新井町五九四	名古屋市中區本郷町三八	東京市京橋區新富町三ノ七	東京市保谷村	東京市須磨區養老町二ノ一	神戶市須磨區養老町二ノ一
臺灣愛書會	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌	私誌

(D) 圖書館關係

學友會雜誌	本訪	本訪	本訪	本訪	本訪	本訪	本訪	本訪	本訪
年一回	年一回	年一回	年一回	年一回	年一回	年一回	年一回	年一回	年一回
菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊	菊
非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣	非賣
東京市上野公園	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘	東京市目黒區中根町旭ヶ丘
文部省圖書館講習所學友會	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行	本道樂發行

出版界一年史(昭和十一年度)

寶塚文藝圖書館月報 一月一回 四六倍判 非賣 大連市東公園町
 朝鮮文藝圖書館月報 一月一回 四六倍判 非賣 兵庫縣武庫郡良元村寶塚
 圖書研究會 一月一回 四六倍判 非賣 京都市南區大門朝鮮總督府圖書館內
 圖書新報 一月一回 四六倍判 非賣 大阪府南區安堂寺橋通四ノ五
 圖書報 一月一回 四六倍判 非賣 京都市東區東區三ノ宮
 帝國圖書館報 一月一回 四六倍判 非賣 大連市霞町一七
 文獻報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市豊島區巢鴨町二ノ四七
 旅順圖書館報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市下谷區上野公園內
 旅順市千歲町

(E) 雜

學 證 一月一回 四六倍判 非賣 東京市日本橋區通二丁目
 雜誌 不定期 四六倍判 非賣 東京市京橋區銀座西七ノ五
 雜誌 一月一回 四六倍判 非賣 東京市小石區高田老松町一七
 雜誌 一月一回 四六倍判 非賣 東京市芝區三田綱町一〇
 雜誌 一月一回 四六倍判 非賣 大連市南區疊屋町一四
 雜誌 一月一回 四六倍判 非賣 京都市伏見區京町八丁目 若林方

(F) 古

大阪古書商組合月報 一月一回 四六倍判 非賣 大連市南區高津町十番町一九
 東京古書商組合月報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區小川町三ノ三二
 日本古書通信 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區小川町三ノ二四
 山ノ手書好會々報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市中野區住吉町八 足立書店內

(G) 印

印刷新報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區錦町二ノ七
 印刷新報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區錦町二ノ七
 印刷新報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區錦町二ノ七
 印刷新報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區錦町二ノ七
 印刷新報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區錦町二ノ七
 印刷新報 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區錦町二ノ七

(H) 紙

紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市中野區上ノ原町一
 紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區駿河臺三ノ六
 紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市東區森の宮東ノ町四一九
 紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市京橋區新富町三ノ六
 紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市京橋區新富町三ノ六
 紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區淡路町一ノ一三
 紙業及 一月一回 四六倍判 非賣 東京市神田區淡路町一ノ一三

讀者人「東京堂月報」合本

天金布裝 定價各卷二圓 送料廿二錢

部 二 第
計 統 諸 版 出

調 月 一 年 二 十 和 昭

最 近 八 ヶ 年 諸 統 計

種 目	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年
種 目	三、九六六	三、三四七	二六、三三二	二四、〇三五	二二、一〇四	二二、一〇	三三、四七六	二二、一一一
普通出版物	五、二八五	六五、四二六	八五、九六六	九一、四八九	五三、九五七	四一、四五六	三九、三三九	三七、四〇二
雜誌 納本數	一〇、四九七	八、七〇三	九、六二九	一〇、三八一	九、二九六	九、八九六	一〇、三三九	一〇、三四一
官 廳 版	二、二八〇	二、一〇一	三、一六五	二、一八〇	一〇、九六〇	一〇、六六六	一〇、一三〇	九、一九一
新聞雜誌年末數	五、〇〇三	四、八二二	四、五七三	四、七二八	四、三八五	四、〇八〇	四、一三六	三、一〇一
書店 投單行本	一五、〇七三	一四、九七四	一五、三三五	一五、一八一	一四、八六七	一四、五四九	一四、〇三九	一三、三三二
全國書籍雜誌組員	六八、五八四	六五、四七三	六二、一六〇	五八、〇一〇	五二、四五〇	五二、三五〇	五二、一〇〇	四八、六〇〇
主要雜誌費上數	五、〇八〇	五、〇八〇	五、〇六八	四、八八一	四、八〇九	四、五一〇	四、一〇〇	四、五九〇
全國圖書館數	—	—	—	—	—	—	—	—
同 閱 登 人 員 數	—	二五、六七三	二五、八二六	二六、三八三	二八、二五七	二六、八六四	二六、四七三	二二、三四〇
印刷用紙販賣高	百萬封度 一、八七三	一、六八〇	一、六〇五	一、四六八	一、四一四	一、三二九	一、三四七	一、三七九

藝 淵 耽 溺

文學博士 高野辰之著 [忽ち再版]

四六判三五〇頁
挿圖 六十面
總布裝函入美木
定價金貳圓五拾錢
送料 十四錢

著者が古書畫に對する鑒識の精且つ高は、夙に世に知る所、此書始めて多數圖版を挿入して其蘊蓄を開く。特に和漢書道の沿革を説き、釋家の墨蹟を論じて要約の妙を示し、別に文人畫俳畫を敘して造詣の淺からざるを現す。又後半の歌舞演劇篇には洞見の透徹を、追憶主張の二篇には探甚の感懷を寄す。莊重の辭、熱烈の慨、活潑の意衷、之を明快暢達の筆もて描く。悉く是味曠四十年の所産、耽溺は蓋し謙讓の語。隨筆か否、論文か否、批評諷刺か否々、著者が多年多方面研究の報告。痛烈快哉篇と破顔一笑篇と、肅然正襟篇と、手を執り合つて列してゐる。

(次 目 容 内)

- 〔書畫篇〕
一、書畫耽溺の回顧
二、五山僧の墨蹟
三、寂嚴と良寛
四、明治高僧の墨蹟
五、行書趣味(江戸名僧の墨蹟)
六、書道と學問
七、畫僧雲室
八、待教四畫
九、佛畫
十、波邊山と江戸名所
二、曝涼漫記

- 一、三、紙 片
〔演劇舞踊篇〕
一、藥師寺の花會式
二、歌舞伎劇の前途
三、古曲の將來
四、矢田よ、いづこ
五、梅幸惜當
六、舊劇の上に見る國民性
七、レコード舞踊
八、レコード舞踊
一、楠公六百年祭に際て

- 〔主張篇〕
一、大自信家如電翁
二、言海博士追憶
三、黒木君と私
四、龍江先生追憶
五、馬を趁ふ
六、山莊閑語
七、唱歌教育の礎石
八、小説と感化
九、音樂家と著作
七、煙幕生活
八、教材としての淨瑠璃

下 段 九 ・ 京 東
堂 京 東
〇 七 二 京 東 替 振

昭和十一年度普通出版物(納本数)統計

(内務省警保局調査)

種類	昭和十一年度普通出版物(納本数)統計												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
政治	109	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
法律	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
經濟	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
社會	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
軍事	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
統計	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
宗教	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
哲學	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
教育	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
教科	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
文學	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
語言	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
歷史	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
地理	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
地誌	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
紀行	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
數學	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
物理	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
醫學	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
衛生	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
醫學	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
產科	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
交際	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
美術	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
音樂	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
家庭	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
娛樂	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
家庭	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
技術	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
辭書	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
叢書	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
雜誌	103	112	103	133	133	133	133	133	133	133	133	133	1,277
合計	1,938	1,883	2,471	2,787	2,698	2,940	2,780	2,321	3,034	3,244	2,973	3,029	31,996

同 體裁分類表

(内務省警保局調査)

體裁	昭和十一年度普通出版物(納本数)統計												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
工學	52	51	84	62	68	91	54	64	67	99	75	93	865
醫學	67	64	72	107	83	68	116	78	97	92	80	61	985
產科	90	75	156	186	188	158	147	144	179	183	188	190	1,884
交際	7	7	13	18	29	33	16	15	25	23	19	27	243
美術	51	64	72	107	83	68	116	78	97	92	80	61	985
音樂	7	7	13	18	29	33	16	15	25	23	19	27	243
家庭	98	68	77	96	80	92	92	84	113	101	85	83	1,185
娛樂	60	68	77	96	80	92	92	84	113	101	85	83	1,185
家庭	60	68	77	96	80	92	92	84	113	101	85	83	1,185
技術	60	68	77	96	80	92	92	84	113	101	85	83	1,185
辭書	7	7	13	18	29	33	16	15	25	23	19	27	243
叢書	7	7	13	18	29	33	16	15	25	23	19	27	243
雜誌	83	79	99	134	119	126	167	138	156	149	126	127	1,587
合計	1,938	1,883	2,471	2,787	2,698	2,940	2,780	2,321	3,034	3,244	2,973	3,029	31,996

普通出版物(銷本數)累年比較表

(內務省警保局調査)

種別	昭和七年	昭和十年	昭和九年	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	大正末年	大正十四年	大正十三年	大正十二年
政治	1,137	1,047	704	581	614	518	454	438	545	615	680	513	554	242
法律	876	774	635	699	574	580	488	533	500	530	611	503	426	382
經濟	2,000	1,482	1,005	1,181	1,236	914	907	727	486	379	400	420	284	208
社會	1,253	804	832	990	1,333	1,279	1,053	861	775	642	600	420	284	195
統計	183	256	130	104	117	114	75	84	192	137	119	154	44	33
神學	340	220	217	226	190	251	219	215	766	735	811	873	763	722
宗教	1,551	1,596	1,339	1,045	933	1,153	1,038	1,025	766	735	811	873	763	722
哲學	1,248	1,245	985	544	548	566	455	498	327	191	351	381	274	191
教育	2,581	2,041	2,798	2,727	2,234	2,482	2,389	1,827	3,383	3,444	3,886	3,128	2,745	1,714
教科書	1,488	2,260	1,809	1,948	2,111	2,139	2,661	2,418	3,082	3,276	3,900	3,075	2,326	1,741
文學	3,189	2,669	2,431	862	813	780	788	790	583	680	711	716	490	311
文學	1,341	967	1,114	455	421	309	337	310	307	339	307	287	226	149
歷史	460	530	470	332	284	315	258	207	357	261	309	278	200	174
傳記	547	584	532	332	284	315	258	207	357	261	309	278	200	174
地誌	1,397	1,191	986	708	741	769	777	771	768	679	1,180	798	527	399
地理	70	110	77	47	80	110	117	151	109	142	108	238	171	153
算學	590	347	203	87	80	110	117	151	109	142	108	238	171	153
理學	602	660	448	458	461	433	434	492	329	188	231	272	272	251
工學	862	804	734	587	461	433	434	492	329	188	231	272	272	251
醫學	985	827	899	771	703	574	427	251	266	480	517	438	226	244

出版諸統計

種別	昭和七年	昭和十年	昭和九年	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	大正末年	大正十四年	大正十三年	大正十二年
產業	1,884	1,488	1,166	434	384	473	453	386	473	518	635	798	691	647
交通	243	145	151	73	45	80	44	108	80	53	41	100	55	83
兵事	414	383	407	156	122	117	144	97	61	69	65	91	55	74
美術	1,817	915	907	844	1,121	817	670	711	711	626	744	560	453	509
音樂	1,885	1,407	888	915	1,009	1,169	1,130	1,284	895	1,009	700	887	1,171	1,131
技藝	185	145	67	94	64	86	80	102	440	491	746	889	724	442
叢書	102	102	134	151	138	137	89	79	86	77	102	141	53	83
評論	378	369	234	18	26	24	88	44	113	56	78	26	20	44
家庭	1,451	1,815	1,161	1,110	672	785	773	848	293	187	189	26	20	44
娛樂	761	558	552	451	462	583	770	674	187	187	189	26	20	44
小說	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
雜說	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
經典	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
天文	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
漁業	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
式禮	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
俗禮	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
感化	1,587	2,606	2,415	3,027	2,547	2,510	3,101	3,192	4,018	4,221	1,895	1,307	968	637
合計	31,996	30,347	26,331	24,035	23,104	23,104	23,104	23,104	19,880	19,967	20,223	18,028	14,361	10,946

出版圖書數 (納本數) 曆年表 (内閣統計局調査)

年次	總數	(著作)	(編譯)	編輯	反刻	雜誌	官廳版
明治三十四年	五,九七三	二,一三三	一六八	三,三九八	二七五		
明治三十五年	七,六四八	二,八一七	二八一	三,九三〇	六二六		
明治三十六年	九,四六二	二,八八一	三三三	五,五四八	七〇一		
明治三十七年	九,八九三	二,七六五	三〇三	六,一五四	六七一		
明治三十八年	八,五九七	二,八一二	四五四	四,六八三	六四八		
明治三十九年	八,一〇五	二,四八一	四五一	四,三三九	八二四		
明治四十年	一〇,四五五	二,七五三	六九二	六,一三五	八七五		
明治四十一年	一三,七一八	五,五二八	四五六	六,一八三	五五一		
明治四十二年	一五,一三五	六,三二三	二六九	八,〇六一	四八二		
明治四十三年	一八,七二〇	七,四七六	二二三	一〇,五八〇	四四一		
明治四十四年	二二,五六八	七,九五六	二〇六	一三,九三六	四一〇		
明治四十五年	二二,四四九	七,三五八	一五五	一三,九三六			
明治四十六年	二六,四一五	七,二一六	一八九	一九,〇一〇			
明治四十七年	二七,五二〇	八,七二〇	一八九	一九,〇一〇			
明治四十八年	二六,一七〇	八,三三四	二二四	一八,六一五			
明治四十九年	二五,五七六	六,八四五	二二三	一七,七二二			
明治五十年	二五,五三三	二五,三八一	一四一	一八,六〇八			
明治五十一年	二〇,八一四	二〇,八〇五	九				
明治五十二年	二二,四三五	二二,二五五	一一一				
明治五十三年	一八,二八一	一八,一七〇	一一〇				
明治五十四年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治五十五年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治五十六年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治五十七年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治五十八年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治五十九年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十一年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十二年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十三年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十四年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十五年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十六年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十七年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十八年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治六十九年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十一年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十二年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十三年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十四年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十五年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十六年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十七年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十八年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治七十九年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				
明治八十年	二二,八二一	二二,八二一	一一一				

明治三十年以後ノ反刻
及編譯ハ著作ノ内
ニ含メス

明治四十三年ヨリ
雜誌ハ別ニ調査シ
テ之ヲ加フ

大正七年著作數減
少セルハ官廳出版
物ヲ除ケルニ由ル

年次	總數	(著作)	(編譯)	編輯	反刻	雜誌	官廳版
明治三十四年	三,一九五〇	二,九四二	一七	一,九〇三			
明治三十五年	二四,二九六	二四,二七九	一七	一,九〇三			
明治三十六年	二五,六〇二	二五,五七四	二八	二,八二一			
明治三十七年	二七,〇九五	二七,〇七八	一七	二,八二一			
明治三十八年	二八,三一九	二八,二五四	一五	二,八二一			
明治三十九年	二九,一〇九	二九,〇六〇	四九	二,八二一			
明治四十年	二八,五二二	二八,四七九	四三	二,八二一			
明治四十一年	三四,一二三	三四,〇六六	五七	二,八二一			
明治四十二年	四一,六二〇	四一,八三七	二五	二,八二一			
明治四十三年	四三,二四四	四三,五三二	九一	二,八二一			
明治四十四年	四五,二八六	四五,八六八	九一	二,八二一			
明治四十五年	四五,五六三	四五,一〇四	八七	二,八二一			
明治四十六年	四四,五一一	四四,五五四	二八	二,八二一			
明治四十七年	四九,一八一	四九,三三二	二六	二,八二一			
明治四十八年	四九,九〇二	四九,五〇一	四〇	二,八二一			
明治四十九年	四八,〇一一	四八,二七	一三	二,八二一			
明治五十年	四八,九四七	四八,五六〇	一四八	二,八二一			
明治五十一年	四七,三五四	四七,四〇〇	一五三	二,八二一			
明治五十二年	四八,四〇四	四八,四〇四	二六二	二,八二一			
明治五十三年	四八,八九二	四八,〇八一	一〇	二,八二一			
明治五十四年	四八,四〇四	四八,〇八一	一〇	二,八二一			
明治五十五年	四七,五二九	四七,三六一	一八	二,八二一			
明治五十六年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治五十七年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治五十八年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治五十九年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十一年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十二年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十四年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十五年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十六年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十七年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十八年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治六十九年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十一年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十二年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十四年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十五年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十六年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十七年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十八年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治七十九年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			
明治八十年	四七,五二九	四七,〇二八	五〇	二,八二一			

出版諸統計

年次	總數	有保證書	無保證書
明治三十九年	六八、八五四	三二、二二一	三七、四〇三
明治三十八年	七三、一五四	三三、四七六	三九、三三九
明治三十七年	七四、四六二	三三、二一〇	四一、四五六
明治三十六年	八五、三五七	三三、〇四四	五三、九五七
明治三十五年	一二五、八九五	二四、〇二五	九一、四八九
明治三十四年	一二一、五二六	二六、三三一	八五、九六六
明治三十三年	一〇四、四七六	三〇、三四七	六五、四二六
明治三十二年	九八、七七八	三一、九九六	五六、二八五
明治三十一年	五三		
明治三十年	一七〇		
明治二十九年	一五六		
明治二十八年	二二五		
明治二十七年	二五三		
明治二十六年	三三四		
明治二十五年	三四四		
明治二十四年	一九九		
明治二十三年	二六九		
明治二十二年	三二一		
明治二十一年	四〇三		
明治二十年	四七一		
明治十九年	五一一		
明治十八年	六四八		
明治十七年	五三		
明治十六年	七九二		
明治十五年	八〇二		
明治十四年	八一四		
明治十三年	七五三		
明治十二年	七七五		
明治十一年	七四三		
明治十年	八二九		
明治九年	九七八		
明治八年	九四四		
明治七年	一、一八一		
明治六年	一、三三八		
明治五年	一、四九九		
明治四年	一、五九〇		
明治三年	一、七七五		
明治二年	一、九八八		
明治元年	二、三〇〇		
明治四年	二、五二四		
明治三年	二、七六八		
明治二年	一、七九三		
明治元年	二、〇七七		
明治四年	二、六四七		
明治三年	二、七一九		
明治二年	二、八五一		
明治元年	三、〇六六		

新聞年末數曆年表

新聞紙法による雜誌を含む (内務省警保局調)

年次	總數	有保證書		無保證書	
		日刊	月四回以上	日刊	月四回以上
明治三十九年	六八、八五四	三二、二二一	三三、四七六	三七、四〇三	三九、三三九
明治三十八年	七三、一五四	三三、二一〇	三三、〇四四	四一、四五六	四三、九五六
明治三十七年	七四、四六二	三三、〇四四	二四、〇二五	九一、四八九	八五、九六六
明治三十六年	八五、三五七	二六、三三一	三〇、三四七	六五、四二六	五六、二八五
明治三十五年	一二五、八九五	二四、〇二五	三〇、三四七	九一、四八九	八五、九六六
明治三十四年	一二一、五二六	二六、三三一	三〇、三四七	六五、四二六	五六、二八五
明治三十三年	一〇四、四七六	三〇、三四七	三〇、三四七	六五、四二六	五六、二八五
明治三十二年	九八、七七八	三一、九九六	三一、九九六	六五、四二六	五六、二八五
明治三十一年	五三				
明治三十年	一七〇				
明治二十九年	一五六				
明治二十八年	二二五				
明治二十七年	二五三				
明治二十六年	三三四				
明治二十五年	三四四				
明治二十四年	一九九				
明治二十三年	二六九				
明治二十二年	三二一				
明治二十一年	四〇三				
明治二十年	四七一				
明治十九年	五一一				
明治十八年	六四八				
明治十七年	五三				
明治十六年	七九二				
明治十五年	八〇二				
明治十四年	八一四				
明治十三年	七五三				
明治十二年	七七五				
明治十一年	七四三				
明治十年	八二九				
明治九年	九七八				
明治八年	九四四				
明治七年	一、一八一				
明治六年	一、三三八				
明治五年	一、四九九				
明治四年	一、五九〇				
明治三年	一、七七五				
明治二年	一、九八八				
明治元年	二、三〇〇				
明治四年	二、五二四				
明治三年	二、七六八				
明治二年	一、七九三				
明治元年	二、〇七七				
明治四年	二、六四七				
明治三年	二、七一九				
明治二年	二、八五一				
明治元年	三、〇六六				

出版諸統計

昭和 十八年 一次	年 次	總 數	有保 證金		無保 證金	
			以月 四上回	以月 二上回	以月 四上回	以月 二上回
七	年	一〇、九六〇	一、二九一	四、四六三	一、〇三一	二、六六六
六	年	一〇、六六六	一、〇八三	四、七三六	一、〇八三	二、五五〇
五	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
四	年	九、一九一	一、〇二〇	四、一七〇	一、〇二〇	二、九六九
三	年	八、四四五	九六六	三、九一〇	一、六七〇	二、八八〇
二	年	八、三五〇	九六六	三、四一〇	一、六七〇	二、九一〇
一	年	七、六〇〇	八六一	三、四一〇	一、六七〇	二、五二〇
昭和 十八年	年	八、三二〇	八六一	三、四一〇	一、六七〇	二、五二〇
昭和 十九年	年	一〇、八六〇	一、〇八三	四、七三六	一、〇八三	二、五五〇
昭和 二十年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十一年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十二年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十三年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十四年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十五年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十六年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十七年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十八年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 二十九年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十一年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十二年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十三年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十四年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十五年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十六年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十七年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十八年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 三十九年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十一年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十二年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十三年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十四年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十五年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十六年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十七年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十八年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 四十九年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六
昭和 五十年	年	一〇、一三〇	一、〇三一	四、二一八	一、〇三一	二、九一六

備考） * 本表は新聞紙法による新聞雑誌の戸籍数にして、出版法により刊行する雑誌類を算入せず。例へば日刊新聞は勿論、中央公論、實業之日本、主婦之友の如き新聞紙法によるものは本表に算入す。學術雑誌等出版法によるものは、別項出版部書類年表の雑誌数を参照。
* 表中「有保證金」は一定の保證金を収めて時事問題に關する事項をも掲載し得る新聞雑誌、「無保證金」は學術、技藝、統計等に關する事項を掲載せるもの。
* 昭和十二年、十三年は統計なし。
* 昭和十四年、十五年は統計なし。

昭和十一年年末全國(廣告統計)雜誌數——新聞紙法にて發行(內容者暨保局製)せる雜誌を含まず(內容者暨保局製)

府縣名	以月四上回		以月二上回		以年六上回		以年四上回		年三回	年二回	其他	計
	月三回	月二回	月一回	以年六上回	以年四上回	年三回	年二回					
北海道	四	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	六
京都市	三	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	六
大阪府	三	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	六
兵庫県	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
長崎縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
新潟縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
群馬縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
千代田縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
茨城縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
栃木縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
三重縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
愛媛縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
山形縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
滋賀縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
岐阜縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
長野縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
宮城縣	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	六
計	四	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二	六

出版諸統計

府縣名	總數	昭和十一年末全國新聞紙數											
		日刊	以月四回以上	以月三回	以月二回	以月一回	以年六回以上	以年四回以上	其他	日刊	以月四回以上	以月三回	以月二回
北海道	四七七	二四七	一三八	二七〇	二八	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
東 京	三〇八	四〇	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
大 阪	一、五九五	九四	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
神 戶	二八七	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
兵 庫	六六四	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
長 崎	一八九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
新 潟	二五三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
埼 玉	七九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
千 葉	一〇六	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
茨 城	八八	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
栃 木	一〇七	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
三 重	一六四	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
奈 良	一六二	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
愛 知	六九九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
靜 岡	二六三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
山 梨	三三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
滋 賀	八九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
駿 野	八七	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
岐 阜	三三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
長 岐	三三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
宮 城	一七二	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六

一五五

昭和十一年末全國新聞紙數

新聞紙法に依る新聞紙を包含す

(内務省警保局調)

府縣名	總數	昭和十一年末全國新聞紙數											
		日刊	以月四回以上	以月三回	以月二回	以月一回	以年六回以上	以年四回以上	其他	日刊	以月四回以上	以月三回	以月二回
北海道	四七七	二四七	一三八	二七〇	二八	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
東 京	三〇八	四〇	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
大 阪	一、五九五	九四	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
神 戶	二八七	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
兵 庫	六六四	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
長 崎	一八九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
新 潟	二五三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
埼 玉	七九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
千 葉	一〇六	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
茨 城	八八	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
栃 木	一〇七	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
三 重	一六四	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
奈 良	一六二	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
愛 知	六九九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
靜 岡	二六三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
山 梨	三三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
滋 賀	八九	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
駿 野	八七	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
岐 阜	三三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
長 岐	三三	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
宮 城	一七二	二一	一三八	一〇一	一〇一	一〇〇三	一三三	一	三三	三〇	三	三	六六
總 計	一、六、七、五九	二、四、七、七	一、三、八、〇	二、七、〇	二、八	一、〇、〇、三	一、三、三	一	三、三	三、〇	三	三	六、六

出版諸統計

一五四

出版諸統計

種別	昭和十一年度新刊書類別統計												計
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
小兒文藝	26	38	33	30	44	43	49	31	45	46	46	46	51
教育書	17	26	25	29	36	34	27	20	43	43	44	44	46
政治書	21	21	20	24	26	27	27	29	25	21	24	24	27
經濟書	33	30	31	33	34	34	36	33	31	34	34	34	38
社會書	21	27	25	29	36	34	27	20	43	43	44	44	46
衛生書	19	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
醫學書	17	21	20	24	26	27	27	29	25	21	24	24	27
哲學書	19	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
外史	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
歷史	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
詩歌	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
法政	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
宗理	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
農學	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
美術	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
地理	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
國語	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
家庭	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
文學	15	16	16	19	26	27	27	29	25	21	24	24	27
合計	355	468	443	400	504	493	549	351	504	504	504	504	515

一五七

出版諸統計

種別	昭和十一年度新刊書類別統計												計
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
福手島	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
岩手島	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
青森	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
山形	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
秋田	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
福井	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
石川	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
富山	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
鳥取	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
島根	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
岡山	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
廣島	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
山口	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
和歌山	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
德島	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
香川	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
愛媛	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
高知	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
福岡	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
大分	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
佐賀	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
熊本	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
鹿兒島	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
沖繩	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
合計	326	326	326	326	326	326	326	326	326	326	326	326	326

一五六

各月合計	洋布製製布		洋布製製布		各月合計	四六六六		四六六六	
	折式	革和背背布上並洋	折式	革和背背布上並洋		寸四菊細三三袖新新三四菊菊四	六四六六	六四六六	六四六六
二八七	〇〇一四一三二九	三九八六三	〇〇四一三二二一	一九八四七	二八七	〇〇四一三二二一	一九八四七	〇〇四一三二二一	一九八四七
三六四	〇〇一三二六九一	三八九一四	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇	三六四	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇
三四九	一〇四二一六七	六八七〇五	〇〇一〇五〇六	九五一三三	三四九	〇〇一〇五〇六	九五一三三	〇〇一〇五〇六	九五一三三
四六〇	〇三五四一三	二六九一一	一一〇一四〇五	二八三五二	四六〇	一一〇一四〇五	二八三五二	一一〇一四〇五	二八三五二
四八九	〇一四一一九	七八七五	〇〇二〇一四	一五六五〇	四八九	〇〇二〇一四	一五六五〇	〇〇二〇一四	一五六五〇
五〇〇	〇〇四三三	二七九	〇〇一〇九六	二九五三一	五〇〇	〇〇一〇九六	二九五三一	〇〇一〇九六	二九五三一
四二二	〇〇二一一	六七七	〇〇二〇六四	五一一〇一	四二二	〇〇二〇六四	五一一〇一	〇〇二〇六四	五一一〇一
三〇三	〇一一四〇	四九三	〇二〇〇四	四四九五	三〇三	〇二〇〇四	四四九五	〇二〇〇四	四四九五
四二八	〇〇一五〇	五六八	〇〇一〇〇	二九八一	四二八	〇〇一〇〇	二九八一	〇〇一〇〇	二九八一
四九七	〇〇二一九	一七九	〇一〇七六	一四四〇	四九七	〇一〇七六	一四四〇	〇一〇七六	一四四〇
四七三	〇一一二一	一七五	〇〇一〇三	三三七二	四七三	〇〇一〇三	三三七二	〇〇一〇三	三三七二
四四一	〇〇二六四	八九二	〇〇二〇二	三九九〇	四四一	〇〇二〇二	三九九〇	〇〇二〇二	三九九〇
五、〇〇三	二、三三三	一、七五九	一、四四二	一、五九八	五、〇〇三	一、四四二	一、五九八	一、四四二	一、五九八

各月合計	圖演數民運趣修作國		圖演數民運趣修作國		各月合計	五四六三二一一		五四六三二一一	
	劇映	書畫學	劇映	書畫學		圓圓圓圓圓	圓圓圓圓圓	圓圓圓圓圓	圓圓圓圓圓
二八七	〇〇二〇二	二〇三	〇〇二〇二	二〇三	二八七	〇〇二〇二	二〇三	〇〇二〇二	二〇三
三六四	〇〇四四〇	一四四	〇〇四四〇	一四四	三六四	〇〇四四〇	一四四	〇〇四四〇	一四四
三四九	〇一四四〇	七二五	〇一四四〇	七二五	三四九	〇一四四〇	七二五	〇一四四〇	七二五
四六〇	五三二	二二七	五三二	二二七	四六〇	五三二	二二七	五三二	二二七
四八九	一二二	三二二	一二二	三二二	四八九	一二二	三二二	一二二	三二二
五〇〇	二〇二	二五	二〇二	二五	五〇〇	二〇二	二五	二〇二	二五
四二二	〇〇二二	五〇二	〇〇二二	五〇二	四二二	〇〇二二	五〇二	〇〇二二	五〇二
三〇三	一〇〇	一八八	一〇〇	一八八	三〇三	一〇〇	一八八	一〇〇	一八八
四二八	〇〇四七	三四三	〇〇四七	三四三	四二八	〇〇四七	三四三	〇〇四七	三四三
四九七	一二三	三七三	一二三	三七三	四九七	一二三	三七三	一二三	三七三
四七三	三二	二九	三二	二九	四七三	三二	二九	三二	二九
四四一	〇一	一六	〇一	一六	四四一	〇一	一六	〇一	一六
五、〇〇三	一、七	二、九	一、七	二、九	五、〇〇三	一、七	二、九	一、七	二、九